

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄								備考
計画の区分	学部の設置								
フリガナ設置者	ガッリホジソウ オウマガクイン 学校法人 大妻学院								
フリガナ大学の名称	オウマジンヨシダウ 大妻女子大学								
大学本部の位置	東京都千代田区三番町12番地								
大学の目的	本学は教育基本法に基づき、学校教育法の定めるところに従い、広く知識を授けると共に深く専門の学芸を教授研究して、応用的能力の展開と人格の完成に努め、高い知性と豊かな情操を有する女性の育成を目的とする。								
新設学部等の目的	大学の教育目的に則し、社会学、心理学、福祉学等を基盤に、基礎から応用・実践に至るまで幅広く学習することを通じて、多様な人々と共生し協働するための知識とコミュニケーション能力、すぐれた問題解決能力、実践力を備えた人材を育成し、共生社会の実現に資する。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位	学位の分野	開設時期及び開設年次	所在地
	人間共生学部	年	人	年次人	人			年 月 第 年次	東京都多摩市唐木田2丁目7番地1
	社会学科	4	70	3年次 3	286	学士(社会学)	社会学・社会福祉学関係	令和8年4月 第1年次 令和10年4月 第3年次	
	心理学科	4	70	3年次 3	286	学士(心理学)	文学関係 社会学・社会福祉学関係	令和8年4月 第1年次 令和10年4月 第3年次	
	福祉学科	4	60	3年次 2	244	学士(福祉学)	社会学・社会福祉学関係	令和8年4月 第1年次 令和10年4月 第3年次	
	共生デザイン学科	4	60	3年次 2	244	学士(共生デザイン)	社会学・社会福祉学関係	令和8年4月 第1年次 令和10年4月 第3年次	
計		260	10	1060					
同一設置者内における変更状況(定員の移行、名称の変更等)	人間関係学部(廃止) 人間関係学科社会学専攻 (△80) (3年次編入学定員) (△4) 人間関係学科社会・臨床心理学専攻 (△80) (3年次編入学定員) (△4) 人間福祉学科 (△100) (3年次編入学定員) (△2) ※令和8年4月学生募集停止 (3年次編入学定員は令和10年4月学生募集停止)								

	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
		講義	演習	実験・実習	計			
教育課程	人間共生学部 社会学科	123科目	75科目	7科目	205科目	126単位		
	人間共生学部 心理学科	110科目	88科目	8科目	206科目	126単位		
	人間共生学部 福祉学科	135科目	95科目	16科目	246科目	126単位		
	人間共生学部 共生デザイン学科	136科目	91科目	10科目	237科目	126単位		
学部等の名称		基幹教員					助手	基幹教員以外の教員 (助手を除く)
		教授	准教授	講師	助教	計		
		人	人	人	人	人	人	人
新設	人間共生学部 社会学科	6 (6)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	84 (84)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	6 (6)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	9 (9)		
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(aに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計(a～b)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	9 (9)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a又はbに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a、b又はcに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計(a～d)	6 (6)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	9 (9)		
	人間共生学部 心理学科	5 (5)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	9 (9)	1 (1)	91 (91)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	9 (9)		
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(aに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計(a～b)	5 (5)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	9 (9)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a又はbに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a、b又はcに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計(a～d)	5 (5)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	9 (9)		
	人間共生学部 福祉学科	7 (7)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (9)	1 (1)	100 (100)
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (7)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (9)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(aに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計(a～b)	7 (7)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (9)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a又はbに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの(a、b又はcに該当する者を除く)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計(a～d)	7 (7)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	9 (9)			
分								

大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人

大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人

大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人

新	人間共生学部 共生デザイン学科	5 (5)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	90 (90)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 6 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	8 (8)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	5 (5)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	8 (8)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	5 (5)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	8 (8)			
分	計	23 (23)	9 (9)	3 (3)	0 (0)	35 (35)			2 (2)
既	家政学部 被服学科	6 (6)	1 (1)	4 (4)	0 (0)	11 (11)	6 (6)	200 (200)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 6 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	6 (6)	1 (1)	4 (4)	0 (0)	11 (11)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	6 (6)	1 (1)	4 (4)	0 (0)	11 (11)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	6 (6)	1 (1)	4 (4)	0 (0)	11 (11)			
設	家政学部 食物学科	11 (11)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	18 (18)			12 (12)
分	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	11 (11)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	18 (18)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	11 (11)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	18 (18)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	11 (11)	6 (6)	1 (1)	0 (0)	18 (18)			
	分	計	11 (11)	6 (6)	1 (1)	0 (0)			18 (18)

既	家政学部 児童学科	12 (12)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	19 (19)	3 (3)	217 (217)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 6 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	12 (12)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	19 (19)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	12 (12)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	19 (19)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	12 (12)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	19 (19)			
設	家政学部 ライフデザイン学科	4 (4)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	11 (11)			3 (3)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	4 (4)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	11 (11)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	4 (4)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	11 (11)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	4 (4)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	11 (11)			
分	文学部 日本文学科	11 (11)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	15 (15)			0 (0)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	11 (11)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	15 (15)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	11 (11)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	15 (15)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	11 (11)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	15 (15)			

既	文学部 英語英文学科	8 (8)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	206 (206)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 6 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (8)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	15 (15)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	8 (8)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	15 (15)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	8 (8)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	15 (15)			
設	文学部 コミュニケーション文化学科	5 (5)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	13 (13)			0 (0)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	5 (5)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	13 (13)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	5 (5)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	13 (13)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	5 (5)	6 (6)	2 (2)	0 (0)	13 (13)			
分	社会情報学部 社会情報学科	20 (20)	8 (8)	4 (4)	0 (0)	32 (32)			0 (0)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	20 (20)	7 (7)	4 (4)	0 (0)	31 (31)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)			
	小計（a～b）	20 (20)	8 (8)	4 (4)	0 (0)	32 (32)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	20 (20)	8 (8)	4 (4)	0 (0)	32 (32)			

既	比較文化学部 比較文化学科					16 (16)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	20 (20)	0 (0)	194 (194)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 9 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの					16 (16)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	20 (20)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）					16 (16)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	20 (20)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）					16 (16)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	20 (20)			
設	データサイエンス学部 データサイエンス学科					11 (11)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	14 (13)			0 (0)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの					11 (10)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	14 (13)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）					11 (10)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	14 (13)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）					0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）					0 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (1)			
	計（a～d）					11 (11)	2 (2)	1 (1)	0 (0)	14 (14)			
分	計					104 (104)	44 (44)	20 (20)	0 (0)	168 (168)			24 (24)
	合 計					127 (125)	53 (56)	23 (23)	0 (0)	203 (204)	26 (26)	— (—)	
職 種						専 属			そ の 他			計	
事 務 職 員						139 (139) 人			63 (63) 人			202 (202) 人	
技 術 職 員						4 (4)			6 (6)			10 (10)	
図 書 館 職 員						13 (13)			5 (5)			18 (18)	
そ の 他 の 職 員						0 (0)			0 (0)			0 (0)	
指 導 補 助 者						38 (38)			0 (0)			38 (38)	
計						194 (194)			74 (74)			268 (268)	
校 地 等	区 分		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計						
	校 舎 敷 地		29,336.39㎡	70,721.18㎡	0.00㎡		100,057.57㎡						
	そ の 他		13.61㎡	150.40㎡	0.00㎡		164.01㎡						
	合 計		29,350.00㎡	70,871.58㎡	0.00㎡		100,221.58㎡						
校 舎			専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用		計						
			29,916.63㎡ (29,916.63㎡)	46,477.04㎡ (46,477.04㎡)	792.49㎡ (792.49㎡)		77,186.16㎡ (77,186.16㎡)						
教 室 ・ 教 員 研 究 室			教 室	279室	教 員 研 究 室		35室						
大学全体（教室には短大との共用153室含む）													

図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕		学術雑誌 〔うち外国書〕		機械・器具 点	標本 点	学部単位での特定不能なため、大学全体の数(図書、学術雑誌)		
		冊	電子図書 〔うち外国書〕	種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕					
	人間共生学部	388,127 [65,541] (372,047 [65,061])	2,201 [144] (1,801 [144])	8,252 [3,764] (8,252 [3,764])	2,784 [2,714] (2,784 [2,714])	2,251 (2,251)	0 (0)			
	計	388,127 [65,541] (372,047 [65,061])	2,201 [144] (1,801 [144])	8,252 [3,764] (8,252 [3,764])	2,784 [2,714] (2,784 [2,714])	2,251 (2,251)	0 (0)			
スポーツ施設等		スポーツ施設		講堂		厚生補導施設		大学全体		
		4,936.82㎡		2,523.72㎡		3,323.40㎡				
経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書購入費には、電子ジャーナル・データベースの整備費(運用コスト含む)を含む。	
		教員1人当り研究費等		410千円	410千円	410千円	410千円	－千円		－千円
		共同研究費等		38,274千円	38,274千円	38,274千円	38,274千円	－千円		－千円
		図書購入費	1,819千円	1,934千円	3,823千円	5,741千円	7,666千円	－千円		－千円
	設備購入費	46,987千円	5,824千円	11,648千円	17,696千円	23,744千円	－千円	－千円		
	学生1人当り納付金		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
		1,425千円	1,295千円	1,315千円	1,335千円	－千円	－千円			
学生納付金以外の維持方法の概要		私立大学等経常費補助金、資産運用収入、雑収入 等								
大学等の名称		大妻女子大学								
既設大学等の状況	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	収容定員充足率	開設年度	所在地	
	家政学部	年	人	年次人	人		倍			
	被服学科	4	110	3年次 7	454	学士 (家政学)	1.05	昭和43年度	東京都千代田区三番町12番地	
	食物学科		130		520		1.05			
	食物学専攻	4	80	－	320	学士 (家政学)	1.04	昭和24年度	同上	
	管理栄養士専攻	4	50	－	200	学士 (家政学)	1.07	昭和24年度	同上	
	児童学科		130		530		1.11			
	児童学専攻	4	80	－	320	学士 (家政学)	1.06	昭和43年度	同上	
	児童教育専攻	4	50	3年次 5	210	学士 (家政学)	1.19	昭和43年度	同上	
	ライフデザイン学科	4	120	3年次 7	494	学士 (家政学)	1.08	平成14年度	同上	
	文学部						1.03			
	日本文学科	4	120	3年次 7	494	学士 (文学)	1.06	昭和42年度	同上	
	英語英文学科	4	120	3年次 7	494	学士 (文学)	0.98	昭和42年度	同上	
	コミュニケーション文化学科	4	120	3年次 7	494	学士 (文学)	1.06	平成14年度	同上	
	社会情報学部						1.07			
社会情報学科		300		1230		1.07				
社会生活情報学専攻	4	100	3年次 5	410	学士 (社会情報学)	1.12	平成4年度	同上		
環境情報学専攻	4	100	3年次 5	410	学士 (社会情報学)	1.02	平成4年度	同上		
情報デザイン専攻	4	100	3年次 5	410	学士 (社会情報学)	1.07	平成4年度	同上		

既設大学等の状況	人間関係学部						0.97				
	人間関係学科		160		656		1.10				※令和8年度より学生募集停止
	社会学専攻	4	80	3年次 4	328	学士 (人間関係学)	1.03	平成11年度	東京都多摩市唐木田2丁目7番地1		※令和8年度より学生募集停止
	社会・臨床心理学専攻	4	80	3年次 4	328	学士 (人間関係学)	1.17	平成11年度	同上		※令和8年度より学生募集停止
	人間福祉学科	4	100	3年次 2	404	学士 (人間関係学)	0.75	平成11年度	同上		※令和8年度より学生募集停止
	比較文化学部						1.04				
	比較文化学科	4	165	3年次 5	670	学士 (比較文化学)	1.04	平成11年度	東京都千代田区三番町12番地		
	データサイエンス学部						1.05				
	データサイエンス学科	4	90	—	90	学士 (データサイエンス)	1.05	令和7年度	東京都千代田区三番町12番地		※令和7年4月開設
	大妻女子大学大学院										
	人間文化研究科 (博士後期課程)										
	人間生活科学専攻	3	3	—	9	博士 (生活科学)	1.00	平成22年度	東京都千代田区三番町12番地		
	言語文化学専攻 (修士課程)	3	3	—	9	博士 (文学)	0.33	平成22年度	同上		
	人間生活科学専攻	2	12	—	24	修士 (生活科学)	0.83	平成22年度	同上		
言語文化学専攻	2	8	—	16	修士 (文学)	0.81	平成22年度	同上			
現代社会研究専攻	2	6	—	12	修士 (社会学)	0.33	平成22年度	東京都千代田区三番町12番地 東京都多摩市唐木田2丁目7番地1			
臨床心理学専攻	2	6	—	12	修士 (心理学)	1.00	平成22年度	東京都多摩市唐木田2丁目7番地1			
大学等の名称	大妻女子大学短期大学部										
学部等の名称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	収容定員 充足率	開設 年度	所在地			
	年	人	年次 人	人		倍					
家政科		90		90		0.60					
家政専攻	2	—	—	—	短期大学士 (家政学)	—	昭和25年度	東京都千代田区三番町12番地		※令和7年度より学生募集停止	
生活総合ビジネス専攻	2	—	—	—	短期大学士 (家政学)	—	平成23年度	同上		※令和7年度より学生募集停止	
食物栄養専攻	2	—	—	—	短期大学士 (家政学)	—	昭和25年度	同上		※令和7年度より学生募集停止	
家政総合コース	2	35	—	35	短期大学士 (家政学)	0.60	令和7年度	同上		※令和7年4月開設	
食と栄養コース	2	55	—	55	短期大学士 (家政学)	0.60	令和7年度	同上		※令和7年4月開設	
国文科	2	—	—	—	短期大学士 (文学)	—	昭和42年度	同上		※令和6年度より学生募集停止	

附属施設の概要	<p>名称：大妻女子大学心理相談センター</p> <p>目的：本学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻に在籍する大学院生を対象として、臨床心理士および公認心理師を養成するための教育・訓練の実習施設としての役割を有するとともに、来談者に対する心理相談サービスの提供及び調査研究活動を行うことを目的とする。</p> <p>所在地：東京都多摩市唐木田2丁目7番地1</p> <p>設置年月：平成15年4月1日</p> <p>規模等：1号館1階に設置、延べ床面積199.29㎡</p>	
	<p>名称：共生社会文化研究所</p> <p>目的：社会貢献の一環として、人間関係学部が有する優れた知的資源を活用し、共生社会の実現に必要な方策や技術の開発、共生社会に関わる社会文化全般の基礎的研究、並びにその結果の応用的発展について、広く学際的見地から研究調査等を行い、これらの成果を広く提供することを目的とする。 なお、今回の人間共生学部の設置に伴い、人間関係学部附属から人間共生学部附属に変更する予定である。</p> <p>所在地：東京都多摩市唐木田2丁目7番地1</p> <p>設置年月：平成31年4月1日</p> <p>規模等：6号館4階に設置、延べ床面積64.00㎡</p>	

学校法人大妻学院 設置認可等に関わる組織の移行表

令和7年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和8年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
大妻女子大学 家政学部 3年次				大妻女子大学 家政学部 3年次				
被服学科	110	7	454	被服学科	110	7	454	
食物学科 食物学専攻	80	-	320	食物学科 食物学専攻	80	-	320	
管理栄養士専攻	50	-	200	管理栄養士専攻	50	-	200	
児童学科 児童学専攻	80	-	320	児童学科 児童学専攻	80	-	320	
児童教育専攻	50	5	210	児童教育専攻	50	5	210	
ライフデザイン学科	120	7	494	ライフデザイン学科	120	7	494	
文学部 3年次				文学部 3年次				
日本文学科	120	7	494	日本文学科	120	7	494	
英語英文学科	120	7	494	英語英文学科	120	7	494	
コミュニケーション文化学科	120	7	494	コミュニケーション文化学科	120	7	494	
社会情報学部 3年次				社会情報学部 3年次				
社会情報学科 社会生活情報学専攻	100	5	410	社会情報学科 社会生活情報学専攻	100	5	410	
環境情報学専攻	100	5	410	環境情報学専攻	100	5	410	
情報デザイン専攻	100	5	410	情報デザイン専攻	100	5	410	
人間関係学部 3年次				人間関係学部 3年次				
人間関係学科 社会学専攻	80	4	328	人間関係学科 社会学専攻	0	0	0	令和8年度4月学生募集停止
社会・臨床心理学専攻	80	4	328	社会・臨床心理学専攻	0	0	0	令和8年度4月学生募集停止
人間福祉学科	100	2	404	人間福祉学科	0	0	0	令和8年度4月学生募集停止
人間共生学部 3年次				人間共生学部 3年次				学部の設置(届出)
社会学科	70	3	286	社会学科	70	3	286	
心理学科	70	3	286	心理学科	70	3	286	
福祉学科	60	2	244	福祉学科	60	2	244	
共生デザイン学科	60	2	244	共生デザイン学科	60	2	244	
比較文化学部 3年次				比較文化学部 3年次				
比較文化学科	165	5	670	比較文化学科	165	5	670	
データサイエンス学部				データサイエンス学部				
データサイエンス学科	90	-	360	データサイエンス学科	90	-	360	
計 3年次				計 3年次				
	1665	70	6800		1665	70	6800	
大妻女子大学大学院				大妻女子大学大学院				
人間文化研究科				人間文化研究科				
人間生活科学専攻(M)	12	-	24	人間生活科学専攻(M)	12	-	24	
言語文化学専攻(M)	8	-	16	言語文化学専攻(M)	8	-	16	
現代社会研究専攻(M)	6	-	12	現代社会研究専攻(M)	6	-	12	
臨床心理学専攻(M)	6	-	12	臨床心理学専攻(M)	6	-	12	
人間生活科学専攻(D)	3	-	9	人間生活科学専攻(D)	3	-	9	
言語文化学専攻(D)	3	-	9	言語文化学専攻(D)	3	-	9	
計				計				
	38	-	82		38	-	82	
大妻女子大学短期大学部				大妻女子大学短期大学部				
家政科 家政総合コース				家政科 家政総合コース				
食と栄養コース	35	-	70	食と栄養コース	35	-	70	
食と栄養コース	55	-	110	食と栄養コース	55	-	110	
計				計				
	90	-	180		90	-	180	

教 育 課 程 等 の 概 要

(人間共生学部社会科学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考			
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外の教員				
学部共通科目	人間共生総論Ⅰ	1前	○	2			○			1							オムニバス		
	人間共生総論Ⅱ	1後		2			○									1			
	人間共生総論Ⅲ	1後		2			○									1			
	人間共生総論Ⅳ	1前		2			○									8			
	社会学概論Ⅰ	1前	○	2			○			1									
	社会学概論Ⅱ	1後	○	2			○			1									
	心理学概論Ⅰ	1前			2		○									1			
	心理学概論Ⅱ	1後			2		○									1			
	社会福祉学概論Ⅰ	1前			2		○									1			
	社会福祉学概論Ⅱ	1後			2		○									1			
	共生デザイン概論Ⅰ	1前			2		○									1			
	共生デザイン概論Ⅱ	1後			2		○									1			
小計(12科目)	—	—	—	6	18	0	—	—	—	2	0	0	0	0	0	14			
専門教育科目	基礎科目	社会学コア科目	社会調査講義Ⅰ	1前	○	2			○			1						※講義 ※講義	
			社会調査講義Ⅱ	1後	○	2			○			1							
			基礎統計学Ⅰ	1前			2			○		1							
			基礎統計学Ⅱ	1後			2			○		1							
	小計(4科目)	—	—	4	4	0	—	—	—	3	0	0	0	0	0	0			
	応用科目	社会学コア科目	現代社会理論	2・3・4後			2			○			1						
			社会学史	2・3・4後			2			○			1						
			社会調査特論Ⅰ	3前			2			○			1						
			社会調査特論Ⅱ	3後			2			○			1						
			小計(4科目)	—	—	0	8	0	—	—	—	2	1	0	0	0	0		
		ダイバーシティとジェンダー科目	家族社会学	2・3・4前			2			○									
			ジェンダーの社会学	2・3・4前			2			○			1						
			ライフコース論	2・3・4後			2			○							1		
			ケアの社会学	2・3・4前			2			○							1		
			生と死の社会学	2・3・4前			2			○							1		
	メンタルヘルスの社会学	2・3・4後			2			○							1				
	恋愛と結婚の社会学	2・3・4前			2			○			1								
	男性学	2・3・4後			2			○			1								
セクシュアリティの社会学	2・3・4後			2			○			1									
小計(9科目)	—	—	0	18	0	—	—	—	2	2	0	0	0	0	4				
文化とメディア科目	映像と表象	2・3・4後			2			○											
	現代メディア論	2・3・4前			2			○			1								
	現代における宗教	2・3・4後			2			○							1				
	サブカルチャーの社会学	2・3・4後			2			○			1								
	身体とファッションの社会学	2・3・4前			2			○				1							
	情報社会論	2・3・4後			2			○			1								
	文化人類学	2・3・4後			2			○				1							
	若者の社会学	2・3・4前			2			○			1								
観光社会学	2・3・4前			2			○							1					
小計(9科目)	—	—	0	18	0	—	—	—	4	2	0	0	0	0	2				

専門教育科目	応用科目	インクルージョンと社会問題と 社会問題と インクルージョン科目	都市の社会学	2・3・4後			2			○								1		
			医療と文化	2・3・4前			2			○									1	
			環境とコミュニティ	2・3・4前			2			○									1	
			現代における労働	2・3・4後			2			○									1	
			子どもと教育の社会学	2・3・4後			2			○						1				
			ボランティアの社会学	2・3・4前			2			○						1				
			格差と不平等の社会学	2・3・4前			2			○										1
			差別とマイノリティ	2・3・4後			2			○										
		小計（8科目）	—	—	0	16	0		—						2	2	0	0	0	4
		特論科目	ジェンダーとダイバーシティ特論Ⅰ	3前			2			○										
	ジェンダーとダイバーシティ特論Ⅱ		3後			2			○											1
	文化とメディア特論Ⅰ		3前			2			○											1
	文化とメディア特論Ⅱ		3後			2			○											1
	社会問題とインクルージョン特論Ⅰ		3前			2			○											1
	社会問題とインクルージョン特論Ⅱ		3後			2			○							1				
	小計（6科目）	—	—	0	12	0		—						1	2	0	0	0	3	
	定留学目	異文化理解Ⅰ	1・2・3・4前後			2				○										1
		異文化理解Ⅱ	1・2・3・4前後			2				○										1
		小計（2科目）	—	—	0	4	0		—						0	0	0	0	0	1
	実践科目	社会学コア科目	社会学基礎セミナーⅠ	1前	○	2				○				4	2					
社会学基礎セミナーⅡ			1後	○	2				○				4	2						
社会調査及び演習Ⅰ			2前	○	2				○				4	2						
社会調査及び演習Ⅱ			2後	○	2				○				4	2						
現代社会論セミナーⅠ			2前	○	2				○				4	2						
現代社会論セミナーⅡ			2後	○	2				○				4	2						
社会学セミナーⅠ			3前	○	2				○				6	3						
社会学セミナーⅡ			3後	○	2				○				6	3						
社会学セミナーⅢ			4前	○	2				○				6	3						
社会学セミナーⅣ			4後	○	2				○				6	3						
卒業論文			4後	○	6				○				6	3						
小計（11科目）		—	—	26	0	0		—				6	3	0	0	0	0	0		
外国語科目		ビジネス英語	2・3・4前後			2				○				1						
	英語コミュニケーション	2・3・4前後			2				○				1							
小計（2科目）	—	—	0	4	0		—					1	0	0	0	0	0	0		
定留学目	Malaysian Cultural CampⅠ	1・2・3・4前			2				○				1							
	Malaysian Cultural CampⅡ	1・2・3・4前			4				○				1							
	小計（2科目）	—	—	0	6	0		—					1	0	0	0	0	0		

※講義
※講義

標準外 ※講義
標準外 ※講義

全学 共通科目	基礎科目	女性とキャンパスライフ	大妻教養講座	1前		1					1							メディア		
			大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ	2前			1					1							メディア	
			キャンパスライフとメンタルヘルス	1・2・3・4前・後			2													2
			女性と健康	1・2・3・4前・後			2													1
			ジェンダーと社会生活	1・2・3・4前・後			2					1								1
			女性史	1・2・3・4前・後			2													2
			リーダーシップ開発	2・3・4前・後			2													1
		小計(7科目)	—	—	1	11	0				—	2	0	0	0	0	0	0	7	
		リテラシー	日本語A(文章表現)	1前・後			2													1
			日本語B(口頭表現)	1・2前・後			2													1
	日本語C(読解)		1前・後			2													1	
	コンピュータ基礎A		1前・後			2													2	
	コンピュータ基礎B		1前・後			2													2	
	コンピュータ応用		1・2・3・4前・後			2													2	
	データサイエンス・AI概論		1後			2													1	
	小計(7科目)	—	—	0	14	0				—	0	0	0	0	0	0	0	6		
	キャリア	キャリアデザインⅠ	1・2前・後			2													2	
		キャリアデザインⅡ	2・3前・後			2													1	
		キャリアデザインⅢ	3・4前・後			2													1	
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ	1・2・3・4後			2													1	
キャリア・ディベロップメント・プログラムⅡ		2・3・4後			2													1		
小計(5科目)	—	—	0	10	0				—	0	0	0	0	0	0	0	2			
人間と文化	文学の世界	1・2・3前・後			2													1		
	音楽の世界	1・2・3前・後			2					1										
	美術の世界	1・2・3前・後			2													1		
	映像・演劇の世界	1・2・3前・後			2													2		
	考古学の世界	1・2・3前・後			2													1		
	ポピュラー・カルチャーの世界	1・2・3前・後			2						1							1		
	地域と文化	1・2・3前・後			2													1		
	言語と文化	1・2・3前・後			2													1		
	日本の歴史と文化	1・2・3前・後			2													1		
	世界の歴史と文化	1・2・3前・後			2													1		
	哲学と思想	1・2・3前・後			2					1								1		
	日本文化・事情	1・2・3前・後			2													1		
	小計(12科目)	—	—	0	24	0				—	2	1	0	0	0	0	0	8		
	社会と生活	子どもの世界	1・2・3前・後			2					1								1	
		人間の成長と心理	1・2・3前・後			2													1	
日本国憲法		1・2・3前・後			2													1		
法律と現代社会		1・2・3前・後			2													1		
政治と現代社会		1・2・3前・後			2													1		
経済と現代社会		1・2・3前・後			2													1		
メディアと現代社会		1・2・3前・後			2													1		
家族と現代社会		1・2・3前・後			2													1		
福祉と現代社会(ボランティアを含む)		1・2・3前・後			2													1		
SDGsと現代社会		1・2・3・4後			2													1		
小計(10科目)	—	—	0	20	0				—	1	0	0	0	0	0	0	7			
自然と科学	数学の世界	1・2・3前・後			2													1		
	生活の物理	1・2・3前・後			2													1		
	生活の化学	1・2・3前・後			2													1		
	科学と環境	1・2・3前・後			2													1		
	生命の科学	1・2・3前・後			2													1		
	宇宙の科学	1・2・3前・後			2													1		
	人類の進化	1・2・3前・後			2													1		
	自然科学の歴史	1・2・3前・後			2													1		
小計(8科目)	—	—	0	16	0				—	0	0	0	0	0	0	0	6			
スポーツ	スポーツA	1・2・3前・後			1													1		
	スポーツB	1・2・3前・後			1													1		
	スポーツC	1・2・3前・後			1													1		
	スポーツD	1・2・3前・後			1													1		
	シーズン・スポーツ	1・2・3前・後			1													1		
	スポーツと健康	1・2・3前・後			2													1		
	レクリエーション論	1・2・3前・後			2													1		
	レクリエーション実技	1・2・3前・後			1													1		
小計(8科目)	—	—	0	10	0				—	0	0	0	0	0	0	0	4			
講特教養 義殊	教養特殊講義	1・2・3前・後			2													1		
	小計(1科目)	—	—	0	2	0				—	0	0	0	0	0	0	0	1		

全学 共通科目	外国語科目	英語ⅠA	1前		1			○		1									
		英語ⅠB	1後		1			○		1									
		英語ⅠC	1前		1			○		1									
		英語ⅠD	1後		1			○		1									
		英語ⅡA	2前		1			○		1									
		英語ⅡB	2後		1			○		1									
		英語ⅡC	2前			1		○		1									
		英語ⅡD	2後			1		○		1									
		英語ⅢA	2前・後			1			○		1								1
		英語ⅢB	2後			1			○										1
		フランス語Ⅰ	1・2前			1			○										1
		フランス語Ⅱ	1・2後			1			○										1
		フランス語Ⅲ	2・3前			1			○										1
		フランス語Ⅳ	2・3後			1			○										1
		ドイツ語Ⅰ	1・2前			1			○										1
		ドイツ語Ⅱ	1・2後			1			○										1
		ドイツ語Ⅲ	2・3前			1			○										1
		ドイツ語Ⅳ	2・3後			1			○										1
		スペイン語Ⅰ	1・2前			1			○										1
		スペイン語Ⅱ	1・2後			1			○										1
スペイン語Ⅲ	2・3前			1			○										1		
スペイン語Ⅳ	2・3後			1			○										1		
ロシア語Ⅰ	1・2前			1			○										1		
ロシア語Ⅱ	1・2後			1			○										1		
ロシア語Ⅲ	2・3前			1			○										1		
ロシア語Ⅳ	2・3後			1			○										1		
中国語Ⅰ	1・2前			1			○										1		
中国語Ⅱ	1・2後			1			○										1		
中国語Ⅲ	2・3前			1			○										1		
中国語Ⅳ	2・3後			1			○										1		
韓国語Ⅰ	1・2前			1			○										1		
韓国語Ⅱ	1・2後			1			○										1		
韓国語Ⅲ	2・3前			1			○										1		
韓国語Ⅳ	2・3後			1			○										1		
日本語Ⅰ	1・2前			1			○										1		
日本語Ⅱ	1・2後			1			○										1		
日本語Ⅲ	2・3前			1			○										1		
日本語Ⅳ	2・3後			1			○										1		
外国語特殊演習	1・2・3・4前・後			1又は2			○										1		
小計(39科目)	—	—	6	34	0		—		1	0	0	0	0	0	0	0	9		
地域文化・国際理解科目	地域文化理解Ⅰ	1・2・3・4前・後			2			○									1		
	地域文化理解Ⅱ	1・2・3・4前・後			2			○									1		
	地域文化理解Ⅲ	1・2・3・4前・後			2			○									1		
	国際理解(海外研修)Ⅰ	1・2・3・4前・後			2			○									1		
	国際理解(海外研修)Ⅱ	1・2・3・4前・後			2			○									1		
	国際理解(海外研修)Ⅲ	1・2・3・4前・後			2			○									1		
	国際理解(海外研修)Ⅳ	1・2・3・4前・後			1			○									1		
	国際理解(海外研修)Ⅴ	1・2・3・4前・後			1			○									1		
小計(8科目)	—	—	0	14	0		—		0	0	0	0	0	0	0	2			

博物館学芸員課程に関する科目	生涯学習概論	2後				2	○										1	
	博物館概論	2前				2	○										1	
	博物館経営論	2・3・4後				2	○										1	
	博物館資料論	2・3・4後				2	○										1	
	博物館資料保存論	2・3・4前・後				2	○										1	
	博物館展示論	2・3・4前・後				2	○										1	
	博物館情報・メディア論	2・3・4前・後				2	○										1	
	博物館教育論	2後				2	○										1	
	博物館実習	3・4通				3			○									2
	文化史A	2・3・4前				2	○											1
	文化史B	2・3・4後				2	○											1
	美術史A	2・3・4前				2	○											1
	美術史B	2・3・4後				2	○											1
	民俗学A	2・3・4前				2	○											1
	民俗学B	2・3・4後				2	○											1
小計 (15科目)	—	—	0	0	31	—	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	7	
図書館司書に関する科目	生涯学習概論	2後				2	○										1	
	図書館概論	2前・後				2	○										1	
	図書館情報技術論	3前				2	○										1	
	図書館制度・経営論	2後				2	○										1	
	図書館サービス概論	2後				2	○										1	
	情報サービス論	3後				2	○										1	
	児童サービス論	3前・後				2	○										1	
	情報サービス演習 (1)	3後				1		○									1	
	情報サービス演習 (2)	4前				1		○									1	
	図書館情報資源概論	2前				2	○										1	
	情報資源組織論	3後				2	○										1	
	情報資源組織演習	4通				2		○									1	
	図書・図書館史	3・4前				1	○										1	
	図書館サービス特論 (1)	3・4前				1	○										1	
	図書館情報資源特論 (2)	3・4前				1	○										1	
図書館基礎特論	3・4前				1	○										1		
小計 (16科目)	—	—	0	0	26	—	—	—	0	0	0	0	0	0	0	8		
合計 (205科目)			—	—	43	263	57	—	—	6	3	0	0	0	0	84		
学位又は称号		学士 (社会学)				学位又は学科の分野			社会学・社会福祉学関係									
卒業要件及び履修方法									授業期間等									
卒業要件単位									1学年の学期区分			2学期						
全学共通科目 32単位									1学期の授業期間			15週						
学部共通科目 12単位									1時限の授業の標準時間			90分						
専門教育科目 82単位 合計126単位以上修得すること。 詳細は以下のとおりである。 本学は必修、選択のほか、選択科目の中で特に重要となる授業科目を選択必修としている。																		
○全学共通科目																		
・必修単位 (7単位)																		
基礎科目から「大妻教養講座」を1単位、外国語科目から「英語 I A」「英語 I B」「英語 I C」「英語 I D」「英語 II A」「英語 II B」を各1単位。																		
・選択必修単位 (16単位以上)																		
基礎科目の女性とキャンパスライフの「大妻教養講座」「大妻教養講座II 卒業生から学ぶ」以外から2単位、リテラシーから2単位、キャリアから2単位。																		
教養科目の人間と文化、社会と生活、自然と科学、スポーツから10単位。																		
・選択単位 (9単位以上)																		
基礎科目、教養科目、外国語科目、地域文化・国際理解科目の中から必修単位と選択必修単位で履修した科目以外で9単位以上。																		
○学部共通科目																		
・必修単位 (6単位)																		
「人間共生総論 I」「社会学概論 I」「社会学概論 II」を各2単位。																		
・選択必修単位 (6単位以上)																		
「人間共生総論 II」「人間共生総論 III」「人間共生総論 IV」から2単位、「心理学概論 I」「心理学概論 II」「社会福祉学概論 I」「社会福祉学概論 II」「共生デザイン概論 I」「共生デザイン概論 II」から4単位。																		
○専門教育科目																		
・必修単位 (30単位)																		
基礎科目の必修科目を4単位、実践科目の必修科目を26単位。																		
・選択必修単位 (4単位以上)																		
応用科目の特論科目から4単位。																		
・選択単位 (48単位以上)																		
選択科目の中から選択必修単位で履修した科目以外で48単位以上。																		
○履修科目の登録の上限 (年間)																		
1学年44単位、2学年45単位、3学年45単位、4学年45単位																		

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(人間共生学部心理学科)																	
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考		
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		基 幹 教 員 (助 手 を 除 く)	
学部 共通 科目	人間共生総論Ⅰ	1後		2			○							1	オムニバス オムニバス		
	人間共生総論Ⅱ	1前	○	2			○		5	2	2			1			
	人間共生総論Ⅲ	1後		2			○							1			
	人間共生総論Ⅳ	1前		2			○							8			
	社会学概論Ⅰ	1前		2			○							1			
	社会学概論Ⅱ	1後		2			○							1			
	心理学概論Ⅰ	1前	○	2			○		1								
	心理学概論Ⅱ	1後	○	2			○		1								
	社会福祉学概論Ⅰ	1前			2			○								1	
	社会福祉学概論Ⅱ	1後			2			○								1	
	共生デザイン概論Ⅰ	1前			2			○								1	
	共生デザイン概論Ⅱ	1後			2			○								1	
小計(12科目)	—	—	6	18	0		—		5	2	2	0	0	13			
専門 教育 科目	基礎 科目	心理学 専門 基礎 科目 群	心理学基礎セミナー	1前	○	2			○							※講義 ※講義 ※講義	
			心理学研究法基礎	1後	○	2			○		1	1	1				
			基礎統計学Ⅰ	1前	○	2			○			2					
			基礎統計学Ⅱ	1後	○	2			○		1	1					
			人体の構造と機能及び疾病	1前			2		○								1
			社会心理学概論	2前	○	2			○		1						
			臨床心理学概論	2後	○	2			○		1						
			心理学的支援法	2後			2		○		1						
			パーソナリティ(感情・人格心理学)	2前			2		○								1
			学習心理学(学習・言語心理学)	2前			2		○								1
			認知心理学(知覚・認知心理学)	2前			2		○								1
			家族心理学(社会・集団・家族心理学)	2前			2		○								1
			発達心理学	2後			2		○				1				
			関係行政論	2後			2		○								1
			産業・組織心理学	2後			2		○			1					
			教育心理学(教育・学校心理学)	2前			2		○								1
			福祉心理学	2後			2		○								1
			公認心理師の職責	2後			2		○								1
			神経・生理心理学	3前			2		○								1
小計(19科目)	—	—	12	26	0		—		4	2	2	0	0	7			
応用 科目	社会 心理 学系 科 目 群	心理学統計法	2前	○	2			○		1	1				1	※講義	
		社会的認知の心理学	2前			2		○							1		
		集団心理学	2後			2		○							1		
		消費行動の社会心理学	3前			2		○							1		
		環境の社会心理学	3後			2		○							1		
	小計(5科目)	—	—	2	8	0		—		1	1	0	0	0	3		
	臨床 心理 学系 科 目 群	教育相談	2後			2		○								1	※講義
		精神分析学	3前			2		○								1	
精神疾患とその治療		3前			2		○								1		
心理的アセスメント	3前			2			○							1			
健康・医療心理学	3後			2			○							1			
障害者・障害児心理学	3後			2			○							1			
司法・犯罪心理学	3後			2			○							1			
小計(7科目)	—	—	0	14	0		—		0	0	0	0	0	7			

専門教育科目	実践科目	科 理 社	社会心理学実験研究法(心理学実験)	2後	○	4				○		1	1					※講義		
		目 学 会	社会心理学調査研究法	3前	○	4				○		1	1						※講義	
		群 心 心	小計 (2科目)	—	—	8	0	0		—		2	2	0	0	0	0	0		
		臨 床 科 目 目 群 心 理 学 系	カウンセリングセミナー	2前			2				○									1
			心理検査法セミナー	3後			4				○									1
			心理演習	3前・後			2				○		3		2					
			心理実習	3後			2				○		3	1	2					
			小計 (4科目)	—	—	0	10	0		—		3	1	2	0	0	0	2		標準外・オムニバス・共同 標準外・共同
		融 合・ 実 践 科 目 目 群	質的研究法	2前			2				○									2
			心理学研究法応用	3後			4				○									3
			Academic Literature I	3前			2				○				1					
			Academic Literature II	3後			2				○									1
			キャリア心理学セミナー	3前	○	2					○		1		1					
			心理学セミナーⅠ	3前	○	2					○		4	2	2					
			心理学セミナーⅡ	3後	○	2					○		4	2	2					
			心理学セミナーⅢ	4前	○	2					○		4	2	2					
			心理学セミナーⅣ	4後	○	2					○		4	2	2					
			対人コミュニケーション演習	2後			2				○									1
			安心・安全の心理学	3前			2				○			1						※講義
			ウェルネスの心理学	3前			2				○		1	1	1					※講義
グループワークⅠ	2前				2				○				1					1		
グループワークⅡ	3後				2				○									1		
卒業論文	4後		○	6					○		4	2	2							
小計 (15科目)	—	—	16	20	0		—		4	2	2	0	0	0	7		※講義 ※講義 ※講義			
英 語	Business English	2・3・4前・後			2				○				1							
	English Communication	2・3・4前・後			2				○				1							
小計 (2科目)	—	—	0	4	0		—		0	0	1	0	0	0	0					
留 学 認 定 科 目	Malaysian Cultural Camp I	1・2・3・4前			2				○									1		
	Malaysian Cultural Camp II	1・2・3・4前			4				○									1		
	異文化理解Ⅰ	1・2・3・4前・後			2				○									1		
	異文化理解Ⅱ	1・2・3・4前・後			2				○									1		
	小計 (4科目)	—	—	0	10	0		—		0	0	0	0	0	0	2		標準外 ※講義 標準外 ※講義		

全学共通科目	基礎科目	女性とキャンパスライフ	大妻教養講座	1前		1												1	メディア		
			大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ	2前			1												1	メディア	
			キャンパスライフとメンタルヘルス	1・2・3・4前・後			2								1	1				1	メディア
			女性と健康	1・2・3・4前・後			2													1	メディア
			ジェンダーと社会生活	1・2・3・4前・後			2													2	メディア
			女性史	1・2・3・4前・後			2													2	メディア
			リーダーシップ開発	2・3・4前・後			2													1	メディア
	小計(7科目)	—	—	1	11	0	—	—	—	—	—	—	1	1	0	0	0	0	7		
	リテラシー	日本語A(文章表現)	1前・後			2														1	
		日本語B(口頭表現)	1・2前・後			2														1	
		日本語C(読解)	1前・後			2														1	
		コンピュータ基礎A	1前・後			2														2	
		コンピュータ基礎B	1前・後			2														2	
		コンピュータ応用	1・2・3・4前・後			2														2	
		データサイエンス・AI概論	1後			2														1	メディア
	小計(7科目)	—	—	0	14	0	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	5		
	キャリア	キャリアデザインⅠ	1・2前・後			2														2	
		キャリアデザインⅡ	2・3前・後			2														1	
		キャリアデザインⅢ	3・4前・後			2														1	
キャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ		1・2・3・4後			2														1		
キャリア・ディベロップメント・プログラムⅡ		2・3・4後			2														1		
小計(5科目)	—	—	0	10	0	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	2			
人間と文化	文学の世界	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	音楽の世界	1・2・3・4前・後			2														1		
	美術の世界	1・2・3・4前・後			2														1		
	映像・演劇の世界	1・2・3・4前・後			2														2		
	考古学の世界	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	ポピュラー・カルチャーの世界	1・2・3・4前・後			2														2		
	地域と文化	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	言語と文化	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	日本の歴史と文化	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	世界の歴史と文化	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	哲学と思想	1・2・3・4前・後			2														2	メディア	
	日本文化・事情	1・2・3・4前・後			2														1		
	小計(12科目)	—	—	0	24	0	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	11		
教養科目	社会と生活	子どもの世界	1・2・3・4前・後			2													1	メディア	
		人間の成長と心理	1・2・3・4前・後			2													1	メディア	
		日本国憲法	1・2・3・4前・後			2													1	メディア	
		法律と現代社会	1・2・3・4前・後			2													1	メディア	
		政治と現代社会	1・2・3・4前・後			2													1	メディア	
		経済と現代社会	1・2・3・4前・後			2													1	メディア	
		メディアと現代社会	1・2・3・4前・後			2													1		
		家族と現代社会	1・2・3・4前・後			2													1	メディア	
		福祉と現代社会(ボランティアを含む)	1・2・3・4前・後			2													1	メディア	
		SDGsと現代社会	1・2・3・4後			2													1	メディア	
小計(10科目)	—	—	0	20	0	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	8			
自然と科学	数学の世界	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	生活の物理	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	生活の化学	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	科学と環境	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	生命の科学	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	宇宙の科学	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	人類の進化	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	自然科学の歴史	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
小計(8科目)	—	—	0	16	0	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	6			
スポーツ	スポーツA	1・2・3・4前・後			1														1		
	スポーツB	1・2・3・4前・後			1														1		
	スポーツC	1・2・3・4前・後			1														1		
	スポーツD	1・2・3・4前・後			1														1		
	シーズン・スポーツ	1・2・3・4前・後			1														1		
	スポーツと健康	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	レクリエーション論	1・2・3・4前・後			2														1	メディア	
	レクリエーション実技	1・2・3・4前・後			1														1		
小計(8科目)	—	—	0	10	0	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	4			
講特教養義養	教養特殊講義	1・2・3・4前・後			2														1		
	小計(1科目)	—	—	0	2	0	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	0	1		

博物館学芸員課程に関する科目	生涯学習概論	2後				2	○										1	オムニバス	
	博物館概論	2前				2	○										1		
	博物館経営論	2・3・4後				2	○										1		
	博物館資料論	2・3・4後				2	○										1		
	博物館資料保存論	2・3・4前・後				2	○										1		
	博物館展示論	2・3・4前・後				2	○										1		
	博物館情報・メディア論	2・3・4前・後				2	○										1		
	博物館教育論	2後				2	○										1		
	博物館実習	3・4通				3		○											2
	文化史A	2・3・4前				2	○												1
	文化史B	2・3・4後				2	○												1
	美術史A	2・3・4前				2	○												1
	美術史B	2・3・4後				2	○												1
	民俗学A	2・3・4前				2	○												1
民俗学B	2・3・4後				2	○											1		
小計 (15科目)	—	—	0	0	31	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7		
図書館司書に関する科目	生涯学習概論	2後				2	○											1	
	図書館概論	2前・後				2	○											1	
	図書館情報技術論	3前				2	○											1	
	図書館制度・経営論	2後				2	○											1	
	図書館サービス概論	2後				2	○											1	
	情報サービス論	3後				2	○											1	
	児童サービス論	3前・後				2	○											1	
	情報サービス演習 (1)	3後				1		○										1	
	情報サービス演習 (2)	4前				1		○										1	
	図書館情報資源概論	2前				2	○											1	
	情報資源組織論	3後				2	○											1	
	情報資源組織演習	4通				2		○										1	
	図書・図書館史	3・4前				1	○											1	
	図書館サービス特論 (1)	3・4前				1	○											1	
	図書館情報資源特論 (2)	3・4前				1	○											1	
	図書館基礎特論	3・4前				1	○											1	
小計 (16科目)	—	—	0	0	26	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8		
合計 (206科目)	—	—	51	265	57	—	—	5	2	2	0	0	0	0	0	0	91		
学位又は称号	学士 (心理学)				学位又は学科の分野				文学関係、社会学・社会福祉学関係										
卒業要件及び履修方法									授業期間等										
卒業要件単位 全学共通科目 36単位以上 学部共通科目 14単位以上 専門教育科目 76単位以上 合計126単位以上修得すること。 詳細は以下のとおりである。 本学は必修、選択のほか、選択科目の中で特に重要となる授業科目を選択必修としている。 ○全学共通科目 ・必修単位 (7単位) 基礎科目から「大妻教養講座」を1単位、外国語科目の「英語 I A」「英語 I B」「英語 I C」「英語 I D」「英語 II A」「英語 II B」を各1単位。 ・選択必修科目 (14単位以上) 基礎科目の女性とキャンパスライフから「大妻教養講座」「大妻教養講座 II 卒業生から学ぶ」以外の2単位以上、リテラシーから2単位以上、キャリアから2単位以上。 教養科目の人間と文化から2単位以上、社会と生活から2単位以上、自然と科学から2単位以上、スポーツから2単位以上。 ・選択科目 (15 単位以上) 基礎科目、教養科目、外国語科目、地域文化・国際理解科目の中から必修科目と選択必修科目で履修した科目以外で15 単位以上。 ○学部共通科目 ・必修単位 (6単位) 「人間共生総論 II」「心理学概論 I」「心理学概論 II」を各2単位。 ・選択単位 (8単位以上) 「人間共生総論 II」「心理学概論 I」「心理学概論 II」以外に8単位。 ○専門教育科目 ・必修単位 (38単位) ・選択単位 (38単位以上) なお、「心理学セミナー I」は学部共通・専門教育科目で合計20単位以上修得していることを条件とする。 ○履修科目の登録の上限 (年間) 1学年43単位、2学年45単位、3学年45単位、4学年45単位								1学年の学期区分				2学期							
								1学期の授業期間				15週							
								1時限の授業の標準時間				90分							

教育課程等の概要																
(人間共生学部福祉学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹教員(助手を除く)以外の教員
学部共通科目	人間共生総論Ⅰ	1後			2		○								1	オムニバス
	人間共生総論Ⅱ	1後			2		○								1	
	人間共生総論Ⅲ	1後	○	2			○			1						
	人間共生総論Ⅳ	1前			2		○								8	
	社会学概論Ⅰ	1前			2		○								1	
	社会学概論Ⅱ	1後			2		○								1	
	心理学概論Ⅰ	1前			2		○								1	
	心理学概論Ⅱ	1後			2		○								1	
	社会福祉学概論Ⅰ	1前	○	2			○				1					
	社会福祉学概論Ⅱ	1後	○	2			○			1						
	共生デザイン概論Ⅰ	1前			2		○								1	
	共生デザイン概論Ⅱ	1後			2		○								1	
小計(12科目)		—	—	6	18	0	—	—	—	2	0	1	0	0	13	
専門教育科目	基礎科目	人体の構造・機能・疾病	1前	○	2			○			1					
		介護福祉論	1前	○	2			○			1					
		ソーシャルワーク論Ⅰ-A	1後	○	2			○				1				
		高齢者福祉論	2前	○	2			○			1					
		社会保障Ⅰ	3前	○	2			○			1					
		健康福祉論	1前			2		○			1					
		心理学と心理的支援	1後			2		○								1
		社会学と社会システム	1後			2		○								1
		社会福祉調査の基礎	2前			2		○								1
		ソーシャルワーク論Ⅰ-B	2前			2		○								1
		地域福祉論Ⅰ	2前			2		○				1				
		児童・家庭福祉論	2前			2		○				1				
		障害者福祉論	2後			2		○				1				1
		女性とキャリア	2・3・4前			2		○								1
		ソーシャルワーク論Ⅱ-A	2前			2		○			1					
		ソーシャルワーク論Ⅱ-B	2後			2		○			1					
		生活と文化	2前			2		○								1
		公的扶助論	2前			2		○			1					
		刑事司法と福祉	2後			2		○			1					
		発達と老化の理解	2後			2		○								1
		障害の理解	2後			2		○								1
		老年医学	2後			2		○			1					
		介護とケアマネジメント	2・3前			2		○				1				
		介護過程Ⅰ	1・2前			2		○			1					
		こころとからだのしくみA	2前			2		○								1
		こころとからだのしくみB	2前			2		○								1
		コミュニケーション技術A	2前			2		○								1
		福祉レクリエーション論	1・2・3・4前			2		○								1
		福祉レクリエーション援助論	2・3・4前			2		○								1
		社会的養護論	2後			2		○				1				
		多文化共生論	2・3・4前			2		○								1
		多文化理解コミュニケーション	2・3・4後			2		○			1					
		ICTの理解	2・3・4後			2		○								1
小計(33科目)		—	—	10	56	0	—	—	—	7	1	1	0	0	12	

応用科目	医療福祉論	3前			2		○			1										
	社会保障Ⅱ	3後			2		○			1										
	ソーシャルワーク論Ⅲ-A	3後			2		○			1										
	ソーシャルワーク論Ⅲ-B	3前			2		○											1		
	権利擁護と成年後見制度	3前			2		○			1										
	地域福祉論Ⅱ	3後			2		○					1								
	福祉サービスの組織と経営	3後			2		○											1		
	介護予防	3後			2		○											1		
	介護と自立支援	3後			2		○											1		
	介護とリスクマネジメント	4後			2		○											1		
	コミュニケーション技術B	3前			2		○											1		
	認知症の理解	3前			2		○											1		
	医療的ケアⅠ	3後			2		○			1										
	医療的ケアⅡ	4前			2		○			1										
	医療的ケアⅢ	4前			2		○	○		1									※講義	
	女性支援論	3・4後			2		○												1	
	社会福祉学特別講義	4後			2		○												1	
	介護福祉学特別講義	4後			2		○												1	
	小計（18科目）	—	—	0	36	0	—	—	—	4	0	1	0	0	0	0	0	0	6	
専門教育科目	実践科目	社会福祉学基礎セミナーⅠ	1前	○	2			○		1		1								
		社会福祉学基礎セミナーⅡ	1後	○	2			○		2										
		社会福祉学セミナーⅠ	3前	○	2			○		7	1	1								
		社会福祉学セミナーⅡ	3後	○	2			○		7	1	1	1							
		社会福祉学セミナーⅢ	4前	○	2			○		7	1	1	1							
		社会福祉学セミナーⅣ	4後	○	2			○		7	1	1	1							
		卒業論文	4後	○	4			○		7	1	1								
		ソーシャルワーク実習指導	2前			1			○		1									3
		相談援助演習Ⅰ	2前			1			○			1								3
		相談援助演習Ⅱ	2後			1			○			1								3
		相談援助演習Ⅲ	3前			1			○		1									2
		相談援助演習Ⅳ	3後			1			○		1									2
		相談援助演習Ⅴ	4前			1			○		1									1
		相談援助実習事前指導	3・4前・後			1			○		3	1								
		相談援助実習事後指導	3・4前・後			1			○		2	1	1							
		相談援助実習Ⅰ	2・3・4前・後			1			○		3	1	1							標準外
		相談援助実習Ⅱ	3・4前・後			4			○		3	1	1							標準外
		生活支援技術A-Ⅰ	1後			1			○		1									
	生活支援技術A-Ⅱ	2後			1			○											1	
	生活支援技術B	2後			2			○											1	
	生活支援技術C	2前			2			○											1	
	生活支援技術D	2後			2			○											1	
	生活支援技術E	3前			2			○											1	
	介護過程Ⅱ-A	2後			2			○		1										
	介護過程Ⅱ-B	3前			1			○		1										
	介護過程Ⅲ	3後			1			○		1										
	介護総合演習Ⅰ	2前			1			○		1										
	介護総合演習Ⅱ	2後			1			○		1										
	介護総合演習Ⅲ	3前			1			○		1										
	介護総合演習Ⅳ	4前			1			○		1										
	介護実習入門	1後2前			1			○		2									標準外	
	介護実習Ⅰ	2前			2			○		2									標準外	
	介護実習Ⅱ	2後			2			○		2									標準外	
	介護実習Ⅲ	3前			4			○		2									標準外	
介護実習Ⅳ	4前			1			○		2									標準外		
アロマセラピー	1・2・3・4後			2			○											1		
健康と栄養	2・3前			2			○											1		
福祉レクリエーション援助技術	2・3・4後			1			○											1		
多文化理解フィールドワーク事前・事後指導	2・3・4前			2			○		1									※講義		
多文化理解フィールドワーク	2・3・4前			1			○		1									標準外		
社会福祉専門実習	4前			3			○		1	1								※講義		
ビジネス英語	2・3・4前・後			2			○			1										
英語コミュニケーション	2・3・4前・後			2			○			1										
Malaysian Cultural CampⅠ	1・2・3・4前			2			○											1		
Malaysian Cultural CampⅡ	1・2・3・4前			4			○											1		
異文化理解Ⅰ	1・2・3・4前・後			2			○		1											
異文化理解Ⅱ	1・2・3・4前・後			2			○		1											
小計（47科目）	—	—	16	66	0	—	—	—	7	1	1	0	0	0	0	0	0	15		

全学共通科目	基礎科目	女性とキャンパスライフ	大妻教養講座	1前		1												1	メディア				
			大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ	2前			1													1	メディア		
			キャンパスライフとメンタルヘルス	1・2・3・4前・後			2														2	メディア	
			女性と健康	1・2・3・4前・後			2															1	メディア
			ジェンダーと社会生活	1・2・3・4前・後			2															2	メディア
			女性史	1・2・3・4前・後			2															2	メディア
			リーダーシップ開発	2・3・4前・後			2															1	
		小計(7科目)	—	—	1	11	0					0	0	0	0	0	0	0	0	0	9		
		リテラシー	日本語A(文章表現)	1前・後			2															1	
			日本語B(口頭表現)	1・2前・後			2															1	
			日本語C(読解)	1前・後			2															1	
	コンピュータ基礎A		1前・後			2															2		
	コンピュータ基礎B		1前・後			2															2		
	コンピュータ応用		1・2・3・4前・後			2															2		
	データサイエンス・AI概論	1後			2															1	メディア		
	小計(7科目)	—	—	0	14	0					0	0	0	0	0	0	0	0	0	6			
	キャリア	キャリアデザインⅠ	1・2前・後			2															2		
		キャリアデザインⅡ	2・3前・後			2															1		
		キャリアデザインⅢ	3・4前・後			2															1		
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ	1・2・3・4後			2															1		
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅡ	2・3・4後			2															1		
	小計(5科目)	—	—	0	10	0					0	0	0	0	0	0	0	0	0	2			
	人間と文化	文学の世界	1・2・3・4前・後			2															1	メディア	
		音楽の世界	1・2・3・4前・後			2															1		
		美術の世界	1・2・3・4前・後			2															1		
		映像・演劇の世界	1・2・3・4前・後			2															2		
		考古学の世界	1・2・3・4前・後			2															1	メディア	
		ポピュラー・カルチャーの世界	1・2・3・4前・後			2															2		
		地域と文化	1・2・3・4前・後			2															1	メディア	
		言語と文化	1・2・3・4前・後			2															1	メディア	
		日本の歴史と文化	1・2・3・4前・後			2															1	メディア	
		世界の歴史と文化	1・2・3・4前・後			2															1	メディア	
		哲学と思想	1・2・3・4前・後			2															2	メディア	
日本文化・事情		1・2・3・4前・後			2															1			
小計(12科目)		—	—	0	24	0					0	0	0	0	0	0	0	0	0	11			
社会と生活		子どもの世界	1・2・3・4前・後			2															1	メディア	
	人間の成長と心理	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	日本国憲法	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	法律と現代社会	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	政治と現代社会	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	経済と現代社会	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	メディアと現代社会	1・2・3・4前・後			2															1			
	家族と現代社会	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	福祉と現代社会(ボランティアを含む)	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	SDGsと現代社会	1・2・3・4後			2															1	メディア		
	小計(10科目)	—	—	0	20	0					0	0	0	0	0	0	0	0	0	8			
自然と科学	数学の世界	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	生活の物理	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	生活の化学	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	科学と環境	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	生命の科学	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	宇宙の科学	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	人類の進化	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
	自然科学の歴史	1・2・3・4前・後			2															1	メディア		
小計(8科目)	—	—	0	16	0					0	0	0	0	0	0	0	0	0	6				
スポーツ	スポーツA	1・2・3・4前・後			1															1			
	スポーツB	1・2・3・4前・後			1															1			
	スポーツC	1・2・3・4前・後			1															1			
	スポーツD	1・2・3・4前・後			1															1			
	シーズン・スポーツ	1・2・3・4前・後			1															1			
	スポーツと健康	1・2・3・4前・後			2															2	メディア		
	レクリエーション論	1・2・3・4前・後			2															2	メディア		
	レクリエーション実技	1・2・3・4前・後			1															1			
小計(8科目)	—	—	0	10	0					1	0	0	0	0	0	0	0	0	3				
講特教義 義殊	教養特殊講義	1・2・3・4前・後			2															1			
	小計(1科目)	—	—	0	2	0					0	0	0	0	0	0	0	0	0	1			

全学共通科目	外国語科目	英語ⅠA	1前		1			○			1								
		英語ⅠB	1後		1			○			1								
		英語ⅠC	1前		1			○			1								
		英語ⅠD	1後		1			○			1								
		英語ⅡA	2前		1			○			1								
		英語ⅡB	2後		1			○			1								
		英語ⅡC	2前			1			○									1	
		英語ⅡD	2後			1			○									1	
		英語ⅢA	2前・後			1			○										1
		英語ⅢB	2後			1			○										1
		フランス語Ⅰ	1・2前			1			○										1
		フランス語Ⅱ	1・2後			1			○										1
		フランス語Ⅲ	2・3前			1			○										1
		フランス語Ⅳ	2・3後			1			○										1
		ドイツ語Ⅰ	1・2前			1			○										1
		ドイツ語Ⅱ	1・2後			1			○										1
		ドイツ語Ⅲ	2・3前			1			○										1
		ドイツ語Ⅳ	2・3後			1			○										1
		スペイン語Ⅰ	1・2前			1			○										1
		スペイン語Ⅱ	1・2後			1			○										1
		スペイン語Ⅲ	2・3前			1			○										1
		スペイン語Ⅳ	2・3後			1			○										1
		ロシア語Ⅰ	1・2前			1			○										1
		ロシア語Ⅱ	1・2後			1			○										1
		ロシア語Ⅲ	2・3前			1			○										1
		ロシア語Ⅳ	2・3後			1			○										1
		中国語Ⅰ	1・2前			1			○										1
		中国語Ⅱ	1・2後			1			○										1
		中国語Ⅲ	2・3前			1			○										1
		中国語Ⅳ	2・3後			1			○										1
		韓国語Ⅰ	1・2前			1			○										1
		韓国語Ⅱ	1・2後			1			○										1
		韓国語Ⅲ	2・3前			1			○										1
		韓国語Ⅳ	2・3後			1			○										1
		日本語Ⅰ	1・2前			1			○										1
		日本語Ⅱ	1・2後			1			○										1
		日本語Ⅲ	2・3前			1			○										1
		日本語Ⅳ	2・3後			1			○										1
		外国語特殊演習	1・2・3・4前・後			1又は2			○										1
小計(39科目)	—	—	6	34	0		—		0	1	0	0	0	0	0	0	10		
全学共通科目	地域文化・国際理解科目	地域文化理解Ⅰ	1・2・3・4前・後			2			○									1	
		地域文化理解Ⅱ	1・2・3・4前・後			2			○									1	
		地域文化理解Ⅲ	1・2・3・4前・後			2			○									1	
		国際理解(海外研修)Ⅰ	1・2・3・4前・後			2			○									1	
		国際理解(海外研修)Ⅱ	1・2・3・4前・後			2			○									1	
		国際理解(海外研修)Ⅲ	1・2・3・4前・後			2			○									1	
		国際理解(海外研修)Ⅳ	1・2・3・4前・後			1			○									1	
		国際理解(海外研修)Ⅴ	1・2・3・4前・後			1			○									1	
小計(8科目)	—	—	0	14	0		—		0	0	0	0	0	0	0	0	2		

博物館学芸員課程に関する科目	生涯学習概論	2後				2	○										1	オムニバス
	博物館概論	2前				2	○										1	
	博物館経営論	2・3・4後				2	○										1	
	博物館資料論	2・3・4後				2	○										1	
	博物館資料保存論	2・3・4前・後				2	○										1	
	博物館展示論	2・3・4前・後				2	○										1	
	博物館情報・メディア論	2・3・4前・後				2	○										1	
	博物館教育論	2後				2	○										1	
	博物館実習	3・4通				3		○									2	
	文化史A	2・3・4前				2	○										1	
	文化史B	2・3・4後				2	○										1	
	美術史A	2・3・4前				2	○										1	
	美術史B	2・3・4後				2	○										1	
	民俗学A	2・3・4前				2	○										1	
	民俗学B	2・3・4後				2	○										1	
小計 (15科目)	—	—	0	0	31	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	7		
図書館司書に関する科目	生涯学習概論	2後				2	○										1	※演習
	図書館概論	2前・後				2	○										1	
	図書館情報技術論	3前				2	○										1	
	図書館制度・経営論	2後				2	○										1	
	図書館サービス概論	2後				2	○										1	
	情報サービス論	3後				2	○										1	
	児童サービス論	3前・後				2	○										1	
	情報サービス演習 (1)	3後				1		○									1	
	情報サービス演習 (2)	4前				1		○									1	
	図書館情報資源概論	2前				2	○										1	
	情報資源組織論	3後				2	○										1	
	情報資源組織演習	4通				2		○									1	
	図書・図書館史	3・4前				1	○										1	
	図書館サービス特論 (1)	3・4前				1	○										1	
	図書館情報資源特論 (2)	3・4前				1	○										1	
	図書館基礎特論	3・4前				1	○										1	
小計 (16科目)	—	—	0	0	26	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	8		
合計 (246科目)			—	—	39	331	57	—	7	1	1	0	0	0	100			
学位又は称号		学士 (福祉学)				学位又は学科の分野		社会学・社会福祉学関係										
卒業要件及び履修方法							授業期間等											
卒業要件単位							1学年の学期区分			2学期								
全学共通科目 26単位以上																		
学部共通科目 12単位以上							1学期の授業期間			15週								
専門教育科目 88単位以上 合計126単位以上を修得すること。							1時限の授業の標準時間			90分								
<p>詳細は以下のとおりである。</p> <p>本学は必修、選択のほか、選択科目の中で特に重要となる授業科目を選択必修としている。</p> <p>○全学共通科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必修単位 (7単位) <ul style="list-style-type: none"> 基礎科目から「大妻教養講座」を1単位、外国語科目から「英語 I A」「英語 I B」「英語 I C」「英語 I D」「英語 II A」「英語 II B」を各1単位。 ・選択必修単位 (13単位以上) <ul style="list-style-type: none"> 基礎科目の女性とキャンパスライフの「大妻教養講座」「大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ」以外の2単位以上、リテラシー、キャリアから各2単位以上。 教養科目の人間と文化、社会と生活、自然と科学から各2単位以上、スポーツから1単位以上。 ・選択単位 (6単位以上) <ul style="list-style-type: none"> 基礎科目、教養科目、外国語科目、地域文化・国際理解科目の中から、必修科目と選択必修科目で履修した科目以外に6単位以上。 <p>○学部共通科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必修単位 (6単位) <ul style="list-style-type: none"> 「人間共生総論Ⅲ」「社会福祉学概論Ⅰ」「社会福祉学概論Ⅱ」を各2単位。 ・選択単位 (6単位以上) <ul style="list-style-type: none"> 「人間共生総論Ⅲ」「社会福祉学概論Ⅰ」「社会福祉学概論Ⅱ」以外に6単位。 <p>○専門教育科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必修単位 (26単位) <ul style="list-style-type: none"> 基礎科目「人体の構造・機能・疾病」「介護福祉論」「ソーシャルワーク論Ⅰ-A」「高齢者福祉論」「社会保障Ⅰ」各2単位、 実践科目「社会福祉学基礎セミナーⅠ」「社会福祉学基礎セミナーⅡ」「社会福祉学セミナーⅠ」「社会福祉学セミナーⅡ」「社会福祉学セミナーⅢ」「社会福祉学セミナーⅣ」各2単位、「卒業論文」4単位 ・選択必修単位 (4単位以上) <ul style="list-style-type: none"> 基礎科目「健康福祉論」「心理学と心理的支援」「社会学と社会システム」「社会福祉調査の基礎」「ソーシャルワーク論Ⅰ-B」「地域福祉論Ⅰ」「児童・家庭福祉論」「障害者福祉論」「女性とキャリア」、応用科目「医療福祉論」「社会保障Ⅱ」から4単位以上 ・選択単位 (58単位以上) <ul style="list-style-type: none"> 専門教育科目の選択科目から58単位以上 <p>なお、選択必修科目で卒業要件単位数を超えて修得した単位数は、選択単位に含むことができる。</p> <p>○履修科目の登録の上限 (年間)</p> <p>1学年48単位、2学年48単位、3学年48単位、4学年44単位</p>																		

教育課程等の概要																
(人間共生学部共生デザイン学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹教員(助手を除く)以外の教員
学部共通科目	人間共生総論Ⅰ	1後			2			○						1	オムニバス	
	人間共生総論Ⅱ	1後			2			○						1		
	人間共生総論Ⅲ	1後			2			○						1		
	人間共生総論Ⅳ	1前	○	2				○						1		
	社会学概論Ⅰ	1前			2			○						1		
	社会学概論Ⅱ	1後			2			○						1		
	心理学概論Ⅰ	1前			2			○						1		
	心理学概論Ⅱ	1後			2			○						1		
	社会福祉学概論Ⅰ	1前			2			○						1		
	社会福祉学概論Ⅱ	1後			2			○						1		
	共生デザイン概論Ⅰ	1前	○	2				○			1					
	共生デザイン概論Ⅱ	1後	○	2				○				1				
小計(12科目)		—	—	6	18	0		—		5	3	0	0	0	8	
基礎科目	グローバル・地域共生基礎科目	国際関係論	1前	○	2			○								※講義
		コミュニティ・空間デザイン論	1後	○	2			○			1					
		コミュニケーションスキル論	2前	○	2				○		1	1				
	小計(3科目)		—	—	6	0	0		—	2	2	0	0	0	0	
	グローバル・地域共生専門科目	社会学と社会システム	1後			2			○							1
		文化人類学	1後			2			○			1				
		まちづくりデザイン	1後			2			○							1
	小計(3科目)		—	—	0	6	0		—	0	1	0	0	0	2	
	人間共生基礎科目	ジェンダー論	1前	○	2				○				1			
		人間の多様性と障害	2前	○	2				○			1				
		メンタルヘルスの課題と支援Ⅰ	2前	○	2				○			1				
	小計(3科目)		—	—	6	0	0		—	2	1	0	0	0	0	
人間共生専門科目	医学知識	1後			2			○							1	
	心理学と心理的支援	1後			2			○							1	
	ソーシャルワーク論ⅠA	1後			2			○							1	
	精神医学Ⅰ	1前			2			○							1	
	マイノリティと社会問題	1後			2			○			1					
小計(5科目)		—	—	0	10	0		—	0	1	0	0	0	3		
ビジネス・デザイン科目	就労支援論	2後			2			○				1				
	企業と社会	1後			2			○				1				
	ビジネスデータ分析の基礎	2後			2			○	○			1				
	産業と経営	2前			2			○				1				
小計(4科目)		—	—	0	8	0		—	2	1	0	0	0	0		
グローバル・地域共生専門科目	精神保健福祉の原理Ⅰ	2前			2			○				1				
	精神保健福祉の原理Ⅱ	3前			2			○							1	
	精神保健福祉制度論	2・3後			2			○				1				
	社会福祉調査の基礎	2前			2			○							1	
	地域福祉と包括支援体制Ⅰ	2前			2			○							1	
	地域福祉と包括支援体制Ⅱ	3後			2			○							1	
	異文化コミュニケーション	2後			2			○	○			1				
	居住環境論	2前			2			○				1				
	ユニバーサルデザイン論	2・3後			2			○				1				
	エスニシティ論	2前			2			○				1				
	政策デザインとガバナンス	3後			2			○				1				
国際共生と社会課題	2前			2			○							1		
国際経済論	3後			2			○				1					
小計(13科目)		—	—	0	26	0		—	4	2	0	0	0	4		

全学共通科目	基礎科目	女性とキャンパスライフ	大妻教養講座 大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ キャンパスライフとメンタルヘルス 女性と健康 ジェンダーと社会生活 女性史 リーダーシップ開発	1前 2前 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 2・3・4前・後	1 1 2 2 2 2 2	1 1 2 2 2 2 2	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○											1 1 2 1 2 2 1	メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア			
		リテラシー	日本語A (文章表現) 日本語B (口頭表現) 日本語C (読解) コンピュータ基礎A コンピュータ基礎B コンピュータ応用 データサイエンス・AI概論	1前・後 1・2前・後 1前・後 1前・後 1前・後 1・2・3・4前・後 1後	2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○												1 1 1 1 1 2 1	メディア		
		キャリア	キャリアデザインⅠ キャリアデザインⅡ キャリアデザインⅢ キャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ キャリア・ディベロップメント・プログラムⅡ	1・2前・後 2・3前・後 3・4前・後 1・2・3・4後 2・3・4後	2 2 2 2 2	2 2 2 2 2	○ ○ ○ ○ ○													2 1 1 1 1		
		小計 (7科目)		—	—	1	11	0	—											9		
		小計 (5科目)		—	—	0	14	0	—											5		
		人間と文化	文学の世界 音楽の世界 美術の世界 映像・演劇の世界 考古学の世界 ポピュラー・カルチャーの世界 地域と文化 言語と文化 日本の歴史と文化 世界の歴史と文化 哲学と思想 日本文化・事情	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○													1 1 1 2 1 2 1 1 1 1 2 1	メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア	
		小計 (12科目)		—	—	0	24	0	—												10	
	社会と生活	子どもの世界 人間の成長と心理 日本国憲法 法律と現代社会 政治と現代社会 経済と現代社会 メディアと現代社会 家族と現代社会 福祉と現代社会 (ボランティアを含む) SDGsと現代社会	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○															1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア
	小計 (10科目)		—	—	0	20	0	—												8		
	自然と科学	数学の世界 生活の物理 生活の化学 科学と環境 生命の科学 宇宙の科学 人類の進化 自然科学の歴史	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後	2 2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2 2	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○															1 1 1 1 1 1 1 1	メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア メディア
	小計 (8科目)		—	—	0	16	0	—												6		
	スポーツ	スポーツA スポーツB スポーツC スポーツD シーズン・スポーツ スポーツと健康 レクリエーション論 レクリエーション実技	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後	1 1 1 1 1 2 2 1	1 1 1 1 1 2 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○																1 1 1 1 1 1 1 1
小計 (8科目)		—	—	0	10	0	—												4			
講特教養殊養	教養特殊講義	1・2・3・4前・後	2	2	○														1			
小計 (1科目)		—	—	0	2	0	—												1			

全学共通科目	外国語科目	英語ⅠA	1前		1			○		1							
		英語ⅠB	1後		1			○		1							
		英語ⅠC	1前		1			○		1							
		英語ⅠD	1後		1			○		1							
		英語ⅡA	2前		1			○		1							
		英語ⅡB	2後		1			○		1							
		英語ⅡC	2前			1		○									1
		英語ⅡD	2後			1		○									1
		英語ⅢA	2前・後			1		○									1
		英語ⅢB	2後			1		○									1
		フランス語Ⅰ	1・2前			1		○									1
		フランス語Ⅱ	1・2後			1		○									1
		フランス語Ⅲ	2・3前			1		○									1
		フランス語Ⅳ	2・3後			1		○									1
		ドイツ語Ⅰ	1・2前			1		○									1
		ドイツ語Ⅱ	1・2後			1		○									1
		ドイツ語Ⅲ	2・3前			1		○									1
		ドイツ語Ⅳ	2・3後			1		○									1
		スペイン語Ⅰ	1・2前			1		○									1
		スペイン語Ⅱ	1・2後			1		○									1
スペイン語Ⅲ	2・3前			1		○									1		
スペイン語Ⅳ	2・3後			1		○									1		
ロシア語Ⅰ	1・2前			1		○									1		
ロシア語Ⅱ	1・2後			1		○									1		
ロシア語Ⅲ	2・3前			1		○									1		
ロシア語Ⅳ	2・3後			1		○									1		
中国語Ⅰ	1・2前			1		○									1		
中国語Ⅱ	1・2後			1		○									1		
中国語Ⅲ	2・3前			1		○									1		
中国語Ⅳ	2・3後			1		○									1		
韓国語Ⅰ	1・2前			1		○									1		
韓国語Ⅱ	1・2後			1		○									1		
韓国語Ⅲ	2・3前			1		○									1		
韓国語Ⅳ	2・3後			1		○									1		
日本語Ⅰ	1・2前			1		○			1								
日本語Ⅱ	1・2後			1		○			1								
日本語Ⅲ	2・3前			1		○			1								
日本語Ⅳ	2・3後			1		○			1								
外国語特殊演習	1・2・3・4前・後			1又は2		○									1		
小計(39科目)	—	—	6	34	0	—			0	1	0	0	0	0	9		
地域文化・国際理解科目	地域文化理解Ⅰ	1・2・3・4前・後			2		○								1		
	地域文化理解Ⅱ	1・2・3・4前・後			2		○								1		
	地域文化理解Ⅲ	1・2・3・4前・後			2		○								1		
	国際理解(海外研修)Ⅰ	1・2・3・4前・後			2		○		1								
	国際理解(海外研修)Ⅱ	1・2・3・4前・後			2		○		1								
	国際理解(海外研修)Ⅲ	1・2・3・4前・後			2		○		1								
	国際理解(海外研修)Ⅳ	1・2・3・4前・後			1		○		1								
	国際理解(海外研修)Ⅴ	1・2・3・4前・後			1		○		1								
小計(8科目)	—	—	0	14	0	—		1	0	0	0	0	0	1			

博物館学芸員課程に関する科目	生涯学習概論	2後				2	○											1
	博物館概論	2前				2	○											1
	博物館経営論	2・3・4後				2	○											1
	博物館資料論	2・3・4後				2	○											1
	博物館資料保存論	2・3・4前・後				2	○											1
	博物館展示論	2・3・4前・後				2	○											1
	博物館情報・メディア論	2・3・4前・後				2	○											1
	博物館教育論	2後				2	○											1
	博物館実習	3・4通				3		○										2
	文化史A	2・3・4前				2	○											1
	文化史B	2・3・4後				2	○											1
	美術史A	2・3・4前				2	○											1
	美術史B	2・3・4後				2	○											1
	民俗学A	2・3・4前				2	○											1
	民俗学B	2・3・4後				2	○											1
小計(15科目)	—	—	0	0	31	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	
図書館司書に関する科目	生涯学習概論	2後				2	○											1
	図書館概論	2前・後				2	○											1
	図書館情報技術論	3前				2	○											1
	図書館制度・経営論	2後				2	○											1
	図書館サービス概論	2後				2	○											1
	情報サービス論	3後				2	○											1
	児童サービス論	3前・後				2	○											1
	情報サービス演習(1)	3後				1		○										1
	情報サービス演習(2)	4前				1		○										1
	図書館情報資源概論	2前				2	○											1
	情報資源組織論	3後				2	○											1
	情報資源組織演習	4通				2		○										1
	図書・図書館史	3・4前				1	○											1
	図書館サービス特論(1)	3・4前				1	○											1
	図書館情報資源特論(2)	3・4前				1	○											1
図書館基礎特論	3・4前				1	○											1	
小計(16科目)	—	—	0	0	26	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	
合計(237科目)		—	—	43	327	57	—	—	5	3	0	0	0	0	0	0	0	90
学位又は称号		学士(共生デザイン)				学位又は学科の分野			社会学・社会福祉学関係									
卒業要件及び履修方法										授業期間等								
卒業要件単位										1学年の学期区分				2学期				
全学共通科目 30単位																		
学部共通科目 12単位										1学期の授業期間				15週				
専門教育科目 84単位 合計126単位以上修得すること。										1時限の授業の標準時間				90分				
詳細は以下のとおりである。																		
本学は必修、選択のほか、選択科目の中で特に重要となる授業科目を選択必修としている。																		
○全学共通科目																		
・必修単位(7単位)																		
基礎科目から「大妻教養講座」を1単位、外国語科目から「英語ⅠA」「英語ⅠB」「英語ⅠC」「英語ⅠD」「英語ⅡA」「英語ⅡB」を各1単位。																		
・選択必修単位(15単位以上)																		
基礎科目の女性とキャンパスライフの「大妻教養講座」以外の3単位、リテラシーから2単位、キャリアから2単位。																		
教養科目の人間と文化、社会と生活、自然と科学、スポーツから8単位。																		
・選択単位(8単位以上)																		
基礎科目、教養科目、外国語科目、地域文化・国際理解科目の中から、必修科目と選択必修科目で履修した科目以外に8単位。																		
○学部共通科目																		
・必修単位(6単位)																		
「人間共生総論Ⅳ」「共生デザイン概論Ⅰ」「共生デザイン概論Ⅱ」を各2単位。																		
・選択単位(6単位以上)																		
「人間共生総論Ⅳ」「共生デザイン概論Ⅰ」「共生デザイン概論Ⅱ」以外に6単位。																		
○専門教育科目																		
・必修単位(30単位)																		
基礎科目の必修科目を12単位、実践科目の必修科目を12単位、「卒業論文」の6単位。																		
・選択必修単位(6単位以上)																		
実践科目の共生デザイン力実践科目のうち、以下①～③のいずれか1つを履修すること。																		
①「グローバル共生フィールドワークⅠ」(2単位)かつ「グローバル共生フィールドワークⅡ」(4単位)																		
②「ダイバーシティインターンシップⅠ」(2単位)かつ「ダイバーシティインターンシップⅡ」(4単位)																		
③「地域共生フィールドワークⅠ」(2単位)かつ「地域共生フィールドワークⅡ」(4単位)																		
・選択単位(48単位以上)																		
専門教育科目の選択科目から48単位。																		
なお、選択必修科目で卒業要件を超えて修得した場合は、選択単位に含むことができる。																		
○履修科目の登録の上限(年間)																		
1学年44単位、2学年45単位、3学年45単位、4学年45単位																		

授 業 科 目 の 概 要				
(人間共生学部社会科学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	人間共生総論Ⅰ	○	本授業は新入生に対して学部の基本理念である「共生」について考えさせることを目的とした授業である。人間共生総論Ⅰにおいては、社会学の観点から共生に問題を考えていく。ジェンダー間、世代間、異文化間、様々な次元の共生について論じられる。受講生には自分とは異なる他者を理解し、共に生きていくための知識と知恵を身につけてもらいたい。講義科目ではあるが、授業内容についての討論を行う等、学生たちが能動的に学べる機会を提供したいと考えている。	主要授業科目
	人間共生総論Ⅱ		人は誕生の瞬間から人との関係の中で生き、成長していく。人間共生とは「人と人が共に生きる」ことであるが、よりよい共生を目指すためには、お互いの心を理解する必要がある。本授業の目的は、自身の感情や考え方を見つめるとともに他者の視点でも物事を捉え、「人間共生」を心理学の立場から多角的に眺めること、そして日常生活の中で実践的に「人間共生」に関する学びを生かす発想力、創造力を身につけることを目指す。そのために本授業では、「人間共生」にかかわる多様な心理学領域の知見を学ぶ。	
	人間共生総論Ⅲ		急速な社会の変化に伴い、人間関係のあり方も大きく変わりつつある。本授業では、共生社会の基盤となる人間関係の基本的視点、対人認知、人間関係の生涯発達、対人関係の成立、コミュニケーションなど基礎的な概念を学ぶ。次に、現代社会において円滑な対人関係を促進あるいは阻む要因について、現在社会で生じている事象を通して考える。そのうえで、円滑な人間関係を構築するための方法についてロールプレイを通して身につける。さらには対人援助における人間関係について事例から学ぶ。	
	人間共生総論Ⅳ		本授業は、共生社会の実現に向けて、多様性を背景とする地域社会や職場の課題を、国内外の地理的差異に関わる「グローバル・地域共生」、多様な特徴を持つ人間同士の共生である「人間共生」の二側面から「共生」を捉える様々な視点について、多様な専門領域の教員がオムニバス形式で授業を行っている。様々な角度から社会の課題を捉える広い視点を持ち、発想力、構想力を養う。 (オムニバス方式/全15回) (12 小川浩/2回)「共生社会」とは何か、またグローバル・地域共生と人間共生の2つの視点を知る。社会の課題を発見する視点を養う。 (14 蔵野ともみ/2回)メンタルヘルスの視点から人間共生を捉え、発想力を養う。 (28 伊藤みちる/1回)国際的な課題からアプローチする視点と発想力を養う。 (29 高丸理香/2回)インターセクショナリティの視点から多様な人々が尊重しあう社会づくりのための発想力を養う。 (11 大橋寿美子/2回)コミュニティを育む共生空間と運営デザインのための視点と構想力を養う。 (30 野崎智仁/2回)総合リハビリテーション及びコミュニティ創りの視点と構想力を養う。 (17 本田周二/2回)心理学の観点から多様な特徴を持つ他者とのコミュニケーションに必要な知識を養う。 (15 齊藤豊/2回)まとめ：共生デザインにおける各分野の基礎的知識を身につけて、その中から深く探究する分野を見つける。	オムニバス方式
	社会学概論Ⅰ	○	本授業では、私たちの身近な諸事例と関連付けながら、まず、社会的行為やコミュニケーション等の社会学の基礎概念について学ぶ。次に、個人と社会との関係を解明するために構築された主要な社会学理論について学習する。本授業を通じて、受講者は、身近な諸事例と関連付けながら、社会学の基礎概念と理論を学ぶことによって、自分自身の日常生活と現代社会の構造・動態との関連を多角的かつ体系的にとらえるため、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、必要な社会学の基本的な考え方を身につけることができるようになる。	主要授業科目
	社会学概論Ⅱ	○	本授業では、まず、現代日本社会における、地域社会の変容、結婚や家族の変化、少子・高齢化の進行といった側面から現代社会の特色と問題点を学習する。本授業を通じて、受講者は、身近な諸事例と関連付けながら、地域社会の変容、結婚や家族の変化、少子・高齢化の進行といった側面から現代社会の特色と問題点を学ぶことによって、自分自身の日常生活と現代社会の構造・動態との関連を多角的かつ体系的にとらえるため、さまざまな人々と社会と共存する知識を備え、必要な社会学の基本的な考え方を身につけることができるようになる。	主要授業科目
	心理学概論Ⅰ		本授業の狙いは、心理学を学ぶ上での基本的な知識を身につけることにある。特に、心理学的な考え方を身に付け、学問としての心理学を学ぶ基礎を身に付ける。具体的には、心理学史、心と脳、知覚、学習、記憶、思考、自己について、それぞれ身近な例を取り上げて概説する。授業は、講師による講義に加え、適宜、重要なポイントについてディスカッションを行うことにより、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、学生が自らの体験を心理学的に理解、説明できることを目指す。	
	心理学概論Ⅱ		本授業の狙いは、心理学を学ぶ上での基本的な知識を身につけることにある。特に、心理学的な考え方を身に付け、学問としての心理学を学ぶ基礎を身に付ける。具体的には、動機づけ、原因帰属、感情、性格、知能、思考の発達、愛着、心理学研究法について、それぞれ身近な例を取り上げて概説する。授業は、講師による講義に加え、適宜、重要なポイントについてディスカッションを行うことにより、さまざまな人々と社会と共存する知識を備え、学生が自らの体験を心理学的に理解、説明できることを目指す。	

学部 共通科目		社会福祉学概論Ⅰ		<p>本授業のねらいは、社会福祉学に関する導入の講義科目として、社会福祉とは何か、その概念、制度・政策について理解を深めることである。</p> <p>多様な地域生活課題を抱える人々に関する事例や、日本における福祉的な課題・テーマ・時事をもとに、それに対する向き合い方や考え方を学び、問題の構造を読み解く力や必要とされる思考を身につける。</p> <p>社会福祉の主要な概念および日本における制度・政策について概説する。そのうえで、日本における実際の出来事や社会問題をもとに考察することや、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、福祉的思考を涵養する。</p> <p>授業は講師による講義を中心に、学生個人のワーク、授業内容に応じて少人数でのディスカッションを行う。</p>	
		社会福祉学概論Ⅱ		<p>本授業では、社会福祉学の全体像を学び、対象ごとの事例検討から各論的な理解を深める。授業を学んだあと、多様な対象や領域から、各自の専門的興味を持てるようにすることをねらいとする。社会福祉とよばれる社会的現象は、歴史、価値、対象、政策、運営、援助、社会行動など、さまざまな要素を包摂しつつも、単なるその集合体ではない。内部的には、多様な要素からなるシステムとしての体系をもち、同時に外部に対してはより高次の、あるいは広範なシステムの構成要素である、一つの全体として存在している。本授業では、そのような社会福祉の全体像を、可能な限り一定した視点と枠組みを基盤に、理論的に把握することをめざす。本授業では、さまざまな人々や社会と共存する知識を備え、様々な社会的現象の事例検討を通して、専門的、多角的な視点を身につける。</p>	
		共生デザイン概論Ⅰ		<p>本授業では共生デザイン概論分野における多様性のうち、グローバルに関わる概念をグループワークを中心に学習する。</p> <p>地理的差異による多様性、すなわち人種、言語、宗教、文化、生活習慣等の差異を含むグローバル化に伴う多様性である。グローバル化は、しばしば政治・経済領域での他国との連携や競争の文脈で言われるが、一部の国際的なビジネスに限らず、国内においても、インバウンド消費に焦点を当てた商品・サービスの開発・提供、外国人労働者との協働や雇用管理、地域社会における外国人住民との共生、外国人に対する教育・医療・福祉場面での対応など、職場や地域社会における日常的なグローバル化が課題となっている。本授業では、国際貿易や国際協力を中心に、グローバルな地理的差異に基づく多様性に焦点を当て、異なる地域間での対話と協力の重要性、そして国際社会での課題解決について学ぶことでグローバルにおける多様性を理解することを目指す。</p>	
		共生デザイン概論Ⅱ		<p>本授業は、少子高齢化社会や障害者福祉などをもとに、個人としての多様性を考え、地域づくりの在り方について学習する。</p> <p>就労支援や生活支援という保健医療福祉的観点を持ち、地域の課題分析をすすめるための思考を身につける。</p> <p>特に就労に関しては社会的に労働者の減少からその確保が重要視されていることから、取り巻く周辺事情を解説する。</p> <p>授業は生きにくさを抱える個人の課題等を講義により行い、小グループでの演習により想定した地域の分析を行う。</p>	
専門教育科目	基礎科目	社会学コア科目		<p>社会学において、社会調査は研究の基礎となる方法論の一つである。その主な目的は、実際の社会における人々のさまざまな行為や意識に関するデータを収集し、分析することによって、それらを記述、説明することにある。本授業では、そのための方法論を学び、実際の調査に必要な技術を身につけることを目指す。本授業では量的調査、質的調査について基本的な内容を学習する。社会調査の歴史をたどり、「時代」を捉えるうえで社会調査がいかに重要であるかを理解する。調査の複数の手法について基本的な考え方や技法、実践の注意点、取得データの分析方法について理解を深める。</p>	主要授業科目
		社会学コア科目		<p>社会学は頭の中だけで考える学問ではない。生きた社会を感じ取り、それを言葉にする学問である。社会調査はそのような研究の基礎となる方法論の一つである。その主な目的は、実際の社会における人々の様々な行為などに関するデータを収集し、分析することによって、それらを記述、説明することにある。つまり社会調査とは、特定の社会的現象を、一定の方法を用いて言語化することであり、そのプロセス全体を指す。このクラスでは、そのような方法論を学び、実際の調査に必要な技術を身につけることを目指す。本授業は、社会調査の実施におけるさまざまなプロセスについて学習することを目的とする。具体的には個々の問題関心から出発し、既存の研究を踏まえながら仮説を設定するプロセス、そのテーマや仮説に適した手法を選択し、調査の実施へと移行するプロセス、詳細な調査の作業の進め方やそのデータ・結果の扱い方、などに関して講義する。</p>	主要授業科目
	応用科目	社会学コア科目		<p>本授業では、社会調査とはどのようなものか（どのような意義・目的をもつのか）について学ぶとともに、社会調査から得られるデータを分析するための基本的な指標の算出・解釈法を学んでいく。これらを学ぶことを通じて、複雑な社会現象を統計分析の専門知識および調査データというエビデンスに基づき理解する能力を養う。社会調査における指標や分析手法は、講義パートと実習パートからなり、後者のパートでは統計ソフト（SPSS）を使ってデータを実際に分析しつつ、学んでもらう。</p>	講義 14時間 演習 16時間
		社会学コア科目		<p>本授業では、標本から母集団を推定する推定統計と統計的仮説検定の基礎を学んでいく。それから平均値の差の検定、カイ二乗検定、相関係数の検定、回帰分析について学んでいく。これらを学ぶことを通じて、複雑な社会現象を統計分析の専門知識および調査データというエビデンスに基づき理解する能力を養う。社会調査における指標や分析手法は、講義パートと実習パートからなり、後者のパートでは統計ソフト（SPSS）を使ってデータを実際に分析しつつ、学んでもらう。</p>	講義 14時間 演習 16時間
	社会学コア科目	現代社会理論		<p>本授業のねらいは、現代の社会学の基礎理論の理解にある。具体的には、現代の代表的な社会学理論や概念、方法論をとりあげ、それぞれの理論や概念や方法論が現代社会をどのように分析し、現代社会の諸問題に対していかなる処方箋を提示しているのかを教授する。本講義の到達目標は、受講生が、現代の社会学における基礎的な理論や概念および方法論の内容を理解できるようになること、その理解に基づき、自分と社会とがどのような関りをもっているかを理解し、また自分の言葉で説明することができるようになること、現今の社会問題に対していかなる解決策がありうるかを考えることができるようになることである。</p>	

専門教育科目	社会科学部 科目	社会学史	本授業は、社会学の理論や概念および方法論の歴史を学ぶことで、社会学のものの見方・考え方を広く・深く修得した人材を育成することをねらいとする。具体的には、代表的な社会学者の理論や概念、方法論を時代順に教授していく。それによって、受講学生が、社会学がどのような社会の下でのような課題に直面して誕生し、その後どのような展開を見せたかについて理解できるようにすること、それぞれの社会学者の理論や概念および方法論について理解し説明できるようになること、それらの理論や概念や方法論がどのように現代社会の分析や社会問題の解決にも資するものであるかを理解し説明することができるようになることを本講義の到達目標とする。	
		社会調査特論Ⅰ	本授業では、社会調査における、多変量解析の手法に関する基礎的な知識と技術を習得することを目的とする。具体的にはサーベイ調査による統計データを用い、統計ソフト（SPSS）等による重回帰分析などの統計的手法を説明し、またそれらの手法を使って、具体的な仮説の検証に関する演習を行う。本授業は、社会調査士資格を取得するための選択科目として指定されている。最終的な本授業の目標は、重回帰分析や因子分析を用いて調査データを分析し、仮説検証型の論文を執筆できるようになることである。	
		社会調査特論Ⅱ	本授業では、質的調査の方法を、実践を通して学ぶ。はじめに、質的調査における基本的なアプローチや問いの立て方を学び、質的調査を用いて書かれた書籍・論文を読んでディスカッションをすることで、質的調査がどのようなことを明らかにすることができるのか理解を深める。そのうえで、実際に質的調査を実施し、それをレポートとしてまとめることで、具体的な調査手法を身につける。これを通して、社会の課題を自ら見つけ、社会学的な質的調査の方法を用いて調査を行い、分析する能力を養う。	
	ジェンダーとダイバーシティ科目	家族社会学	本授業では、過去から現在までの家族をめぐるさまざまな具体的な事象について家族社会学の視点から学んでいく。家族社会学の理論や概念を知ること、家族や結婚の歴史の変遷を知ること、そして、さまざまな国や文化における家族のありかたを比較することによって、われわれが「自明」とみなしている家族を相対化し、さまざまな問題に気づくことができる。現代家族の現状・課題を理解するうえで近代家族、家族の多様化、ジェンダー、セクシュアリティといった概念を習得し、社会構造の問題として考えられるようになること、現代の家族が直面しているさまざまな問題とその背景を多角的な視点から理解し、どのような解決策が必要なのかを考える力を身につけることが目標となる。	
		ジェンダーの社会学	主に戦後の日本社会に着目して、ジェンダー概念を理解する。日本のジェンダーに関連する社会政策は、とりわけ高度成長期以降、夫婦と子ども二人の組合せを標準世帯として策定されてきた。ジェンダーをめぐる社会政策は、女性と男性の生き方、そして、われわれの家族のかたちをも形成してきたのである。ただし、社会政策によって一方的にジェンダーのあり方が規定されてきたとは考えられない。人々の生活における主体性という視点も踏まえて、ジェンダーをめぐる「常識」がいかに形成され、維持・再生産されているのかを考察する。授業を通して、学生は戦後の日本社会を中心に、学生が自分の力で、女らしさ／男らしさをめぐって発生している諸問題についてジェンダーの視点から観察し、分析する方法を習得する。	
		ライフコース論	本授業は、ライフコースという視点から、個人と社会の相互作用の中で生じるキャリアのパターンの多様性を理解し、個人の生き方や社会システムを問い直すことを目的としている。ライフコースの理論枠組みや歴史的变化、国際比較を学び、少子高齢化や雇用の不安定化、ジェンダー不平等といった社会問題の背景を学び、その解決のために何が求められているのかを考えていく。講義を通じて以下を習得することが目標である。第一に、将来の職業生活や家庭生活に備えることに資する思考枠組みを身につけること、第二に、社会を生きていく人びとの人生の行路のなかで生じる困難や、ありうる決定的タイミングでの判断の局面のうちのいくつかを具体的に把握し、それが人生にもたらす影響を理解すること、第三に、個人のライフコースやキャリア設計に影響を与えている社会的条件や政策的条件を理解し、問題を解決するために何が必要かを考えることができることである。	
		ケアの社会学	近年、医療や福祉の領域では、ケアについてさまざまな議論が行われてきた。本授業では、ケアを社会学的な視点から捉え、ケアとは何か、よいケアとは何か、ケアをどのような労働として捉えるか、ケアとジェンダーはどのようなかわりあっているのか、誰がケアを担うべきか、多角的な視点からケアについて問い直す。これにより、育児・介護・病气・障害などのケアにかかわるさまざまな社会問題を多角的な視点から分析し、解決する能力を養う。	
		生と死の社会学	本授業では、おもに生命倫理・死生学の観点から、生と死にかかわるさまざまなトピックを取り上げつつ講義を行う。具体的には、出生前検査、代理母出産、さまざまな文化における死生観、臓器移植、尊厳死、死生観教育、ターミナルケアといったトピックを取り上げながら、それぞれのはらむ倫理的課題や問題を、社会学的観点からどのように捉えることができるかを学生とともに考えていく。これにより、明快な答えの出ない課題に対して、その複雑さを理解しながら解決に向けて取り組むことのできる力を身につける。	
		メンタルヘルスの社会学	健康や病气に関する人々の状況や行動は、個人の属性や社会環境などさまざまな影響を受けながらかたちづくられている。本授業では、そうした社会的変数が個人のメンタルヘルスに関する行動や状況、理解にどのような影響を与えているのかについて説明する。具体的には、いくつかの症候や障がいを取りあげていく。これらを通して、社会で生きる人々の生のさまざまなあり方への理解を深め、社会問題の解決に活用する能力を育成する。授業は、講義、グループディスカッション、映像資料の視聴、課題文献の通読、レポートの作成を組み合わせ実施する。	

専門教育科目	ジェンダーとダイバーシティ科目	恋愛と結婚の社会学	本授業では、社会学の基礎的な理論や概念を応用し、恋愛と結婚を題材に、親密圏における人と人との結びつきのあり方について教授することを目的とする。親密圏における人間関係のあり方は、その時代や社会における社会・経済構造、家族構造、ジェンダーやダイバーシティの問題群と深く結びついている。本授業では、統計データや史料を用いて、恋愛や結婚に関する国際比較や歴史比較を行い、社会構造や社会意識に根差す親密圏における関係性のあり方について教示する。それによって、受講学生が恋愛や結婚に見られる関係性のあり方の多様性を理解し、現代社会がかかえる恋愛や結婚をめぐる諸問題に対していかなる対処策がありうるかについて検討できるようになることが本授業の目標である。	
		男性学	男性学とは、男性が男性であるがゆえに抱える「男性問題」を対象とする学問である。現代の日本社会においては、長時間労働、過労死といった仕事をめぐって発生する社会問題が、「男性問題」の典型だといえる。また、日本では年間2万人の自殺者がでているが、そのうちの1万5千人は男性であることから、自殺も「男性問題」の一つとして考えることができる。この他にも結婚難などの「男性問題」を概観し、男性学がどのような学問であるのかを紹介する。講義を通じて、学生は男性中心社会における「男性問題」を把握し、ジェンダー平等に向けてマジョリティ男性にアプローチする重要性を理解する。	
		セクシュアリティの社会学	セクシュアリティの社会学では、性をめぐる諸問題について社会学の視点からアプローチする。人間の性的欲望は社会的・文化的に構築されている側面がある。そのため、「自然」なものとして一般的に考えられている性的欲望は、社会学的考察の対象となる。現代の日本が「異性愛」中心社会であり、LGBTQ+の人々は排除されている。そのような仕組みがいかにして成立しているのかを解説する。本授業を通じて学生は、セクシュアリティの社会構築性について理解し、その上で、多様な性が許容されるような社会を構想していく力を身につけることができる。	
	文化とメディア科目	映像と表象	本授業では、映画やドキュメンタリーなどの映像作品を視聴し、物事がどのように表象されているのかを分析的に捉える視点を学ぶ。具体的には、捕鯨について扱ったドキュメンタリーを通して、アメリカ、日本それぞれの立場からどのように表象のされ方が異なるのかを学ぶ。また、精神疾患が映像作品のなかでどのように表象されてきたのかを追うことにより、精神疾患の捉えられ方が社会の中でどう変遷してきたのかを学ぶ。これにより、時代や立場によってもごとの表象のされ方が異なるという複雑さに気づき、そうした複雑さを捨象せずに問題解決を図る力を身につける。	
		現代メディア論	21世紀に入ってから次々に登場した新しいメディアが社会にどのような影響を及ぼしたのかを考えることが本授業の目的である。パンデミック、戦争、大災害等近年生じた大きな出来事にメディアがどのように関わったのかを授業の中で伝えていきたい。いわゆるメディアリテラシーだけではなく、現代の社会問題を読み解くリテラシーの涵養をこの講義を通して身につけてもらう。授業は講義形式で行われるが、学生の能動的な学びを促す方法を工夫する。	
		現代における宗教	現代において宗教の衰退あるいは世俗化が論じられるようになって久しいが、今なお習慣や習俗に関わる生活のいたる所に、宗教現象や宗教文化は関わっている。本授業では、宗教を理解不能なものとしてではなく、専門的観点から宗教の育む世界観について学んでいくことを通じて、現代社会の複雑さを理解し、今日も起こっている宗教をめぐる事件への向き合い方を体得してもらうことを目指す。授業前半では宗教研究の展開を学び、宗教に対する基本的な考え方を身につけていく。後半では現代社会における主要なトピックを学ぶことにより、現代宗教を幅広い視野から捉えることを目標とする。	
		サブカルチャーの社会学	サブカルチャー（下位文化）とは、社会における支配的な文化（メイン・カルチャー）と異なり、そこから逸脱した、よりマイナーな文化のことである。サッカーの熱狂的なファン（フーリガン）、漫画やアニメ、アイドルなどのマニアックな愛好家（いわゆるオタク）、ストリートファッション、ゲイ・レズビアンライフスタイルやネットワーク、クラブ・ミュージックやヒップ・ホップ、ドラッグカルチャー、サーファーやスケートボーダー、不良・ヤンキー・暴走族、都市の外国人や貧困者などがその代表として語られている。本授業では、いわゆる「文化の社会学」を中心に、現代社会における様々な社会現象を異なる角度からアプローチし、サブカルチャーの構成やその形成過程などについて、具体例や映像資料を提示しながら講義する。	
		身体とファッションの社会学	本授業のねらいは、社会学の理論や概念を応用し、身体とファッションにかかわる社会現象についての社会学的な分析を教示することである。身体やファッションは、自己アイデンティティや集団アイデンティティ、自己と他者との関係性、社会一般の意識などのある種の表れでもある点で、社会学的分析の対象となりうる。また、それらは、ルッキズム、摂食障害、衣料大量廃棄による環境問題といった、社会問題のアーリーナでもある。よって、本授業では、身体やファッションをめぐる諸現象や社会問題に関する経験的研究や理論的研究について教示する。また、そういった分析に有用な社会学の諸概念も紹介する。それによって受講学生が、身体やファッションをめぐる社会現象を社会学的に理解し分析できるようになること、身体やファッションをめぐる諸問題への解決策を考えることができるようになることが、本講義の到達目標である。	
		情報社会論	本授業では、まず、情報社会論の観点から、情報化による社会の変化と社会的諸問題をとりあげながら、こうした問題に対処するためには社会的ルールとしての道徳や倫理がどのようなものとなるべきかについて考察する。さらに、大規模災害における救援活動でのインターネット等のデジタル・メディアの活用を事例としてとりあげ、情報通信技術が社会問題の解決や社会の変革にどのように役立つのかについて、その可能性と課題を明らかにする。受講者は、本授業を通じて、情報化による社会の変化と諸問題を多面的に捉え、情報社会において必要とされる道徳や倫理や情報通信技術による社会問題の解決の可能性と課題について理解できるようになる。	

専門教育科目 応用科目 社会問題とインクルージョン科目	文化とメディア科目	文化人類学	文化人類学は、もともと自分たちとは異なる「他者の文化」を探求してきた学問分野である。言い換えれば、近代化した社会を当たり前のように享受してきた私たちにあって、そうではない人間のあり方を示してくれる学問である。本授業では、結婚・家族のあり方、多様な性のあり方、儀礼のあり方、死の弔い方などさまざまな文化の事例を紹介していく。自分の思う「当たり前」が必ずしも「当たり前」ではないことに気づく経験を重ねることにより、さまざまな人びとと共生するための基本的な姿勢や考え方を養うことが本授業の狙いである。
		若者の社会学	本授業では、各時代の「若者」の趣味嗜好、感性がどのような社会・歴史的背景のもとで成り立っているのか、若者文化の通史的あるいは同時代的な比較に基づき、考えていく。各回の講義では、(1)「若者」という社会的カテゴリーの出現以後、さまざまに語られた「若者」のあり方の変遷、(2)受講者と同年代のそうした「若者」たちが集行的に行ってきた諸活動の変遷、(3)現代における「若者」についての実証的な調査データについて学ぶことを通じて、受講者自身の自己理解および現代社会についての理解を促し、世代間の分断を共生へと導く考え方を養う。
		観光社会学	近代社会の成立とともに「健全な娯楽」として登場した観光は、近代の典型的な社会現象の一つを構成するようになった。そのような観光を、社会学の理論や概念や方法論を応用し、分析・考察することが本授業のねらいである。具体的には、行為者の次元（観光客の研究）、行為者間の相互作用という社会関係の次元（観光客と観光事業者と観光地住民の関係の研究）、社会システムの次元（一方の観光と、他方の地域社会、国民社会、グローバル社会との関係の研究）といった諸次元においてなされた、観光に関する理論的・経験的分析を教示する。それによって、観光が個人や人間関係や諸社会に及ぼすインパクトを多様な角度から理解分析できるようになること、観光が引き起こす社会問題への対策案を考えることができるようになることが本講義の目標である。
	社会問題とインクルージョン科目	都市の社会学	本授業では、都市とコミュニティという主題について、社会学の専門的知見に基づいて理解を深めていく。各講義では、都市とコミュニティにかんする基礎概念、社会理論、社会調査、具体的な事例をとりあげて、それらを社会的な観点から考察するための手がかりを提示する。これらを通して、都市とコミュニティに関連する基礎概念、社会理論、事例を習得し、都市とコミュニティの社会的な調査研究を行ない、今日的な都市問題の解決に市民として寄与できるようになることを目指す。
		医療と文化	本授業では、身体・病い・医療・健康といった事象を人類学的な視点から学ぶ。たとえば、何を望ましい身体とするか、病気、障害、出産、臓器移植についてどう捉えるか、死者をどう弔うかといった事柄は、文化によって大きく異なる。本授業では具体的な事例を紹介しながら、身体・病い・医療・健康といった事象が決してどの文化も同一の医学的・生物学的な現象ではなく、文化や社会のあり方が強く影響しながら形作られるものであることを学ぶ。これにより、医療にかかわる問題に対して、人類学的な視点からアプローチしながら問題の解決について考える力を養う。
		環境とコミュニティ	本授業では、環境の問題について、個人の意識や自然科学の問題ではなく、社会の問題として捉え、考察することができるようになることを目的とする。講義の前半では、環境社会学の一般的・基礎的な考え方について学び、後半では、社会学の視点から実際に、環境問題について分析・考察してもらい、これらを通して、環境社会学の代表的な理論モデルについて説明することができるようになり、また特定の環境問題をめぐる主体連関図を作成することができるようになることで、専門的な観点から環境問題の複雑な構造を考察し、その解決方法を考える力を養う。
		現代における労働	労働は学生たちにとって切実な関心事である。多くの学生がアルバイトをしており、その意味では彼女らもすでに労働者であるといえる。そして卒業後に彼女らが出ていく労働市場の流動性は極めて高いものになってしまっている。企業は最高益を更新しながら、それが給与に反映されることもない。本授業においては、現在の労働環境についての概括的な知識を授けることを目的としている。そして日本の労働の歪みを認識させると同時に働く者としての権利についても講じていきたい。講義科目ではあるが、能動的な学びの機会を与えたい。
		子どもと教育の社会学	本授業では、「子ども」や「教育」といった「こうすべきこと」「こうした方が正しい/善い」といった価値判断にまみれている対象についての社会的な見方を呈示することで、「べき」「正しい/善い」にこだわることでは得られない、事象をより深く理解する視点を提供していく。具体的には学校教育・教育問題をめぐる各種のトピックをとりあげ、教育社会学の知見を紹介し、受講者に考えてもらう。これらから、教育という複雑な社会現象を理解し、また学問的エビデンスに基づいて教育問題の解決のあり方を考える力を養う。授業は講義、各回の小考察課題、それに対するフィードバックからなる。
		ボランティアの社会学	本授業では、まず、現代社会の諸問題を自分の問題として受け止めその解決を目指す活動である「ボランティア」の現状をとらえ、さらに、情報化が進化した今日の社会において、ボランティアがインターネット等のデジタル・メディアを活用して問題解決に取り組んで行く「デジタル・ネットワーク」の現状と社会変革の可能性と課題について学習して行く。本授業を通じて、受講者は、(1)ボランティアとは何か？、(2)ボランティア活動の分野・担い手・動機、(3)ボランティア活動から得られるもの、という観点からボランティアの現状を捉えた上で、人びとの「共生」の実現を目指して展開される(4)「デジタル・ネットワーク」による社会変革の可能性と課題について展望できるようになる。
		格差と不平等の社会学	本授業では、社会学の「格差社会学」の知見に基づいて、現代日本社会における、社会的格差の拡大といった側面から現代社会の特色と問題点について学習するとともに、現代社会の諸課題解決に向けての方策について探求する。本授業を通じて、受講者は、(1)日本は格差社会か？、(2)世代間の格差、(3)男女間の格差、(4)地域間の格差という観点から社会的格差から生じる現代社会の問題発生との因果関係を理解し、人びとの「共生」の実現を目指して(5)格差社会から平等な社会を構築する可能性と課題を展望できるようになる。

専門 教育 科目	応用 科目	特 論 科 目	社会問題とインクルージョン	差別とマイノリティ	本授業では、差別やマイノリティをめぐる問題を、個人の意識の問題ではなく、社会的属性と強くかかわりのある社会構造上の問題として捉える視点を理論的および具体的な観点の双方から示していく。講義では、まず差別とマイノリティについて考えるうえで前提として理論的視点を学んだうえで、重要なトピックについて扱う。これらを通して、社会学の専門的な観点から、差別とマイノリティについて考える視点と、それらの視点を活用して、この社会で起こっている差別・マイノリティをめぐる問題の解決に活用する能力を育成する。	
			ジェンダーとダイバーシティ特論Ⅰ	本授業では、ジェンダーとダイバーシティ（特にジェンダー）に関する特定のトピックにより特化して、社会学のより高度な専門的観点からどのような分析・考察が行われているかについて学んでもらうことで、ジェンダーとダイバーシティ（特にジェンダー）に関する視点の深化を目指す。各講義では、選ばれたトピックないしテーマに関する詳細な研究動向を複数回に分けて紹介することを通して、社会学の高度に専門的な知識・技術と、ジェンダーに関する社会問題の解決に活用する能力を育成する。		
			ジェンダーとダイバーシティ特論Ⅱ	本授業では、ジェンダーとダイバーシティ（特にダイバーシティ）に関する特定のトピックにより特化して、社会学のより高度な専門的観点からどのような分析・考察が行われているかについて学んでもらうことで、ジェンダーとダイバーシティ（特にダイバーシティ）に関する視点の深化を目指す。各講義では、選ばれたトピックないしテーマに関する詳細な研究動向を複数回に分けて紹介することを通して、社会学の高度に専門的な知識・技術と、ダイバーシティをめぐる問題の解決に活用する能力を育成する。		
			文化とメディア特論Ⅰ	本授業では、文化とメディア（特に文化）に関する特定のトピックにより特化して、社会学のより高度な専門的観点からどのような分析・考察が行われているかについて学んでもらうことで、文化とメディア（特に文化）に関する視点の深化を目指す。各講義では、選ばれたトピックないしテーマに関する詳細な研究動向を複数回に分けて紹介することを通して、社会学の高度に専門的な知識・技術と、文化をめぐる現象を深く理解する能力を育成する。		
			文化とメディア特論Ⅱ	本授業では、文化とメディア（特にメディア）に関する特定のトピックにより特化して、社会学のより高度な専門的観点からどのような分析・考察が行われているかについて学んでもらうことで、文化とメディア（特にメディア）に関する視点の深化を目指す。各講義では、選ばれたトピックないしテーマに関する詳細な研究動向を複数回に分けて紹介することを通して、社会学の高度に専門的な知識・技術と、メディアをめぐる現象を深く理解する能力を育成する。		
			社会問題とインクルージョン特論Ⅰ	本授業では、社会問題とインクルージョン（特に社会問題）に関する特定のトピックにより特化して、社会学のより高度な専門的観点からどのような分析・考察が行われているかについて学んでもらうことで、社会問題とインクルージョン（特に社会問題）に関する視点の深化を目指す。各講義では、選ばれたトピックないしテーマに関する詳細な研究動向を複数回に分けて紹介することを通して、社会学の高度に専門的な知識・技術と、社会問題の解決に活用する能力を育成する。		
			社会問題とインクルージョン特論Ⅱ	本授業では、社会問題とインクルージョン（特にインクルージョン）に関する特定のトピックにより特化して、社会学のより高度な専門的観点からどのような分析・考察が行われているかについて学んでもらうことで、社会問題とインクルージョン（特にインクルージョン）に関する視点の深化を目指す。各講義では、選ばれたトピックないしテーマに関する詳細な研究動向を複数回に分けて紹介することを通して、社会学の高度に専門的な知識・技術と、インクルージョンをめぐる問題の解決に活用する能力を育成する。		
	留学 認定 科目	異文化理解Ⅰ	留学認定科目として設置されている。本学が行っている留学・研修プログラム等に参加し、一定以上の成績を修めた場合にこの科目の単位が修得されることになる。プログラムの参加先における授業形態・授業内容はさまざまであるが、普段学んでいる環境とは異なる社会・文化のあり方を体験すること、またプログラムの内容を学ぶことを通して、社会・文化・世界における多様な生のあり方について理解し、知識を深めることが期待される。			
		異文化理解Ⅱ	留学認定科目として設置されている。本学が行っている留学・研修プログラム等に参加し、一定以上の成績を修めた場合にこの科目の単位が修得されることになる。プログラムの参加先における授業形態・授業内容はさまざまであるが、普段学んでいる環境とは異なる社会・文化のあり方を体験すること、またプログラムの内容を学ぶことを通して、社会・文化・世界における多様な生のあり方について理解し、知識を深めることが期待される。			
	実践 科目	社会学 コア 科目	社会学基礎セミナーⅠ	○	本授業は、大学での学びの方法について学ぶことを目的とする。具体的には、セミナーでの報告の仕方、図書館の使用方法、レポートや論文の書き方、少人数のグループで課題に取り組むグループワークの進め方等々について、学科が定めた教科書とスケジュールに沿って、演習形式で学んでもらう。授業を通して、これからの大学生活にとって重要となる、主体的な探究力、読解力、思考力、コミュニケーション力、論理的表現力、および共生可能性を見つけていく社会的想像力の基礎となる部分を養う。	主要授業科目
			社会学基礎セミナーⅡ	○	本授業は、「社会学基礎セミナーⅠ」に引き続き、大学での学びの方法について学ぶことを目的とする。具体的には、セミナーでの報告の仕方、図書館の使用方法、レポートや論文の書き方、少人数のグループで課題に取り組むグループワークの進め方等々について、演習形式で学んでもらう。授業を通して、これからの大学生活にとって重要となる、主体的な探究力、読解力、思考力、コミュニケーション力、論理的表現力、および共生可能性を見つけていく社会的想像力の基礎となる部分の定着と成長を図る。	主要授業科目

専門教育科目	実践科目	社会学コア科目	社会調査及び演習Ⅰ	○	本授業では、具体的な社会的現象・社会問題に関する経験的な調査・分析を行う。「社会調査及び演習Ⅰ」と「社会調査及び演習Ⅱ」は一貫した授業計画に基づいて行われるもので、この「社会調査及び演習Ⅰ」では、演習で扱う社会的現象・社会問題に関する文献の精読を通してテーマに関する問題関心を深め、どのようなことを調査すべきか、どのような計画に基づいて調査を進めるべきか等について、演習形式の授業のなかで検討していく。これらを通して、専門的な観点から社会的な課題に接近し、調査・実践する力、およびさまざまな人々が共に生きることのできる解決方法を考える力を修得することを目指す。	主要授業科目 講義 10時間 演習 20時間
			社会調査及び演習Ⅱ	○	本授業では、具体的な社会的現象・社会問題に関する経験的な調査・分析を行う。「社会調査及び演習Ⅰ」と「社会調査及び演習Ⅱ」は一貫した授業計画に基づいて行われる演習形式の授業で、この「社会調査及び演習Ⅱ」では、社会調査の方法についての学びを深め、たうえで実際に調査を行い、その調査データの分析・発表を行う。その経過においては教員がフィードバックを行い、分析・発表の水準の向上を図る。これらを通して、専門的な観点から社会的な課題に接近し、調査・実践する力、およびさまざまな人々が共に生きることのできる解決方法を考える力を修得することを目指す。	主要授業科目 講義 10時間 演習 20時間
			現代社会論セミナーⅠ	○	本授業は2年生の必修授業として学科内で6コマ開講されるもので、各授業の担当教員が設定したテーマに関連する文献購読を中心とした演習形式の授業である。文献の内容の要約と文献に対する意見を中心とした資料作成、資料を用いたプレゼンテーション、プレゼンテーションの内容を素材としたディスカッションを通して、当該テーマへの問題関心を深めるとともに、1年生時にその基礎的な部分が養われた、主体的な探究力、読解力、思考力、コミュニケーション力、論理的表現力、および共生可能性を見つけ出し、社会学的想像力の向上を図る。	主要授業科目
			現代社会論セミナーⅡ	○	本授業は「現代社会論セミナーⅠ」に引き続き、各授業の担当教員が設定したテーマに関連する文献購読を中心とした演習形式の授業である。文献の内容の要約と文献に対する意見を中心とした資料作成、資料を用いたプレゼンテーション、プレゼンテーションの内容を素材としたディスカッションを通して、当該テーマへの問題関心を深めるとともに、1年生時にその基礎的な部分が養われた、主体的な探究力、読解力、思考力、コミュニケーション力、論理的表現力、および共生可能性を見つけ出し、社会学的想像力の向上を図る。	主要授業科目
			社会学セミナーⅠ	○	本授業は、4年間の学びの集大成となる卒業論文の執筆に向けた指導を中心とする演習形式の授業である。指導教員の専門領域に関するテーマないしは受講者の関心に合わせたテーマの文献購読（グループディスカッションや指導教員からのフィードバックを含む）、セミナー全体で行われる共同調査や社会活動を通して、卒業論文についての問題関心を育んでいくことを目的とする。これらを通して、主体的な探究力、読解力、思考力、コミュニケーション力、論理的表現力、および共生可能性を見つけ出し、社会学的想像力の一層の向上を図る。	主要授業科目
			社会学セミナーⅡ	○	本授業は「社会学セミナーⅠ」に引き続き、4年間の学びの集大成となる卒業論文の執筆に向けた指導を中心とする演習形式の授業である。指導教員の専門領域に関するテーマないしは受講者の関心に合わせたテーマの文献購読（グループディスカッションや指導教員からのフィードバックを含む）、セミナー全体で行われる共同調査や社会活動を通して、卒業論文についての問題関心をより明確なものにしていくことを目的とする。これらを通して、主体的な探究力、読解力、思考力、コミュニケーション力、論理的表現力、および共生可能性を見つけ出し、社会学的想像力の一層の向上を図る。	主要授業科目
			社会学セミナーⅢ	○	本授業は「社会学セミナーⅡ」に引き続き、4年間の学びの集大成となる卒業論文の執筆に向けた指導を中心とする演習形式の授業である。受講者の問題関心に即して、先行研究の整理、さらに探究すべき点の導出、それを可能にする調査計画の立案を、グループディスカッションや指導教員からのフィードバックを通して進めていくことで、卒業論文の執筆を進めていくことを目的とする。これらを通して、主体的な探究力、読解力、思考力、コミュニケーション力、論理的表現力、および共生可能性を見つけ出し、社会学的想像力の一層の向上を図る。	主要授業科目
			社会学セミナーⅣ	○	本授業は「社会学セミナーⅢ」に引き続き、4年間の学びの集大成となる卒業論文の執筆に向けた指導を中心とする演習形式の授業である。受講者の問題関心に即して行われた社会調査や文献精査を論文のかたちにとまとめ、その整合性・論理性・新奇性を高めるべく指導教員からのフィードバックを繰り返していくことで、卒業論文を完成させることを目的とする。これらを通して、主体的な探究力、読解力、思考力、コミュニケーション力、論理的表現力、および共生可能性を見つけ出し、社会学的想像力の体得を図る。	主要授業科目
			卒業論文	○	「社会学セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」での指導を通して、4年間の学びの集大成としての卒業論文を執筆する。社会に対する広い関心をもって、また既存の文献を丁寧に読解して自らの問題意識を深め、さらに指導教員・セミナー受講者からのコメント・アドバイスを受け入れて問題意識・社会調査・分析解釈の精度の向上に努め、最終的にそれらを総合して卒業論文として表現することを目的とする。これらを通して、自己理解と社会に対する洞察力・貢献意識、および共生可能性を見つけ出し、社会学的想像力を高めることを目指す。	主要授業科目
			外国語科目		ビジネス英語	

専門教育科目	実践科目	外国語科目	英語コミュニケーション	これまでの英語クラスで学んだことを活かし、よりスムーズで深みのある会話を続けられる能力を身につけることを目的とする。毎回のレッスンを通じて、自分の意見を論理的かつ説得力を持って表明したり、相手の意見に対し婉曲に反対意見を述べたりできるようにする。また、予測される未来についての会話などを通して、想像力を養いながら、より自然な英語表現の習得も目指す。1、2年次開講の英語クラス同様、学期の終盤にはプレゼンテーションを導入し、今まで養ってきた、人前で自分の意見を効果的に表明するスキルにさらに磨きをかける。このコースでの学習を通じ、よりネイティブライクな英語話者になることを目指す。	
		留学認定科目	Malaysian Cultural Camp I	本授業はマレーシアにおける海外研修を中心とした、多文化共生社会について学ぶ体験型のプログラムの一環である。現地での研修の前後に、多摩キャンパスにおいてワークショップをおこなう。研修前には、マレーシア社会に関する基礎的な講義や現地でのプレゼンテーションの準備となるグループワークなど、研修後には、研修での成果をまとめ、文化祭においてグループ・プレゼンテーションをおこなうこととなる。このプログラムは、本学部が3つのポリシーで掲げている、人々と共生するための幅広い知識と教養、多様性を受け入れる価値観とコミュニケーション能力を身につけることにつながる。TEP(Tama English Program)で養った英語力に対しても、より発展的な学習効果が期待される。	講義 6時間 演習 24時間
			Malaysian Cultural Camp II	本授業はマレーシアにおける約3週間にわたる海外研修を中心とした、多文化共生社会について学ぶ体験型のプログラムである。夏季にSunway Universityにおいての各学部等の協力によって構成された、幅広い分野に及ぶ内容を講義・演習にて学ぶが、その中には現地学生との交流やキャンパス外でのフィールドワークも含まれる。このプログラムは本学部が3つのポリシーで掲げている、人々と共生するための幅広い知識と教養、多様性を受け入れる価値観とコミュニケーション能力を身につけることにつながる。また、これは単なる語学研修ではないが、TEP(Tama English Program)で養った英語力に対しても、より発展的な学習効果が期待される。	講義 28時間 演習 92時間
全学共通科目	基礎科目	女性とキャンパスライフ	大妻教養講座	新入生が、この大学で何をどう学ぶかについてを考える入門講座である。大人(社会人)として、自分の行為に自分で責任を持つことは、自分の心身の状態を自分でコントロールする必要性を知ることであり、法律的、経済的な自分の権利義務を知る必要性を知ることである。また、卒業後、職業人として旅立つために、大学での学びの中でどのような職業に進むかなどを含めて、人生についての見通しを持ってよう、4年間の学びが人生にどう影響していくかを理解し、本学での学びをどう進めるかを考える。なお、この講座では、大妻コダカ先生が何を考えておられたのかも学ぶ。	
			大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ	大妻学院の使命「学び働き続ける自立自存の女性の育成」の具体化を目標とした科目である。1年生の時に受講した「大妻教養講座」における「大妻での学びと人生(卒業生の回)」での学びを踏まえ、本科目では卒業生による講演を中心とした授業を行う。卒業生から、学生時代の過ごし方を含めた今までのキャリア、現在の仕事内容などを紹介いただき、職場での体験・経験などを通じて得たこと、将来の目標、学生へのメッセージなどをお話しいただく。	
			キャンパスライフとメンタルヘルス	主として思春期・青年期の一般的な心理社会的特徴を概観しながら、大学生がキャンパスライフの中で遭遇する可能性のある危機、あるいはメンタルヘルス上の問題について、その予防や対処方法も含めて学ぶことを目的とする。キャンパスライフの中で、大学生が体験する成長のプロセスは、時に大きな心の揺れを伴いやすく、悩みや危機を経験することもごく自然なことである。本講義では、ストレス、五月病、摂食障害、うつ病、自傷行為、アパシーといった問題や、消費トラブル、宗教カルト、ハラスメント等の具体的なかつ身近な話題を取り上げながら、学生たちがより健康的で有意義なキャンパスライフを送れるような講義内容とする。	
			女性と健康	我が国の女性のライフサイクルは、ここ数十年間で大きな変化を遂げている。この講義では、女性の健康に関する問題点を正しく理解し、対策を講じる事は、これからの人生を健康で豊かなものにするために必要不可欠である。講義は生物学的な「女性」の定義から始まり、「月経」、「妊娠」、「(性)感染症」、「食生活」、「喫煙」、「飲酒」、「薬物」、「精神疾患」等をキーワードに、医師、看護師等の専門家により分かり易く行う。	
			ジェンダーと社会生活	ジェンダーを前提に成り立つ役割分業や格差、種々の社会的制度とジェンダーとの関わりについて、具体的な事象を通して学ぶ。妊娠、出産といった身体をめぐる問題、DV(ドメスティック・バイオレンス)やセクシュアル・ハラスメントなどの性と暴力の構造、労働をめぐる不平等な環境、結婚制度や家族制度の現状、メディアに含まれる女性差別的なメッセージ、セクシュアリティと社会システムのかかわり等々、各授業では日常生活と深く結びついたテーマが設けられる。社会をジェンダーの観点から分析することを通して、自らの生活環境についてとらえなおし、自分の視点をもって生きていくために必要な知識を得ることが目的となる。	
			女性史	「女性史」とは、女性を主体とした歴史、またはジェンダー(文化的に構築された性差)の視点からみた歴史のことを指しているが、女性史を学び、歴史のなかに生きた女性たちへの想像力を手に入れることで、いま女性として生きることの意味を考えていく。また、大妻女子大学の学祖・大妻コダカ先生の教育活動も含め、女子の高等教育機関をめぐる歴史を知るとは、現在の学びの環境である。過去の歴史を理解し、歴史を生きた女性たちの足跡を知ること、自らの社会的位置や生活環境を積極的に解釈し、歴史的知識を自分の人生に活用することを目指す。	
			リーダーシップ開発	当科目では、産業界や地域社会で活躍する複数の女性リーダーから、それぞれのリーダーシップ論やそれを確立した背景や経験、さらに自身の今後の展望に関する講演を聞いたうえで、「男女共同参画社会において必要とされるリーダーシップ」をテーマに講師と学生を交えた対話を行う。 これを複数回繰り返すことで、自己理解を深めるとともに、女性リーダーに関する様々なロールモデルを通じて、学生自身がこれまで持っていたリーダーシップに対するイメージをブラッシュアップし、自らのリーダーシップ論を再構築することが目的である。	

全学共通科目 基礎科目 リテラシー	日本語A(文章表現)	<p>文章表現力向上を目指す場合、読み手への配慮を忘れず、しかも、より正確に伝えようとする努力をいとわない、という二つのことが重要になる。したがって、文章表現力向上には、(1)読み手に対する思いやりの気持ちを養うこと、(2)事実関係、意図、感情が正確に伝わるような工夫として表現効果を磨こうとする努力、(3)形式上の決まりを当然のこととして守ろうとする意識を養うこと、等が意識されるべきだろう。</p> <p>本科目はあくまで本学での学生生活の基本となる文章表現力の育成を目指す、社会においても通用する基礎生活力として個人の日本語運用能力を高めていく基盤を作ることも、授業におけるねらいとする。</p>
	日本語B(口頭表現)	<p>話し言葉を中心に、日本語を目的や場面に応じて適切に表現し、運用する能力の向上を目指す。「聞き手」を意識して、伝えるべき内容や目的・場面を限定した自己あるいは第三者の紹介や説明を行うなど、話し言葉の実践的訓練を行う。また、筋道を立てて話すために必要な論理的思考力と話し言葉での論理的な表現力を身につけることも重要であることから、説明資料を用いたプレゼンテーションなども行う。さらに、口頭表現においては、書き言葉とは異なり、(3)適切に発声・発音する力も必要となるため、その実践的な訓練を含める。</p>
	日本語C(読解)	<p>言語としての日本語の特質に対する理解を深めるとともに、情報を的確に受け取り、分析的・批判的に捉え返すことができるような、読解リテラシーの向上を目指す。方策としては、(1)中等教育の(国語科)を補うような、語彙・語法・慣用表現など、日本語に関する知識を確認すること(2)さまざまなジャンルの文章に触れて、自らの問題意識を深め、知的な好奇心を涵養すること(3)一定以上の長さを持った文章の内容を把握し、組み立てや構成を理解すること(4)テキストに対する批判的・能動的なかわり方を可能にするための分析的な読解の訓練を行っていく。</p>
	コンピュータ基礎A	<p>パソコンを使って文書を作成し、計算し、発表するための知識・技能の基礎を、演習を通して身につける。また、インターネットを使った情報収集などで注意すべきセキュリティと情報モラルを理解し、安全にコンピュータを利用するために知識を身につける。</p> <p>Wordを使った基本的な文書の作成、Excelを使った表計算によるデータ処理の基礎、PowerPointを使ったプレゼンテーションの方法を演習により身につける。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コンピュータの仕組みと基本操作(2回) Windowsとファイル操作、セキュリティと情報モラル 2. Wordによる文書の入力(5回) 文字の入力、作成、印刷、表、表現力をアップする機能 3. Excelの基礎(5回) 4. PowerPointの基礎(3回)
	コンピュータ基礎B	<p>パソコンの基本操作(文字入力、保存、印刷など)ができる学生を対象として、表計算ソフト(Excel)を使った効果的、効率的なデータ処理の方法を演習する。ICT(Information and Communication Technology)が進展し、情報が低コストで、時間差なく収集することができるようになってきている。また、処理しきれない量の情報が氾濫している時代でもある。このような中、本当に必要な情報を取捨選択し、意思決定に生かしていくことが求められている。</p> <p>本科目では、多くのデータ(社会における実データを含む)から、われわれが必要とする情報を抽出すること、また、その抽出結果を読み解き、それら情報の関係を分析、考察し表現することを目的とする。その一連の中でExcelの基本からグラフ、データベース、応用的な関数の使い方を演習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Excelの基本操作(3回) 表の作成、修飾、印刷、便利な機能 2. グラフの作成(3回) グラフの基礎、さまざまなグラフ、グラフの編集(適切なグラフ表現)、グラフの読み解き方 3. データベース(4回) データベースの基礎、並べ替えと抽出、自動集計、クロス集計、ピボットテーブル、データの読み解き方 4. 関数の応用(5回) 統計関数、論理関数(IF)、表検索(VLOOKUP)、財務関数
	コンピュータ応用	<p>パソコンの基本操作、Word、Excelの基本操作を習得している学生を対象とした科目である。社会や企業で必要となる具体的な文書作成、企画提案、プレゼンテーション、データ分析、効果的なデザインなどの実例を取り上げ、インターネットによる情報検索、文書作成、データ分析、プレゼンテーションおよび情報発信の方法を総合的に演習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Wordの活用(3回) ビジネス文書とは、表の活用 2. Excelの活用(4回) 実用的な関数(VLOOK、IF関数を含む)、図解とグラフ、データベースの活用、ピボットテーブルの活用 3. WordとExcelの活用(2回) 連携の方法、表とグラフの活用 4. PowerPointの活用(3回) プレゼンテーションとは、図解の基本、見やすいスライドの作成 5. 総合演習(3回) 報告書の作成、案内書の作成、レポートの作成
	データサイエンス・AI概論	<p>近年、自らの専門分野に加えて、数理・データサイエンス・AIの素養を持った人材が求められている。一方、数理やデータサイエンス、AIと聞くと難しそうに感じる人もいると思われる。そのため、これらを活用することの「楽しさ」や「学ぶことの意義」に重きを置く。</p> <p>当科目では主に、「AIやデータサイエンスが社会にもたらす価値」と「デジタル技術が行き渡る社会における課題」をテーマとして、本学の各学部における具体例や最新動向等を織り込みながら、データサイエンスが様々な事象にどう関与しているかという「ストーリー」を理解してもらおう。さらにデータ活用におけるリスクや留意事項についても学ぶ。</p>

基礎科目	キャリア	キャリアデザインⅠ	キャリアデザインの第1段階として、「職業世界の一部を知る」「自己を知る」「自己を育成する方法を知る」ことを目的とする。職業意識を涵養すると共に、産業界から求められている汎用的能力の育成のきっかけとツールを提供することにより、課内外の学生生活からの学びを促す。 「働くことの意味」「職業への適性と能力」「ライフプラン」「自己分析」「コミュニケーション能力」「チームワーク」「セルフコントロール」を中心に学ぶ。	
		キャリアデザインⅡ	キャリアデザインの第2段階として、「実社会・実業界を知る」に主眼を置く。一般的な企業の構造や経営についての知識、および広く産業についての知識を受講者に付与し、もって職業選択の一助とする。前半は企業、後半は産業についての講義とする。 「企業とは何か」「マネジメント(モノ・サービス、ヒト・カネ)」「各産業の概要」について学ぶ。	
		キャリアデザインⅢ	キャリアデザインの第3段階として、「内部世界(自己)と外部世界(実社会)を統合する」ことを目的とする。 就職活動時期を目前とした学生に対し、女性を取り巻く雇用環境など現実問題の中で就職意欲を喚起すると同時に、学生生活からの学びと関連づける形での自己理解を促し、事務局主催の、業界研究等、各種就職支援活動の活用へとつなげる。 「日本企業の人事管理制度」「昨今の労働事情」「女性の労働」「ワーク・ライフ・バランスの実践」「コミュニケーション能力」「自己分析(大学生生活の振り返り)」について学ぶ。	
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ	今日、大学卒業者に最も強く求められるものは、「汎用能力」(社会人基礎能力)である。具体的には、コミュニケーション能力、問題解決能力、達成意欲などである。しかし、これらの能力は必ずしも知識獲得によって育成できるものではない。 本授業は、外部組織との提携のもと、与えられた実際の課題に対し、受講生がチーム単位で責任をもって取り組むという体験の場を設定することにより、かかる能力の重要性についての受講者の認識を高めるとともに、受講者相互の刺激により、受講者の潜在的能力を引き出すものである。	
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅡ	本授業はⅠの発展版とし、履修条件としてキャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ(CDPⅠ)の単位を履修習得した学生とする。具体的な内容は、学生は「プロジェクトリーダー」または「ファシリテーター」という立場でCDPⅠの授業に参加し、CDPⅠの履修生に対してチーム運営をリードすること、または、チーム運営のファシリテーションを体験する。その後、全プロセスを通してリーダーシップのあり方、チームワークのあり方、ファシリテーションを振り返り、CDPⅠと同様に「汎用能力」をより一層高めることを目的とする。	
	全学共通科目	人間と文化	文学の世界	本授業のひとつの目的は、ことばと物語の力が、想像力を通じていかにか人の心を揺さぶり、新しい認識を形づくるかという文学のもつ力について考えることである。このためには、さまざまな切り口が想定できる。特定の作品の鑑賞と解釈を通じて、その特定の社会と文化を映す物語の中に時空を超えた普遍的人間の精神や思想を読む、というものと。また、複数の作品の通時的関連性や、同ジャンルの歴史的発展の過程を辿るといふ、文学史的俯瞰によってその本質を考えてみることも可能となるだろう。
			音楽の世界	学生たちに音楽に対する認識を深め、かつそれを楽しむ糸口を与えることを目的としたものである。ここでいう音楽は、西欧古典音楽に限定されたものではない。日本の伝統的音楽や、世界の様々なエスニシティに根差した音楽もそのなかには含まれている。また若者たちは深くポピュラー音楽に親しみ、音楽なしには彼らの生活は成り立たなくなっているといっても過言ではない。また音楽は、今日では様々なセラピーのなかにも取り入れられている。音楽の心理的・医療的作用も講義の主題となりうる。
			美術の世界	優れた美術作品の観察と分析を通じて、対象を理解するだけにとどまらず、美的体験を豊かにし、鑑賞能力を養うことを目指す。また、美術の地域や時代による特徴をも把握できるようにして、諸作品の個別化と一般化を通じて、人間生活の中での造形表現の基本となる形体や空間を把握し、的確な観察力や構成力を養うことをねらう。さらには美術作品の記号的側面にも注目し、例えばビジュアルデザインの部門では視覚的な伝達効果を主とするデザインの世界の学習を通して、デザインについて理解を深めるとともに、デザインにおける計画と表示の能力を高める。こうした学習と実践を通して、芸術としての美術の意義を理解させる。
			映像・演劇の世界	現在は、映像技術の進展と劇場型世界への転進のため、誰でもデジタル機器を駆使してイメージの編集ができるようになり、誰もが期待される役を意識してパフォーマンスを演じられるようになった。つまり「見る」アートから「する」アートへの転換が行われようとしている。本授業では、日常性に入り込んだようなイメージとパフォーマンスの世界を、歴史的視座の中に置いたり、同時代の他のアートとの往來を絡ませてみたり、具体的な作品をそれぞれの世界の用語で分析してみたりして、これらのアートの本質と人間の本性との係わり合いを深く、また広く論じていきたい。
			考古学の世界	考古学という学問的な方法について理解を深めることを目的とする。対象地域としては、学生の関心を考慮して、日本周辺をフィールドとした考古学を講義の対象とすることが考えられるが、関係の深い他の地域や、画期的な発見がなされた遺跡、あるいは話題性のある遺跡・遺物などについて世界の他の地域をあつつかうことも可能である。またどの時代をあつつかうか、あるいはある特定の遺跡・遺物に関して通史的に扱うかなどについては担当者にゆだねられる。したがって先史考古学と歴史考古学を講義の対象にふくむことはいうまでもない。
全学共通科目	人間と文化	ポピュラー・カルチャーの世界	「ポピュラー・カルチャー」論とは、古くは大衆文化論と呼ばれていた。「ポピュラー・カルチャー」は直訳すれば「民衆の文化」となる。古くから受け継がれてきた伝統的な民衆の文化が、都市化とメディアの発達のおかげでどのような変容を遂げているのか。そして、村上春樹の小説の大ヒットが示すように「ハイ・カルチャー」と「ポピュラー・カルチャー」の区別も今日また曖昧なものとなってきている。このように本講義の内包する課題は多岐にわたり、メディアと文化に関心をもつ多様な研究者の参加が期待される。	

全学 共通科目	教養科目	地域と文化	本科目では、地域の文化・社会について、言語、歴史、政治、経済、宗教、文学、芸術などさまざまな側面を、社会学、言語学、地理学といった単一の分野ではなく複数の分野にわたって「学際的研究」から全体的に理解することを到達目標とする。さらに近年の地球のグローバル化を背景に、特定の地域ではなくいくつかの地域のあいだの交流や関連にも注目し、そこから生ずる種々の政治・経済・社会問題と解決方法にも言及する。	
		言語と文化	コミュニケーションを成立させるのは「言語」なのだが、その「言語」は時として（あるいは同時に）よほど頻りにコミュニケーションを阻害し破壊させるものでもある。「ことば」は通じる、しかし同時に「ことば」は通じない。 言語についてのかような二律背反は、言語観の対立にも引き継がれる。ある言語はその言語固有のやり方で世界を分節する結果、その言語固有の世界観が形成されるのだと主張する考え方が一方、異言語であっても普遍的な心的言語・普遍的言語生成構造の上にその差異が生じているのだと説く考え方もある。果たして人は、「言語」という共通した知性によって相互理解の基礎を得たのだろうか。それとも、異なる言語はそれぞれ独自の文化を生み出すと同時に相互理解を阻む壁ともなるのだろうか。 本授業では、空気のように「あたりまえ」で、人間の知的営為の前提と捉えられているもの、それゆえに深くその本質を考えることをしなくて済んできたもの、にもかわらず、知的営為にとって不可欠あるいは知的営為そのものである「言語」とはなにかについて、さまざまな議論があることを知り、考える機会を与える。	
		日本の歴史と文化	日本の歴史を主な対象とし、客観的に歴史を見る目を涵養し、歴史に対する理解を深める。対象とする時代や事象については、特定の時代を掘り下げて分析することも可能であるし、文化史などから通史的に歴史をあつかうことも可能である。またここで日本という枠組みも固定的なものではなく、周辺地域との関係や世界史のなかで歴史を見直すという視点も必要であろう。日本列島を中心とする地域の過去の歴史や文化を見る目を養うことによって、現代の日本社会をあらためて見直し、問い直す、視点と視野を開く契機としたい。	
		世界の歴史と文化	世界の歴史を対象とし、広い視野で客観的に歴史を見る目を涵養し、歴史に対する理解を深める。併せて代表的な幾つかの民族と宗教について、その行動や思考の規範となっている教理と心性にも触れたい。対象とする地域・時代や事象については、特定の地域、時代を掘り下げて分析することも可能であるし、特定の事象を通史的にあつかうことも可能である。また、文化圏相互の交流という視点から、平時の交易や宗教間戦争の事例を、分析することにより有益であろう。世界の歴史と文化、民族と宗教を知ることによって、我々をとりまくグローバルな問題について、関心を深め、考えていく契機と視野を獲得できるようにしていきたい。	
		哲学と思想	哲学や思想は人類が発生以来、如何に生きるべきかを問い続けて、その問いと答えの繰り返しが累積され、体系付けられたものである。従ってその根本は実生活の即した具体的なものであったので、難解なものではない。教室ではまずこの誰もが経験するような身近な問題から出発し、それぞれの問題意識に基づいて思索してゆくことを練習する。また、哲学の長い歴史を参照し、滋養とすることにより我々が得手勝手に思索してゆくよりも、はるかに思考活動を豊かなものにしてくれる。こうした過去の遺産、そしてそれは現在にまで密接につながっているものであるが、それらに関する基本的知識の習得を試みる。	
		日本文化・事情	留学生の受講が優先されるが、履修人数に余裕がある場合には、日本人学生も受講できる科目である。留学生が日本語・日本文化に興味を持った理由の一つに、日本のアニメやマンガ、アイドルグループがある。留学生と共に、こうした日本の現代文化を鑑賞・分析し、それを育んだ日本の文化事情について学ぶ。	
		子どもの世界	子ども文化という時、学生たちが抱くイメージは多様なものであろう。広い意味での「子ども文化」そのものに、児童学、教育学、体育学、社会学、心理学、歴史学、文化人類学等々のさまざまなディシプリンからアプローチすることが本講義の方向性とし、小説、詩、絵画そして音楽等々、さまざまな芸術作品のなかで描かれた子どもの姿を論じることも本講義のもうひとつの方向性である。「子ども」は生命力や創造性の隠喩でもある。学生たちの「内なる子ども」に語りかけ、それを呼び覚ますような瑞々しい講義としたい。	
		人間の成長と心理	本講義では、人間の生涯に渡る“心・身体・社会性”の成長や発達というテーマについて、主に心理学的アプローチから概説していく。生涯発達の諸局面における様々なライフイベントを横軸として、そこでの心や身体の状態、人間関係や社会の様相、直面するであろう課題や問題について共に考え、受講生各自が自分なりの視点を持てるようになることを目指したい。特に受講生の皆さんが当面する青年期・成人期の特徴や課題について、講義を通して共に考えていくことを目指す。	
		日本国憲法	本科目は、わが国の法制度及び法体系の根幹をなす日本国憲法の基本原則と概略を理解することを目的とする。講義の中心は、実定法としての日本国憲法の解釈におかれる。即ち、基本的人権および統治機構に関わる憲法諸規定を、具体的な判例と関連諸法令の分析を通じて、その意味内容を解釈する作業を行う。また、実定憲法の解釈の枠に留まらず、その歴史的ないし論理的基礎をなす、英、仏、独、米などの西洋近代社会の構造ないし立憲主義思想の分析、さらには現代の諸外国の実定憲法との比較する。最後に、本科目は現代社会における憲法の最新の問題状況、例えば所謂「新しい人権」（環境権、国際人権など）についても論じる。	

全学共通科目 教養科目	社会と生活	法律と現代社会	<p>本科目は、現代社会を成立かつ存続せしめている、道徳、倫理、慣習そして法律など、種々の「社会規範」のうち、「法律」に焦点を当てて考察することを目的とする。以下、ここでの法律は法規範の中の、狭義の「法律」ではなく、法規範全体を意味するものとして扱う。</p> <p>第一に、社会規範の中で法規範の特徴を、特に国家権力との関係において明らかにする。</p> <p>第二に、代表的な法領域である、民法、刑法、そして行政法などについて、その基本的な特徴と概略を、具体的な判例を通じて考察する。</p> <p>第三に、法を紛争解決の方法として、動態的、機能的視点から分析する。</p> <p>第四に、現代社会における具体的な法律問題をいくつか取り上げ、法的主体としての我々市民について聴講者とともに考えたい。</p>	
		政治と現代社会	<p>現代社会における「政治」のあり方をできるかぎり多面的に考察することを通じて、「政治」に対するセンスを養うとともに、主権者として「政治」に対する判断や行動の指針を獲得することを目的とする。</p> <p>まず、政治に関する基本概念と、それらを育んだ西洋社会の歴史的・思想的理解をたかめ、近代国家およびそこで政治の特徴を明確にする。次に、現代社会における政治のシステムと機能を実証的分析も扱う。投票行動分析、政治意識分析などを通じた政治過程論、現代政治論などの領域である。さらに、国際政治史、国際関係論なども扱う。最後に、国家単位での政治行動とは異なる、例えばNGOなど新しい政治主体の役割についても考察する。</p>	
		経済と現代社会	<p>21世紀に入って世界経済は、市場のグローバル化が進展する中、近代国家と国民経済の形成においてさまざまな発展段階にある国々が、競争的關係をさらに強める場となっている。先進国が近代国家の枠組を超える方向を模索している一方、新興国は経済の急速な発展に国家の枠組みが追いつかない状況にあり、また途上国は政治経済の近代化が進まないまま伝統社会の仕組みが崩壊しつつある。このような世界経済の状況に、アダム・スミスに確立され、ケインズによる大きな革新を経た、市場と国民経済を分析する経済学の諸理論はいかなる有効性をもつかを検証し、新たなパラダイムの形成を模索してゆく。特に、日本経済が世界経済の中でどのような位置付けにあるかを確認し、高齢社会化など日本経済に特有な問題を明らかにした上で、その解決策をさまざまな角度から考えてゆく。</p>	
		メディアと現代社会	<p>現代社会に生きる私たちは、様々なメディアに囲まれて生活し、各種メディアは人々にとって情報源であるばかりでなく、彼らに娯楽を提供するソースともなっている。そこで、新聞・雑誌・テレビ・ラジオ等のマス・メディアが提供する様々なエンターテインメントについて論じる。またネットや携帯電話を通じて自ら情報を積極的に発信する事は、ネット右翼や学校裏サイトのような負の現象も生み出している。本授業ではこれらのメディアと現代社会にかかわる諸問題について、多様な切り口から考える事を通じ、私たちが世界を認識する方法やあり方を再検討する。</p>	
		家族と現代社会	<p>家族は、社会における基本的人間結合単位であると言える。本科目は、そのような家族の現代社会における位置と特徴を、社会諸科学（社会学、法学、経済学、教育学など）の方法論と視点から、具体的問題の考察を通じて、明らかにすることを目的とする。現代日本における家族の諸側面および諸問題を分析するためには、歴史的、比較社会的考察が不可欠である。</p> <p>伝統的な家族のあり方と、近代以降のあり方には大きな相違が横たわり、それを正確に測定することなしに、現在のわが国の家族のあり方を把握することは不可能である。以上の考察を踏まえて、現在社会における家族の諸問題をいくつか取り上げ、具体的に考察したい。</p>	
		福祉と現代社会（ボランティアを含む）	<p>私たちが暮らす現代社会を「福祉」の視点から取り上げて、履修者が身近な生活課題として受け止めながら考察し、一人ひとりがよりよく生きていくために役立てることを目的とする。今日の社会福祉制度がこれまで歩んできた歴史的経緯とその社会的背景やそれらの制度を支えてきた思想、そして制度の運用を行う福祉現場の実践活動の様子などをDVD等で紹介していく。また、国や地方自治体の法令によって制度化された福祉だけでなく、地域住民の自主的な活動によって創り出される市民ボランティア等の活動状況についても紹介しながら、これらの市民活動のあり方や今後の展望について考察していきたい。</p>	
		SDGsと現代社会	<p>当科目ではまずSDGsの全体像と17の目標の相互関係を理解し、本学の教育・研究と目標との関連について、最新動向を踏まえて学ぶ。これらは、①各学部の教育・研究はSDGsとどのように関連しているのか、②得た知識をSDGs課題発見・解決にどのように生かせるかについて、学生自身の「気づき」を促すことが目的である。学生には、1つの目標に対して多角的なアプローチ方法があることを知り、本学における学びは将来にわたって有機的に結びつくことを実感して欲しい。「持続可能な共生社会の実現への貢献」を教育使命の一つとする本学にて、SDGsと自らの興味関心の対象を結び付けて考え、今後、どのように学びを深めたらよいかを考える契機となる講義を提供する。</p>	
	自然と科学	数学の世界	<p>①微分・積分は、万有引力を発見したニュートンによって作られた。車のメーターで見る速度というものが微分概念のひとつの具体例である。速度をきちんと理解できれば、微分が何であるかがわかる。この理解のためには、関数と、極限の概念を知る必要がある。初歩から始めて、微分というものを理解するまで進む。</p> <p>②「速度」という概念と、「速さ」という概念は異なる。大きさしかないので速さであり、大きさと向きを持つものが速度である。大きさと向きを持つものをベクトルという。図示するときには矢印で表す。このベクトルの演算などを学ぶと、幾何学において強力な武器となる。このベクトルを別のベクトルに移す行列や、行列の性質を知るために役に立つ行列式も学ぶ。</p>	

<p>全学 共通科目</p>	<p>教養科目</p>	<p>自然と科学</p>	<p>生活の物理</p>	<p>日常生活に見る現象の裏にある法則を物理を使って、なるべく数式に頼らず、説明していく。身の回りに溢れる家電製品などは、物理という学問がなければどれひとつとして存在しない。いくつか例をあげる。電子レンジは、第二次世界大戦中のレーダの民生品である。電気ポットは、ジュール熱の法則に従って、お湯が沸く。また、日々新聞を賑わす地球温暖化の問題の理解には気象学の知識が必要だが、気象学の基本には物理学がある。</p> <p>学生の興味ある話題を取りあげ、その裏にある物理法則を明らかにして、物理的思考方を身につけてもらうことを目標とする。</p>	
			<p>生活の化学</p>	<p>その昔、化学者の夢は錬金術であったと言われる。金でないものから金を作り出すのが錬金術であるが、現在、プラスチックや繊維などは錬金術のごとく石油からつくることができる。ペットボトルからフリースをつくるなんてこともできる。ペットボトルもフリースも、炭素(C)と水素(H)と酸素(O)からできていて、結合の組み合わせを変えるだけで、見かけも性質も違うものに变化させることができるのである。砂糖と紙とサラダ油、見かけは違うが、これも実は主成分はすべて炭素(C)と水素(H)と酸素(O)からできている。どれも、燃やすと二酸化炭素と水になる。このような物質たちの七変化を理解するためには、物質を構成している原子に思いを馳せなければならない。</p> <p>水も化学物質の1つである。水は水素(H)2つと酸素(O)1つが結合してできたシンプルな物質だが、特別な性質を持っている。電子レンジで水を含む食品を暖めることができるのはなぜか。それは水の化学構造に秘密がある。</p> <p>本授業では、物質の性質や化学変化を理解するための化学の基礎を学び、日常生活に散らばっている事柄を化学の目で見てみることを目的とする。</p>	
			<p>科学と環境</p>	<p>地球環境は、この星が生まれて以来の約46億年間で常に変動し続けており、生命は環境の変動に適応しながらさまざまな生き方を獲得・進化してきた。地球環境の歴史を学ぶことで環境および生命の多様性を学ぶ。近年の環境問題は地球規模(温暖化や砂漠化など)でありながら身近な問題(都市化や食料・エネルギー問題など)でもある。これらの問題の多くは科学の進歩がもたらしたものであるが、こうした諸問題を克服して持続可能な社会を構築するのもまた科学の力である。本講義では、「環境・生命の多様性を学ぶ」と「科学技術の功罪をふまえて未来を考える」という2つの視点を中心に据えて環境問題について考える力を養うことを目的とする。</p>	
			<p>生命の科学</p>	<p>生命の誕生から始まり、成長に伴う様々な機能を持つようになる分化現象、子孫を残す生殖活動、そして加齢による老化現象、生命の終焉までを様々な観点から、最新の研究成果を踏まえて講義するのが本授業である。近年、ヒトゲノム計画を始めとして多くの生物において分子生物学の研究成果は著しいものがある。このような成果を踏まえて疾病の研究や品種改良などの応用面は言うまでもないが、生命の根本に触れる研究も行われている。このような研究は人類の健康に対する貢献は多大であることは間違いない。一方、本来動物細胞においては受精以降では全能性を欠いているわけであるが、i p s細胞のような人工的に全能性を待つ細胞に対する危険性や倫理面について指摘されている。このように最先端の研究の両面性も学生と一緒に考えていきたいと思っている。</p> <p>本授業を行うことで学生に生命現象を探究する面白さを学び、科学的な考え方を修得してもらうことが授業目標である。</p>	
			<p>宇宙の科学</p>	<p>宇宙の科学に関する発展は目覚ましく、宇宙の起源や進化に関する研究ばかりでなく、惑星探査機による火星などの直接探査、そして宇宙旅行や月旅行も実現間近になっている。宇宙に関する基本的な科学的知識や考え方を始め、人類が宇宙や地球のなかでは極めて小さな存在であることを理解する。本授業では古代や中世の宇宙観を始め、宇宙の起源や進化、太陽系と地球の起源と進化、宇宙開発についてビデオ等の画像を用いて解説する。</p> <p>宇宙は137億年前にビッグバンと呼ばれる超高温の火の玉として始まったとされているが、ビッグバン後には星や銀河が生成し宇宙の構造が形成された。太陽系は46億年前に誕生し、太陽を中心に8つの惑星とその衛星などから構成される。太陽系と同時に誕生した原始地球は、微惑星の衝突で生成したため高温であったが、冷却するにつれて海洋が生成し陸地が形成された。宇宙開発は1957年の人工衛星の打ち上げの成功に始まるが、その後人類は月面に降り立ち、スペースシャトルや宇宙ステーションの開発に成功し、宇宙旅行の基礎ができた。宇宙の巨大な時間的空間的な広がりや理解し、これからの宇宙と人類のあり方を言及する。</p>	
			<p>人類の進化</p>	<p>本授業では、まず生物分類および学名について解説し、その後、生命誕生から現在に至るまでを通覧しながら人類進化の概要、すなわち人類の誕生から世界各地への拡散移住の過程を解説する。とくに近年詳細な部分にまで理解が及ぶようになった人類のアフリカ単一起源説を基に、人類進化の特徴を理解してゆく。また併せて、進化過程で獲得してきた人体の構造と機能について解説する。また日本人の起源についても解説する。以上の知識をもとに、近未来生活において人類自らが制御する温度や照明など環境要因への適応の問題、およびロボットとの共存が想定される生活と人間観について、学生諸君の意見を求めながら考える。</p>	
			<p>自然科学の歴史</p>	<p>自然科学は、人間のあくなき知的欲求から生み出された輝く宝石のような結晶である。人間は、自然科学の知識を活用することで、物質的にも精神的にも豊かな社会を築いている。授業では、自然科学の歴史の夜明けから解説し、人類の歴史の中で、どのような科学的思想や科学的概念が生まれたかについて、自然科学の方法論とともに学ぶ。また、それらの科学的知識がどのようにして体系づけられ、現代のような自然科学が発展してきたかについて基礎から学ぶ。こうした歴史に関する知識を背景に、現代社会における、人間と自然科学の付き合い方について考える。また、自然科学は常に発展途上段階にあるため、今後の展開を含め、自然科学の未来についても考える。</p> <p>授業を通して、自分の中にある知的好奇心と人類の進歩や未来像との深い関わりを意識することを目標とする。</p>	

全学共通科目 教養科目	スポーツ	スポーツA	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことから本授業では、生涯スポーツの中でも愛好者の多い卓球・バドミントン・テニス・ゴルフなどの個人スポーツを中心に授業を実施する。	
		スポーツB	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことから本授業では、健康づくりのための体力を高める・技を高めるためのスポーツ実践として、エアロビクスダンス・ウォーキング・ランニングや器械運動（トランポリン）などを中心に授業を実施する。	
		スポーツC	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことを踏まえ本授業では、チームで協力して課題を解決し、コミュニケーション能力及び、スポーツ技能を高めるために、バレーボール型・バスケットボール型・ベースボール型などのスポーツを中心に授業を実施する。	
		スポーツD	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことから本授業では、健康でしなやかな日常生活を送れるように、軽いエクササイズ（ヨガ・ピラティス等）やストレッチを通して、自己のからだについて気づきを促し、身体のコンディショニングを行う。	
		シーズン・スポーツ	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことを踏まえ本授業では、学外での集中授業を（夏季はトレッキング、冬季はスキー・スノーボード）通じてそれぞれの技能を習得し高めると共に、自然と触れ合い、またそこに集う人たちとの交流を通して、コミュニケーションを高めることを目的として授業を実施する。	
		スポーツと健康	現代社会は、都市化、高齢化、労働環境の変化にともなう自由時間の増大といったライフスタイルの変化、また、科学技術の進歩や経済成長による生活の効率化がもたらした慢性的な運動不足やストレス傾向等にあつて、心身の健康を自ら維持管理することや、運動・スポーツ・野外運動を積極的に行うことは、現代人にとっては必要不可欠であると考えられる。 「健康」「運動」「スポーツ」の実践の基礎となる理論的な事柄について理解を深めていくことを目的に、①生活とスポーツ②生活とスポーツ技術③生活と体力④生活とトレーニング⑤女性とスポーツなどについて解説し、自らが生涯にわたって心身ともに健康で豊かな生活を営むための「健康・スポーツ」について考える機会とする。	
		レクリエーション論	レクリエーションとは、単なる身体的な健康だけでなく、精神的な健康をも促す活動で、自分の生活に喜びと活力を満たしてくれる重要な手段というように変わってきた。そしてまた、職場や地域社会、地域福祉の現場等においても、重要な役割をはたしている。本授業では、レクリエーションの基礎理論を学び、必要とされる地域社会等におけるレクリエーションの重要性や必要性、さらには支援方法等について理解を深めることをねらいとする。なお、本授業はレクリエーション・インストラクター資格取得とも関連する。	
		レクリエーション実技	レクリエーションとは、単なる身体的な健康だけでなく、精神的な健康をも促す活動で、自分の生活に喜びと活力を満たしてくれる重要な手段というように変わってきたのです。そしてまた、職場や地域社会、地域福祉の現場等においても、重要な役割をはたしている。本授業では、レクリエーションでの人と人をつなげるためのコミュニケーションワークや目的に応じたレクリエーション・ワーク等の指導・支援技術や方法などを習得し、多くの人たちをつなげるための基礎的能力の育成をねらいとする。なお、本授業はレクリエーション・インストラクター資格取得とも関連する。	
	特 義 教 養 講 義	教養特殊講義	本授業は、協定を締結した他大学・他短期大学が開設する特色ある授業科目を受講し修得した場合の単位認定科目である。なお、内容が異なる場合は、複数回の履修が可能である。	
	外国語科目	英語ⅠA	英語の基礎的な、聞く、話す、読む、書く、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、高校までに習得した英語力を実際のコミュニケーションに活かす訓練を行う。高校までの間に学んだ英語は「知識」として脳に蓄積されているはずである。しかしいざその「知識」を使ってコミュニケーションを行なおうとすると、簡単な表現さえ発することが出来ないのが現状ではないだろうか。このコースでは、「知識」としての英語を「道具」として使えるようになることを目標とし、コミュニケーション技術向上のための基礎構築を目指す。	

全学共通科目 外国語科目	英語 I B	英語の基礎的な、聞く、話す、読む、書く、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、平易な語彙や文法を用いつつ、人間関係を築く基となるコミュニケーション能力を磨く。前期の英語 I Aを受講することで英語のみの授業に慣れ、英語を「道具」として使うための基礎を身につけるはずである。このコースでは更にその「道具」を使ってコミュニケーションを行い、会話を継続・発展させる訓練を行うと共に、自分の意見を分かりやすい言葉で表現して発表する機会も設ける。
	英語 I C	英語の基礎的な、読む、書く、聞く、話す、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語の基礎的な読解力と表現力を身につけることを目指す。高校までの間に、入試問題で出題されるような英文読解力や英作文力は既に身につけているはずである。しかし、本来読み書きの目的はコミュニケーションである。このコースではその原点に戻り、基礎的な英語で書かれた文章を読んで理解し、それに倣って文章を作成するという訓練を繰り返し行い、書面によるコミュニケーション技術の構築を目指す。
	英語 I D	英語の基礎的な、読む、書く、聞く、話す、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語の基礎的な読解力と表現力を身につけることを目指す。前期の英語 I Cを受講することで、センテンスレベルの英語による書面コミュニケーション技術の基礎を身につけるはずである。このコースでは更にその技術を発展させ、基礎的な英語で書かれた文書を読んで書き手の意図を理解し、簡単な英語でそれに返答するという書面によるコミュニケーション技術の向上を目指す。
	英語 II A	英語 I A・英語 I Bを発展させ、中級レベルで4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、普通で話される英語をセンテンス・レベルから発展させ、パラグラフ・レベルでその大まかな内容を把握できることを目指す。扱うトピックは世界の人々の暮らしや環境、世界各地の都市の様子など幅広い分野に及び、英語を通して一般教養を身につけることも目指す。また、海外旅行を想定した旅行英語の要素も取り入れ、英語力の実践的な利用を目指す。さらに、学期を通してグループプロジェクトを行い学期末にその成果を発表することで、1年次に培った協調性を磨くことも目指す。
	英語 II B	英語 I A・英語 I B・英語 I Aを発展させ、中級レベルで4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、普通で話される英語をパラグラフ・レベルで理解できることになることを目指す。また、相手の話に耳を傾けてそれに反応し、自分の意見や感想を加えてパラグラフ・レベルで表現する訓練も行う。扱うトピックは世界中の家族のあり方や最新のテクノロジー、個人固有の嗜好など幅広い分野に及び、英語を通して一般教養を身につけることも目指す。また、学期を通してグループプロジェクトを行い学期末にその成果を発表することで、より豊かな協調性を身につけることも目指す。
	英語 II C	英語 I C・英語 I Dを発展させた、いわゆる英語の中級のな、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語をセンテンス・レベルから発展させてパラグラフ・レベルで読解できることを目指す。具体的には、新聞や雑誌記事などのパラグラフを、限られた時間で辞書を引かずその大まかな内容を把握することを目標とする。また、自分の身の回りのことをパラグラフ・レベルの英語で書くこと、環境・健康・文化・歴史などに関するレポートを書きこなすことを目標とする。そのためには、かなり多くの英語の情報に接する必要がある。新聞、雑誌に限らず、平易にリライトされたエッセイやストーリーを読むことも望まれる。
	英語 II D	英語 I C・英語 I Dを発展させた、いわゆる英語の中級のな、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語をセンテンス・レベルから発展させてパラグラフ・レベルで読解できることを目指す。具体的には、新聞や雑誌記事などのパラグラフを、限られた時間で辞書を引かずその大まかな内容を把握することを目標とする。また、自分の身の回りのことをパラグラフ・レベルの英語で書くこと、環境・健康・文化・歴史などに関するレポートを書きこなすことを目標とする。そのためには、かなり多くの英語の情報に接する必要がある。新聞、雑誌に限らず、平易にリライトされたエッセイやストーリーを読むことも望まれる。
	英語 III A	今まで学習した英語を発展させた、いわゆるブラクティカルな上級総合英語へのレベルアップを目的とする。たとえば、スピーチ、ディスカッション、ディベート、そしてプレゼンテーションなどにおいて必要とされる、自分の意見を英語で発表できること、相手の意見を聞きながら自分の意見も英語で述べて討論できること、相手を説得できるようなレトリカルな英語の発表ができることを目標とする。また、英検、国連英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験を念頭に高得点獲得も目標とする。そのためには、新聞・インターネットの記事など英語で書かれた各種の資料などから瞬時に必要な情報を的確に抜き出し、それを分析すること、BBC、CNN、ABCなどのニュースやドキュメンタリー番組を積極的に活用し、高度なリスニング力を体得することも望まれる。
	英語 III B	今まで学習した英語を発展させた、いわゆるブラクティカルな上級総合英語へのレベルアップを目的とする。たとえば、スピーチ、ディスカッション、ディベート、そしてプレゼンテーションなどにおいて必要とされる、自分の意見を英語で発表できること、相手の意見を聞きながら自分の意見も英語で述べて討論できること、相手を説得できるようなレトリカルな英語の発表ができることを目標とする。また、英検、国連英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験を念頭に高得点獲得も目標とする。そのためには、新聞・インターネットの記事など英語で書かれた各種の資料などから瞬時に必要な情報を的確に抜き出し、それを分析すること、BBC、CNN、ABCなどのニュースやドキュメンタリー番組を積極的に活用し、高度なリスニング力を体得することも望まれる。

全学共通科目 外国語科目	フランス語Ⅰ	<p>初めてフランス語に接する人のためのクラス。まずはフランス語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方（綴りと発音の関係）、文字表記をしっかりと修得する。</p> <p>CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、フランス語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>	
	フランス語Ⅱ	<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級フランス語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がフランス語できちんとできるようになることを目指す。</p>	
	フランス語Ⅲ	<p>フランス語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、フランスの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたフランス語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。</p>	
	フランス語Ⅳ	<p>全学共通教養科目としてのフランス語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、フランスと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とフランスの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたフランス語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。</p>	
	ドイツ語Ⅰ	<p>初めてドイツ語に接する人のためのクラス。まずはドイツ語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方（綴りと発音の関係）、文字表記をしっかりと修得する。</p> <p>CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、ドイツ語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>	
	ドイツ語Ⅱ	<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級ドイツ語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がドイツ語できちんとできるようになることを目指す。</p>	
	ドイツ語Ⅲ	<p>ドイツ語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、ドイツの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたドイツ語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。</p>	
	ドイツ語Ⅳ	<p>全学共通教養科目としてのドイツ語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、ドイツと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とドイツの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたドイツ語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。</p>	
	スペイン語Ⅰ	<p>初めてスペイン語に接する人のためのクラス。まずはスペイン語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方（綴りと発音の関係）、文字表記をしっかりと修得する。</p> <p>CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、スペイン語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>	
	スペイン語Ⅱ	<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級スペイン語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がスペイン語できちんとできるようになることを目指す。</p>	
	スペイン語Ⅲ	<p>スペイン語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、スペインの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたスペイン語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。</p>	

全学 共通 科目	外国 語科 目	スペイン語Ⅳ	全学共通教養科目としてのスペイン語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、スペインと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とスペインの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたスペイン語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		ロシア語Ⅰ	初めてロシア語に接する人のためのクラス。まずはロシア語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行ない、やさしい文章を読んだり、文型の反復練習をすることによって、ロシア語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		ロシア語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級ロシア語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がロシア語できちんとできるようになることを目指す。	
		ロシア語Ⅲ	ロシア語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、ロシアの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたロシア語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		ロシア語Ⅳ	全学共通教養科目としてのロシア語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、ロシアと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とロシアの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたロシア語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		中国語Ⅰ	初めて中国語に接する人のためのクラス。まずは中国語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、中国語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		中国語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級中国語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介が中国語できちんとできるようになることを目指す。	
		中国語Ⅲ	中国語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、中国の雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きた中国語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		中国語Ⅳ	全学共通教養科目としての中国語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、中国と日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本と中国の歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きた中国語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		韓国語Ⅰ	初めて韓国・朝鮮語に接する人のためのクラス。まずは韓国・朝鮮語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、韓国・朝鮮語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		韓国語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級韓国・朝鮮語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介が韓国・朝鮮語できちんとできるようになることを目指す。	

外国語科目	韓国語Ⅲ		韓国・朝鮮語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、韓国・朝鮮の雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きた韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
	韓国語Ⅳ		全学共通教養科目としての韓国・朝鮮語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、韓国・朝鮮と日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本と韓国・朝鮮の歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きた韓国・朝鮮語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
	日本語Ⅰ		日本語を母語としない学生のための授業である。大学の授業を受講する際に必要な日本語のうち、聞くことと話すことを中心に、基礎を固めて応用に備える練習を行う。	
	日本語Ⅱ		日本語を母語としない学生のための授業である。大学の授業を受講する際に必要な日本語のうち、読むことと書くことを中心に、基礎を固めて応用に備える練習を行う。	
	日本語Ⅲ		日本語を母語としない学生が大学の授業で必要となる日本語を総合的に養う授業である。特に、受講という学習活動に必要な日本語を総合的に訓練する。講義を聴き、ノートを取り、質疑、応答に対応して、内容を理解するという流れと、理解、整理した内容に対する詳細を補足的に調べることで、さらに内容の理解を深める方法を学ぶ。	
	日本語Ⅳ		日本語を母語としない学生が大学の授業で必要となる日本語を総合的に養う授業である。特に、学術上の表現・発信活動に必要な日本語をコミュニケーションに訓練することで、日本の大学の学習活動のあり方とその流れを理解する。また、まとまった意見として口頭で発表するプレゼンテーションを通じ、文化的、倫理的約束事に配慮しつつ産出する方法を学ぶ。 具体的には、講義で出された課題を実施する際、下調べを行い、その調査に基づいて他の学生と意見交換を行うのであるが、掲示板、メール、板書においては文書で、また、グループ活動では口頭で意見交換しながら、考察を深める練習を行うものである。	
	外国語特殊演習		本授業は、協定を締結した他大学・他短期大学が開設する特色ある授業科目を受講し修得した場合の単位認定科目である。なお、内容が異なる場合は、複数回の履修が可能である。	
地域文化・国際理解科目	地域文化理解Ⅰ		本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。	
	地域文化理解Ⅱ		本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。	
	地域文化理解Ⅲ		本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。	
	国際理解（海外研修）Ⅰ		グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。 日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に用意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。	
	国際理解（海外研修）Ⅱ		グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。 日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に用意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。	

全学共通科目	地域文化・国際理解科目	国際理解（海外研修）Ⅲ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。</p>	
		国際理解（海外研修）Ⅳ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が2週間以上、かつ研修の実日数が10日間以上の場合、1単位を認定をする。</p>	
		国際理解（海外研修）Ⅴ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が2週間以上、かつ研修の実日数が10日間以上の場合、1単位を認定をする。</p>	
博物館学芸員課程に関する科目	生涯学習概論	本授業では、生涯学習の理念や制度など基礎的知識を学び、生涯学習に携わる博物館学芸員・図書館司書・社会教育主事・公民館主事など、その活動や方法、意義について事例や実践例などを通して学ぶ。		
	博物館概論	博物館学芸員資格取得のための必修の授業である。多くの博物館を対象しながら、歴史系博物館を中心に、博物館の本質、機能や役割、業務の内容、学芸員の仕事とともに、博物館に関連する法律など全般的な基礎知識を学ぶことを目的とする。		
	博物館経営論	授業のテーマは、「現代博物館経営の諸問題解決に向けて」。博物館経営では、理念に基づいた様々な効率的、かつ効果的な事業展開を図っていかねばならない。特に公立博物館における博物館経営の向上への取組は、行政改革において運営面や財政面から指定管理者制度導入など、切実な問題に直面している。いかに入館者増を図り、収入を増加させて安定した財政運営に導くかという一面的な問題解決では、博物館経営は成り立たない。 本授業では、現代博物館の抱える経営の諸問題の現状と課題を通して、博物館のあるべき姿を模索しながら、学芸員としてどのように博物館経営に携わっていくかを考える。		
	博物館資料論	博物館にとって資料は博物館活動を行うための基本となるものである。本授業では、博物館資料の種類や、その収集・整理の方法、保存や活用するためには何が必要なのかなどについて学ぶ。		
	博物館資料保存論	資料の保存は博物館の大きな役割である。ここでの保存とは、単に失くさない、壊さないということではなく、歴史の物的証拠である種々の資料を良好な状態を保ったまま、次世代に引き継ぐということである。そのためにも、防犯や防災対策はもちろんのこと、温湿度変化や光、気中化学物質などの環境要因や虫カビによって引き起こされる変質を防ぐための対策が必要となる。本授業では、博物館において必要とされる資料保存のための環境、またこれを維持するための構造や空間配置、設備、管理体制などに関して概観する。		
	博物館展示論	博物館における展示の歴史、現状、教育活動、主要な博物館・美術館等の紹介・見学等をおして博物館展示に関する基礎的理解を深める。 さらに博物館展示の意義について、調査研究、展示の計画、解説・図録の作成等、具体的な作業を通して、その果たす役割についても考える。		
	博物館情報・メディア論	博物館資料データベースを基に博物館活動に関わる様々なメディア（図録、展示パネルなど）を再構成する基礎的能力を習得できるようにする。		
	博物館教育論	社会教育機関としての博物館の役割、エデュケーターとしての学芸員の役割を理解すること。学芸員として学習者の特性や発達段階に応じて適切な理論と方法を選択し、生涯学習に繋がる基礎的能力を涵養したい。		

博物館学 芸員課程 に関する 科目	博物館実習	博物館学芸員として必要な基礎的知識および技術、心構え等について実習する。また、学内の博物館施設「大妻女子大学博物館」あるいは博物館に認定された学外の施設で実習を行うので、その際に必要となる事項や留意すべき点などについて学習する。 「博物館実習」は3つの内容から構成される。 (1)講義や実技を含む学内実習 (2)見学実習および巡見 (3)実際の博物館での館内実習である。 (オムニバス方式/全30回) (23 見澤博昭/15回) 博物館見学実習、博物館館務実習、事前事後指導を中心に担当する。 (32 下田敦子/15回) 博物館実務実習を中心に担当する。	オムニバス方式
	文化史A	我々のくらしは過去の歴史の積み重ねによって成り立っている。本授業では「日本文化」の原点である原始古代の文化について学ぶ。旧石器時代から弥生時代を対象とし、さまざまな歴史事象を通観して各時代の文化の特質を明らかにする。	
	文化史B	我々のくらしは過去の歴史の積み重ねによって成り立っている。本授業では「日本文化」の原点である原始古代の文化について学ぶ。古墳時代から奈良時代を対象とし、さまざまな歴史事象を通観して各時代の文化の特質を明らかにする。	
	美術史A	西洋美術の源流にある古代ギリシア・ローマの美術からルネサンス美術までをとりあげ、博物館学芸員を目指す者にとって必要な知識を習得し、芸術作品の見方をつちかうことを目標としている。 また、美術史の基礎的な事柄を習得することを目的としている。	
	美術史B	西洋美術の、バロック時代(17世紀)から20世紀までの作例をとりあげ、博物館学芸員を目指すものにとって必要な知識を習得し、芸術作品の見方をつちかうことを目標とする。	
	民俗学A	民俗学の基礎を学ぶ。どこの地域に行ってもその地域の歴史や生活の様子をテーマにした博物館を見かける。「□(地域名)歴史・民俗博物館」とか「□郷土博物館」などである。歴史と民俗はワンセットで組み込まれていることが多いが、展示の内容に違いがある。おおよその傾向として歴史が過去の人が記した古文書や歴史の出来事を中心に展示しているのに対し、民俗は生活用具や聞き書き資料に重きを置いた内容になっている。この違いが民俗学を特徴付けているともいえるが、民俗学は生活のあらゆる場面を研究対象としている。それ故研究者によって関心領域も異なり今日の民俗学は細分化される傾向を強めているのが実情である。 本講義ではそうした流れを念頭に置きつつもA「社会生活」、B「宗教(信仰)生活」の二つの面に絞って進めていく。Aの社会生活は人と人とのつながり方を考察する。特に家族・親族、地域社会ではどうつながっているのか、という点に関する代表的な事例を紹介しながら解説する。	
民俗学B	民俗学Aに続き、民俗学の基礎を学ぶ。Bでは主に宗教(信仰)面を取り上げる。私たちの生活は情報化社会の中で一見すると均一化したようにも思われるが、ちょっとしたところでこれが「標準」ではなかったことに気がついたりする。そうした経験は他の地域の出身者とのつきあいの中で生じることがほとんどと思う。また、どんなに科学的な知識を学んだとしても、日常生活を省みると「げんをかつぐ」とか「縁起が悪い」など合理的とはいえないものにこだわっている自分がある。些細なことのように思えても、こうしたことは実は私たちの精神世界を根底から支えている文化であり、しかもその有り様は多様なものである。本講義では民俗学の視点から私たちの生活の中に展開する様々な宗教(信仰)をみていきたいと思います。		
図書館司書 に関する 科目	生涯学習概論	本授業では、生涯学習の理念や制度など基礎的知識を学び、生涯学習に携わる博物館学芸員・図書館司書・社会教育主事・公民館主事など、その活動や方法、意義について事例や実践例などを通して学ぶ。	
	図書館概論	本授業では、図書館に関する全体的な理解を深めるために、図書館の歴史や、館種などの基本的な事柄を説明する。	
	図書館情報技術論	図書館の使命は、様々な情報資源を蓄え、将来に向けて保存し、利用者へ提供することである。現在、図書館で利用される情報資源は多様な形態をとっており、そこには情報技術が深く関係している。情報資源は、従来からあるプリント媒体だけではなく、デジタル媒体の資料も多く利用されている。また、図書館を通じて提供可能な図書館外のデータとしては、インターネット上の情報資源やデータベースもある。情報技術の活用は、図書館で提供される情報だけではなく、図書館自体の業務や所蔵資料の検索、広報としてのWebページなどにも影響を与えており、今や情報技術は、図書館とは切り離すことのできない重要な位置を占めている。 本授業では、図書館にかかわるいろいろな情報技術について理解し、基礎的な情報技術を修得することを目標としている。図書館スタッフとして必要な知識や技術だけではなく、利用者側からの視点や図書館を運営する自治体等からの考えや立場も考慮しつつ、図書館の運営を支える核となる情報技術を考えつつ学んでもらいたい。	講義 26時間 演習 4時間
	図書館制度・経営論	記録された知識や情報を収集、組織、保存し、人々の要求に応じて提供するための「社会的機関」「情報社会の羅針盤」と位置づけられる図書館は、制度的にそれぞれの設置者が定めた使命あるいは設置の目的を掲げている。 図書館の経営とは、そうしたねらいが十分に達成できるように、「組織の内部および外部に働きかける活動」であるという内容を核に講義を行う。なお、図書館活動と地域社会のかかわりについても解説する。	

図書館司書に関する科目	図書館サービス概論	現代の図書館の重要な機能であるサービス提供機能の全体的な理解を図るために、代表的な図書館サービスを取り上げ解説する。図書館サービスの構造、種類、方法を理解することが本科目の目標である。 まず、図書館サービスの考え方、構造、変遷等について学修する。つぎに図書館サービスの二つの柱である資料提供サービスと情報提供サービスについて考察する。この二つの領域は、図書館サービスの車の両輪とも言われる基本的なものである。その上で、利用対象者別のサービスとして、障害者・高齢者・多文化サービス等について理解を深める。合わせて、こうしたサービスを支える仕組みである図書館の連携・協力、接遇、著作権についても学ぶ。本科目では図書館のサービス面に焦点を当てるが、図書館サービスのうち児童サービス、情報サービスについては別に科目を設定し、より詳しく学ぶ。	
	情報サービス論	本授業では図書館における情報サービスの意義を明らかにしたうえで、図書館における各種情報サービス、情報検索サービスの理論と方法、情報サービスに必要な各種情報源の種類と特性、その組織化などについて解説する。図書館の情報サービスについて基礎的な知識を身に付けることをねらいとする。	
	児童サービス論	本授業では以下について解説する。 ①乳幼児からヤングアダルトを対象とした児童サービスの意義 ②子どもの発達と学習における読書の役割 ③年齢別の児童サービス ④児童サービスの企画・運営 ⑤各種資料の意義と役割 以上を理解したうえで、子どもたちへのよりよい図書館サービスとは何か、理解を深めることを目的とする。	講義 28時間 演習 2時間
	情報サービス演習（1）	本演習では、図書館が提供するサービスのうち、情報サービスについての演習を行う。本科目では、中でも信頼性の高い情報源を調べるための手法を身につけるため、レファレンスブックを中心とした探索法について学ぶ。まず、情報サービスの概要について理解を深めるため、その設計方法、レファレンスコレクションの整備、レファレンスプロセスについて解説し、つぎに、実際のレファレンスを想定したインタビューについて確認を進める。最後に、レファレンスブックを中心にさまざまな情報源を解説するとともに、それらを使った演習を行う。この演習を通して、情報を探索する力を高める。	
	情報サービス演習（2）	本演習では、主に情報検索（IR：information retrieval）の基礎的な知識と技術を、座学と実習を通じて身に付ける。 私たちの日常生活では、インターネット上の情報を検索することや、様々なツールを用いて情報を入手し利用することがごく普通に行われている。 しかしながら、信頼度を考慮した正確な情報や専門的な情報は、一般的な検索エンジンを用いた情報検索では、十分に見つけることは期待できない。 信頼性の高い情報をどのように見つけるかは、ある程度専門的な知識と技術が必要である。どこを探せばどのような情報があるか、どのように探せば的確な情報を得られるかは、図書館のような情報提供を担う組織のみのミッションではなく、だれもが身に付けておくべきスキルのひとつでもある。 本授業を通じて、様々な問題解決を可能とする情報検索ができるような知識と技術を身に付けることが大きな目標である。	
	図書館情報資源概論	図書館のコレクション（蔵書等）は、長期間にわたって構築されるものである。そのコレクションは、個別の図書館の特徴や魅力を示すうえで、重要な要因でもある。そこで、本講義では、魅力的なコレクションを構築していく上で必要な知識を得るため、コレクションの特徴や収集、蓄積について理解を深める。 まず、資料の種類について学んだ上で、コレクション形成の理論、情報源、プロセスを学ぶ。また、主題分野ごとの情報資源とそれらの特性についても考察する。最後に、図書館と密接に関わる出版社・取次を含む情報資源の生産・流通について理解する。	
	情報資源組織論	図書館をはじめとする「知のアーカイブ」においては、多岐にわたる資料を収集し、その資料に利用者がより確実にアクセスすることが可能なように、様々な組織化の方法を発展させてきた。 本授業では、まず、これら組織化の意義からスタートし、情報資源組織法を概括する。その後、ほとんどの受講者が次年度に履修するはずの「情報資源組織演習」に備えて、実際に利用されているさまざまな組織法について理解していく。特に、司書教諭資格取得を目指している受講生には、組織化の演習機会がほとんどないため、それを自覚しつつ、本講義においてはそのエッセンスを必ず身に付けてもらいたい。また、各組織法自体が、コンピュータやデータベースを利用したボーダーレスになりつつある状況も把握し、コンピュータやデータベースを利用した演習にも備えておいてもらいたい。同時に、図書館内の資料組織化だけではなく、インターネット上の情報資源の組織化についてもその基礎を理解する必要がある。 授業全体で学んでもらいたいことは、単に組織法を覚えることではなく、その組織法にどのような意味があるのかを受講者自身が考え咀嚼してもらいたいことと、日本で利用されている代表的な組織化の具体的な方法の要点である。そのためには、組織化する側だけの視点ではなく、利用者側の視点も常に意識しつつ受講し学習を進めることが必要である。	

図書館司書に関する科目	情報資源組織演習	<p>コンピュータを中心とする情報化の進展は、図書館においても、様々な変化を与えてきた。公的機関や民間から様々なMARC（機械可読式目録）が提供され、図書館の現場では、それを利用（活用）して、目録データベース作成の負担を軽減させているというのが実状である。それは、確かに省力化にはなるが、図書館員の様々な能力（特にデータ作成能力）を著しく低下させている現実も見逃せない。資料の組織化は、図書館システムの基礎でもあり、組織化を的確に行うためには、既存のデータを利用するだけの能力では明らかに力不足である。</p> <p>本授業では、受講者自身が考えることによって、具体的に資料を組織化してもらいたい。そのためには、各組織法で利用するツール（日本目録規則など）から、必要な情報を読み取る能力が必要である。マニュアルをきちんと読みこなし、効率のよい作業ができる技能をしっかりと身に付けてもらいたい。演習を通じて得られたこれらの能力は、既存のデータの矛盾や誤りもきつと発見できるはずである。</p> <p>また、組織化の手法を用いて作成されたデータは、一般的にはコンピュータを通じて利用されていますから、それらデータをデータベースに登録する作業もシミュレートしてもらいたい。時間的な余裕があれば、ネットワーク情報資源の組織化についても、より理解を深める演習にしていく。</p>	
	図書・図書館史	<p>本授業では図書を中心とした情報資源の歴史と図書館の歴史を学ぶことによって、図書館と情報資源について、より広い視野から考えることができるようになることを目的とする。</p> <p>講義では図書館や図書館で扱われるメディアの歴史的变化について、日本はもとよりアメリカやヨーロッパ、イスラムやインドなどの諸外国についても取り上げ解説する。併せてそれぞれの文化圏がどのような相互作用を及ぼしたかについての理解を深める。</p>	
	図書館サービス特論（1）	<p>本授業では公共図書館を運営するなかで起こりうる可能性のある、様々な問題について解説する。近年の公共図書館で起きている図書館サービスにかかわる諸問題を取り上げ、図書館サービスを取り巻く環境について理解を深めることを目的とする。</p>	
	図書館情報資源特論（2）	<p>図書館情報資源特論（2）では図書館基礎特論と合わせて「医学情報特論」として授業を構成し、医療専門家、患者や家族、一般市民のための医学情報やサービスについて、次の4点を中心に解説する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医学情報の需要と供給 ・研究の進展が早く日々新しい発見がある医学情報の特徴 ・人命にも関わる医学情報の信憑性 ・最新、且つ、正確な情報を提供するためのサービス 	
	図書館基礎特論	<p>図書館基礎特論では図書館情報資源特論（2）と合わせて「医学情報特論」として授業を構成し、医療専門家、患者や家族、一般市民のための医学情報やサービスについて、次の4点を中心に解説する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医学情報の需要と供給 ・研究の進展が早く日々新しい発見がある医学情報の特徴 ・人命にも関わる医学情報の信憑性 ・最新、且つ、正確な情報を提供するためのサービス 	

授 業 科 目 の 概 要					
(人間共生学部心理学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
学部 共通 科目	人間共生総論Ⅰ		本授業は新入生に対して学部の基本理念である「共生」について考えさせることを目的とした授業である。人間共生総論Ⅰにおいては、社会学の観点から共生に問題を考えていく。ジェンダー間、世代間、異文化間、様々な次元の共生について論じられる。受講生には自分とは異なる他者を理解し、共に生きていくための知識と知恵を身につけてもらいたい。講義科目ではあるが、授業内容についての討論を行う等、学生たちが能動的に学べる機会を提供したいと考えている。		
	人間共生総論Ⅱ	○	「人間共生」を考えていく上で、心身の健康を保持増進という視点は必要不可欠である。そして、ここでは、発達心理学や社会心理学、臨床心理学、健康心理学、健康教育など多岐かつ幅広い学問領域における知見や実践を学ぶことが求められる。 本授業では、「健康」を各種応用心理学の観点から十分に考え、自らも他者も充実した毎日を送ることができることを目指す。そして、健康な毎日を送るベースにある「人間共生」の在り方について学術的かつ実践的に学ぶ。 本授業では心理学科の専任教員がオムニバス形式で行なう。 (オムニバス方式/全15回) (3 田中優/2回) 人間理解のために：人間共生総論導入① (1 福島哲夫/2回) 心身の健康を考える：人間共生総論導入② (8 春日文/2回) 発達心理学的視点からの心身の健康の保持、増進そして共生社会の実現へ (2 香月菜々子/2回) 臨床心理学的視点からの心身の健康の保持、増進そして共生社会の実現へ (6 伊澤冬子/2回) 健康心理学的視点からの心身の健康の保持、増進そして共生社会の実現へ (7 堀洋元/2回) 社会心理学的視点からの心身の健康の保持、増進そして共生社会の実現へ (9 三好真/1回) 心理的安全性から考える共生社会 (4 古田雅明/1回) 人間共生と教育：健康行動と健康教育 (5 八城薫/1回) よりよい共生社会を目指した心理学的アプローチ	主要授業科目 オムニバス方式	
	人間共生総論Ⅲ		急速な社会の変化に伴い、人間関係のあり方も大きく変わりつつある。本授業では、共生社会の基盤となる人間関係の基本的視点、対人認知、人間関係の生涯発達、対人関係の成立、コミュニケーションなど基礎的な概念を学ぶ。次に、現代社会において円滑な対人関係を促進あるいは阻む要因について、現在社会で生じている事象を通して考える。そのうえで、円滑な人間関係を構築するための方法についてロールプレイを通して身につける。さらには対人援助における人間関係について事例から学ぶ。		
	人間共生総論Ⅳ		本授業は、共生社会の実現に向けて、多様性を背景とする地域社会や職場の課題を、国内外の地理的差異に関わる「グローバル・地域共生」、多様な特徴を持つ人間同士の共生である「人間共生」の二側面から「共生」を捉える様々な視点について、多様な専門領域の教員がオムニバス形式で授業を行っていく。様々な角度から社会の課題を捉える広い視点を持ち、発想力、構想力を養う。 (オムニバス方式/全15回) (12 小川浩/2回)「共生社会」とは何か、またグローバル・地域共生と人間共生の2つの視点を知る。社会の課題を発見する視点を養う。 (15 蔵野ともみ/2回)メンタルヘルスの視点から人間共生を捉え、発想力を養う。 (32 伊藤みちる/1回)国際的な課題からアプローチする視点と発想力を養う。 (33 高丸理香/2回)インターセクショナリティの視点から多様な人々が尊重しあう社会づくりのための発想力を養う。 (11 大橋寿美子/2回)コミュニティを育む共生空間と運営デザインのための視点と構想力を養う。 (34 野崎智仁/2回)総合リハビリテーション及びコミュニティ創りの視点と構想力を養う。 (20 本田周二/2回)心理学の観点から多様な特徴を持つ他者とのコミュニケーションに必要な知識を養う。 (17 齊藤豊/2回)まとめ：共生デザインにおける各分野の基礎知識を身につけて、その中から深く探究する分野を見つける。	オムニバス方式	
	社会学概論Ⅰ		本授業では、私たちの身近な諸事例と関連付けながら、まず、社会的行為やコミュニケーション等の社会学の基礎概念について学ぶ。次に、個人と社会との関係を解明するために構築された主要な社会学理論について学習する。本授業を通じて、受講者は、身近な諸事例と関連付けながら、社会学の基礎概念と理論を学ぶことによって、自分自身の日常生活と現代社会の構造・動態との関連を多角的かつ体系的にとらえるため、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、必要な社会学の基本的な考え方を身につけることができるようになる。		
	社会学概論Ⅱ		本授業では、まず、現代日本社会における、地域社会の変容、結婚や家族の変化、少子・高齢化の進行といった側面から現代社会の特色と問題点を学習する。本授業を通じて、受講者は、身近な諸事例と関連付けながら、地域社会の変容、結婚や家族の変化、少子・高齢化の進行といった側面から現代社会の特色と問題点を学ぶことによって、自分自身の日常生活と現代社会の構造・動態との関連を多角的かつ体系的にとらえるため、さまざまな人々や社会と共存する知識を備え、必要な社会学の基本的な考え方を身につけることができるようになる。		

学部 共通 科目	心理学概論Ⅰ	○	本授業の狙いは、心理学を学ぶ上での基本的な知識を身につけることにある。特に、心理学的な考え方を身に付け、学問としての心理学を学ぶ基礎を身に付ける。具体的には、心理学史、心と脳、知覚、学習、記憶、思考、自己について、それぞれ身近な例を取り上げて概説する。授業は、講師による講義に加え、適宜、重要なポイントについてディスカッションを行うことにより、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、学生が自らの体験を心理学的に理解、説明できることを目指す。	主要授業科目		
	心理学概論Ⅱ	○	本授業の狙いは、心理学を学ぶ上での基本的な知識を身につけることにある。特に、心理学的な考え方を身に付け、学問としての心理学を学ぶ基礎を身に付ける。具体的には、動機づけ、原因帰属、感情、性格、知能、思考の発達、愛着、心理学研究法について、それぞれ身近な例を取り上げて概説する。授業は、講師による講義に加え、適宜、重要なポイントについてディスカッションを行うことにより、さまざまな人々や社会と共存する知識を備え、学生が自らの体験を心理学的に理解、説明できることを目指す。	主要授業科目		
	社会福祉学概論Ⅰ		本授業のねらいは、社会福祉学に関する導入の講義科目として、社会福祉とは何か、その概念、制度・政策について理解を深めることである。多様な地域生活課題を抱える人々に関する事例や、日本における福祉的な課題・テーマ・時事をもとに、それに対する向き合い方や考え方を学び、問題の構造を読み解く力や必要とされる思考を身につける。社会福祉の主要な概念および日本における制度・政策について概説する。そのうえで、日本における実際の出来事や社会問題をもとに考察することや、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、福祉的思考を涵養する。授業は講師による講義を中心に、学生個人のワーク、授業内容に応じて少人数でのディスカッションを行う。			
	社会福祉学概論Ⅱ		本授業では、社会福祉学の全体像を学び、対象ごとの事例検討から各論的な理解を深める。授業を学んだあと、多様な対象や領域から、各自の専門的興味を持つようようにすることをねらいとする。社会福祉とよばれる社会的現象は、歴史、価値、対象、政策、運営、援助、社会行動など、さまざまな要素を包括しつつも、単なるその集合体ではない。内部的には、多様な要素からなるシステムとしての体系をもち、同時に外部に対してはより高次の、あるいは広範なシステムの構成要素である、一つの全体として存在している。本授業では、そのような社会福祉の全体像を、可能な限り一定した視点と枠組みを基盤に、理論的に把握することをめざす。本授業では、さまざまな人々や社会と共存する知識を備え、様々な社会的現象の事例検討を通して、専門的、多角的な視点を身につける。			
	共生デザイン概論Ⅰ		本授業では共生デザイン概論分野における多様性のうち、グローバルに関わる概念をグループワークを中心に学習する。地理的差異による多様性、すなわち人種、言語、宗教、文化、生活習慣等の差異を含むグローバル化に伴う多様性である。グローバル化は、しばしば政治・経済領域での他国との連携や競争の文脈で言われるが、一部の国際的なビジネスに限らず、国内においても、インバウンド消費に焦点を当てた商品・サービスの開発・提供、外国人労働者との協働や雇用管理、地域社会における外国人住民との共生、外国人に対する教育・医療・福祉場面での対応など、職場や地域社会における日常的なグローバル化が課題となっている。本授業では、国際貿易や国際協力を中心に、グローバルな地理的差異に基づく多様性に焦点を当て、異なる地域間での対話と協力の重要性、そして国際社会での課題解決について学ぶことでグローバルにおける多様性を理解することを目指す。			
	共生デザイン概論Ⅱ		本授業は、少子高齢化社会や障害者福祉などをもとに、個人としての多様性を考え、地域づくりの在り方について学習する。就労支援や生活支援という保健医療福祉的観点を持ち、地域の課題分析をするための思考を身につける。特に就労に関しては社会的に労働者の減少からその確保が重要視されていることから、取り巻く周辺事情を解説する。授業は生きにくさを抱える個人の課題等を講義により行い、小グループでの演習により想定した地域の分析を行う。			
専門 教育 科目	基礎 科目	心理学 専門 基礎 科目 群	心理学基礎セミナー	○	本セミナーは、人間関係と心の問題を解明する「人間関係力」を養うために、「社会生活を送っている人々の相互関係の法則性を明らかにする」社会心理学と「個人や集団に生じるさまざまな心の問題を扱い、それらの改善や予防を目指す」臨床心理学を、バランスよくかつ効果的に学んでいくための基礎の育成を目的とする。具体的にはカウンセリング・ロールプレイやアサーショントレーニング、マインドフルネスの体験学習を通じて「人間関係の中の自身を知る」「人間関係に臨むにあたって自身を整える」「人間関係において自身を用いる」力の獲得を目指す。また、体験・観察したことから考察したことを論理的な文章で表現するレポートライティングのトレーニングも行う。このセミナーは、全受講生が集まるイントロダクションや少人数制のグループワークのほか、受講生が3グループに分かれて、それぞれの担当教員からテーマごとに2回ずつ学ぶ方法でも行われる。	主要授業科目
			心理学研究法基礎	○	本授業の狙いは、心理学研究法の基礎を講義と演習により習得することである。具体的な到達目標は、1. 心理学実験の基礎（相関関係と因果関係、独立変数と従属変数、仮説の立て方）を講義により理解する。2. 基礎的な心理学実験について講義と演習により理解する。3. 基礎的な心理学の研究レポートの書き方を講義と演習により理解すること。科学的な心理学の研究法の基礎を理解することは、実証的な問題解決能力を高め社会人としての基礎力を身につけることが見込まれる。	主要授業科目 講義 10時間 演習 20時間
			基礎統計学Ⅰ	○	心理学の研究は、人の心や行動を読み解き、原因を探り、さまざまな問題を解決に導く学問である。そのような研究成果を生み出すためにまず必要なことは、心や行動に現れた事実をより客観的・論理的に捉え、分析し、実証していく知識と技能であり、その技能の一つが統計法である。本授業では統計学の中でも、特に、記述統計について学ぶ。基本的な統計資料を理解し、エクセルを使用して各自で数値データを適切に整理、記述できることを目指す。そのためにまず統計学を学ぶための基礎となる専門用語や記号を学び、次にデータ分析の基礎となる、度数分布などの図表の表わし方、質的・量的データの数値要約（数値データのまとめ方）について理解し、習得する。	主要授業科目 講義 10時間 演習 20時間

専門教育科目 基礎科目 心理学専門基礎科目群	基礎統計学Ⅱ	○	<p>本授業の狙いは、統計学の中でも推測統計学について学び、統計的データの分析、結果の解釈ができるようになることにある。そのために、統計的検定とは何か、t検定による平均値の差の検定、分散分析による平均値の差の検定、量的変数同士の相関関係、質的変数同士の相関係数、カイ二乗検定による比率の差の検定について概説する。授業は主に、講師による講義の後、各自、Excel等を用い実際にデータ分析を行う形式をとる。これらを通して、既存のデータからどのような分析が可能であるか、研究計画・実験計画からどのようなデータを取集する必要があるか、を自ら決定できるようになることを目指す。</p>	主要授業科目 講義 10時間 演習 20時間
	人体の構造と機能及び疾病		<p>本授業では、人体の構造と働き、疾病、障害、さらにリハビリテーション、健康の考え方について基本的な知識を身につけることを狙いとしている。とくに将来、心理職に従事する人のために、基本的な人間の身体の構造と働きについて理解できるようにする。また成長、発達、老化によって生じる身体機能の変化やよく見られる疾患について理解することで適切な対応ができることををはかる。授業は講義に加えて、ドリルや小テストを織り交ぜながら、理解を促進し定着をはかる。</p>	
	社会心理学概論	○	<p>社会心理学とは、個人と社会、他の人々とのさまざまなかかわりの中で生じる認知、意識、態度、行動について研究する心理学領域である。本授業では、多岐にわたる社会心理学の研究テーマの中から代表的なものについて理論や研究例を交えながら紹介していく。これらの理論や研究知見を学生生活や社会生活の中で生かしてみることで、日常生活の中で興味・関心を持った社会現象について社会心理学的な視点で捉えていくことで、世の中のさまざまな現象を客観的に見抜き考えていく力を養う。</p>	主要授業科目
	臨床心理学概論	○	<p>本授業の狙いは、個人や集団に生じるさまざまな心の問題を扱い、それらの改善や予防を目指す臨床心理学に関する基礎的な知識を得ることである。そのために授業内容として臨床心理学の成り立ちと代表的な理論と共、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働といった主要5分野における心理臨床実践を取り上げる。本授業を通じて、世の中の現象を臨床心理学的に捉えるための基礎的な思考力や判断力を身に着けるとともに、将来、心理専門職を目指す受講生が資格取得に必要な基礎知識を身に着けることが目標となる。授業は講師による講義に加え、主要5分野の実践に関する動画資料や臨床心理士・公認心理師のゲストスピーカーによる講義も行う。</p>	主要授業科目
	心理学的支援法		<p>本授業の狙いは、人が人の心を支援する際のもっとも基本となる考え方とその方法について理解することにある。具体的には心理学的支援に関する理論と方法を学び、心理に関する相談、助言、指導等に応用するための基本的事項について習得することを目標とする。そのために、授業では講師が実践している心理学的支援の実例について、時に動画資料の視聴も交えながら紹介して、できるだけ実践的な理解を深めていく。</p>	
	パーソナリティ (感情・人格心理学)		<p>本授業の狙いは、感情およびパーソナリティ (人格) の基礎的な研究方法を習得し、科学的実証研究の知見を古典から最先端まで幅広く理解し、人間の多様性を理解するひとつの視座を養うことにある。そのために、感情に関する理論及び感情喚起、感情が行動に及ぼす影響、人格の概念及び形成過程、人格の類型・特性について概説する。授業は講師による講義に加え、適宜、感情や人格に関連する課題について小グループでのディスカッションを通し、理解を深めていく。</p>	
	学習心理学 (学習・言語心理学)		<p>本授業の狙いは、①人の行動が変化する過程、②言語の習得における機序について、学習心理学、言語心理学の基礎的な捉え方、考え方から解説し、体系的かつ理論的に理解することを目的とする。具体的には、学習心理学・言語心理学について、①その具体的な内容を理解する。②関連する様々な概念及びその過程を説明する代表的理論の基礎を理解する。③幼児、児童及び生徒の自身の発達を踏まえ、言語の習得について理解することを到達目標とする。また、本授業は、公認心理師法第7条第1号及び第2号に規定する公認心理師となるために必要な科目である。</p>	
	認知心理学 (知覚・認知心理学)		<p>本授業の狙いは、①人の感覚・知覚等の機序及びその障害、②人の認知・思考等の機序及びその障害について理解することを目的とする。具体的には、1. 人の感覚・知覚の基本的特性およびその障害について説明することが出来る。2. 人の認知・思考の基本的特性およびその障害について説明することが出来ることを到達目標とする。また、本授業は、公認心理師法第7条第1号及び第2号に規定する公認心理師となるために必要な科目である。</p>	
	家族心理学 (社会・集団・家族心理学)		<p>本授業の狙いは、心理学的支援法を支える基礎理論の一つとして、社会・集団・家族の心理について明らかにされている主要な知見を理解することである。具体的には、社会心理学、集団心理学、家族心理学に通底する基本的概念と個々の心理学に特有の理論について習得する。そのために、まず対人関係並びに集団における人の意識及び行動についての心の過程を概説し、社会的認知、社会的自己、対人関係・対人行動、コミュニケーション、集団・組織などについて学ぶ。次に、その理解の前提として知っておくべき事柄として、人の態度及び行動について態度の機能と構造、説得による態度と行動の変化について概説する。さらに、家族、集団及び文化が個人に及ぼす影響である家族の機能、家族内の関係、集団・組織の影響、文化の影響について学びを深めていく。</p>	
	発達心理学		<p>本授業では、人間の発達を生涯発達の視点から捉え、胎児期から老年期に至るまでの発達特徴や発達課題に関する知識の習得を目標とする。また、認知機能および感情・社会性の発達や、自己と他者の関係の在り方と心理的発達にも理解を深める。さらに、発達障害についての基礎的な知識および考え方を学ぶ。そして、発達心理学における研究方法の基本についても概説する。具体的には、①生涯発達の視点から胎児期から老年期に至るまでの、人間の心理的な発達特徴や発達課題についての理解を深める②発達障害についての基礎的な知識を習得する③生涯発達心理学的視点に基づく研究方法についての基礎的な知識を習得することを目標とする。講義形式の授業ではあるが、履修者の日常的関心と結びつけながら展開していくために、授業中に課題をだし、ペアワークを行う。</p>	

専門教育科目	基礎科目	心理学専門基礎科目群	関係行政論		本授業では保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の各分野に関連する法律や制度について理解することを目標とする。この科目は公認心理師として必要な法体系について学ぶが、法律や制度は守るべきルールであるとともに私たち自身を守ってくれるものでもあることを理解し、各分野に係る法律、制度、行政システム等について理解できることを目指す。このことにより公的な専門職として必要な知識ということだけでなく、自分を含めた身近な誰かを助ける知識が身につくことになる。授業では、講義に加えてミニレポートやリアクションペーパーを通じて積極的な理解を促進する。	
			産業・組織心理学		産業・労働領域は、公認心理師として働く主要5領域のひとつである。本授業では、職場における問題に対する必要な心理支援や組織における人の行動や心理について理解することを目的とする。人的資源管理、組織行動、安全衛生、消費者行動など、産業・組織心理学についての基本的事項を概説し、職場における問題に対して必要な心理支援について説明でき、組織における人の行動について説明できるようになることがねらいである。授業は講義に加え、各単元に関するディスカッションを行い理解を深めていく。	
			教育心理学 (教育・学校心理学)		本授業では、①教育現場において生じる問題及びその背景(教育の制度・法律、教育・学校分野での活動の倫理、学校における問題の理解と対応)、②教育現場における心理社会的課題及び必要な支援(発達と教育、学習と教育、教授方法、教育分野における心理学的アセスメント、教育における心理学的援助、特別支援教育)について学ぶ。これら教育心理学の基礎的な知識と考え方を学習するとともに、教育現場での心理社会的課題への関心を高め洞察を深め、教育現場における問題及びその背景、支援について説明できることを目指す。	
			福祉心理学		本授業の狙いは、福祉分野において生じる問題やその背景を理解すること、知識を学ぶことを通じて、課題や必要な支援について自ら考える力を身につけることである。福祉分野における心理支援を行うためには、福祉領域において生じる問題やその背景を理解することが重要である。また、福祉分野に関する基本的な知識を学ぶことで、課題の理解や必要な支援につながる。	
			公認心理師の職業		本授業の目的は、公認心理師の資格を有する者の業務とその職業についての基本的な理解をはかるものである。そのために、①公認心理師の役割について解説し、②公認心理師の法的義務や必要な倫理について解説する。次に③心理に関する支援を要する者等の安全を最優先し、常にその者中心の立場に立つことができるよう、学びを深める。さらに④守秘義務および情報共有の重要性を理解し、情報を適切に扱うことができるような視点を養う。最後に⑤保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の各分野における公認心理師の具体的な業務について理解を深める。本授業では、多職種連携の基礎として求められるチームワーク力も養うため、教員からの講義のほか、公認心理師の方にインタビューをし、履修者がクラスメートに解説・説明を行うグループワークによるインタビュー・プレゼンテーションを実施する。また、知識の定着化を図るための小テストも実施する。	
			神経・生理心理学		本授業の狙いは、生物学的観点より心の性質やメカニズムについての理解を図ることである。具体的には、脳神経系の構造及び機能をはじめ、記憶や感情等の生理学的反応の機序、ならびに精神疾患と脳との関係について学ぶことにより、脳の構造や機能についての基礎知識を身につけ、生物学的観点からの心の理解を深めていくことを可能にする。授業は、講師による講義に加え、リアクションペーパーによる意見交換や小テストを取り入れることで、知識の定着を図る。また、適宜実験デモの実施および参加をもとめることで体験を通じての理解を促進する。	
	応用科目	社会心理学系科目群	心理学統計法	○	心理学の研究は、人の心や行動を読み解き、原因を探り、さまざまな問題を解決に導く学問である。そのような研究成果を生み出すためにまず必要なことは、心や行動に現れた事実をより客観的・論理的に捉え、分析し、実証していく知識と技能であり、その手法の一つが統計的仮説検定である。本授業では、心理学の研究でよく用いられる統計解析について、解析ソフトを用いて行う技能を習得し、心理学研究の作法に則った形で結果の記述と解釈が出来るまでを目指す。	主要授業科目 講義 10時間 演習 20時間
			社会的認知の心理学		本授業の狙いは、社会的認知研究の様々な知見を学ぶことを通じて、社会心理学における認知の重要性を理解することができるようになることである。同時に、認知、感情、動機づけの関係の理解、実験・調査研究の読み方について理解してもらおう。そのため、自己、帰属、態度、ステレオタイプ、意識決定、ヒューリスティクスなどの社会的認知研究の知見を概説する。授業は講師による講義を中心とし、適宜、授業で紹介した文献を検索し学びを深めるといった課題に取り組んでもらう。	
			集団心理学		社会心理学とは、個人と社会、他の人々とのさまざまなかかわりの中で生じる認知、意識、態度、行動について研究する心理学領域である。本授業は、社会心理学の中でもマクロの単位、すなわち集団や組織、集合(単なる人の集まり)、社会に注目する。その中で生じる様々な人間行動や心理について理解し、日常的に経験している集団の動向を、心理学的な視点から解釈し説明できるようになることが本授業のねらいである。授業は講義に加え、各単元に関する小集団でのディスカッションを行い理解を深めていく。	
			消費行動の社会心理学		本授業の狙いは2つある。一つ目は、受講者自身が日頃行っている消費者としての具体的な行動を、消費者行動に関する心理プロセスの特徴や働きから論理的に捉えなおせるようになることである。消費者心理学は経済学・経営学や人類学など様々な社会科学と関係している。そこで、本授業を通して、学際的な領域に対する心理学の貢献について理解できるようになることが二つ目の狙いである。そのため、消費者心理学の古典的理論から近年の動向に関してまで幅広く概説する。授業は講師による講義を中心とし、適宜、授業で紹介した文献を検索し、消費者行動に関する世の中の現象への理解を深めるといった課題に取り組んでもらう。	

専門教育科目	応用科目	臨床心理学系科目群	社会心理学系科目群	環境の社会心理学	本授業では、環境心理学に関する基本的な知識を身につけることで、日常生活の中にある物理的な環境が人間の行動や心理に及ぼす影響について説明できるようになることを目的とする。具体的には都市生活、遺伝と環境の関係、美的環境、労働環境、情報環境、犯罪、地域再生などの諸問題を心理学の観点からとらえ直し、科学的データとその解釈に基づいて問題解決をはかる。授業は講義に加え、各単元に関するディスカッションを行い理解を深めていく。	
			教育相談	本授業では、学校における教育相談について、スクールカウンセラーの立場から学ぶことを狙いとする。学校臨床の基礎知識を学ぶとともに、事例を通じて体験的に対応を学ぶことを通じて教育相談におけるスクールカウンセラーの立ち位置、業務内容、視点、マインドなどの「基本」を理解してもらう。このようにしてスクールカウンセラーの役割を理解し、学校現場で実際に考え対応できる力を身につけることを目的とする。授業には適宜体験的なミニワークを取り入れて、実践的な力が身につくようにする。		
			精神分析学	本授業の狙いは、代表的な人間理解の理論である精神分析学における主要な基礎理論を講義することにより、受講生が精神分析的観点からこころの仕組みや精神病理について理解し、自己と他者を理解して、自分を整える力を養成することである。そのために授業では、経済論、構造論、発達論、防衛論、自己愛論、対象関係論モデルなどの理論をフロイトの5大症例など歴史的な代表的事例などとともに取り上げる。本授業を通じて、世の中の現象を精神分析学的観点から見抜き、精神分析理論に立脚して考えるための実践的な思考力や判断力を身につけるとともに、将来、心理専門職を目指す受講生が資格取得に必要な基礎知識を身につけることが目標となる。授業は講師による講義と共に理解度を評価するために毎回小テストも実施する。		
			精神疾患とその治療	本授業の狙いは、精神医学の基本的なアプローチ、主な精神疾患の概略を理解し、説明できるようになることである。公認心理師、臨床心理士を目指す者はもとより、将来心理業務に携わる者にとって、精神疾患について学ぶことは不可欠なことである。そのため本授業では、精神医学概論、精神障害の理解、精神疾患の症状と診断、代表的な精神疾患について学び、説明できる力を身につける。授業は講義の中にミニレポートやリアクションペーパーを取り入れて、理解と定着の促進をはかる。		
			心理的アセスメント	本授業では、心理的アセスメントの基礎を理解し、心理検査を用いる上での必要な知識を身につけることを目標とする。心理アセスメントの目的、倫理的配慮、代表的な心理検査の特徴や施行上の注意点について学ぶことで、心の専門家としての基本姿勢を培っていく。授業は、講師による講義に加え、心理検査の実施に関する演習により構成されている。いくつかの心理検査を用いての実験体験を通じて、心理的アセスメントの実際や留意点についての理解を深める。そのほか、少人数のグループワークの実施およびディスカッション、そしてグループごとに発表を行うことで、心理的アセスメントについての実践的な理解を深めていく。	講義 10時間 演習 20時間	
			健康・医療心理学	本授業の狙いは、医療分野及び健康分野における心理学の理論と役割について学習し、実践的な専門家を育成することである。そして、健康及び医療に関わる心理学の基本的な理論について理解し、事例や課題の検討を通して、実践的な視点や態度を獲得することを目標とする。具体的には、人々の健康の維持増進に向けた心理学的な理論を理解し、説明できるようになることや、人々の健康に対する具体的なアプローチの方法を理解し、説明できるようになること、そして、心理学の科学的な視点に基づいてアプローチ方法を検討できるようになることである。そのために、人々の健康に関わる心理学の基本的な理論について説明し、医療・福祉・産業等の領域における事例や課題について解説する。		
			障害者・障害児心理学	本講義の狙いは、障害者・児をめぐる状況、心理社会的課題、必要な支援について理解することであり、さらに、講義を通して、障害を自分事としてとらえ、社会の中で自分に何ができるか考えることである。具体的には、身体障害、知的障害、精神障害（発達障害）について概説できるようになること、障害者・児の心理社会的課題、必要な支援について説明できるようになること、そして多様な人を理解する視点から、受講者自身の多様性の受け止め方について省察できるようになることである。そのために、様々な障害の特徴、および障害を抱える子どもおよび大人の心理全般について解説する。		
			司法・犯罪心理学	司法・犯罪領域は、公認心理師として働く主要5分野のひとつである。本授業では、犯罪・非行、犯罪被害及び家事事件についての基本的知識を身につけ、司法・犯罪分野における心理学的アセスメントや心理学的援助について理解することを目的とする。具体的には、暴力犯罪や性犯罪、子どもへの虐待、プロファイリング理論、犯罪被害者の心理、加害者への矯正と支援について概説し、必要な心理に関する支援について説明できることを目指す。授業は講義に加え、各単元に関するディスカッションを行い理解を深めていく。		
	実践科目	社会心理学系科目群	社会心理学実験研究法（心理学実験）	○	実証科学のひとつである心理学には、実験法、調査法、面接法、観察法などさまざまな研究方法がある。本授業では、実験法を用いて研究計画を立てデータを収集し分析することを通して、論理的思考法やデータの分析スキル、研究レポートの執筆スキルを身につけることを目的とする。具体的な到達目標は1) 実験を行い、科学的研究論文にまとめること、2) 研究計画に基づいて実験を行い、研究成果を科学的研究論文にまとめることである。講義と演習により授業を行い、グループでディスカッションを行うことで理解を深めていく。	主要授業科目 講義 20時間 演習 40時間
			社会心理学調査研究法	○	実証科学としての心理学では、面接法、調査法、実験法によるデータの収集を行う。本授業では、心理尺度を使用した調査研究を実践的に習得する。一つの研究テーマを定め、調査の計画から実施、データの分析や解析、レポート作成まで、研究の流れに沿って実践的に進め、各段階で必要な知識の理解と技能修得の確認を行うことによって、調査の基本的事項を習得し、適切な調査設計と実施が出来るようになること、得られたデータを入力・編集・分析し、結果をまとめることが出来るようになることを目指す。	主要授業科目 講義 20時間 演習 40時間

専門教育科目	実践科目	臨床心理学系科目群	カウンセリングセミナー	本授業の狙いは3つある。1つ目は臨床心理学的なカウンセリングについて理解し説明できること。2つ目はカウンセラーとしての基本的な態度を身につけること。最後に自分の心理的な特性を理解しカウンセリングが実施できる土台を作ることである。これらの狙いを通じてカウンセリングの基本的な態度、理論、技法を身につけることを目標とする。カウンセリングは様々な分野で使用される言葉であるが、本授業では、臨床心理学的な支援としてのカウンセリングについて理解し、説明できるようになることを目指す。また、カウンセリングは知識を得ただけで学んだとは言えず、心身で体験して理解し、実践できることが重要であるので、ロールプレイやグループワークも実施していく。	
			心理検査法セミナー	本セミナーでは、様々な心理検査を実際に施行し、参加者自らが受検体験を重ねることによって、心理検査がどのようなことを知るために利用できるのかについて体験的に理解することを目標とする。具体的には、(1)検査者として、さまざまな心理検査を実際に施行し解釈を試みる(2)被検査者として心理検査を体験をする(3)一連の受検体験を通じて自分自身についての理解を深める。(4)検査体験をレポートにまとめる(5)検査について得られた理解をグループで発表しディスカッションを行う。以上5点を通じて、心理検査実施法を身に付け、心理検査から得られた情報を統合し、心の特徴をとらえることやパーソナリティの理解にどのように役立っているのかについて、実践的な理解を深める。	
			心理演習	公認心理師として必要な知識及び技能の基本的な水準の修得を目的とし、次に掲げる事項について、具体的な場面を想定した役割演技(ロールプレイ)を行い、事例検討で取り上げる。(ア)心理に関する支援を要する者等に関する以下の知識及び技能の修得 1)コミュニケーション、2)心理検査、3)心理面接、4)地域支援等(イ)心理に関する支援を要する者の現実生活を視野に入れたチームアプローチ(ウ)多職種連携及び地域連携(オ)公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解 授業は上に掲げた授業の目的を達成するために、公認心理師として必要な知識の講義と共に、心理面接や心理検査の具体的な場面を想定したロールプレイを行い、その結果を事例として検討する演習を行う。 (オムニバス方式/全15回) (9 三好真・1 福島哲夫/5回) (共同) 心理演習の導入とロールプレイの注意事項 成人を対象とした個人面接①～③ 成人を対象とした個人面接の事例検討会 (8 春日文・4 古田雅明/5回) (共同) 子どもを対象とした遊戯療法①～③ 子どもを対象とした遊戯療法の事例検討会 映像で学ぶ心理支援 熟練者の面接場面から① (4 古田雅明・2 香月菜々子/5回) (共同) 心理検査①～③ 心理検査の事例検討会 映像で学ぶ心理支援 熟練者の面接場面から②	オムニバス方式・共同
			心理実習	本授業は公認心理師受験資格取得に必須の科目であり、その目的は公認心理師法第2条における公認心理師が業として行う行為について、適切に実践できる能力を養成するための基礎作りである。そのために「保健医療」「福祉」「教育」「司法・犯罪」「産業・労働」の5つの分野の施設において、事前学習ならびに見学等による実習を行いながら、当該施設の実習指導者又は本学教員による指導を受ける。なお、実習時間は80時間以上とする。見学等による実習により以下の3点を学ぶ。(ア)心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ(イ)多職種連携及び地域連携(ウ)公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解 これら3点について説明できるようになることが、本科目の到達目標となる。なお注意事項としては、本授業はGPA等、先修条件を満たさないと履修登録ができないことがあげられる。	共同
			質的研究法	本授業の狙いは、代表的な質的研究法のKJ法、KH-coderによるテキストマイニングを講義と演習から理論的、実践的に学ぶ。そのために次の2点を到達目標としている。1. 質的研究法の理論的背景、分析の手続き、心理学研究への応用を説明できるようになること。2. 適切で効果的なプレゼンテーションができるようになること。このことから、日常の現象を質的に捉え、分析し、心理学的な考察を行い、それを報告書(論文)の形にすることを旨とする。	講義 10時間 演習 20時間
			心理学研究法応用	本授業の狙いは、これまでの授業で身に付けた社会心理学・臨床心理学の知識・技能が、社会問題の解決の一助になることを体験的に理解してもらうことである。そのために、心理学における実証的研究法、データを用いた実証的な思考方法、研究における倫理について体系的に解説する。授業では、3～5名の少人数のグループで、グループごとに社会に存在する課題をテーマとした心理学の実証的な研究を行う。関連する先行研究のまとめ、仮説の構築、研究方法の立案、データ収集、分析と考察、発表という一連の作業についてグループメンバーと協働することが求められる。	講義 20時間 演習 40時間
		融合・実践科目群	Academic Literature I	本授業では、心理学(特に臨床心理学)に関する英語の書籍や論文を読む作業を通じて、英語の文献に対する抵抗感をなくし、今後心理学を専門的に学ぶ上で求められる英語力を身に付けることを目的とする。そのため、3つの能力を向上させることを目標とする。1つ目は心理学を英語で学ぶ上で必須となる単語力をつけること、2つ目は丁寧な和訳作業を通じて身につける理解力、3つ目は英語論文を素早く読み骨子を把握する速読力である。事前課題として指定された心理学の英語教科書の各箇所(数ページ)を読み込み和訳をし、授業では、各回ランダムに指名して段落ごとに読み進めていく。また、知識の定着化を図るため、単語テストを実施する。	

専門教育科目	実践科目	融合・実践科目群	Academic Literature II		本セミナーの目的は、心理学（特に臨床心理学）に関する英語の研究論文を読み、心理学を学ぶ上で求められる英語力と論理的思考力を養う事を目的とする。本授業では、質的・量的研究を扱った英語の論文の読解・輪読を通じて、①心理学に関する英語の文献を読み、日本語としてわかりやすい形に訳したり、要約したりする能力（英文法、文、段落、論文の構造といった基礎的な知識と読解スキル）、②心理学の文献を読みこなす上で必要な基礎的な知識（一般英単語や心理学用語の知識）、③心理学の研究論文を読解する上で必要な学習方法といった英語力を身に付ける取り組みをする。また、研究論文の『英語』を和訳するだけでなく、研究論文の構造と異文化・多文化的理解など論理的思考力を用いて内容を理解していくために、少人数のグループに分かれ、割り振られた箇所の内容の批評・発表・ディスカッションを行う。	
			キャリア心理学セミナー	○	本セミナーでは、受講生個々人が、生涯発達といったキャリア心理学の観点からこれまでの大学で学習したことの意味を確認し、かつ大学生活後半の学習への動機を明確にすることで、一歩前に入る自信と力を引き出せるようになる事がねらいである。具体的な授業内容としては、①自分の成長を確認するため、これまでの大学での学習を振り返る取り組みをし、②先輩（社会人女性）の生き方から学び、③自分自身のキャリアを考えるグループワークを通じて、専門知識・知識を目に見える形にする力、これまでを振り返る力、プレゼンテーション力、社会人マナー、マネージメント力を身につける。そして、これらの取り組みから、自分が身に付けてきたことやできなかったこと、さらに他に挑戦して身につけたいと思うことなどを明確にしなが、進路選択や大学生活後半および社会人生活を見据えた学習への取り組みを個々に合った形で計画することができる事を旨とする。	主要授業科目
			心理学セミナーⅠ	○	本セミナーの目的は、受講生各自が心理学的な研究のプロセスを学び、最終的に卒業論文として結実させるための基礎的な知識と技能を育成することである。そのために、受講生が自身の興味・関心に沿った心理学的テーマを探ることから始め、次にそのテーマを研究することの意義を客観的に、科学的に明確にできるようになることが目標となる。 そのための基礎として、セミナーⅠではネットリテラシー、文献検索スキル、心理学論文の読み方の基礎、発表資料の作成法、プレゼンテーション、ディスカッションの基礎的スキルを取り上げる。 セミナーは教員による解説に加え、受講生がグループワーク、ディスカッションを通じて、自己の考えを適切に他者に伝えたり、他者の意見を理解し共同できる力を身に付けることが目標となる。	主要授業科目
			心理学セミナーⅡ	○	本セミナーの目的は、受講生各自が心理学研究のプロセスを進め、最終的に卒業論文として結実させるための基礎的な知識と技能を育成することである。そのために、受講生が自身の興味・関心に沿った心理学的テーマに関する学術書や学術論文を読み、卒業論文研究の構想を心理学的観点から客観的に、科学的に明確にできるようになることが目標となる。そのための基礎として、本セミナーでは、心理学論文を抄読、抄読した論文の要約法、卒業論文構想に関するプレゼンテーションとディスカッション、代表的な量的研究法、質的研究法の基礎知識を取り上げる。 セミナーⅡは、教員による解説に加え、受講生が毎回のプレゼンテーションとディスカッションを通じて他者との建設的対話を体験し、自分が関心を持った現象を心理学的に捉える力と、論理的に思考し、PowerPointなどを活用して他者に的確に伝える力を身に付けることが目標となる。	主要授業科目
			心理学セミナーⅢ	○	本セミナーの目的は、受講生各自が心理学研究を具体的に進めるための実践力を育成することである。 そのために、本セミナーでは、卒業論文研究の研究計画を立てること、適切な仮題目を付けること、先行研究を読んで理解しまとめること、データ収集の下準備をすることなどを個人ワークやグループワークにより取り扱う機会を多く設ける。その集大成として卒業論文中間発表会を行う。 セミナーⅢも教員による解説に加え、受講生が毎回のプレゼンテーションと、教員とのディスカッションや受講生同士でのディスカッション、さらにはグループワークを通じて、他者との建設的対話を体験し、集団の中で自らの能力を発揮したり、的確な役割を果たしていける人間関係を身に付けることが目標となる。	主要授業科目
			心理学セミナーⅣ	○	本セミナーの目的は、卒業論文の研究計画を実行すること、具体的には先行研究をまとめること、データを適切に収集すること、収集したデータをICTを活用して分析すること、さらに結果を社会心理学と臨床心理学の知見を組み合わせ考察し、論文化する実践力を育成することである。 そのために、卒業論文研究に関する進捗報告、データの収集方法と分析方法の発表、分析結果と考察に関する発表をし、自己の考えを適切に他者に伝えたり、他者の意見を理解する機会を多く設ける。 セミナーⅣも講師による講義に加え、受講生が毎回のプレゼンテーションと、教員とのディスカッションや受講生同士でのディスカッション、さらにはグループワークを通じて、他者との建設的対話を体験し、受講生同士で協働して学びつつ、研究上の課題を実践的に解決する力を身に付けることが目標となる。	主要授業科目
			対人コミュニケーション演習		本授業の狙いは、対人コミュニケーションに関する心理学の理論や現象を理解したうえで、対人コミュニケーションにかかわる様々な諸問題に対して解決するための知識や技能を獲得してもらうことにある。そのために、対人関係における理論や対人感情、言語的・非言語的コミュニケーション、対人葛藤、リーダーシップ、ストレスなど対人コミュニケーションの関連する様々なトピックについて、その理論や背景、先行研究について概説する。授業では、講義に加えて、それぞれが自身の経験と照らし合わせながら授業のテーマについてディスカッションやグループワークをすることを通して理解を深めてもらう。	講義 10時間 演習 20時間

専門教育科目	融合・実践科目群	安心・安全の心理学		本授業では、地震や豪雨、火災などの自然災害、日常生活における災難に関するさまざまな社会問題や現象を取り上げ、心理学の観点からの問題解決を目指す。具体的には日常生活の中で起こる安心・安全上の問題について、認知・性格・帰属・動機づけ・感情・対人関係・集団など、心理学研究での知見を適用して説明できること、得られた知識を身近な生活場面などに活かせることが本授業の到達目標である。授業では各単元に関する社会問題や現象について講義を行い、問題解決のためのワークなどを導入してグループごとにディスカッションを行うことにより、各単元に関する知識の理解が深まるだけでなく実践するための力を身につけることが見込まれる。	講義 10時間 演習 20時間
		ウェルネスの心理学		本授業は、社会心理学と臨床心理学の知見をベースに、自身の心と身体を整えるための知識と技能を習得するための融合・実践科目である。具体的には理論的な講義を受けたのち、マインドフルネス、動物介在介入、フィットセラピー（植物療法）などの実践的なワークとその後の個人内省、グループシェア、自主トレーニングを繰り返すことで、自己理解と自身の安定的な心の健康を維持する方法を学び、社会や集団の中でしなやかに自らの特性や能力を発揮し、的確な役割を果たしていける人間関係力の向上を目指す。	講義 10時間 演習 20時間
		グループワークⅠ		人は、サークルや部活動、バイトや仕事場、大学の講義などをはじめ、様々な形でグループや集団といったものを形成し、集まることのメリットをうまく活用して、一人では成し遂げられないような事を可能としている。本授業では、より役割・手順・目標が明確な構成的な形態のワークを通して、集団に見られる現象について体験的に理解を深めることで、どのように集団を作り、維持するのかについて学ぶ。また、社会や集団の状況に応じて、自らの特性や能力を発揮するために、より円滑なグループワークを進めていくのに役立つ関わり方の基本（傾聴スキル、アサーション・スキル・リーダーシップ機能）を体験的に学習する。自分自身を含めたグループのメンバーやグループが成長していける関係を築くには、お互いの学びとなる対話（コミュニケーション）に繋がる適切な他者理解と自己主張が求められる。この演習では、他者理解と自己理解を深めるワークも行っていく。	
		グループワークⅡ		人は、サークルや部活動、バイトや仕事場、大学の講義などをはじめ、様々な形でグループや集団を形成するが、その中には、既に用意されている「テーマ」や「目標」「方法・段取り」が無い中で、メンバーと協力しながら、自ら主体的に作り上げていく事が求められるもの（より非構成的なグループ）も含まれる。本授業では、特に、テーマや手順などが予め定められていないより非構成的な形態のワークを通して、集団に見られる現象について体験的に理解を深めることで、自らを用いて主体的・民主的なグループの形成・維持していく事を学ぶ。また、ワークを通じて、集団での自身の特徴や集団に求めているニーズなどを把握する自己理解力、自身のニーズを適切に表す自己表現力、および問題解決能力のスキルを高め、より円滑なグループワークを進めていくための関わり方の基本（傾聴スキル、アサーション・スキル・リーダーシップ機能）を体験的に学習する。	
		卒業論文	○	卒業論文の目的は、社会や自己の内外に存在する諸問題に対し、それまでに習得した社会心理学と臨床心理学の知識や技能を組み合わせる主体的に取り組む実践力を育成することである。そのために、卒業論文要項に沿った形式の卒業論文を指定の期日までに提出させ、心理学会に準じた形式の卒業論文発表会を開催し、ルーブリックによる評価を行う。卒業論文は、原則として個人研究とする。研究プロセス全体を通じて、海外の文献へのアクセスと情報読解力や発信力、複雑な社会環境や国内外の多様な文化の中で自らの特性や能力を発揮し、的確な役割を果たしていける人間関係力、傾聴力と自己表現力、そして自ら積極的に課題を発見し、それを心理学的な視点と研究法によって見通しを立て、チームの中での対話やプレゼンテーションを通じて解決策を模索し、さらに文書等を通じて発信する力などを身につけることが目標となる。	主要授業科目
	英語	Business English		これまでの英語クラスで学んだことを活かし、よりフォーマルな場面で自信を持って英語を使えるようになることを目標とする。特にビジネスの場面や、海外でフィールドワークを実施するような場合に、相手に対して丁寧かつ明確に情報を伝え、交渉し、合意に達するというプロセスを繰り返し練習し、実用的な英語を身につける。また、対面だけではなく文書によるコミュニケーション（Emailやショートメッセージなど）の方法も学び、時間や場所を問わずスムーズに意思疎通を図れる技術を習得する。学期の終盤には組織や商品を紹介するプレゼンテーションを実施し、より高度なプレゼンテーションスキルを磨く。	
		English Communication		これまでの英語クラスで学んだことを活かし、よりスムーズで深みのある会話を続けられる能力を身につけることを目的とする。毎回のレッスンを通じて、自分の意見を論理的かつ説得力を持って表明したり、相手の意見に対し婉曲に反対意見を述べたりできるようにする。また、予測される未来についての会話などを通して、想像力を養いながら、より自然な英語表現の習得も目指す。1、2年次開講の英語クラス同様、学期の終盤にはプレゼンテーションを導入し、今まで養ってきた、人前で自分の意見を効果的に表明するスキルにさらに磨きをかける。このコースでの学習を通し、よりネイティブライクな英語話者になることを目指す。	
	留学認定科目	Malaysian Cultural Camp I		本授業はマレーシアにおける海外研修を中心とした、多文化共生社会について学ぶ体験型のプログラムの一環である。現地での研修の前後に、多摩キャンパスにおいてワークショップをおこなう。研修前には、マレーシア社会に関する基礎的な講義や現地でのプレゼンテーションの準備となるグループワークなど、研修後には、研修での成果をまとめ、文化祭においてグループ・プレゼンテーションをおこなうこととなる。このプログラムは、本学部が3つのポリシーで掲げている、人々と共生するための幅広い知識と教養、多様性を受け入れる価値観とコミュニケーション能力を身につけることにつながり、TEP (Tama English Program) で養った英語力に対しても、より発展的な学習効果が期待される。	講義 6時間 演習 24時間
	実践科目				

専門教育科目	実践科目	留学認定科目	Malaysian Cultural Camp II	本授業はマレーシアにおける約3週間にわたる海外研修を中心とした、多文化共生社会について学ぶ体験型のプログラムである。夏季にSunway Universityにおいての各学部等の協力によって構成された、幅広い分野に及ぶ内容を講義・演習にて学ぶが、その中には現地学生との交流やキャンパス外でのフィールドワークも含まれる。このプログラムは本学部が3つのポリシーで掲げている、人々と共生するための幅広い知識と教養、多様性を受け入れる価値観とコミュニケーション能力を身につけることにつながる。また、これは単なる語学研修ではないが、TEP(Tama English Program)で養った英語力に対しても、より発展的な学習効果が期待される。	講義 28時間 演習 92時間
			異文化理解 I	留学認定科目として設置されている。本学が行っている留学・研修プログラム等に参加し、一定以上の成績を修めた場合にこの科目の単位が修得されることになる。プログラムの参加先における授業形態・授業内容はさまざまであるが、普段学んでいる環境とは異なる社会・文化のあり方を体験すること、またプログラムの内容を学ぶことを通して、社会・文化・世界における多様な生のあり方について理解し、知識を深めることが期待される。	
			異文化理解 II	留学認定科目として設置されている。本学が行っている留学・研修プログラム等に参加し、一定以上の成績を修めた場合にこの科目の単位が修得されることになる。プログラムの参加先における授業形態・授業内容はさまざまであるが、普段学んでいる環境とは異なる社会・文化のあり方を体験すること、またプログラムの内容を学ぶことを通して、社会・文化・世界における多様な生のあり方について理解し、知識を深めることが期待される。	
全学共通科目	基礎科目	女性とキャンパスライフ	大妻教養講座	新入生が、この大学で何をどう学ぶかについてを考える入門講座である。大人(社会人)として、自分の行為に自分で責任を持つことは、自分の心身の状態を自分でコントロールする必要性を知ることであり、法律的、経済的な自分の権利義務を知る必要性を知ることである。また、卒業後、職業人として立脚するために、大学での学びの中でどういう職業に進むかなどを含めて、人生についての見通しを持ってよう、4年間の学びが人生にどう影響していくかを理解し、本学での学びをどう進めるかを考える。なお、この講座では、大妻コタカ先生が何を考えておられたのかも学ぶ。	
			大妻教養講座 II 卒業生から学ぶ	大妻学院の使命「学び働き続ける自立自存の女性の育成」の具体化を目標とした科目である。1年生の時に受講した「大妻教養講座」における「大妻での学びと人生(卒業生の回)」での学びを踏まえ、本科目では卒業生による講演を中心とした授業を行う。卒業生から、学生時代の過ごし方を含めたこれまでのキャリア、現在の仕事内容などを紹介いただき、職場での体験・経験などを通じて得たこと、将来の目標、学生へのメッセージなどをお話いただく。	
			キャンパスライフとメンタルヘルス	主として思春期・青年期の一般的な心理社会的特徴を概観しながら、大学生がキャンパスライフの中で遭遇する可能性のある危機、あるいはメンタルヘルス上の問題について、その予防や対処方法も含めて学ぶことを目的とする。キャンパスライフの中で、大学生が体験する成長のプロセスは、時に大きな心の揺れを伴いやすく、悩みや危機を経験することもごく自然なことである。本講義では、ストレス、五月病、摂食障害、うつ病、自傷行為、アパシーといった問題や、消費トラブル、宗教カルト、ハラスメント等の具体的なかつ身近な話題を取り上げながら、学生たちがより健康的で有意義なキャンパスライフを送れるような講義内容とする。	
			女性と健康	我が国の女性のライフサイクルは、ここ数十年間で大きな変化を遂げている。この講義では、女性の健康に関する問題点を正しく理解し、対策を講じる事は、これからの人生を健康で豊かなものにするために必要不可欠である。講義は生物学的な「女性」の定義から始まり、「月経」、「妊娠」、「(性)感染症」、「食生活」、「喫煙」、「飲酒」、「薬物」、「精神疾患」等をキーワードに、医師、看護師等の専門家により分かり易く行う。	
			ジェンダーと社会生活	ジェンダーを前提に成り立つ役割分業や格差、種々の社会的制度とジェンダーとの関わりについて、具体的な事象を通して学ぶ。妊娠、出産といった身体をめぐる問題、DV(ドメスティック・バイオレンス)やセクシュアル・ハラスメントなどの性と暴力の構造、労働をめぐる不平等な環境、結婚制度や家族制度の現状、メディアに含まれる女性差別的なメッセージ、セクシュアリティと社会システムのかかわり等々、各授業では日常生活と深く結びついたテーマが設けられる。社会をジェンダーの観点から分析することを通して、自らの生活環境についてとらえなおし、自分の視点をもって生きていくために必要な知識を得ることが目的となる。	
			女性史	「女性史」とは、女性を主体とした歴史、またはジェンダー(文化的に構築された性差)の視点からみた歴史のことを指しているが、女性史を学び、歴史のなかに生きた女性たちへの想像力を手に入れることで、いま女性として生きることを意味を考えていく。また、大妻女子大学の学祖・大妻コタカ先生の教育活動も含め、女子の高等教育機関をめぐる歴史を知ることが、現在の学びの環境である。過去の歴史を理解し、歴史を生きた女性たちの足跡を知ること、自らの社会的地位や生活環境を積極的に解釈し、歴史的知識を自分の人生に活用することを目指す。	
			リーダーシップ開発	本科目では、産業界や地域社会で活躍する複数の女性リーダーから、それぞれのリーダーシップ論やそれを確立した背景や経験、さらに自身の今後の展望に関する講演を聞いたうえで、「男女共同参画社会において必要とされるリーダーシップ」をテーマに講師と学生を交えた対話を行う。これを複数回繰り返すことで、自己理解を深めるとともに、女性リーダーに関する様々なロールモデルを通じて、学生自身がこれまで持っていたリーダーシップに対するイメージをブラッシュアップし、自らのリーダーシップ論を再構築することが目的である。	

全学共通科目 基礎科目 リテラシー	日本語 A (文章表現)	<p>文章表現力向上を目指す場合、読み手への配慮を忘れずに、しかも、より正確に伝えようとする努力をいとわない、という二つのことが重要になる。したがって、文章表現力向上には、(1)読み手に対する思いやりの気持ちを養うこと、(2)事実関係、意図、感情が正確に伝わるような工夫として表現効果を磨こうとする努力、(3)形式上の決まりを当然のこととして守ろうとする意識を養うこと、等が意識されるべきだろう。</p> <p>本科目はあくまで本学での学生生活の基本となる文章表現力の育成を目指すのが、社会においても通用する基礎生活力として個人の日本語運用能力を高めていく基盤を作ることも、授業におけるねらいとする。</p>
	日本語 B (口頭表現)	<p>話し言葉を中心に、日本語を目的や場面に応じて適切に表現し、運用する能力の向上を目指す。「聞き手」を意識して、伝えるべき内容や目的・場面を限定した自己あるいは第三者の紹介や説明を行うなど、話し言葉の実践的訓練を行う。また、筋道を立てて話すために必要な論理的思考力と話し言葉での論理的な表現力を身につけることも重要であることから、説明資料を用いたプレゼンテーションなども行う。さらに、口頭表現においては、書き言葉とは異なり、(3)適切に発声・発音する力も必要となるため、その実践的な訓練を含める。</p>
	日本語 C (読解)	<p>言語としての日本語の特質に対する理解を深めるとともに、情報を的確に受け取り、分析的・批判的に捉え返すことができるような、読解リテラシーの向上を目指す。方策としては、(1)中等教育の(国語科)を補うような、語彙・語法・慣用表現など、日本語に関する知識を確認すること(2)さまざまなジャンルの文章に触れて、自らの問題意識を深め、知的な好奇心を涵養すること(3)一定以上の長さを持った文章の内容を把握し、組み立てや構成を理解すること(4)テキストに対する批判的・能動的なかわり可能にするための分析的な読解の訓練を行っていく。</p>
	コンピュータ基礎 A	<p>パソコンを使って文書を作成し、計算し、発表するための知識・技能の基礎を、演習を通して身につける。また、インターネットを使った情報収集などで注意すべきセキュリティと情報モラルを理解し、安全にコンピュータを利用するために知識を身につける。</p> <p>Wordを使った基本的な文書の作成、Excelを使った表計算によるデータ処理の基礎、PowerPointを使ったプレゼンテーションの方法を演習により身につける。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コンピュータの仕組みと基本操作 (2回) Windowsとファイル操作、セキュリティと情報モラル 2. Wordによる文書の入力 (5回) 文字の入力、作成、印刷、表、表現力をアップする機能 3. Excelの基礎 (5回) 4. PowerPointの基礎 (3回)
	コンピュータ基礎 B	<p>パソコンの基本操作 (文字入力、保存、印刷など) ができる学生を対象として、表計算ソフト (Excel) を使った効果的、効率的なデータ処理の方法を演習する。ICT (Information and Communication Technology) が進展し、情報が低コストで、時間差なく収集することができるようになってきている。また、処理しきれない量の情報が氾濫している時代でもある。このような中、本当に必要な情報を取捨選択し、意思決定に生かしていくことが求められている。</p> <p>本科目では、多くのデータ (社会における実データを含む) から、われわれが必要とする情報を抽出すること、また、その抽出結果を読み解き、それら情報の関係性分析、考察し表現することを目的とする。その一連の中でExcel の基本からグラフ、データベース、応用的関数の使い方を演習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Excel の基本操作 (3 回) 表の作成、修飾、印刷、便利な機能 2. グラフの作成 (3 回) グラフの基礎、さまざまなグラフ、グラフの編集 (適切なグラフ表現)、グラフの読み解き方 3. データベース (4 回) データベースの基礎、並べ替えと抽出、自動集計、クロス集計、ピボットテーブル、データの読み解き方 4. 関数の応用 (5 回) 統計関数、論理関数 (IF)、表検索 (VLOOKUP)、財務関数
	コンピュータ応用	<p>パソコンの基本操作、Word、Excelの基本操作を習得している学生を対象とした科目である。社会や企業で必要となる具体的な文書作成、企画提案、プレゼンテーション、データ分析、効果的なデザインなどの実例を取り上げ、インターネットによる情報検索、文書作成、データ分析、プレゼンテーションおよび情報発信の方法を総合的に演習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Wordの活用 (3回) ビジネス文書とは、表の活用 2. Excelの活用 (4回) 実用的関数 (VLOOK、IF関数を含む)、図解とグラフ、データベースの活用、ピボットテーブルの活用 3. WordとExcelの活用 (2回) 連携の方法、表とグラフの活用 4. PowerPointの活用 (3回) プレゼンテーションとは、図解の基本、見やすいスライドの作成 5. 総合演習 (3回) 報告書の作成、案内書の作成、レポートの作成
データサイエンス・AI概論	<p>近年、自らの専門分野に加えて、数理・データサイエンス・AI の素養を持った人材が求められている。一方、数理やデータサイエンス、AI と聞くと難しそうに感じる人もいられる。そのため、これらを活用することの「楽しさ」や「学ぶことの意義」に重きを置く。</p> <p>当科目では主に、「AI やデータサイエンスが社会にもたらす価値」と「デジタル技術が行き渡る社会における課題」をテーマとして、本学の各学部における具体例や最新動向等を織り込みながら、データサイエンスが様々な事象にどう関与しているかという「ストーリー」を理解してもらおう。さらにデータ活用におけるリスクや留意事項についても学ぶ。</p>	

基礎科目	キャリア	キャリアデザインⅠ	キャリアデザインの第1段階として、「職業世界的一端を知る」「自己を知る」「自己を育成する方法を知る」ことを目的とする。職業意識を涵養すると共に、産業界から求められている汎用的能力の育成のきっかけとツールを提供することにより、課内外の学生生活からの学びを促す。 「働くことの意味」「職業への適性と能力」「ライフプラン」「自己分析」「コミュニケーション能力」「チームワーク」「セルフコントロール」を中心に学ぶ。		
		キャリアデザインⅡ	キャリアデザインの第2段階として、「実社会・実業界を知る」に主眼を置く。一般的な企業の構造や経営についての知識、および広く産業についての知識を受講者に付与し、もって職業選択の一助とする。前半は企業、後半は産業についての講義とする。 「企業とは何か」「マネジメント(モノ・サービス、ヒト・カネ)」「各産業の概要」について学ぶ。		
		キャリアデザインⅢ	キャリアデザインの第3段階として、「内部世界(自己)と外部世界(実社会)を統合する」ことを目的とする。 就職活動時期を目前とした学生に対し、女性を取り巻く雇用環境など現実問題の中での就職意欲を喚起すると同時に、学生生活からの学びと関連づける形での自己理解を促し、事務局主催の、業界研究等、各種就職支援活動の活用へとつなげる。 「日本企業の人事管理制度」「昨今の労働事情」「女性の労働」「ワーク・ライフ・バランスの実践」「コミュニケーション能力」「自己分析(大学生生活の振り返り)」について学ぶ。		
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ	今日、大学卒業者に最も強く求められるものは、「汎用能力」(社会人基礎能力)である。具体的には、コミュニケーション能力、問題解決能力、達成意欲などである。しかし、これらの能力は必ずしも知識獲得によって育成できるものではない。 本授業は、外部組織との提携のもと、与えられた実際的な課題に対し、受講生がチーム単位で責任をもって取り組むという体験の場を設定することにより、かかる能力の重要性についての受講者の認識を高めるとともに、受講者相互の刺激により、受講者の潜在的能力を引き出すものである。		
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅡ	本授業はⅠの発展版とし、履修条件としてキャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ(CDPⅠ)の単位を履修習得した学生とする。具体的な内容は、学生は「プロジェクトリーダー」または「ファシリテーター」という立場でCDPⅠの授業に参加し、CDPⅠの履修生に対してチーム運営をリードすることを、または、チーム運営のファシリテーションを体験する。その後、全プロセスを通してリーダーシップのあり方、チームワークのあり方、ファシリテーションを振り返り、CDPⅠと同様に「汎用能力」をより一層高めることを目的とする。		
	全学共通科目	人間と文化	文学の世界	本授業のひとつの目的は、ことばと物語の力が、想像力を通じていかに人の心を揺さぶり、新しい認識を形づくるかという文学のもつ力について考えることである。このためには、さまざまな切り口が想定できる。特定の作品の鑑賞と解釈を通じて、その特定の社会と文化を映す物語の中に時空を超えた普遍的人間の精神や思想を読む、というものひとつ。また、複数の作品の通時的関連性や、同ジャンルの歴史的発展の過程を辿ると、文学史的俯瞰によってその本質を考えてみることも可能となるだろう。	
			音楽の世界	学生たちに音楽に対する認識を深め、かつそれを楽しむ糸口を与えることを目的としたものである。ここでいう音楽は、西欧古典音楽に限定されたものではない。日本の伝統的音楽や、世界の様々なエスニシティに根差した音楽もそのなかには含まれている。また若者たちは深くポピュラー音楽に親しみ、音楽なしには彼らの生活は成り立たなくなっているといっても過言ではない。また音楽は、今日では様々なセラピーのなかにも取り入れられている。音楽の心理的・医療的作用も講義の主題となりうる。	
			美術の世界	優れた美術作品の観察と分析を通じて、対象を理解するだけにとどまらず、美的体験を豊かにし、鑑賞能力を養うことを目指す。また、美術の地域や時代による特徴をも把握できるようにして、諸作品の個別化と一般化を通じて、人間生活の中での造形表現の基本となる形体や空間を把握し、的確な観察力や構成力を養うことをねらう。さらには美術作品の記号的側面にも注目し、例えばビジュアルデザインの部門では視覚的な伝達効果を主とするデザインの学習を通して、デザインについて理解を深めるとともに、デザインにおける計画と表示の能力を高める。こうした学習と実践を通して、芸術としての美術の意義を理解させる。	
			映像・演劇の世界	現在は、映像技術の進展と劇場型世界への転進のため、誰でもデジタル機器を駆使してイメージの編集ができるようになり、誰もが期待される役を意識してパフォーマンスを演じられるようになった。つまり「見る」アートから「する」アートへの転換が行われようとしている。本授業では、日常性に入り込んできたイメージとパフォーマンスの世界を、歴史的視座の中に置いたり、同時代の他のアートとの往來を絡ませてみたり、具体的な作品をそれぞれの世界の用語で分析してみたりして、これらのアートの本質と人間の本性との係わり合いを深く、また広く論じていきたい。	
			考古学の世界	考古学という学問的な方法について理解を深めることを目的とする。対象地域としては、学生の関心を考慮して、日本周辺をフィールドとした考古学を講義の対象とすることが考えられるが、関係の深い他の地域や、画期的な発見がなされた遺跡、あるいは話題性のある遺跡・遺物などについて世界の他の地域をあつかうことも可能である。またどの時代をあつかうか、あるいはある特定の遺跡・遺物に関して通史的に扱うかなどについては担当者にゆだねられる。したがって先史考古学と歴史考古学を講義の対象にふくむことはいうまでもない。	
ポピュラー・カルチャーの世界	「ポピュラー・カルチャー」論とは、古くは大衆文化論と呼ばれていた。「ポピュラー・カルチャー」は直訳すれば「民衆の文化」となる。古くから受け継がれてきた伝統的な民衆の文化が、都市化とメディアの発達のおかげでどのような変容を遂げているのか。そして、村上春樹の小説の大ヒットが示すように「ハイ・カルチャー」と「ポピュラー・カルチャー」の区別も今日また曖昧なものとなってきている。このように本講義の内包する課題は多岐にわたり、メディアと文化に関心をもつ多様な研究者の参加が期待される。				

全学 共通科目	教養科目	人間と文化	地域と文化	本科目では、地域の文化・社会について、言語、歴史、政治、経済、宗教、文学、芸術などさまざまな側面を、社会学、言語学、地理学といった単一の分野ではなく複数の分野にわたって「学際的研究」から全体的に理解することを到達目標とする。さらに近年の地球のグローバル化を背景に、特定の地域ではなくいくつかの地域のあいだの交流や関連にも注目し、そこから生ずる種々の政治・経済・社会問題と解決方法にも言及する。	
			言語と文化	コミュニケーションを成立させるのは「言語」なのだが、その「言語」は時として（あるいは同時に）よほど頻りにコミュニケーションを阻害し破壊させるものでもある。「ことば」は通じる、しかし同時に「ことば」は通じない。 言語についてのかような二律背反は、言語観の対立にも引き継がれる。ある言語はその言語固有のやり方で世界を分節する結果、その言語固有の世界観が形成されるのだと主張する考え方が一方、異言語であっても普遍的な心的言語・普遍的言語生成構造の上にその差異が生じているのだと説く考え方もある。果たして人は、「言語」という共通した知性によって相互理解の基礎を得たのだろうか。それとも、異なる言語はそれぞれ独自の文化を生み出すと同時に相互理解を阻む壁ともなるのだろうか。 本授業では、空気のように「あたりまえ」で、人間の知的営為の前提と捉えられているもの、それゆえに深くその本質を考えることをしなくて済んできたもの、にもかかわらず、知的営為にとって不可欠あるいは知的営為そのものである「言語」とはなにかについて、さまざまな議論があることを知り、考える機会を与える。	
			日本の歴史と文化	日本の歴史を主な対象とし、客観的に歴史を見る目を涵養し、歴史に対する理解を深める。対象とする時代や事象については、特定の時代を掘り下げて分析することも可能であるし、文化史などから通史的に歴史をあつかうことも可能である。またここで日本という枠組みも固定的なものではなく、周辺地域との関係や世界史のなかで歴史を見直すという視点も必要であろう。日本列島を中心とする地域の過去の歴史や文化を見る目を養うことによって、現代の日本社会をあらためて見直し、問い直す、視点と視野を開く契機としたい。	
			世界の歴史と文化	世界の歴史を対象とし、広い視野で客観的に歴史を見る目を涵養し、歴史に対する理解を深める。併せて代表的な幾つかの民族と宗教について、その行動や思考の規範となっている教理と心性にも触れたい。対象とする地域・時代や事象については、特定の地域、時代を掘り下げて分析することも可能であるし、特定の事象を通史的にあつかうことも可能である。また、文化圏相互の交流という視点から、平時の交易や宗教間戦争の事例を、分析することも有益であろう。世界の歴史と文化、民族と宗教を知ることによって、我々をとりまくグローバルな問題について、関心を深め、考えていく契機と視野を獲得できるようにしていきたい。	
			哲学と思想	哲学や思想は人類が発生以来、如何に生きるべきかを問い続けて、その問いと答えの繰り返しが集積され、体系付けられたものである。従ってその根本は実生活の即した具体的なものであったので、難解なものではない。教室ではまずこの誰もが経験するような身近な問題から出発し、それぞれの問題意識に基づいて思索してゆくことを練習する。また、哲学の長い歴史を参照し、涵養とすることにより我々が得手勝手に思索してゆくよりも、はるかに思考活動を豊かなものにしてくれる。こうした過去の遺産、そしてそれは現在にまで密接につながっているものであるが、それらに関する基本的知識の習得を試みる。	
			日本文化・事情	留学生の受講が優先されるが、履修人数に余裕がある場合には、日本人学生も受講できる科目である。留学生が日本語・日本文化に興味を持った理由の一つに、日本のアニメやマンガ、アイドルグループがある。留学生と共に、こうした日本の現代文化を鑑賞・分析し、それを育んだ日本の文化事情について学ぶ。	
	社会と生活	子どもの世界	子ども文化という時、学生たちが抱くイメージは多様なものであろう。広い意味での「子ども文化」そのものに、児童学、教育学、体育学、社会学、心理学、歴史学、文化人類学等々のさまざまなディシプリンからアプローチすることが本講義の方向性とし、小説、詩、絵画そして音楽等々、さまざまな芸術作品のなかで描かれた子どもの姿を論じることも本講義のもうひとつの方向性である。「子ども」は生命力や創造性の隠喩でもある。学生たちの「内なる子ども」に語りかけ、それを呼び覚ますような瑞々しい講義としたい。		
		人間の成長と心理	本講義では、人間の生涯に渡る“心・身体・社会性”の成長や発達というテーマについて、主に心理学的アプローチから概説していく。生涯発達の諸局面における様々なライフイベントを横軸として、そこでの心や身体の状態、人間関係や社会の様相、直面するであろう課題や問題について共に考え、受講生各自が自分なりの視点を持てるようになることを目指したい。特に受講生の皆さんが当面する青年期・成人期の特徴や課題について、講義を通して共に考えていくことを目指す。		
		日本国憲法	本科目は、わが国の法制度及び法体系の根幹をなす日本国憲法の基本原則と概略を理解することを目的とする。講義の中心は、実定法としての日本国憲法の解釈におかれる。即ち、基本的人権および統治機構に関わる憲法諸規定を、具体的な判例と関連諸法令の分析を通じて、その意味内容を解釈する作業を行う。また、実定憲法の解釈の枠に留まらず、その歴史のないし論理的基礎をなす、英、仏、独、米などの西洋近代社会の構造ないし立憲主義思想の分析、さらには現代の諸外国の実定憲法との比較する。最後に、本科目は現代社会における憲法の最新の問題状況、例えば所謂「新しい人権」（環境権、国際人権など）についても論じる。		

全学共通科目 教養科目 社会と生活 自然と科学	法律と現代社会 政治と現代社会 経済と現代社会 メディアと現代社会 家族と現代社会 福祉と現代社会（ボランティアを含む） SDGsと現代社会	本科目は、現代社会を成立かつ存続せしめている、道徳、倫理、慣習そして法律など、種々の「社会規範」のうち、「法律」に焦点を当てて考察することを目的とする。以下、ここでの法律は法規範の中の、狭義の「法律」ではなく、法規範全体を意味するものとして扱う。 第一に、社会規範の中で法規範の特徴を、特に国家権力との関係において明らかにする。 第二に、代表的な法領域である、民法、刑法、そして行政法などについて、その基本的な特徴と概略を、具体的な判例を通じて考察する。 第三に、法を紛争解決の方法として、動態的、機能的視点から分析する。 第四に、現代社会における具体的な法律問題をいくつか取り上げ、法的主体としての我々市民について聴講者とともに考えたい。	
		現代社会における「政治」のあり方をできるかぎり多面的に考察することを通じて、「政治」に対するセンスを養うとともに、主権者として「政治」に対する判断や行動の指針を獲得することを目的とする。 まず、政治に関する基本概念と、それらを育んだ西洋社会の歴史・思想的理解をたかめ、近代国家およびよこでの政治の特徴を明確にする。次に、現代社会における政治のシステムと機能を実証的分析も扱う。投票行動分析、政治意識分析などを通じた政治過程論、現代政治論などの領域である。さらに、国際政治史、国際関係論なども扱う。最後に、国家単位の政治行動とは異なる、例えばNGOなど新しい政治主体の役割についても考察する。	
		21世紀に入って世界経済は、市場のグローバル化が進展する中、近代国家と国民経済の形成においてさまざまな発展段階にある国々が、競争的関係をさらに強める場となっている。先進国が近代国家の枠組を超える方向を模索している一方、新興国は経済の急速な発展に国家の枠組が追いつかない状況にあり、また途上国は政治経済の近代化が進まないまま伝統社会の仕組みが崩壊しつつある。このような世界経済の状況に、アダム・スミスに確立され、ケインズによる大きな革新を経た、市場と国民経済を分析する経済学の諸理論はいかなる有効性をもつかを検証し、新たなパラダイムの形成を模索してゆく。特に、日本経済が世界経済の中でどのような位置付けにあるかを確認し、高齢社会化など日本経済に特有な問題を明らかにした上で、その解決策をさまざまな角度から考えてゆく。	
		現代社会に生きる私たちは、様々なメディアに囲まれて生活し、各種メディアは人々にとって情報源であるばかりでなく、彼らに娯楽を提供するソースともなっている。そこで、新聞・雑誌・テレビ・ラジオ等のマス・メディアが提供する様々なエンターテインメントについて論じる。またネットや携帯電話を通じて自ら情報を積極的に発信する事は、ネット右翼や学校裏サイトのような負の現象も生み出している。本授業ではこれらのメディアと現代社会にかかわる諸問題について、多様な切り口から考える事を通じ、私たちが世界を認識する方法やあり方を再検討する。	
		家族は、社会における基本的人間結合単位であると言える。本科目は、そのような家族の現代社会における位置と特徴を、社会諸科学（社会学、法学、経済学、教育学など）の方法論と視点から、具体的問題の考察を通じて、明らかにすることを目的とする。現代日本における家族の諸側面および諸問題を分析するためには、歴史的、比較社会的考察が不可欠である。 伝統的な家族のあり方と、近代以降のあり方には大きな相違が横たわり、それを正確に測定することなしに、現在のわが国の家族のあり方を把握することは不可能である。以上の考察を踏まえて、現在社会における家族の諸問題をいくつか取り上げ、具体的に考察したい。	
		私たちが暮らす現代社会を「福祉」の視点から取り上げて、履修者が身近な生活課題として受け止めながら考察し、一人ひとりがよりよく生きていくために役立てることを目的とする。今日の社会福祉制度がこれまで歩んできた歴史的背景とその社会的背景やそれらの制度を支えてきた思想、そして制度の運用を行う福祉現場の実践活動の様子などをDVD等で紹介していく。また、国や地方自治体の法令によって制度化された福祉だけでなく、地域住民の自主的な活動によって創り出される市民ボランティア等の活動状況についても紹介しながら、これらの市民活動のあり方や今後の展望について考察していきたい。	
		当科目ではまずSDGsの全体像と17の目標の相互関係を理解し、本学の教育・研究と目標との関連について、最新動向を踏まえて学ぶ。これらは、①各学部の教育・研究はSDGsとどのように関連しているのか、②得た知識をSDGs課題発見・解決にどのように生かせるかについて、学生自身の「気づき」を促すことが目的である。学生には、1つの目標に対して多角的なアプローチ方法があることを知り、本学における学びは将来にわたって有機的に結びつくことを実感して欲しい。「持続可能な共生社会の実現への貢献」を教育使命の一つとする本学にて、SDGsと自らの興味関心の対象を結び付けて考え、今後、どのように学びを深めたいのかを考える契機となる講義を提供する。	
	①微分・積分は、万有引力を発見したニュートンによって作られた。車のメーターで見る速度というのが微分の概念のひとつの具体例である。速度をきちんと理解できれば、微分が何であるかがわかる。この理解のためには、関数と、極限の概念を知る必要がある。初歩から始めて、微分というものを理解するまで進む。 ②「速度」という概念と、「速さ」という概念は異なる。大きさしかないものが速さであり、大きさと向きを持つものが速度である。大きさと向きを持つものをベクトルという。図示するときは矢印で表す。このベクトルの演算などを学ぶと、幾何学において強力な武器となる。このベクトルを別のベクトルに移す行列や、行列の性質を知るために役に立つ行列式も学ぶ。		

<p>全学共通科目</p> <p>教養科目</p> <p>自然と科学</p>	<p>生活の物理</p>	<p>日常生活に見る現象の裏にある法則を物理を使って、なるべく数式に頼らず、説明していく。身の回りに溢れる家電製品などは、物理という学問がなければどれひとつとして存在しない。いくつか例をあげる。電子レンジは、第二次世界大戦中のレーダの民生品である。電気ポットは、ジュール熱の法則に従って、お湯が沸く。また、日々新聞を賑わす地球温暖化の問題の理解には気象学の知識が必要だが、気象学の基本には物理学がある。</p> <p>学生の興味ある話題を取りあげ、その裏にある物理法則を明らかにして、物理的思考方を身につけてもらうことを目標とする。</p>
	<p>生活の化学</p>	<p>その昔、化学者の夢は錬金術であったと言われる。金でないものから金を作り出すのが錬金術であるが、現在、プラスチックや繊維などは錬金術のごとく石油からつくることができる。ペットボトルからフリースをつくるなんてこともできる。ペットボトルもフリースも、炭素 (C) と水素 (H) と酸素 (O) からできていて、結合の組み合わせを変えるだけで、見かけも性質も違うものに変化させることができるのである。砂糖と紙とサラダ油、見かけは違うが、これも実は主成分はすべて炭素 (C) と水素 (H) と酸素 (O) からできている。どれも、燃やすと二酸化炭素と水になる。このような物質たちの七変化を理解するためには、物質を構成している原子に思いを馳せなければならない。</p> <p>水も化学物質の1つである。水は水素 (H) 2つと酸素 (O) 1つが結合してできたシンプルな物質だが、特別な性質を持っている。電子レンジで水を含む食品を暖めることができるのはなぜか。それは水の化学構造に秘密がある。</p> <p>本授業では、物質の性質や化学変化を理解するための化学の基礎を学び、日常生活に散らばっている事柄を化学の目で見てみることを目的とする。</p>
	<p>科学と環境</p>	<p>地球環境は、この星が生まれて以来の約46億年間で常に変動し続けており、生命は環境の変動に適応しながらさまざまな生き方を獲得・進化してきた。地球環境の歴史を学ぶことで環境および生命の多様性を学ぶ。近年の環境問題は地球規模(温暖化や砂漠化など)でありながら身近な問題(都市化や食料・エネルギー問題など)でもある。これらの問題の多くは科学の進歩がもたらしたものであるが、こうした諸問題を克服して持続可能な社会を構築するのもまた科学の力である。本講義では、「環境・生命の多様性を学ぶ」と「科学技術の功罪をふまえて未来を考える」という2つの視点を中心に据えて環境問題について考える力を養うことを目的とする。</p>
	<p>生命の科学</p>	<p>生命の誕生から始まり、成長に伴う様々な機能を持つようになる分化現象、子孫を残す生殖活動、そして加齢による老化現象、生命の終焉までを様々な観点から、最新の研究成果を踏まえて講義するのが本授業である。近年、ヒトゲノム計画を始めとして多くの生物において分子生物学の研究成果は著しいものがある。このような成果を踏まえて疾病の研究や品種改良などの応用面は言うまでもないが、生命の根本に触れる研究も行われている。このような研究は人類の健康に対する貢献は多大であることは間違いない。一方、本来動物細胞においては受精以降では全能性を欠いているわけであるが、i p s 細胞のような人工的に全能性を待つ細胞に対する危険性や倫理面について指摘されている。このように最先端の研究の両面性も学生と一緒に考えていきたいと思っている。</p> <p>本授業を行うことで学生に生命現象を探究する面白さを学び、科学的な考え方を修得してもらうことが授業目標である。</p>
	<p>宇宙の科学</p>	<p>宇宙の科学に関する発展は目覚ましく、宇宙の起源や進化に関する研究ばかりでなく、惑星探査機による火星などの直接探査、そして宇宙旅行や月旅行も実現間近になっている。宇宙に関する基本的な科学的知識や考え方を始め、人類が宇宙や地球のなかでは極めて小さな存在であることを理解する。本授業では古代や中世の宇宙観を始め、宇宙の起源や進化、太陽系と地球の起源と進化、宇宙開発についてビデオ等の画像を用いて解説する。</p> <p>宇宙は137億年前にビッグバンと呼ばれる超高温の火の玉として始まったとされているが、ビッグバン後には星や銀河が生成し宇宙の構造が形成された。太陽系は46億年前に誕生し、太陽を中心に8つの惑星とその衛星などから構成される。太陽系と同時に誕生した原始地球は、微惑星の衝突で生成したため高温であったが、冷却するにつれて海洋が生成し陸地が形成された。宇宙開発は1957年の人工衛星の打ち上げの成功に始まるが、その後人類は月面に降り立ち、スペースシャトルや宇宙ステーションの開発に成功し、宇宙旅行の基礎ができあがった。宇宙の巨大な時間的空間的な広がりや理解し、これからの宇宙と人類のあり方を言及する。</p>
	<p>人類の進化</p>	<p>本授業では、まず生物分類および学名について解説し、その後、生命誕生から現在に至るまでを通覧しながら人類進化の概要、すなわち人類の誕生から世界各地への拡散移住の過程を解説する。とくに近年詳細な部分にまで理解が及ぶようになった人類のアフリカ単一起源説を基に、人類進化の特徴を理解してゆく。また併せて、進化過程で獲得してきた人体の構造と機能について解説する。また日本人の起源についても解説する。以上の知識をもとに、近未来生活において人類自らが制御する温度や照明など環境要因への適応の問題、およびロボットとの共存が想定される生活と人間観について、学生諸君の意見を求めながら考える。</p>
	<p>自然科学の歴史</p>	<p>自然科学は、人間のあくなき知的欲求から生み出された輝く宝石のような結晶である。人間は、自然科学の知識を活用することで、物質的にも精神的にも豊かな社会を築いている。授業では、自然科学の歴史の夜明けから解説し、人類の歴史の中で、どのような科学的思想や科学的概念が生まれたかについて、自然科学の方法論とともに学ぶ。また、それらの科学的知識がどのようにして体系づけられ、現代のような自然科学が発展してきたかについて基礎から学ぶ。こうした歴史に関する知識を背景に、現代社会における、人間と自然科学の付き合い方について考える。また、自然科学は常に発展途上段階にあるため、今後の展開を含め、自然科学の未来についても考える。</p> <p>授業を通して、自分の中にある知的好奇心と人類の進歩や未来像との深い関わりを意識することを目標とする。</p>

全学共通科目	教養科目	スポーツ	スポーツA	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことから本授業では、生涯スポーツの中でも愛好者の多い卓球・パドミントン・テニス・ゴルフなどの個人スポーツを中心に授業を実施する。	
			スポーツB	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことから本授業では、健康づくりのための体力を高める・技を高めるためのスポーツ実践として、エアロビクスダンス・ウォーキング・ランニングや器械運動（トランポリン）などを中心に授業を実施する。	
			スポーツC	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことを踏まえ本授業では、チームで協力して課題を解決し、コミュニケーション能力及び、スポーツ技能を高めるために、バレーボール型・バスケットボール型・ベースボール型などのスポーツを中心に授業を実施する。	
			スポーツD	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことから本授業では、健康でしなやかな日常生活を送れるように、軽いエクササイズ（ヨガ・ピラティス等）やストレッチを通して、自己のからだについて気づきを促し、身体のコンディショニングを行う。	
			シーズン・スポーツ	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことを踏まえ本授業では、学外での集中授業を（夏季はトレッキング、冬季はスキー・スノーボード）通じてそれぞれの技能を習得し高めると共に、自然と触れ合い、またそこに集う人たちとの交流を通して、コミュニケーションを高めることを目的として授業を実施する。	
			スポーツと健康	現代社会は、都市化、高齢化、労働環境の変化にともなう自由時間の増大といったライフスタイルの変化、また、科学技術の進歩や経済成長による生活の効率化がもたらした慢性的な運動不足やストレス傾向等にあつて、心身の健康を自ら維持管理することや、運動・スポーツ・野外運動を積極的に行うことは、現代人にとっては必要不可欠であると考え。 「健康」「運動」「スポーツ」の実践の基礎となる理論的な事柄について理解を深めていくことを目的に、①生活とスポーツ②生活とスポーツ技術③生活と体力④生活とトレーニング⑤女性とスポーツなどについて解説し、自らが生涯にわたって心身ともに健康で豊かな生活を営むための「健康・スポーツ」について考える機会とする。	
			レクリエーション論	レクリエーションとは、単なる身体的な健康だけでなく、精神的な健康をも促す活動で、自分の生活に喜びと活力を満たしてくれる重要な手段というように変わってきた。そしてまた、職場や地域社会、地域福祉の現場等においても、重要な役割をはたしている。本授業では、レクリエーションの基礎理論を学び、必要とされる地域社会等におけるレクリエーションの重要性や必要性、さらには支援方法等について理解を深めることをねらいとする。なお、本授業はレクリエーション・インストラクター資格取得とも関連する。	
			レクリエーション実技	レクリエーションとは、単なる身体的な健康だけでなく、精神的な健康をも促す活動で、自分の生活に喜びと活力を満たしてくれる重要な手段というように変わってきたのです。そしてまた、職場や地域社会、地域福祉の現場等においても、重要な役割をはたしている。本授業では、レクリエーションでの人と人をつなげるためのコミュニケーションワークや目的に応じたレクリエーション・ワーク等の指導・支援技術や方法などを習得し、多くの人たちを結び付けるための基礎的能力の育成をねらいとする。なお、本授業はレクリエーション・インストラクター資格取得とも関連する。	
	特殊講義	教養特殊講義	本授業は、協定を締結した他大学・他短期大学が開設する特色ある授業科目を受講し修得した場合の単位認定科目である。なお、内容が異なる場合は、複数回の履修が可能である。		
	外国語科目	英語 I A	英語の基礎的な、聞く、話す、読む、書く、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、高校までに習得した英語力を実際のコミュニケーションに活かす訓練を行う。高校までの間に学んだ英語は「知識」として脳に蓄積されているはずである。しかしいざその「知識」を使ってコミュニケーションを行なおうとすると、簡単な表現さえ発することが出来ないのが現状ではないだろうか。このコースでは、「知識」としての英語を「道具」として使えるようになることを目標とし、コミュニケーション技術向上のための基礎構築を目指す。		

全学共通科目 外国語科目	英語 I B	英語の基礎的な、聞く、話す、読む、書く、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、平易な語彙や文法を用いつつ、人間関係を築く基となるコミュニケーション能力を磨く。前期の英語 I Aを受講することで英語のみの授業に慣れ、英語を「道具」として使うための基礎を身につけるはずである。このコースでは更にその「道具」を使ってコミュニケーションを行い、会話を継続・発展させる訓練を行うと共に、自分の意見を分かりやすい言葉で表現して発表する機会も設ける。
	英語 I C	英語の基礎的な、読む、書く、聞く、話す、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語の基礎的な読解力と表現力を身につけることを目指す。高校までの間に、入試問題で出題されるような英文読解力や英作文力は既に身につけているはずである。しかし、本来読み書きの目的はコミュニケーションである。このコースではその原点に戻り、基礎的な英語で書かれた文章を読んで理解し、それに倣って文章を作成するという訓練を繰り返し行い、書面によるコミュニケーション技術の構築を目指す。
	英語 I D	英語の基礎的な、読む、書く、聞く、話す、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語の基礎的な読解力と表現力を身につけることを目指す。前期の英語 I Cを受講することで、センテンスレベルの英語による書面コミュニケーション技術の基礎を身につけるはずである。このコースでは更にその技術を発展させ、基礎的な英語で書かれた文書を読んで書き手の意図を理解し、簡単な英語でそれに返答するという書面によるコミュニケーション技術の向上を目指す。
	英語 II A	英語 I A・英語 I Bを発展させ、中級レベルで4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、普通で話される英語をセンテンス・レベルから発展させ、パラグラフ・レベルでその大まかな内容を把握できることを目指す。扱うトピックは世界の人の暮らしや環境、世界各地の都市の様子など幅広い分野に及び、英語を通して一般教養を身につけることも目指す。また、海外旅行を想定した旅行英語の要素も取り入れ、英語力の実践的な利用を目指す。さらに、学期を通してグループプロジェクトを行い学期末にその成果を発表することで、1年次に培った協調性を磨くことも目指す。
	英語 II B	英語 I A・英語 I B・英語 II Aを発展させ、中級レベルで4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、普通で話される英語をパラグラフ・レベルで理解できることになることを目指す。また、相手の話に耳を傾けてそれに反応し、自分の意見や感想を加えてパラグラフ・レベルで表現する訓練も行う。扱うトピックは世界の家族のあり方や最新のテクノロジー、個人固有の嗜好など幅広い分野に及び、英語を通して一般教養を身につけることも目指す。また、学期を通してグループプロジェクトを行い学期末にその成果を発表することで、より豊かな協調性を身につけることも目指す。
	英語 II C	英語 I C・英語 I Dを発展させた、いわゆる英語の中級のな、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語をセンテンス・レベルから発展させてパラグラフ・レベルで読解できることを目指す。具体的には、新聞や雑誌記事などのパラグラフを、限られた時間で辞書を引かずその大まかな内容を把握することを目標とする。また、自分の身の回りのことをパラグラフ・レベルの英語で書くこと、環境・健康・文化・歴史などに関するレポートを書くことを目標とする。そのためには、かなり多くの英語の情報に接する必要がある。新聞、雑誌に限らず、平易にリライトされたエッセイやストーリーを読むことも望まれる。
	英語 II D	英語 I C・英語 I Dを発展させた、いわゆる英語の中級のな、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語をセンテンス・レベルから発展させてパラグラフ・レベルで読解できることを目指す。具体的には、新聞や雑誌記事などのパラグラフを、限られた時間で辞書を引かずその大まかな内容を把握することを目標とする。また、自分の身の回りのことをパラグラフ・レベルの英語で書くこと、環境・健康・文化・歴史などに関するレポートを書くことを目標とする。そのためには、かなり多くの英語の情報に接する必要がある。新聞、雑誌に限らず、平易にリライトされたエッセイやストーリーを読むことも望まれる。
	英語 III A	今まで学習した英語を発展させた、いわゆるブラクティカルな上級総合英語へのレベルアップを目的とする。たとえば、スピーチ、ディスカッション、ディベート、そしてプレゼンテーションなどにおいて必要とされる、自分の意見を英語で発表できること、相手の意見を聞きながら自分の意見も英語で述べて討論できること、相手を説得できるようなレトリカルな英語の発表ができることを目標とする。また、英検、国連英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験を念頭に高得点獲得も目標とする。そのためには、新聞・インターネットの記事など英語で書かれた各種の資料などから瞬時に必要な情報を的確に抜き出し、それを分析すること、BBC、CNN、ABCなどのニュースやドキュメンタリー番組を積極的に活用し、高度なリスニング力を体得することも望まれる。
	英語 III B	今まで学習した英語を発展させた、いわゆるブラクティカルな上級総合英語へのレベルアップを目的とする。たとえば、スピーチ、ディスカッション、ディベート、そしてプレゼンテーションなどにおいて必要とされる、自分の意見を英語で発表できること、相手の意見を聞きながら自分の意見も英語で述べて討論できること、相手を説得できるようなレトリカルな英語の発表ができることを目標とする。また、英検、国連英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験を念頭に高得点獲得も目標とする。そのためには、新聞・インターネットの記事など英語で書かれた各種の資料などから瞬時に必要な情報を的確に抜き出し、それを分析すること、BBC、CNN、ABCなどのニュースやドキュメンタリー番組を積極的に活用し、高度なリスニング力を体得することも望まれる。

全学 共通 科目	外国 語科 目	フランス語Ⅰ	初めてフランス語に接する人のためのクラス。まずはフランス語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、フランス語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		フランス語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級フランス語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がフランス語できちんとできるようになることを目指す。	
		フランス語Ⅲ	フランス語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、フランスの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたフランス語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		フランス語Ⅳ	全学共通教養科目としてのフランス語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、フランスと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とフランスの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたフランス語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		ドイツ語Ⅰ	初めてドイツ語に接する人のためのクラス。まずはドイツ語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、ドイツ語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		ドイツ語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級ドイツ語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がドイツ語できちんとできるようになることを目指す。	
		ドイツ語Ⅲ	ドイツ語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、ドイツの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたドイツ語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		ドイツ語Ⅳ	全学共通教養科目としてのドイツ語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、ドイツと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とドイツの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたドイツ語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		スペイン語Ⅰ	初めてスペイン語に接する人のためのクラス。まずはスペイン語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、スペイン語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		スペイン語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級スペイン語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がスペイン語できちんとできるようになることを目指す。	
		スペイン語Ⅲ	スペイン語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、スペインの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたスペイン語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	

全学共通科目 外国語科目	スペイン語Ⅳ		<p>全学共通教養科目としてのスペイン語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、スペインと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とスペインの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたスペイン語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。</p>	
	ロシア語Ⅰ		<p>初めてロシア語に接する人のためのクラス。まずはロシア語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行ない、やさしい文章を読んだり、文型の反復練習をすることによって、ロシア語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>	
	ロシア語Ⅱ		<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級ロシア語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がロシア語できちんとできるようになることを目指す。</p>	
	ロシア語Ⅲ		<p>ロシア語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、ロシアの雰囲気を映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたロシア語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。</p>	
	ロシア語Ⅳ		<p>全学共通教養科目としてのロシア語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、ロシアと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とロシアの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたロシア語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。</p>	
	中国語Ⅰ		<p>初めて中国語に接する人のためのクラス。まずは中国語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、中国語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>	
	中国語Ⅱ		<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級中国語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介が中国語できちんとできるようになることを目指す。</p>	
	中国語Ⅲ		<p>中国語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、中国の雰囲気を映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きた中国語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。</p>	
	中国語Ⅳ		<p>全学共通教養科目としての中国語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、中国と日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本と中国の歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きた中国語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。</p>	
	韓国語Ⅰ		<p>初めて韓国・朝鮮語に接する人のためのクラス。まずは韓国・朝鮮語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、韓国・朝鮮語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。</p>	
	韓国語Ⅱ		<p>ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級韓国・朝鮮語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介が韓国・朝鮮語できちんとできるようになることを目指す。</p>	

全学共通科目	外国語科目	韓国語Ⅲ	韓国・朝鮮語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、韓国・朝鮮の雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きた韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		韓国語Ⅳ	全学共通教養科目としての韓国・朝鮮語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、韓国・朝鮮と日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本と韓国・朝鮮の歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きた韓国・朝鮮語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		日本語Ⅰ	日本語を母語としない学生のための授業である。大学の授業を受講する際に必要な日本語のうち、聞くことと話すことを中心に、基礎を固めて応用に備える練習を行う。	
		日本語Ⅱ	日本語を母語としない学生のための授業である。大学の授業を受講する際に必要な日本語のうち、読むことと書くことを中心に、基礎を固めて応用に備える練習を行う。	
		日本語Ⅲ	日本語を母語としない学生が大学の授業で必要となる日本語を総合的に養う授業である。特に、受講という学習活動に必要な日本語を総合的に訓練する。講義を聴き、ノートを取り、質疑、応答に対応して、内容を理解するという流れと、理解、整理した内容に対する詳細を補足的に調べることで、さらに内容の理解を深める方法を学ぶ。	
		日本語Ⅳ	日本語を母語としない学生が大学の授業で必要となる日本語を総合的に養う授業である。特に、学術上の表現・発信活動に必要な日本語をコミュニケーションに訓練することで、日本の大学の学習活動のあり方とその流れを理解する。また、まとまった意見として口頭で発表するプレゼンテーションを通し、文化的、倫理的約束事に配慮しつつ産出する方法を学ぶ。 具体的には、講義で出された課題を実施する際、下調べを行い、その調査に基づいて他の学生と意見交換を行うのであるが、掲示板、メール、板書においては文書で、また、グループ活動では口頭で意見交換しながら、考察を深める練習を行うものである。	
		外国語特殊演習	本授業は、協定を締結した他大学・他短期大学が開設する特色ある授業科目を受講し修得した場合の単位認定科目である。なお、内容が異なる場合は、複数回の履修が可能である。	
地域文化・国際理解科目	地域文化理解Ⅰ	本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。		
	地域文化理解Ⅱ	本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。		
	地域文化理解Ⅲ	本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。		
	国際理解（海外研修）Ⅰ	グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。 日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に用意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。		
	国際理解（海外研修）Ⅱ	グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。 日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に用意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。		

全学共通科目	地域文化・国際理解科目	国際理解（海外研修）Ⅲ	グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。 日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。	
		国際理解（海外研修）Ⅳ	グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。 日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が2週間以上、かつ研修の実日数が10日間以上の場合、1単位を認定をする。	
		国際理解（海外研修）Ⅴ	グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。 日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が2週間以上、かつ研修の実日数が10日間以上の場合、1単位を認定をする。	
博物館学芸員課程に関する科目	生涯学習概論	本授業では、生涯学習の理念や制度など基礎的知識を学び、生涯学習に携わる博物館学芸員・図書館司書・社会教育主事・公民館主事など、その活動や方法、意義について事例や実践例などを通して学ぶ。		
	博物館概論	博物館学芸員資格取得のための必修の授業である。多くの博物館を対象にしながら、歴史系博物館を中心に、博物館の本質、機能や役割、業務の内容、学芸員の仕事とともに、博物館に関連する法律など全般的な基礎知識を学ぶことを目的とする。		
	博物館経営論	授業のテーマは、「現代博物館経営の諸問題解決に向けて」。博物館経営では、理念に基づいた様々な効率的、かつ効果的な事業展開を図っていかなければならない。特に公立博物館における博物館経営の向上への取組は、行政改革において運営面や財政面から指定管理者制度導入など、切実な問題に直面している。いかに入館者増を図り、収入を増加させて安定した財政運営に導くかという一面的な問題解決では、博物館経営は成り立たない。 本授業では、現代博物館の抱える経営の諸問題の現状と課題を通して、博物館のあるべき姿を模索しながら、学芸員としてどのように博物館経営に携わっていくかを考える。		
	博物館資料論	博物館にとって資料は博物館活動を行うための基本となるものである。本授業では、博物館資料の種類や、その収集・整理の方法、保存や活用するためには何が必要なかなどについて学ぶ。		
	博物館資料保存論	資料の保存は博物館の大きな役割である。ここでの保存とは、単に失くさない、壊さないということではなく、歴史の物的証拠である種々の資料を良好な状態を保ったまま、次世代に引き継ぐということである。そのためには、防犯や防災対策はもちろんのこと、温湿度変化や光、気中化学物質などの環境要因や虫カビによって引き起こされる変質を防ぐための対策が必要となる。本授業では、博物館において必要とされる資料保存のための環境、またこれを維持するための構造や空間配置、設備、管理体制などに関して概観する。		
	博物館展示論	博物館における展示の歴史、現状、教育活動、主要な博物館・美術館等の紹介・見学等をおして博物館展示に関する基礎的理解を深める。 さらに博物館展示の意義について、調査研究、展示の計画、解説・図録の作成等、具体的な作業を通して、その果たす役割についても考える。		
	博物館情報・メディア論	博物館資料データベースを基に博物館活動に関わる様々なメディア（図録、展示パネルなど）を再構成する基礎的能力を習得できるようにする。		
	博物館教育論	社会教育機関としての博物館の役割、エデュケーターとしての学芸員の役割を理解すること。学芸員として学習者の特性や発達段階に応じて適切な理論と方法を選択し、生涯学習に繋がる基礎的能力を涵養したい。		

博物館学 芸員課程 に関する科目	博物館実習	博物館学芸員として必要な基礎的知識および技術、心構え等について実習する。また、学内の博物館施設「大妻女子大学博物館」あるいは博物館に認定された学外の施設で実習を行うので、その際に必要となる事項や留意すべき点などについて学習する。 「博物館実習」は3つの内容から構成される。 (1)講義や実技を含む学内実習 (2)見学実習および巡見 (3)実際の博物館での館内実習である。 (オムニバス方式/全30回) (26 是澤博昭/15回) 博物館見学実習、博物館館務実習、事前事後指導を中心に担当する。 (36 下田敦子/15回) 博物館実務実習を中心に担当する。	オムニバス方式
	文化史A	我々のくらしは過去の歴史の積み重ねによって成り立っている。本授業では「日本文化」の原点である原始古代の文化について学ぶ。旧石器時代から弥生時代を対象とし、さまざまな歴史事象を通観して各時代の文化の特質を明らかにする。	
	文化史B	我々のくらしは過去の歴史の積み重ねによって成り立っている。本授業では「日本文化」の原点である原始古代の文化について学ぶ。古墳時代から奈良時代を対象とし、さまざまな歴史事象を通観して各時代の文化の特質を明らかにする。	
	美術史A	西洋美術の源流にある古代ギリシア・ローマの美術からルネサンス美術までをとりあげ、博物館学芸員を目指す者にとって必要な知識を習得し、芸術作品の見方をつちかうことを目標としている。 また、美術史の基礎的な事柄を習得することを目的としている。	
	美術史B	西洋美術の、バロック時代(17世紀)から20世紀までの作例をとりあげ、博物館学芸員を目指すものにとって必要な知識を習得し、芸術作品の見方をつちかうことを目標とする。	
	民俗学A	民俗学の基礎を学ぶ。どこの地域に行ってもその地域の歴史や生活の様子をテーマにした博物館を見かける。「□(地域名)歴史・民俗博物館」とか「□郷土博物館」などである。歴史と民俗はワンセットで組み込まれていることが多いが、展示の内容に違いがある。おおよその傾向として歴史が過去の人が記した古文書や歴史的出来事を中心に展示しているのに対し、民俗は生活用具や聞き書き資料に重きを置いた内容になっている。この違いが民俗学を特徴付けているともいえるが、民俗学は生活のあらゆる場面を研究対象としている。それ故研究者によって関心領域も異なり今日の民俗学は細分化される傾向を強めているのが実情である。 本講義ではそうした流れを念頭に置きつつもA「社会生活」、B「宗教(信仰)生活」の二つの面に絞って進めていく。Aの社会生活は人と人とのつながり方を考察する。特に家族・親族、地域社会ではどうつながっているのか、という点に関する代表的な事例を紹介しながら解説する。	
民俗学B	民俗学Aに続き、民俗学の基礎を学ぶ。Bでは主に宗教(信仰)面を取り上げる。私たちの生活は情報化社会の中で一見すると均一化したようにも思われるが、ちょっとしたところでこれが「標準」ではなかったことに気がついたりする。そうした経験は他の地域の出身者とのつきあいの中で生じることがほとんどと思う。また、どんなに科学的な知識を学んだとしても、日常生活を省みると「げんをかつぐ」とか「縁起が悪い」など合理的とはいえないものにこだわっている自分がいる。些細なことのように思えても、こうしたことは実は私たちの精神世界を根拠から支えている文化であり、しかもその有り様は多様なのである。本講義では民俗学の視点から私たちの生活の中に展開する様々な宗教(信仰)をみていきたいと思う。		
図書館司書 に関する科目	生涯学習概論	本授業では、生涯学習の理念や制度など基礎的知識を学び、生涯学習に携わる博物館学芸員・図書館司書・社会教育主事・公民館主事など、その活動や方法、意義について事例や実践例などを通して学ぶ。	
	図書館概論	本授業では、図書館に関する全体的な理解を深めるために、図書館の歴史や、館種などの基本的な事柄を説明する。	
	図書館情報技術論	図書館の使命は、様々な情報資源を蓄え、将来に向けて保存し、利用者に提供することである。現在、図書館で利用される情報資源は多様な形態をとっており、そこには情報技術が深く関係している。情報資源は、従来からあるプリント媒体だけではなく、デジタル媒体の資料も多く利用されている。また、図書館を通じて提供可能な図書館外のデータとしては、インターネット上の情報資源やデータベースもある。情報技術の活用は、図書館で提供される情報だけではなく、図書館自体の業務や所蔵資料の検索、広報としてのWebページなどにも影響を与えており、今や情報技術は、図書館とは切り離すことのできない重要な位置を占めている。 本授業では、図書館にかかわるいろいろな情報技術について理解し、基礎的な情報技術を修得することを目標としている。図書館スタッフとして必要な知識や技術だけではなく、利用者側からの視点や図書館を運営する自治体等からの考えや立場も考慮しつつ、図書館の運営を支える核となる情報技術を考えつつ学んでもらいたい。	講義 26時間 演習 4時間
	図書館制度・経営論	記録された知識や情報を収集、組織、保存し、人々の要求に応じて提供するための「社会的機関」「情報社会の羅針盤」と位置づけられる図書館は、制度的にそれぞれの設置者が定めた使命あるいは設置の目的を掲げている。 図書館の経営とは、そうしたねらいが十分に達成できるように、「組織の内部および外部に働きかける活動」とであるという内容を核に講義を行う。なお、図書館活動と地域社会のかかわりについても解説する。	

図書館サービス概論		<p>現代の図書館の重要な機能であるサービス提供機能の全体的な理解を図るために、代表的な図書館サービスを取り上げ解説する。図書館サービスの構造、種類、方法を理解することが本科目の目標である。</p> <p>まず、図書館サービスの考え方、構造、変遷等について学修する。つぎに図書館サービスの二つの柱である資料提供サービスと情報提供サービスについて考察する。この二つの領域は、図書館サービスの車の両輪とも言われる基本的なものである。その上で、利用対象者別のサービスとして、障害者・高齢者・多文化サービス等について理解を深める。合わせて、こうしたサービスを支える仕組みである図書館の連携・協力、接遇、著作権についても学ぶ。本科目では図書館のサービス面に焦点を当てるが、図書館サービスのうち児童サービス、情報サービスについては別に科目を設定し、より詳しく学ぶ。</p>	
情報サービス論		<p>本授業では図書館における情報サービスの意義を明らかにしたうえで、図書館における各種情報サービス、情報検索サービスの理論と方法、情報サービスに必要な各種情報源の種類と特性、その組織化などについて解説する。図書館の情報サービスについて基礎的な知識を身に付けることをねらいとする。</p>	
児童サービス論		<p>本授業では以下について解説する。</p> <p>①乳幼児からヤングアダルトを対象とした児童サービスの意義 ②子どもの発達と学習における読書の役割 ③年齢別の児童サービス ④児童サービスの企画・運営 ⑤各種資料の意義と役割</p> <p>以上を理解したうえで、子どもたちへのよりよい図書館サービスとは何か、理解を深めることを目的とする。</p>	<p>講義 28時間 演習 2時間</p>
情報サービス演習（1）		<p>本演習では、図書館が提供するサービスのうち、情報サービスについての演習を行う。本科目では、その中でも信頼性の高い情報源を調べるための手法を身につけるため、レファレンスブックを中心とした探索法について学ぶ。まず、情報サービスの概要について理解を深めるため、その設計方法、レファレンスコレクションの整備、レファレンスプロセスについて解説し、つぎに、実際のレファレンスを想定したインタビューについて確認を進める。最後に、レファレンスブックを中心にさまざまな情報源を解説するとともに、それらを使った演習を行う。この演習を通して、情報を探索する力を高める。</p>	
情報サービス演習（2）		<p>本演習では、主に情報検索（IR：information retrieval）の基礎的な知識と技術を、座学と実習を通じて身に付ける。</p> <p>私たちの日常生活では、インターネット上の情報を検索することや、様々なツールを用いて情報を入手し利用することがごく普通に行われている。</p> <p>しかしながら、信頼度を考慮した正確な情報や専門的な情報は、一般的な検索エンジンをを用いた情報検索では、十分に見つけることは期待できない。</p> <p>信頼性の高い情報をどのように見つけるかは、ある程度専門的な知識と技術が必要である。どこを探せばどのような情報があるか、どのように探せば確かな情報を得られるかは、図書館のような情報提供を担う組織のみのミッションではなく、だれもが身に付けておくべきスキルのひとつでもある。</p> <p>本授業を通じて、様々な問題解決を可能とする情報検索ができるような知識と技術を身に付けることが大きな目標である。</p>	
図書館情報資源概論		<p>図書館のコレクション（蔵書等）は、長期間にわたって構築されるものである。そのコレクションは、個別の図書館の特徴や魅力を示すうえで、重要な要因でもある。そこで、本講義では、魅力的なコレクションを構築していく上で必要な知識を得るため、コレクションの特徴や収集、蓄積について理解を深める。</p> <p>まず、資料の類型について学んだ上で、コレクション形成の理論、情報源、プロセスを学ぶ。また、主題分野ごとの情報資源とそれらの特性についても考察する。最後に、図書館と密接に関わる出版社・取次を含む情報資源の生産・流通について理解する。</p>	
情報資源組織論		<p>図書館をはじめとする「知のアーカイブ」においては、多岐にわたる資料を収集し、その資料に利用者がより確実にアクセスすることが可能なように、様々な組織化の方法を発展させてきた。</p> <p>本授業では、まず、これら組織化の意義からスタートし、情報資源組織法を概括する。その後、ほとんどの受講者が次年度に履修するはずの「情報資源組織演習」に備えて、実際に利用されているさまざまな組織法について理解していく。特に、司書教諭資格取得を目指している受講生には、組織化の演習機会がほとんどないため、それを自覚しつつ、本講義においてはそのエッセンスを必ず身に付けてもらいたい。また、各組織法自体が、コンピュータを利用したボーダーレスになりつつある状況も把握し、コンピュータやデータベースを利用した演習にも備えてもらいたい。同時に、図書館内の資料組織化だけではなく、インターネット上の情報資源の組織化についてもその基礎を理解する必要がある。</p> <p>授業全体で学んでもらいたいことは、単に組織法を覚えることではなく、その組織法にどのような意味があるのかを受講者自身が考え咀嚼してもらいたいことと、日本で利用されている代表的な組織化の具体的な方法の要点である。そのためには、組織化する側だけの視点ではなく、利用者側の視点も常に意識しつつ受講し学習を進めることが必要である。</p>	

図書館司書に関する科目	情報資源組織演習		<p>コンピュータを中心とする情報化の進展は、図書館においても、様々な変化を与えてきた。公的機関や民間から様々なMARC（機械可読式目録）が提供され、図書館の現場では、それを利用（活用）して、目録データベース作成の負担を軽減させているというのが実状である。それは、確かに省力化にはなるが、図書館員の様々な能力（特にデータ作成能力）を著しく低下させている現実も見逃せない。資料の組織化は、図書館システムの基礎でもあり、組織化を的確に行うためには、既存のデータを利用するだけの能力では明らかに力不足である。</p> <p>本授業では、受講者自身が考えることによって、具体的に資料を組織化してもらいたい。そのためには、各組織法で利用するツール（日本目録規則など）から、必要な情報を読み取る能力が必要である。マニュアルをきちんと読みこなし、効率のよい作業ができる技能をしっかりと身に付けてもらいたい。演習を通じて得られたこれらの能力は、既存のデータの矛盾や誤りもきつと発見できるはずである。</p> <p>また、組織化の手法を用いて作成されたデータは、一般的にはコンピュータを通じて利用されていますから、それらデータをデータベースに登録する作業もシミュレートしてもらいたい。時間的な余裕があれば、ネットワーク情報資源の組織化についても、より理解を深める演習にしていく。</p>	
	図書・図書館史		<p>本授業では図書を中心とした情報資源の歴史と図書館の歴史を学ぶことによって、図書館と情報資源について、より広い視野から考えることができるようになることを目的とする。</p> <p>講義では図書館や図書館で扱われるメディアの歴史的变化について、日本はもとよりアメリカやヨーロッパ、イスラムやインドなどの諸外国についても取り上げ解説する。併せてそれぞれの文化圏がどのような相互作用を及ぼしたかについての理解を深める。</p>	
	図書館サービス特論（1）		<p>本授業では公共図書館を運営するなかで起こりうる可能性のある、様々な問題について解説する。近年の公共図書館で起きている図書館サービスにかかわる諸問題を取り上げ、図書館サービスを取り巻く環境について理解を深めることを目的とする。</p>	
	図書館情報資源特論（2）		<p>図書館情報資源特論（2）では図書館基礎特論と合わせて「医学情報特論」として授業を構成し、医療専門家、患者や家族、一般市民のための医学情報やサービスについて、次の4点を中心に解説する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医学情報の需要と供給 ・研究の進展が早く日々新しい発見がある医学情報の特徴 ・人命にも関わる医学情報の信憑性 ・最新、且つ、正確な情報を提供するためのサービス 	
	図書館基礎特論		<p>図書館基礎特論では図書館情報資源特論（2）と合わせて「医学情報特論」として授業を構成し、医療専門家、患者や家族、一般市民のための医学情報やサービスについて、次の4点を中心に解説する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医学情報の需要と供給 ・研究の進展が早く日々新しい発見がある医学情報の特徴 ・人命にも関わる医学情報の信憑性 ・最新、且つ、正確な情報を提供するためのサービス 	

授 業 科 目 の 概 要				
(人間共生学部福祉学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	人間共生総論Ⅰ		本授業は新入生に対して学部の基本理念である「共生」について考えさせることを目的とした授業である。人間共生総論Ⅰにおいては、社会学の観点から共生に問題を考えていく。ジェンダー間、世代間、異文化間、様々な次元の共生について論じられる。受講生には自分とは異なる他者を理解し、共に生きていくための知識と知恵を身につけてもらいたい。講義科目ではあるが、授業内容についての討論を行う等、学生たちが能動的に学べる機会を提供したいと考えている。	
	人間共生総論Ⅱ		人は誕生の瞬間から人との関係の中で生き、成長していく。人間共生とは「人と人が共に生きる」ことであるが、よりよい共生を目指すためには、お互いの心を理解する必要がある。本授業の目的は、自身の感情や考え方を見つめるとともに他者の視点でも物事を捉え、「人間共生」を心理学の立場から多角的に眺めること、そして日常生活の中で実践的に「人間共生」に関する学びを生かす発想力、創造力を身につけることを目指す。そのために本授業では、「人間共生」にかかわる多様な心理学領域の知見を学ぶ。	
	人間共生総論Ⅲ	○	急速な社会の変化に伴い、人間関係のあり方も大きく変わりつつある。本授業では、共生社会の基盤となる人間関係の基本的視点、対人認知、人間関係の生涯発達、対人関係の成立、コミュニケーションなど基礎的な概念を学ぶ。次に、現代社会において円滑な対人関係を促進あるいは阻む要因について、現在社会で生じている事象を通して考える。そのうえで、円滑な人間関係を構築するための方法についてロールプレイを通して身につける。さらには対人援助における人間関係について事例から学ぶ。	主要授業科目
	人間共生総論Ⅳ		本授業は、共生社会の実現に向けて、多様性を背景とする地域社会や職場の課題を、国内外の地理的差異に関わる「グローバル・地域共生」、多様な特徴を持つ人間同士の共生である「人間共生」の二側面から「共生」を捉える様々な視点について、多様な専門領域の教員がオムニバス形式で授業を行っていく。様々な角度から社会の課題を捉える広い視点を持ち、発想力、構想力を養う。 (オムニバス方式/全15回) (11 小川浩/2回) 「共生社会」とは何か、またグローバル・地域共生と人間共生の2つの視点を知る。社会の課題を発見する視点を養う。 (13 蔵野ともみ/2回) メンタルヘルスの視点から人間共生を捉え、発想力を養う。 (29 伊藤みちる/1回) 国際的な課題からアプローチする視点と発想力を養う。 (30 高丸理香/2回) インターセクショナリティの視点から多様な人々が尊重しあう社会づくりのための発想力を養う。 (10 大橋寿美子/2回) コミュニティを育む共生空間と運営デザインのための視点と構想力を養う。 (31 野崎智仁/2回) 総合リハビリテーション及びコミュニティ創りの視点と構想力を養う。 (17 本田周二/2回) 心理学の観点から多様な特徴を持つ他者とのコミュニケーションに必要な知識を養う。 (15 齊藤豊/2回) まとめ：共生デザインにおける各分野の基礎知識を身につけて、その中から深く探究する分野を見つける。	オムニバス方式
	社会学概論Ⅰ		本授業では、私たちの身近な諸事例と関連付けながら、まず、社会的行為やコミュニケーション等の社会学の基礎概念について学ぶ。次に、個人と社会との関係を解明するために構築された主要な社会学理論について学習する。本授業を通じて、受講者は、身近な諸事例と関連付けながら、社会学の基礎概念と理論を学ぶことによって、自分自身の日常生活と現代社会の構造・動態との関連を多角的かつ体系的にとらえるため、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、必要な社会学の基本的な考え方を身につけることができるようになる。	
	社会学概論Ⅱ		本授業では、まず、現代日本社会における、地域社会の変容、結婚や家族の変化、少子・高齢化の進行といった側面から現代社会の特色と問題点を学習する。本授業を通じて、受講者は、身近な諸事例と関連付けながら、地域社会の変容、結婚や家族の変化、少子・高齢化の進行といった側面から現代社会の特色と問題点を学ぶことによって、自分自身の日常生活と現代社会の構造・動態との関連を多角的かつ体系的にとらえるため、さまざまな人々と社会と共存する知識を備え、必要な社会学の基本的な考え方を身につけることができるようになる。	
	心理学概論Ⅰ		本授業の狙いは、心理学を学ぶ上での基本的な知識を身につけることにある。特に、心理学的な考え方を身に付け、学問としての心理学を学ぶ基礎を身に付ける。具体的には、心理学史、心と脳、知覚、学習、記憶、思考、自己について、それぞれ身近な例を取り上げて概説する。授業は、講師による講義に加え、適宜、重要なポイントについてディスカッションを行うことにより、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、学生が自らの体験を心理学的に理解、説明できることを目指す。	
	心理学概論Ⅱ		本授業の狙いは、心理学を学ぶ上での基本的な知識を身につけることにある。特に、心理学的な考え方を身に付け、学問としての心理学を学ぶ基礎を身に付ける。具体的には、動機づけ、原因帰属、感情、性格、知能、思考の発達、愛着、心理学研究法について、それぞれ身近な例を取り上げて概説する。授業は、講師による講義に加え、適宜、重要なポイントについてディスカッションを行うことにより、さまざまな人々と社会と共存する知識を備え、学生が自らの体験を心理学的に理解、説明できることを目指す。	

学部 共通科目		社会福祉学概論Ⅰ	○	<p>本授業のねらいは、社会福祉学に関する導入の講義科目として、社会福祉とは何か、その概念、制度・政策について理解を深めることである。</p> <p>多様な地域生活課題を抱える人々に関する事例や、日本における福祉的な課題・テーマ・時事をもとに、それに対する向き合い方や考え方を学び、問題の構造を読み解く力や必要とされる思考を身につける。</p> <p>社会福祉の主要な概念および日本における制度・政策について概説する。そのうえで、日本における実際の出来事や社会問題をもとに考察することや、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、福祉的思考を涵養する。</p> <p>授業は講師による講義を中心に、学生個人のワーク、授業内容に応じて少人数でのディスカッションを行う。</p>	主要授業科目
		社会福祉学概論Ⅱ	○	<p>本授業では、社会福祉学の全体像を学び、対象ごとの事例検討から各論的な理解を深める。授業を学んだあと、多様な対象や領域から、各自の専門的興味を持てるようにすることをねらいとする。社会福祉とよばれる社会的現象は、歴史、価値、対象、政策、運営、援助、社会行動など、さまざまな要素を包摂しつつも、単なるその集合体ではない。内部的には、多様な要素からなるシステムとしての体系をもち、同時に外部に対してはより高次の、あるいは広範なシステムの構成要素である、一つの全体として存在している。本授業では、そのような社会福祉の全体像を、可能な限り一定した視点と枠組みを基盤に、理論的に把握することをめざす。本授業では、さまざまな人々と社会と共存する知識を備え、様々な社会的現象の事例検討を通して、専門的、多角的な視点を身につける。</p>	主要授業科目
		共生デザイン概論Ⅰ		<p>本授業では共生デザイン概論分野における多様性のうち、グローバルに関わる概念をグループワークを中心に学習する。</p> <p>地理的差異による多様性、すなわち人種、言語、宗教、文化、生活習慣等の差異を含むグローバル化に伴う多様性である。グローバル化は、しばしば政治・経済領域での他国との連携や競争の文脈で言われるが、一部の国際的なビジネスに限らず、国内においても、インバウンド消費に焦点を当てた商品・サービスの開発・提供、外国人労働者との協働や雇用管理、地域社会における外国人住民との共生、外国人に対する教育・医療・福祉場面での対応など、職場や地域社会における日常的なグローバル化が課題となっている。本授業では、国際貿易や国際協力を中心に、グローバルな地理的差異に基づく多様性に焦点を当て、異なる地域間での対話と協力の重要性、そして国際社会での課題解決について学ぶことでグローバルにおける多様性を理解することを目指す。</p>	
		共生デザイン概論Ⅱ		<p>本授業は、少子高齢化社会や障害者福祉などをもとに、個人としての多様性を考え、地域づくりの在り方について学習する。</p> <p>就労支援や生活支援という保健医療福祉的観点を持ち、地域の課題分析をするための思考を身につける。</p> <p>特に就労に関しては社会的に労働者の減少からその確保が重要視されていることから、取り巻く周辺事情を解説する。</p> <p>授業は生きにくさを抱える個人の課題等を講義により行い、小グループでの演習により想定した地域の分析を行う。</p>	
専門 教育科目	基礎 科目	人体の構造・機能・疾病	○	<p>将来、福祉職に従事する人は、人間の身体の構造と働きについて理解することは不可欠である。また成長、発達、老化などライフステージによって生じる身体機能の変化やよく見られる疾患について理解することで適切な対応ができる。</p> <p>本授業では、まず人体の構造と働きを理解し、生活習慣病、がん、感染症、精神障害など頻度の高い疾病、障害の成り立ち及び回復過程について学び、さらにリハビリテーション、疾病予防と健康の増進をはかるための公衆衛生について基本的な知識を身につける。</p>	主要授業科目
		介護福祉論	○	<p>複雑化・多様化・高度化する介護ニーズ及び介護福祉を取り巻く状況を社会的な課題として捉え、尊厳の保持や自立支援という介護福祉士の基本となる理念を理解することを目的とする。さらに、要介護者及びその家族に対して、当事者の意向、心身状況、社会背景を考慮しながら適切な介護サービスが提供できるよう、介護福祉士に求められる倫理、知識、技術の基礎を身につける。少子高齢化社会の進行、家族機能の変化などに伴って高まった介護の社会化の要請、高齢者虐待等介護を取り巻く状況の変化を受け、介護福祉士が備えるべき倫理や専門性、個々の利用者を主体とした介護サービスのあり方を概説する。本授業は講義形式である。</p>	主要授業科目
		ソーシャルワーク論Ⅰ-A	○	<p>本授業では、社会福祉士・精神保健福祉士の法的な位置づけや、ソーシャルワークの基盤となる考え方、形成過程、価値規範、倫理について理解することを目的とする。</p> <p>ソーシャルワークの価値や倫理、理念といった概念や基盤となる考え方、社会福祉士・精神保健福祉士の役割、形成過程を学ぶ。社会の中で生活する中で、問題や課題を持つ当事者の立場を尊重し、問題の軽減化や解決をめざそうとする「相談援助（ソーシャルワーク）」の意義や目的を考える。授業は講義を中心としながら、視覚教材や事例を使用し、理解を深めていく。</p>	主要授業科目
		高齢者福祉論	○	<p>本授業では、高齢者福祉についての専門的思考力、判断力を身につけるため、高齢者の定義と特性を踏まえ、高齢者とその家族の生活とこれを取り巻く社会環境について理解する。また、高齢者福祉の歴史と高齢者観の変遷、制度の発展過程について学ぶ。さらに、高齢者に対する法制度と支援の仕組みについて理解する。そして、高齢期の個性、多様性を理解するために、事例検討をとおして、社会福祉士としての適切な支援のあり方を身につける。</p>	主要授業科目
		社会保障Ⅰ	○	<p>初めて社会保障を学ぶ者に対して、「社会保障とは何か、現在どんな問題を抱えているのか」ということを示す。現代社会に生きる私たちにとって、社会保障制度は日々の暮らしに欠かすことのできない重要な存在になっているため、本授業では社会保障の発達の歴史、制度全体の体系、財政の仕組みなどの総論的なテーマと、公的年金制度の導入部分までを扱う。授業の中では、日本の制度の解説にとどまらず、できる限り外国の制度との比較も行いながら、わが国の経済や社会の仕組みと社会保障とが、非常に密接な関係にあることを理解させる。</p>	主要授業科目

専門 教育 科目	基礎 科目	健康福祉論	現代社会における健康とは、WHOも示唆する通り、身体的、精神的、社会的に満たされた状態を指す総合的概念である。人間の誕生から高齢までのライフステージをフィールドにして、「こころ」「からだ」「くらし」を総合的にとらえ健康寿命の延伸や介護予防のためには、移動機能を主とした身体機能の低下をきたすロコモティブシンドロームに対する対策のみならず、心理・精神的な問題や社会的な問題を含めて高齢者の抱える問題を包括的に捉えるフレイルという観点、筋肉を移動のための動力源としてのみでなく、広く全身状態の関連性の中で捉えるサルコペニアの視点は大変重要となる。これらを身につけ実践させるには、若いころからの様々な習慣が影響を与えることは言うまでもなく、問題点や解決方法をあげて課題の解決に必要な要素を考える力を身につけることが重要である。健康を基軸にあらゆる側面から健康を支えられるようにしたい。	
		心理学と心理的支援	本授業では、心理学的な知見や技術を学び、人を理解するために必要な知識や態度を身につけること、また、活用できる力を身につけることをめざす。福祉ニーズのある人への支援を行う際には、人を理解することが必要となる。多様化する現代社会において人のこころは複雑で、人を理解するためには多角的に考えることのできる力や様々な知識・技術が求められる。本授業では、心理学的な知見や技術の知識を学ぶとともに支援の基礎となる力を身につけることを目指す。	
		社会学と社会システム	本授業では、社会システム論の立場から、少子高齢化、産業化・都市化といった社会変動について学ぶ。社会変動によって生まれたさまざまな社会問題を、社会学の考え方から理解する。さらに、地域、家族、ライフコース・ライフサイクル、組織・集団、自己・アイデンティティについて学ぶ。そして、社会問題のとらえ方を理解するために、構築主義、ラベリング論、緊張理論、文化学習理論のそれぞれの立場について学ぶ。最後に、社会学と社会福祉学の役割分担および相互影響の関係について学ぶ。	
		社会福祉調査の基礎	本授業では、社会福祉調査の意義や方法について学び、相談援助実践において活用する力を身につけることをめざす。サービス利用者の満足度調査や地域住民のニーズ把握、アプローチの効果測定など、相談援助実践においてデータに基づいて、様々な説明を行うことが求められている。そのため、社会福祉調査を行う意味や問いつた方を理解した上で、量的調査と質的調査ともにデータの収集及び分析、結果の報告ができるようになること、また、社会調査の実施過程で生じる倫理的問題等への配慮の必要性やインターネットの活用についても理解する。	
		ソーシャルワーク論Ⅰ-B	本授業では、社会福祉士の役割を理解し、ソーシャルワーク専門職の概念と範囲について理解すること、マイクロ・メソ・マクロレベルの対象と連携性について学ぶことを目的としている。援助対象者の生活課題や福祉ニーズに対応する社会福祉援助技術の枠組みと技術相互の関連性を理解し、実践には人として援助する様々な援助活動と援助技術が必要であることを知る。そして、社会福祉専門職業としてのソーシャルワークの考え方に触れ、社会で生じている課題解決を考えられるようになる。	
		地域福祉論Ⅰ	本授業のねらいは、地域社会の現状や地域福祉の基本的な考え方について理解を深めることである。日本における多様な地域生活課題に対して、地域福祉推進の視点をもって考える力を身につける。地域福祉に関連する諸概念および現在の日本における多様な地域生活課題について、概説する。そのうえで、地域福祉における多様な主体の特性・役割や活動状況と、コミュニティワーク、コミュニティソーシャルワーク等の基礎的な方法論を学ぶ。授業は講師による講義を中心に、学生個人のワーク、授業内容に応じて少人数でのディスカッションを行う。	
		児童・家庭福祉論	本授業では、家族や家庭状況の変化、少子高齢化社会となり「子どもの育ち」を保障することが困難となる中で、「子どもの権利」を主体とし、子ども・家庭福祉に関わる社会問題を取り上げ、その支援について学ぶことを目的とする。講義の中で、子どもとその家庭を取り巻く現状や課題と子どもの育ちを保障するための基本的な考え方、それらの支援の基礎となる権利や制度・法律を理解していく。また、児童虐待やDVへの対応とその支援過程や支援内容、妊娠前から就学前などの保育や子育て支援についてについて学び、今後の子どもの福祉についての制度の全体と今後の課題を考える。	
		障害者福祉論	本授業は、障害者を取り巻く社会情勢、社会福祉制度の歴史について学び、共生社会の実現にむけた基礎知識を身につける。すべての障害者施策の基本となる障害者基本法の理念を押さえ、次に、障害者総合支援法を中心として、障害者福祉制度の仕組み、障害福祉サービスを公的に提供する仕組み、サービス提供に関わる各専門職の役割等について具体的に学ぶ。さらに、障害者雇用促進法、障害者虐待防止法、障害者差別解消法、バリアフリー新法等、障害者に関わる法制度について、それらの基本を学ぶ。また、これらの制度面だけでなく、障害のある人の障害特性と、それに伴ってどのような生活上の困難、職業上の困難が生じるのかについても学び、時に事例を取り上げて、1人の障害のある人とその家族が地域で生活していく際に、どのようなニーズが生じ、どのように公的サービスでそれらのニーズに応えていくのか、ケースマネジメントの視点と方法を身につける。	
		女性とキャリア	本授業では、企業における女性の働き方やキャリア形成について理解を深めていく。その上で、自分自身の興味関心、適性を踏まえ、自分に向いている仕事とは何か、将来どのようなキャリアを歩んでいきたいかを描き、主体的な就職活動への取り組み、適切な職業選択へと繋げていくことをねらいとする。そのために、企業における具体的な仕事とキャリア、ビジネスマナーやリーダーシップ、コミュニケーション等を広く学び、企業で働くことへの理解を促す。また、働く女性の現状と課題を踏まえ、受講者自身が具体的にどのような仕事に就き、将来起りうるライフイベントも想定した中で、どのようなキャリアを築いていくかを考える。なお、本授業は講義形式である。	

専門 教育 科目	基礎 科目	ソーシャルワーク論Ⅱ-A	本授業は、ソーシャルワークにおける人と環境の相互作用に関する理論について理解することから始める。その上で、ソーシャルワークにおける価値や倫理について学ぶ。また、ソーシャルワークの過程についてケースワーク（個別援助技術）との関係を重視しながら、援助過程に関わる知識と技術を理解する。ソーシャルワークにおける援助関係や面接技法についても学ぶ。さらに具体的な事例をとおりして、ソーシャルワークの対象者の近いと援助活動におけるソーシャルワークの基本的枠組み及び理論、利用者の複雑多様化する社会福祉ニーズに対して、相談援助活動が、どのように実践されるのかを学ぶ。	
		ソーシャルワーク論Ⅱ-B	ソーシャルワークにおける基本的な枠組みを理解しながら、利用者の複雑多様化する社会福祉ニーズに対して、相談援助がどのように実践されているのかを理解する。その上で、ソーシャルワークにおけるグループワーク（集団援助技術）について学ぶ。具体的な事例を通して、グループワークの援助過程を理解し、グループに関する知識と援助者としてのグループ支援の技法を学ぶ。更に、相談援助における援助関係や記録の技法についても学ぶ。また、ケースマネジメントの意義、目的、方法などについても学ぶ。	
		生活と文化	介護を必要とする人の生活の個性に対応するために、生活の多様性や文化の違い、社会との関わりを理解し、介護を必要とする人の生活を支援するという観点から介護サービスや地域連携など、フォーマル、インフォーマルサービスを理解することを目的としている。本授業は、多様な文化を有している介護を必要とする人の生活と文化を多角的にとらえ、個々の介護ニーズの特性を理解できることを到達目標として、介護を必要とする利用者は日本人や外国人など多様な文化を有していることから、個々の利用者の生活習慣や家族関係等の生活歴を踏まえ、そこから生じる介護ニーズ、求められる介護のあり方を考察できるような知識を教授する。授業は講義形式であるがディスカッションをしながら考察を深める。	
		公的扶助論	近代的な社会保障制度を整えた国々において、社会保障の中心は年金や医療保険といった社会保険の方にシフトしてきているものの、現在においては国民の生活を支える「最後のセーフティネット」としての公的扶助の重要性は、いささかも低下していない。特に近年においてはコロナ禍によって職を失った若年層が多数生活保護を受給するなど、これまでとは違った新たな制度の展開が見られる。日本の生活保護制度は、一方で最低限度の生活を確実に保障しつつ、他方では「いかんして自立に向けた支援を効果的に行なっていくのか」という、極めて難しい課題に直面させられている。本授業では、このような現代社会における貧困問題の実態を直視し、生活保護法を中心とする低所得者対策が今後どのように運用されていくべきなのかについて解説していく。	
		刑事司法と福祉	犯罪者の処遇の分野のうち、本授業では、主として「社会内処遇」の在り方について論じていく。近年、わが国では、高齢者による犯罪や軽度の知的障害・発達障害をもった者による犯罪の増加が指摘されている。これらの犯罪者の処遇においては、矯正施設を出てからの福祉・医療・雇用などの領域における支援が効果的に行なわれるかどうか、再犯を防止するうえでの重要なカギとなってくる。このように刑事司法と社会福祉援助とが緊密に連携しつつ犯罪者の社会内処遇を進めていくことが、今後の日本の刑事政策における大きなテーマであるといえる。したがって、この領域では、これからますます福祉専門職に期待される役割が大きくなっていくと思われる。本授業では、このような更生保護制度の概要について解説していくとともに、その中で福祉専門職に何が期待されているのかについて問題提起を行っていく。	
		発達と老化の理解	人間の成長と発達の過程において、特に老化に伴う身体機能の変化や心理的变化、社会的変化の特徴を学ぶことをねらいとし、ライフサイクルの特徴に応じた生活を支援するために必要な基礎知識を習得することを目的としている。本授業では、人間の成長と発達の観点から人の一生について理解して説明できること、老化に伴う心身機能の変化を理解し説明できること、老化に伴う心身機能の変化を踏まえ援助に必要な基礎知識を理解し説明できることを到達目標とし、人間の発達段階と発達課題、老年期の特徴と発達課題、老化に伴う心身の変化・疾患と日常生活等について教授する。本授業は講義形式ではあるが、ディスカッションの時間も設ける。	
		障害の理解	障害のある人の心理や身体機能、社会的側面に関する基礎的な知識を修得するとともに、障害のある人の地域での生活を理解し、本人のみならず家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点を修得することを目的としている。本授業では、障害のある人の身体的及び心理的影響についての基礎知識を習得し、障害のある人や家族への支援や関連する多職種との連携のあり方を理解することを到達目標とし、講義形式により身体障害、精神障害、知的障害、精神障害等、様々な障害のある人の心理的・機能的変化と生活への影響について教授する。	
		老年医学	本授業では、加齢に伴う生理学的変化を基礎にした疾病や障害について理解し、高齢者特有の健康問題の特徴について学ぶ。老年医学の対象疾患は非常に多岐にわたり、なかでも認知症、動脈硬化性疾患、高齢者の呼吸器疾患（嚥下性肺炎、慢性閉塞性肺疾患COPD、間質性肺炎、肺癌など）、骨粗鬆症、圧迫骨折、睡眠時無呼吸症候群などについて理解が求められる。 高齢者の多くは複数の疾病、障害を持っていることが多く、また治療薬についても多剤服用することの相互作用、消化・吸収の加齢変化など考慮しなければならぬ。そのうえで高齢者の健康増進、自立支援に向けて何が適切かを学ぶ。	
		介護とケアマネジメント	本授業科目のねらいは、介護を必要とする人の生活を支えるしくみについて理解を深めることである。高齢者・障害者の自立支援において、フォーマル・インフォーマルな支援を適切に組み合わせるケアマネジメントの考え方を身につける。自立支援の考え方や、利用者理解の視点であるICFを概説したうえで、高齢者・障害者に関わる福祉サービスの基本的な制度を学ぶ。専門職だけではなく、家族や地域社会も含めたサポートネットワーク構築のため、ケアマネジメントの方法論を学ぶ。授業は講師による講義を中心に、学生個人のワーク、授業内容に応じて少人数でのディスカッションを行う。	

専門教育科目	基礎科目	介護過程 I	厚生労働省が示した「求められる介護福祉士像」の中に専門職として自律的に介護過程の展開ができるという項目がある。介護福祉士は、科学的根拠に基づいて介護過程展開の中で介護実践を行うことが専門性の一つであり、高い倫理性をもって尊厳と自立を支えることを基本として本人が望む生活を支援することに基づき、一連の介護過程の展開を理解することを目的としている。本授業は講義形式であるが、講義に加えて、グループワークを通して介護過程の理解を深めるような展開としており、介護過程の一連の流れを理解することを到達目標としている。身の回りにおける生活課題を例に挙げ、介護過程の意義と基礎的理解のため、介護過程のプロセスについて専門基礎を教授する。
		こころとからだのしくみ A	介護を必要とする人の生活支援を行うため、介護実践の根拠となる人間の心理、人体の構造や機能を理解することを目的としている。本授業では、こころとからだの基本的なしくみについて説明でき、機能の低下・障害が身体に与える影響について理解し実際の介護に役立てることを到達目標としている。本授業は、講義形式であり、人間の心理や人体の構造・機能を理解するための基礎的な知識、特に人間にとって重要な「基本動作」「活動」「移動」について理解し、機能低下や障害のある人のこころや移動に必要な支援方法の根拠を中心に教授する。
		こころとからだのしくみ B	介護を必要とする人の生活支援を行うための基礎知識として生活場面に応じたこころとからだのしくみおよび機能低下や障がい生活に及ぼす影響について理解することを目的としている。本授業は、身じたく、食事、排泄、入浴、休息・睡眠に関連したこころとからだの基礎知識を駆使し、実際の介護に役立てる。また、終末期における具体的な身体の変化について説明できることを到達目標としている。授業は講義形式であり、身じたく、食事、排泄、入浴、休息・睡眠の生活場面ごとにこころとからだのしくみや機能の低下、障害が身体に及ぼす影響、変化に対する基礎知識および観察のポイント、人生の最終段階のケアに関連したこころとからだのしくみの基礎知識について教授する。
		コミュニケーション技術 A	介護実践に必要な人の理解や援助の関係、援助的コミュニケーションに求められる態度・知識・技術、及び心身機能に障害のある利用者とのコミュニケーションの技法の実際を理解し、技能を高めることを目的としている。本授業は、基本的なコミュニケーション技法を習得し、コミュニケーションを困難にする障害のある利用者の特性に応じた技法を習得することを到達目標としている。授業形態は講義を中心とするがコミュニケーション技法を高めるためにグループワークやディスカッションを行う。人間関係におけるコミュニケーションの基本的理解を踏まえ、対象者との支援関係の構築やチームケアを実践するためのコミュニケーションの意義やコミュニケーション技法を教授する。
		福祉レクリエーション論	ウェルビーイングの実現の一環として、楽しさや生きがいを求める当事者の人間的な営みが原理としておかれていることが本授業のねらいである。主たる内容として、楽しさや生きがいを求める意欲が高まり行動が生じる過程のダイナミズムを取り上げる。また、福祉レクリエーションと生活全般の活性化の関係性も取り上げる。動機づけ、ICFを利用した対人援助等の研究成果を援用し原理を理論的に理解する講義と、少人数でのケース分析やロールプレイなどで当事者の視点で原理を理解する体験的学習とを組み合わせる授業を実施する。こうした授業スタイルを通して、福祉や介護の現場等において福祉レクリエーションを援助する際に、根拠を持って当事者に寄り添える実践力が身につく。また、当事者を尊重した援助の見通しや目標を設定できる実践力も身につく。あわせて、主体的、協働的な課題解決能力やプレゼンテーション能力の涵養も期待される。
		福祉レクリエーション援助論	本授業は、楽しさや生きがいを求める意欲が高まり行動が生じる過程のダイナミズムを取り上げる。また、生活全般の活性化の関係性も取り上げるとともに、それらを援助していく立場としての様々なものの見方、捉え方を理解することにある。本授業は動機づけ、ICFを利用した対人援助等の研究成果を援用し原理を理論的に理解する講義と、少人数でのケース分析やロールプレイなどで当事者の視点ならびに援助する側の視点で原理を理解する体験的学習とを組み合わせる授業を実施する。こうした授業スタイルを通して、福祉や介護等の現場において援助する際に、根拠を持って当事者に寄り添える実践力が身につく。また、当事者を尊重した援助の見通しや目標を設定できる実践力も身につく。あわせて、主体的、協働的な課題解決能力やプレゼンテーション能力の涵養も期待される。
		社会的養護論	本授業は、子どもの権利を土台とし、社会的養護、ひとり親家庭、子どもの貧困、障害児支援、虐待などさまざまな子どもの福祉の分野を具体的に取り上げ、それぞれの分野の実践的に支援を考えていく。特に、里親や養子縁組に関する知識や児童福祉施設の実践を深く学ぶ。その中で、子どもたちの自尊心や主体性を回復するための具体的方法論について主として取り上げる。子どもの福祉の原理、子どもの権利を理解したうえで、それぞれの分野の基本的な知識を習得し、さまざまな子ども家庭福祉の中の専門職、施設、支援について学ぶ。
		多文化共生論	本授業では、人々が生活する上で抱える諸課題にソーシャルワークが何ができるのか、日本の社会福祉制度施策の枠組みを超え、「国際」の視座に立ち複眼視点をもって福祉（ソーシャルワーク）を学ぶ。授業は講義とアクティブ・ラーニング（グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション）を活用し実施される。グローバルな課題及び解決のために活動している人々・団体の実践を学ぶとともに、これからの日本の社会福祉専門職に必要とされる多様性を尊重する視点を養うために、日本以外のソーシャルワークに関する文献を調べたり、海外事情を調べて授業内で共有する。
		多文化理解コミュニケーション	福祉現場では、外国人人材の受け入れや在日外国人の高齢化が進んでいる。そこで、本授業では、多文化、多言語社会の在り方や信頼関係構築のためのコミュニケーションについて学ぶ。文化的背景や価値観の異なる人々の事例を取り上げ、文化の違いによる考え方や言語・非言語コミュニケーションの多様性や重要性について体系的に学ぶ。多文化理解コミュニケーションの基本的な知識を習得し、グループディスカッションやシミュレーションを通して、多文化の人々との効果的な言語・非言語コミュニケーションが取れる実践力を培う。本授業は、講義を中心に、学生のワークやグループディスカッションを行う。

専門教育科目	基礎科目	ICTの理解	福祉分野におけるICT（情報通信技術）やAI（人工知能）、介護ロボット等の先端技術について理解を深める。ICTやAI、介護ロボット等の利活用の意義を理解し、福祉分野における効果的な導入・推進に向けて調整できる力を身につける。ICTやAI等の基礎的な知識について概説するとともに、日本の福祉分野におけるICTやAI、介護ロボット等の利活用の現状および課題を学び、先進事例をもとにその意義や効果を考察する。本授業は講義を中心に、学生のワーク、グループディスカッションを行う。	
	応用科目	医療福祉論	医療機関にソーシャルワーカーのいる意味と意義、その専門性を学ぶ。病者とその家族への相談援助に必要な知識や技術を理解し、他職種や他機関との連携の必要性とその方法を学び、保健医療サービスの全体を理解する。また、医療ソーシャルワーカーの専門性は何か、固有の視点で実践するあるべき姿とは何かなどを中心に、患者の側に立脚した目で見つめることのできる専門性についてふれたい。その上で、専門職の役割と実際、他職種協働についての理解を深める。更に、相談援助活動において必要となる医療保険制度や保健医療サービスについて理解する。	
		社会保障Ⅱ	「社会保障Ⅰ」の内容を受けて、さらに年金、医療保険、介護保険、労働保険の各社会保険制度の具体的な内容について解説していく。近年、社会保険制度の大きな改革が続いて行なわれているが、これらの改革はどのようなねらいで行なわれているのか、これらの改革によって国民の生活にどのような変化が生じているのかという視点から、社会保障の最前線の問題について解説していく。とりわけ、急速に進む少子高齢化の流れを受けて、各制度を支える財政基盤をどのように整えていくのかというところに重点を置いた解説を行う。	
		ソーシャルワーク論Ⅲ-A	本授業では相談援助の様々な実践モデルについて理解することを主眼とする。また、相談援助の過程とそれにかかわる知識と技術について理解する。さらに、具体的な事例をとおして、援助活動の基本的枠組み及び利用者の複雑多様化する社会福祉ニーズに対して、相談援助活動が、どのように実践されるのかを学ぶ。ソーシャルワークの理論を理解し、事例を理論から分析する方法を理解する。自分なりのアセスメントができるようになることを目標とする。	
		ソーシャルワーク論Ⅲ-B	本授業では、ソーシャルワークのうち、人々の地域生活や住みよい地域づくりを支援するコミュニティワークについて学ぶ。地域生活の姿をあらためて考え、その人らしい暮らしを支援するための方法・技術、その理論の歴史的展開と今後の展望、コミュニティワークの実践例などについて学習する。この学習を通して、ともに暮らす地域づくりの視点と方法を身につけること、人々の暮らしの様相に関心を持ち、寄り添っていきける人材を育成することを目的とする。	
		権利擁護と成年後見制度	本授業では、成年後見制度の種類、内容について理解を深め、社会人として成年後見制度の知識を伝えるようになることをめざす。そのために、相談援助活動と法（日本国憲法の基本原理、民法・行政法の理解を含む）とのかわりについて学ぶ。そして、相談援助活動において必要となる成年後見制度（後見人等の役割を含む）やその実際について、事例検討をとおして理解する。さらに、社会的排除や虐待などの権利侵害や認知症などの日常生活上の支援が必要なものに対する権利擁護活動の実際について学び、適切な課題解決方法を身につける。	
		地域福祉論Ⅱ	本授業のねらいは、地域福祉論Ⅰを履修したうえでより発展的かつ応用的に、地域福祉を推進する方法論や政策について理解を深めることである。日本における地域共生社会の実現に向けて、包括的支援体制の整備に関する政策を理解し、地域福祉の理論や方法をもって地域生活課題に向き合う力を身につける。地域福祉に関連する政策動向や財源について概説する。地域福祉計画や災害福祉等と地域福祉推進の関連を学ぶ。学生自身が個から地域への一体的な支援事例を考えることで、地域福祉を捉える視点を学ぶ。授業は講師による講義を中心に、学生個人のワーク、授業内容に応じて少人数でのディスカッションを行う。	
		福祉サービスの組織と経営	本授業では、経営学の知見にもとづくマネジメントの基礎理論と福祉サービスにおける運営管理を学んでいく。経営学における基礎理論について理解し、またそれらを用いて現実の組織や社会の動きを分析できるようになる。そして、福祉サービスの経営と管理運営について理解する。福祉サービス事業者・施設に就職した場合、組織マネジメントの基本を理解・実践し、リーダーシップがとれることが求められる。さらに、福祉サービスに係る組織や団体について理解し、将来のキャリア形成を考えられるようになることをめざす。	
		介護予防	介護予防の考え方を正確に理解することをねらいとして、リハビリテーションの基礎知識を学習するとともに、介護とリハビリテーションとの連携・協働を実践的に理解できる基礎能力の習得とともに多様な人々が連携する地域社会のあり方について考察できる応用力を身につけることを到達目標としている。授業形態は講義形式であり、エンパワメントとの観点から、個々の状態に応じた自立を支援するための環境整備や介護予防について、ICFの視点に基づくアセスメントを駆使した自立支援について、多職種とのチームアプローチ方法について、自立支援の方法や社会生活活動能力の維持・拡大のために必要な介護予防方法について教授する。	
介護と自立支援	自律と自立、自立支援の概念を理解し、介護が必要な人の尊厳の保持や自立した日常生活を営むことができるように、権利擁護、身体的・精神的・社会的な自立についての基礎知識を学ぶことを目的としている。本授業は、自律と自立、自立支援の概念を含めた基礎知識を理解し、幅広い知識と応用力を身につけることを到達目標とし、自律と自立の意義、介護を必要とする人との自律を阻む要因について、多様な側面からとらえて介護における自立支援のあり方について講義の形態で教授する。			

専門 教育 科目	応用 科目	介護とリスクマネジメント		介護におけるリスクマネジメントの必要性を理解し、安全の確保のための基礎的な知識や事故への対応を学ぶ。また、介護従事者自自身が心身ともに健康で、介護を実践するための健康管理や労働環境の管理について理解することを目的としている。本授業は、介護におけるリスクマネジメントの考え方や対応方法等の応用力を身につけるため、講義とグループワークを組み合わせた授業を展開する。介護におけるリスクマネジメントの考え方を理解し、組織全体で取り組む重要性、事例を通して、安全な暮らしの支援が、利用者の尊厳の保持に結びつくことの重要性、事故防止・予防のための対策、感染対策、介護従事者の健康と安全を守る技術や労働環境の整備方法について教授する。	
		コミュニケーション技術B		他職種協働（チームアプローチ）を実践・促進し利用者主体の介護に役立てることをねらいとし、チーム内のコミュニケーションの方法を習得することを目的としている。本授業は、介護実践上のコミュニケーションの意義と内容、具体的な技法を身につけることを到達目標とし、講義とグループワークやディスカッションを組み合わせた授業を展開する。専門基礎に加え応用力を身につけるため、介護従事者のチーム、他職種と連携を図るチームそれぞれの場面において求められるコミュニケーションの意義とその技法、介護におけるチーム内でのコミュニケーション（記録、報告、会議等）を中心に、組織内・他職種との役割分担の上で求められるコミュニケーションのあり方とその留意点や方法について教授し技術指導を行う。	
		認知症の理解		認知症ケアの歴史や理念を含め、認知症を取り巻く社会的環境について学ぶことをねらいとし、認知症の原因となる疾病及び段階に応じた心身の変化や心理状態を理解し、地域で支えるサポート体制や多職種連携・協働による支援の基礎的な知識を学ぶことを目的としている。本授業は、認知症の予備軍である軽度認知障害（MCI）を含め、認知症の人を中心に据え、本人や家族、地域の力を活かした認知症ケアについて理解するための基礎的な知識と応用力を身につけるため、認知症の基礎知識および、認知症のある人が体験することや意思表示が困難な特性を理解し、本人や家族への支援だけではなく、認知症の人を地域で支えるために、地域住民ができることについて授業講義形式で教授する。	
		医療的ケアⅠ		医療的ケアが必要な人の安全で安楽な生活を支えるという観点から、医療職との連携の元で医療的ケアを安全・適切に実施できる等必要な知識を習得することを目的としている。本授業は、介護福祉士が医療的ケアを行うようになった背景・法律を理解し、喀痰吸引及び経管栄養に必要な解剖生理の理解をした上でリスクを踏まえ、喀痰吸引を行う基礎知識を習得することを到達目標としている。医療的ケアの実施に関する制度の概要、医療的ケアと関連付けた個人の尊厳と自立、医療的ケア体制の倫理上の留意点、医療的ケアを実施するための感染予防、安全管理体制等の基礎知識、喀痰吸引の手順と留意点について教授する。	
		医療的ケアⅡ		医療的ケアが必要な人の安全で安楽な生活を支えるという観点から、医療職との連携の元で医療的ケアを安全・適切に実施できる等必要な知識を習得することを目的としている。本授業は、経管栄養に関する基礎的な知識を習得することを到達目標としており、経管栄養（胃ろう又は腸ろうによる経管栄養・経鼻経管栄養）を実施する上で必要な消化管の解剖生理、手順と留意点、リスクと対応方法、栄養剤の種類や特徴とリスクについて教授する。	
		医療的ケアⅢ		医療的ケアが必要な人の安全で安楽な生活を支えるという観点から、医療職との連携の元で医療的ケアを安全・適切に実施できる等必要な知識と技術を習得することを目的としている。本授業は、医療的ケアⅠ・Ⅱで学んだことを踏まえて口腔内吸引、鼻腔内吸引、気管カニューレ内部の吸引、胃ろう又は腸ろうによる経管栄養、経鼻経管栄養の技術を確実に習得することを到達目標としている。本授業は実質時間として5時間講義17.5時間以上の演習で構成している。演習では各項目それぞれ5回以上の演習を行い、チェック項目すべてに合格する必要がある。さらに救急蘇生法の演習も1回行う。	講義 5時間 演習 55時間
		女性支援論		困難を抱える女性の支援について具体的に学ぶ。女性支援に対する個別援助の内容とプロセスについて理解する。女性支援の実態等を通じ、援助にかかわる基本的技術について理解し、習得への導入とする。また、ソーシャルワーク実践における理論・モデルの多様化動向とその内容と女性支援の状況を結び付けて考える。DVや犯罪被害者等の法的内容や多職種連携の実態を理解する。特に相談援助における人と環境の交互作用に関する理論について理解し、女性支援を行う上での、社会福祉援助活動の価値・倫理を学ぶ。	
		社会福祉学特別講義		社会福祉制度の仕組みを理解し、法制度の改正、新たな法律、過去3年の国家試験の出題傾向を戦略的に考えながら、出題が予想される重要項目にフォーカスし重点的に取り上げていく。また、答練を実践し、解いた問題を関連事項とリンクさせて応用範囲を広げる。そして、本試験に向けてゆるぎない実力を培う。また、授業内でインプットとアウトプットを行い記憶の定着を図る授業設計を行い、直前期に何を勉強すべきかを明確に線引きし、試験当日まで最も有効なラストスパートを先導する。	
		介護福祉学特別講義		介護福祉士国家試験の出題範囲（領域「人間と社会」、領域「介護」、領域「こころからだのしくみ」及び「医療的ケア」）について学び、介護福祉士国家試験合格に必要な問題解答力を培うことを目的としている。介護福祉関連制度の仕組みを理解し、法制度の改正、過去問及び模擬問題に取り組むことにより、介護福祉士国家試験に合格できるようになることを目標とする。本授業は講義を中心に、学生個人のワーク、グループディスカッションを行う。	
		実践 科目	社会福祉学基礎セミナーⅠ	○	本セミナーでは、社会福祉を学ぶにあたり「社会福祉とは何か」に焦点を当て、その目的、理念、視点、権利など、学生一人ひとりが自ら考え検討を加えられる演習形式の授業である。特に、入学に当たって抱いていた「社会福祉」に対する興味関心を、より明確にとらえていくことを授業のねらいとする。また、大学での学習を深める意味でも到達目標として、広く社会福祉について、その概念や理念が理解できること、福祉先進国との比較や外国人労働者への支援など、国際化を意識した幅広い福祉の学びについて進んで取り組む。多様な人々との関わりや体験学習を学ぶにあたり、疑問点や問題点を明かにしようとする努力をすること、学びを通して、対象とする人々の理解を深めようと自ら努力できることを修得させる。

専門 教育 科目	実践 科目	社会福祉学基礎セミナーⅡ	○	本セミナーでは、福祉専門職として活動する際に必要な基礎的な知識や倫理を身に付けるとともに、社会福祉の研究課題を持ち、それに取り組む方法を学ぶ。その過程で、基本的な文献の検索方法、論文の読み方、まとめの方法等を学び、今後の大学生活の中でレポートや卒論を書くための基本的な資質を体得させる。高度情報化時代に対応できるように、様々なツールを使用した研究・分析の方法を理解する。また、授業の後半では、クラスをいくつかのグループに分けて、グループで話し合った研究テーマに沿って、学習を進めていく。最後はクラス内で発表を行ないますので、見やすい資料の作り方や、聞きやすいプレゼンテーションの方法等についても学ばせる。さらに、グループ学習を通じて、コミュニケーション能力や、質問する力、聞く力を総合的に養う。	主要授業科目
		社会福祉学セミナーⅠ	○	本セミナーでは、福祉専門職として活動する際に必要な基礎的な知識や倫理を身に付けるとともに、社会福祉の研究課題を持ち、それに取り組む方法を学ぶ。その過程で、基本的な文献の検索方法、論文の読み方、まとめの方法等を学び、今後の大学生活の中でレポートや卒論を書くための基本的な資質を体得する。また、授業の後半では、クラスをいくつかのグループに分けて、話し合った研究テーマに沿って学習を進めていく。多様な人々と共生・協働するためのコミュニケーション能力を身につける。また、高度情報化時代に対応できるように、様々なツールを使用した研究・分析の方法を実践する。最後はクラス内で発表を行ない、見やすい資料の作り方や、聞きやすいプレゼンテーションの方法等についても学ぶ。さらに、グループ学習を通じて、多様な人々とのコミュニケーション能力や、質問する力、聞く力、情報分析の手法を総合的に養う。	主要授業科目
		社会福祉学セミナーⅡ	○	本セミナーでは、卒論作成にむけて、各自の問題意識を深める。自分の関心のあるテーマを選定し、研究の方法を学びながら卒業論文を執筆するための指導を行う。各自の問題意識を深めるため、先行研究を調べる。先行研究の到達点を明らかにしたうえで、自分の意見を述べていく。自分の意見を述べるトレーニングでは、エビデンスを示しながら、プレゼンテーション能力を身につける。さらに、情報分析の技法を理解し、主体的な課題解決能力、実践力を養う。その上で、研究倫理を理解し、遵守することができるようにする。こうした取り組みをもとに、問題意識の醸成とプレゼンテーション能力を高める。	主要授業科目
		社会福祉学セミナーⅢ	○	本セミナーでは、卒論作成にむけて各自の問題意識を深めることをねらいとする。各自の問題意識を深めながら、先行研究を調べ、先行研究の到達点を明らかにしたうえで、自分の意見を客観的に述べられるようになることをめざす。これにより主体的な課題解決能力、実践力を培う。その上で、卒論作成にむけた取り組みとしては、根拠に基づく自らの考えをまとめる論理的思考ができるようになること。そうした取り組みが、論文として形成される。さらに、論文を発表して、他者に伝えることができる力を身につける。	主要授業科目
		社会福祉学セミナーⅣ	○	卒論作成は、大学での学びの集大成として位置づく。各自が関心のあるテーマを設定し、構想を立て、文献講読や実地調査を行い、そして執筆するという段階をやりぬくことは、貴重な体験となる。これまでの研究活動を元に、各自の掲げる研究テーマの先行研究、調査活動、研究のまとめ、報告ができるようになり、卒業論文執筆に繋げる。卒業論文執筆にあたり、適切な論文執筆のルールに従って自らの論考を執筆できるようになる。また、論文執筆作業を通し、自らの研究に関して最終報告(プレゼンテーション)ができるようになる。	主要授業科目
		卒業論文	○	卒論作成は、大学での学びの集大成として位置づく。各自が関心のあるテーマを設定し、構想を立て、文献講読や実地調査を行い、そして執筆するという段階をやりぬくことは、貴重な体験となる。これまでの研究活動を元に、各自の掲げる研究テーマの先行研究、調査活動、研究のまとめ、報告ができるようになり、卒業論文執筆に繋げる。卒業論文執筆にあたり、適切な論文執筆のルールに従って自らの論考を執筆できるようになる。また、論文執筆作業を通し、自らの研究に関して最終報告(プレゼンテーション)ができるようになる。	主要授業科目
		ソーシャルワーク実習指導		本授業では、相談援助実習で実習生に求められる知識、技術、倫理について、個人やグループでの事例検討等を通して具体的なかつ実際に理解できるようにする。そして、社会福祉士として求められる資質、技術、倫理、自己覚知等を学び、実習に臨めるようにする。具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し、理論化し、体系立てていくことができる能力を養う。実習の基本的な準備を通して、相談援助実習Ⅰに臨むための必要な力を身につける。	
		相談援助演習Ⅰ		本授業は、演習を通して、自己理解、他者理解をおこないながら、ソーシャルワークに必要な基本的なコミュニケーション技術を学ぶ。事例検討やロールプレイを通じて、面接の基本的スキルを身につけることを目的としている。また、事例を通してソーシャルワークの展開過程を演習で学んでいく。自己理解と他者理解についてのお互いの気持ちや考えを知り、ソーシャルワークの知識と技術に係る他の科目との関連性を踏まえ、社会福祉士として求められる基礎的な能力を涵養する。	
		相談援助演習Ⅱ		本授業は、さまざまな事例に対してのソーシャルワークの展開過程において用いられる、知識と技術を実践的に理解することを目的としている。また、ソーシャルワークの実践に必要なコミュニケーション能力を養うとともに、ソーシャルワークの価値規範と倫理を実践的に理解していく。この演習では特に、虐待、障害者に関する事例を取り上げ、それぞれのソーシャルワークの展開場面や、アウトリーチ、ネットワークキング、チームアプローチなどを使用した事例を使用し、ロールプレイや事例検討を行う。	
		相談援助演習Ⅲ		本授業は、社会福祉士の専門的援助技術及び関連援助技術について、具体的な事例及びロールプレイ等を通して、ソーシャルワーク実践に求められる知識と基本的な相談援助演習の習得を目的としている。特に、グループワーク(集団援助技術)に関する理解と技術の習得を意識する。その上でソーシャルワークの展開過程について目的・方法・技術・社会資源の実際を理解し、自ら実践できる技術を修得する。具体的な相談事例を用いて、グループワークの意味、意義、ソーシャルワーカーとしての援助の方法について実践的に修得する。	

専門 教育 科目	実践 科目	相談援助演習Ⅳ	本授業では、地域課題とその対応策について考察することにより、さまざまな地域の住みにくさ、課題解決策を提示できるようになることをめざす。ここでは、主に地域の生活課題の解決方法について学ぶ。そのために、自分が住む自治体の基礎データを調べ理解する。さらに、地域の実情について、同程度の人口規模の自治体との比較から理解を深められるようにする。そして、先進事例とその取り組みについて、基本情報、地域福祉計画等で調べながら、後半ではグループに分かれ多摩市の10エリアの地域課題をフィールドワークを通して実態的に理解し、課題抽出と解決策を提示できるようにする。	
		相談援助演習Ⅴ	本授業では、相談援助に関わる知識や技術について、受講生の現場実習等を中心とするこれまでの体験を一般化・理論化し、将来の現場実践に活用できる形で習得していくことを目指す。すなわち、受講生が相談援助の現場で遭遇した出来事等を思い返して、その背景にある福祉専門職としての価値や倫理の視点、あるいはそこで実際に活用されている制度や社会資源等についても一度見直し、それを理論的に再構築する作業を行う。具体的には、授業中から提示される事例を題材として、その対応方法について小人数のグループで議論し、各グループの議論の到達点を全員の前で発表するという作業を繰り返す。このような学習を通じて、ひとつの問題に対して多様なものの見方があることや、福祉専門職として身につけておくべき知識にはどのようなものがあるかを理解することができる。	
		相談援助実習事前指導	本授業は、社会福祉士取得のための実習に臨むための基礎知識、技術等を身につけることをめざす。実習に必要な基礎知識の習得、実習に向けての目的意識の向上と整理、実習を効果的に行うための実習計画書の作成、等の実習事前指導を行う。また、福祉現場で求められる職場マナーや社会人としての常識等に関して指導を行う。また実習日誌の書き方についても詳しく指導します。授業の序盤では、昨年度同じ分野で実習を行なった先輩の体験を聞いて現場実習のイメージを固め、実習計画書の作成を行う。	
		相談援助実習事後指導	本授業では、実習を振り返り、グループ内で経験したことを理論的に統合できるようにしたり、指導者から評価を受け、自分を見つめ直し、成長につなげられるようになることをめざす。そのため、実習終了後の振り返りを行い、実習で学んだ知識の確認と整理、今後の学習課題の発見、事例検討を通じた考察などを行う。講義では、実習報告とそれに基づくグループ検討、個別事例検討、いくつかの共通テーマを設定した援助のあり方についての考察などを行っていく。	
		相談援助実習Ⅰ	相談援助実習Ⅰは、実習の入門的な位置づけとなる。60時間の相談援助実習を通して、相談援助に関わる知識と技術について具体的かつ实际的に理解し、実践的な技術を身につけることをめざす。さらに、関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的な内容を実践的に理解する。多様な福祉施設、機関等において実習を行うことで、利用者の理解、ニーズの把握、権利擁護活動の理解、エンパワメントの理解を実習において行う。相談援助実習Ⅰでの経験を踏まえ、実習Ⅱでさらに発展的に学びを促す。2年次に8日間（1日7.5時間×8日＝60時間）の実習を想定する。ただし、状況によって3年次以降での履修もあり得る。	
		相談援助実習Ⅱ	相談援助実習Ⅱは、基礎的な実習を経験した者がさらに学びを深めるために行う応用的、積み上げ的な位置づけとなる。180時間の相談援助実習を通して、相談援助に関わる知識と技術について具体的かつ实际的に理解し、実践的な技術を身につけることをめざす。さらに、関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的な内容を実践的に理解する。福祉施設、機関等において実習を行うことで、利用者の理解、ニーズの把握、権利擁護活動の理解、エンパワメントの理解を実習において行う。3年次に24日間（1日7.5時間×24日＝180時間）の実習を想定する。ただし、状況によって4年次での履修もあり得る。	
		生活支援技術A－Ⅰ	ICFの視点を生活支援に活かすことの意義を理解し、心身の状況に応じた自律・自立を尊重し、生活の豊かさや心身の活性化のための生活支援技術の基礎を身につけることを目的としている。本授業は、福祉用具と自立について説明でき、ベッドメイキングが時間内に確実にできること、安全で安楽な体位について理解し工夫することができることを到達目標とし、グループ学習や演習を中心として展開する。ICFの視点を生活支援に活かす方法、自立に向けた居住空間の環境整備、住まいの多様性、ICFの視点から福祉用具を活用した自立支援の在り方について教授する。なお、居住環境の整備としてベッドメイキングについても教育の内容に含めている。	
		生活支援技術A－Ⅱ	人々が健康な日常生活を過ごすためには、対象者の能力を活用・発揮し、自立に向けた生活支援技術の基礎的な知識を身につけて実践できる能力を育成することを目的としている。本授業は、グループでの演習を通して、日常生活を過ごすために必要不可欠な衣食に関する基本的な知識を学び、さらにさまざまな生活課題を抱えた人々と共生できる知識を身につけることを到達目標としている。家事支援の基本となる、栄養や調理に関する食生活に関すること、被服管理に関することについて教授する。	
		生活支援技術B	人々が健康な日常生活を過ごすためには、対象者の能力を活用・発揮し、自立に向けた生活支援技術の基礎的な知識を身につけて実践できる能力を育成することを目的としている。本授業は、グループでの演習を通して、日常生活を過ごすために必要不可欠な衣食に関する基本的な知識を学び、さらにさまざまな生活課題を抱えた人々と共生できる技術を身につけることを到達目標としている。演習内容は、高齢者のための形態別調理方法や縫製の基本についての演習指導を行う。	
		生活支援技術C	生活行為を成立させるための支援ができる移乗・移動技術を習得することを目的としている。本授業は、グループによる学習・ディスカッション及び演習形態により自立に向けた移乗・移動の介助・みじたくの介助についての技術を習得することを到達目標としている。高齢や障害があっても、生活行為を自立に向けてするためには、利用者本人の意欲や意思が重要となるため、目的を持った移動・移乗、目的に合わせた衣服の選択と整容や衣服の着脱、生活の楽しみである食事についてなど、アセスメントと介助方法について教授し、技術指導を行う。	

専門 教育 科目	実践 科目	生活支援技術D	介護を必要とする人の日常生活における入浴・清潔保持、排泄、休息・睡眠の重要性を理解し、尊厳の保持、自立支援を踏まえた生活支援技術を習得することをねらいとして、リスクを予測したうえで個々の生活課題にあつた入浴・清潔保持、排泄、休息・睡眠への安全で安心な生活支援技術の方法を学ぶことを目的としている。本授業はグループ学習による演習の形態としており、高齢や障害によって日常生活行為に支障のある人への、入浴・清潔保持、排泄、休息・睡眠への介護について基本技術を学び、実践できるようになることを到達目標としている。ペーパーシュミレーションを用いた技術の応用を含めて、具体的な身体補保清の基本技術として全身清拭、入浴介助、様々な方法を用いた排泄の介助について教授し、技術指導を行う。	
		生活支援技術E	多様な人の「死」や「生」のありかたに関わる介護福祉士にとっては、この多様性を理解しておくことは重要であり、人生の最終段階の人に対する介護福祉士としてのケアの視点を育成することを目的としている。本授業は、ディスカッションやグループワークを活用した演習の形態であり、多様な死生観を述べるができることを到達目標としている。人生の最終段階にある人の多様な現状や価値観の違い、安楽死と尊厳死、ACP、「質の高い死（QoD）」と「質の高い生（QoL）」、多職種との連携、死を迎えた人へのケアについて教授する。	
		介護過程Ⅱ-A	介護を必要とする人がより良い日常生活を送るためには、生活上の課題の明確化や根拠に基づいた適切な支援が必要である。本授業では介護過程の実践的展開を行い、介護を必要とする人の心身の状態や状況を踏まえた自立に向けた介護過程の展開方法について習得する。既習の専門知識・技術を用いてアセスメント、介護計画の立案、実施、評価という一連の過程を展開することができるようになる。さらに、介護過程の展開を通し、根拠に基づく介護を理解するとともに、その人らしい生活を実現するための個別ケアについて説明できる。本授業は、演習形式であり、学生の個人ワーク、グループディスカッション、プレゼンテーションを行う。	
		介護過程Ⅱ-B	介護を必要とする人がより良い日常生活を送るためには、生活上の課題の明確化や根拠に基づいた適切な支援が必要である。本授業では介護過程Ⅰ及び介護過程Ⅱ-Aを踏まえ、事例（複雑な情報）を用いた実践的展開を行い、介護を必要とする人の心身の状態や状況を踏まえた自立に向けた介護過程の展開方法について習得する。介護実践における介護サービス計画や協働する他の専門職のケア計画と個別介護計画との関係性、チームとして介護過程を展開する意義や方法を理解する。介護を必要とする人を仮定したペーパーシュミレーション（複雑な事例）から全体像を把握し、介護過程を展開する構成要素に沿って、一人で展開できる。本授業は、演習形式であり、学生の個人ワーク、グループディスカッション、プレゼンテーションを行う。	
		介護過程Ⅲ	厚生労働省が示した「求められる介護福祉士像」の中に専門職として自律的に介護過程の展開ができるという項目がある。介護福祉士は、科学的根拠に基づいて介護過程展開の中で介護実践を行うことが専門性の一つであり、高い倫理性をもって尊厳と自立を支えることを基本として本人が望む生活を支援する。これまでの介護過程展開の応用編として障がいや重複疾患等様々な状況にある対象者に対する介護過程展開や応用技術について学ぶことを目的とする。本授業はグループワークを含めた演習であり、障がいのある人や医療依存度の高い人など、様々な生活場面における実践的な介護過程が展開できることを到達目標としている。内部障害を中心とした身体障害、脳血管障害、嚥下障害、言語障害、特定疾患等の介護過程について教授し、在宅で生活している人への介護過程について事例を用いて展開しカンファレンスを行う。	
		介護総合演習Ⅰ	介護実習Ⅰに向けて、事前学習として介護老人保健施設の法的根拠や入所している利用者および関連職種への理解を深めるとともに、各領域で学んだ知識と技術を統合し、介護実践につなげることを目的とする。介護老人保健施設における介護実習の意義や目的・目標について理解する。また、学生個々で老人保健施設の法的根拠を文献検索し、グループ活動を通して介護老人保健施設の役割や機能について理解を深める。さらに、実習配属先の施設概要や沿革等を調べ、介護実習Ⅰの目標の立案および立案した目標の根拠を明確化する。本授業は、演習形式である。	
		介護総合演習Ⅱ	介護総合演習Ⅰで学んだ内容や立案した実習目標の到達度について分析し、自己の課題を明確にする。さらに、介護実習Ⅱに向けて、障害児・者入所施設の法的根拠や入所している利用者および関連職種への理解を深めるとともに、各領域で学んだ知識と技術を統合し、介護実践につなげることを目的とする。障害児・者入所施設における介護実習の意義や目的・目標について理解する。また、学生個々で障害児・者入所施設の法的根拠を文献検索し、グループ活動を通してより理解を深める。さらに、実習配属先の施設概要や沿革等を調べ、介護実習Ⅱの目標の立案および立案した目標の根拠を明確化する。本授業は、演習形式である。	
		介護総合演習Ⅲ	介護実習Ⅱの振り返りと介護実習Ⅲに向けての準備のための演習である。介護実習Ⅱの振り返りは、実習到達目標の達成度について自己分析し、自己課題を明らかにすることを目的とし、介護実習Ⅲは、特別養護老人ホームにおいて介護過程展開を行う上での、介護の専門職としての高い倫理観やエビデンスに基づいた生活支援の方法について検討することを目的としている。本授業は演習であり、グループワークを主体としており、障害者支援施設における特徴や障がいに応じた支援方法について共有できる。介護実習Ⅲの意義及び目的が理解でき根拠に基づいた介護方法の検討ができることを到達目標としている。授業の内容は、プレゼンテーションにより、介護実習Ⅱで経験した様々な事例等について共有する。介護実習Ⅲでは、根拠に基づいた介護実践を行い評価するため、先行研究のレビューを行い共有する。	
		介護総合演習Ⅳ	介護実習Ⅲの介護過程展開の学びをもとに、介護実践の科学的探究を追求するとともに介護観を醸成させることと、介護実習Ⅳの居宅介護サービス事業所での実習に向けての準備と実習後の振り返りと情報共有をすることを目的とする演習である。本授業はグループワークを中心とした演習であり、介護実習Ⅲの学びから事例研究発表を行うこと、介護実習Ⅳの学びから個人の介護観を明らかにすることを到達目標としている。授業の内容は、事例研究発表のための意義、事例研究の方法、倫理的配慮の方法等について教授する。	

専 門 教 育 科 目	実 践 科 目	介護実習入門	介護老人福祉施設で生活している何らかの障害のある高齢者を知る観点から、利用者の1日の過ごし方、会話レベルのコミュニケーション、利用者の施設内での人間関係等を知り、介護に必要な定点観察および気づきをもてることをねらいとした実習である。また、介護行為、生活支援の基本である入居者の基本動作について見学を通して理解し、人間工学的に介護行為の理解につなげ、今後の講義・演習・実習の基礎的な学びとする。1・2年次に5日間（1日8時間×5日）にわたって介護老人福祉施設で実施する。同施設での介護実習Ⅲに向けた事前学習として位置づけられ、施設で日常生活を送っている入所者の生活を把握する。	
		介護実習Ⅰ	介護老人保健施設の概要と特徴を知り、在宅復帰と自立支援を目指した医療ケアと生活ケアの両方を提供する中間的ケア施設であることを理解する。さらに、入門で学んだ定点観察や机上での生活支援技術を駆使し、職員の手導のもとで介護を提供することを目的とした実習である。2年次に12日間（1日8時間×12日）の予定で実施する。内容は科目「介護の基本」「生活支援技術」を基礎とし、「介護総合演習Ⅰ」と連携しながら、理論と技術の統合および実習への心構えを深めていく。また、日常生活動作の中に自立支援がどのように行われているかを学習する実習である。	
		介護実習Ⅱ	障害者総合支援法および児童福祉法における施設・事業所等（生活介護事業所、障害者支援施設、医療型障害児入所施設）を利用する障害児・者の生活を理解し、障害特性を踏まえた上で、利用者のニーズをとらえ、計画立案及び介護実践の方法について学ぶことを目的としている。本実習の対象となる利用者は、障害の特性や程度により個人差が大きく、自覚症状やニーズの自己表現を理解することが容易ではないことから、言語的・非言語的コミュニケーションの重要性を学ぶとともに、生活介護を行う上で必要な日常生活用具や福祉用具の使用法や評価方法を学ぶ。2年次に12日間（1日8時間×12日）の実習である。	
		介護実習Ⅲ	特別養護老人ホーム（介護老人福祉施設）において介護を必要としている利用者の生活実態を知り、利用者に対して必要な介護を適切に実践できる。また、個別ケアを理解するため、利用者の全体像を把握し、介護計画の立案、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった介護福祉士としての一連の介護過程のすべてを実践する。さらに、施設で生活している利用者に関する多職種との協働の中で、介護福祉士としての役割を理解し、サービス担当者会議やケースカンファレンスを通じて、多職種連携やチームケアを体験的に学ぶことを目的とした実習である。3年次に23日間（1日8時間×23日）の実習を実施する。これまでの実習で学んだ多様な利用者の生活支援の在り方を統合し、実践することがねらいである。学生自身が利用者との信頼関係を構築し、介護福祉士としての自覚を養う。	
		介護実習Ⅳ	居宅における利用者の日常生活への理解を深め、居宅で暮らすことの意義、生活を継続するために必要な社会的支援について考える。さらに、利用者の個別ニーズに沿った介護サービスがどのように展開されているかを学ぶことを目的とした実習である。4年次に5日間（1日8時間×5日）の実習を実施する。介護保険制度における居宅サービス事業所（主として訪問介護事業所）での実習であり、個別のライフスタイルをもつ利用者のニーズに沿った居宅介護サービスを計画し実践する。	
		アロマセラピー	本授業は、福祉や介護の現場等で用いられるアロマテラピーについて学ぶ。アロマセラピーに関する基礎的な理論を伝えながら、精油の特性を学ぶ。授業を通して、まずは自分の状態をホリスティックに捉え、精油を選択し、セルフケアとしてアロマセラピーを体感すること、また、活用できるようになることを目標とする。より実践的な方法を習得するためにアロマセラピーの利用法やアロマクラフト作成などの演習を行う。主な授業形式は講義スタイルで行うが、適宜ペアワーク、グループワークを行いコミュニケーション能力の向上を図る。	講義 10時間 演習 20時間
		健康と栄養	健康と栄養の研究は、全ての人が健康な日常生活を送りながら共生できるような衣食住生活の環境を主体的に整えるための知識を学び、健康と安全を守るための被服環境や体と心を満たすための栄養バランスのよい食事づくり、安全に安心して心地よく暮らせる住環境をつくるために必要な基本的技術を修得することを目的としている。少子高齢化が進む社会の中で、さまざまな生活課題を抱えた人々が健康で自立した生活ができるように、本授業では、誰もが生きやすい社会である共生社会を作ることができるように、また共生社会の一員として生きることができるような衣食住等の生活のマネジメントを学び、生活をデザインすることができるように教授し、これらの知識や技能をレクリエーションや福祉の現場、社会で役立てることができるようにする。さらに、世代を超えて受け継がれる生活文化や持続可能な社会をつくるSDGsの大切さも理解してほしい。	講義 20時間 演習 40時間
		福祉レクリエーション援助技術	本授業は、ウェルビーイングの実現の一環として楽しさや生きがいを求める当事者の人間的な営み(福祉レクリエーション)を支える福祉レクリエーション援助の技術の習得をねらいとしている。本講座で取り上げる主な技術は、当事者と信頼関係を結び勇気づけるコミュニケーション技術と、楽しさや生きがいの追求への自信を高める経験をするためにアクティビティを企画し実施する技術、社会資源の活用等による自律的な楽しさや生きがいの追求を支える環境整備の技術である。いずれの技術の習得も、教員による技術のデモンストレーションを通じた当事者体験、心理理論など根拠に基づく技術解説、ロールプレイなど諸技術を用いた援助体験の3段階形式で行う。そのため、介護等において個々の当事者のニーズや援助の過程に応じた技術を活用して当事者の福祉レクリエーションを支える実践力が身につく。あわせて、主体的、協働的な課題解決能力の涵養も期待される。	
多文化理解フィールドワーク事前・事後指導	本授業は、多文化理解フィールドワークの準備と振り返りを通して多文化理解を深めることを目的としている。急激な国際化に伴い、多文化が混在する現状をふまえ、日本国内の実態や先駆的な事例から多文化理解のための基本的な考え方を学ぶ。まずは、日本と隣国である韓国を対象に、食文化や食事作法、敬老思想、老後への意識等に関する事前学習を通して、韓国文化に関する基礎的な知識を身につける。日本国内および韓国でのフィールドワークを終えた後、事後学習として日本における多文化共生の現状や日韓比較を通して、多文化理解を深める。本授業は、講義と演習形式であり、グループディスカッション、プレゼンテーションを行う。	講義 10時間 演習 20時間		

専 門 教 育 科 目	実 践 科 目	多文化理解フィールドワーク	急激なグローバル化に伴い、多様な文化を有する人々との共生には、多文化理解が不可欠である。本授業では、日本国内の外国人集住地域でのフィールドワークを通して、外国にルーツを持つ人々の実態や先進的な取り組みから多文化理解を深める。また当面は、隣国である韓国でのフィールドワークを通して、福祉に関する様々な取り組み、目上の方や高齢者を重んじる韓国の文化を把握し、日本の福祉分野における退歩的な部分について早急な改革ができるように問題点等を抽出し、日本と韓国の文化を比較することで多文化理解を深め、相互に高め合うことを目指す。本授業は、フィールドワークである。		
		社会福祉専門実習	本授業は、原則として「相談援助演習」を先修条件として、その内容を一層深めることを目的として開講される実習科目である。4年次に、1日7.5時間×10日間の実習を行う。実習の前・事後、事前・事後指導を行う。実習分野は、医療分野か児童分野のいずれか1分野を想定する。医療分野での実習は、将来医療ソーシャルワーカーをめざす学生に対して、医療機関で働くソーシャルワーカーとしての基礎知識を身につけ、医療機関において福祉として働くための患者支援の方法を身につけることをめざす。児童分野での実習は、児童福祉施設・機関におけるソーシャルワークを学び、他機関連携、多職種連携、各機関や施設の役割について学びを深める。ソーシャルワークの実践に必要な各科目の知識と技術を統合し、社会福祉士としての価値と倫理に基づく支援を行うための実践能力を養うことを目的として行う。	講義 30時間 実習 30時間	
		ビジネス英語	これまでの英語クラスで学んだことを活かし、よりフォーマルな場面で自信を持って英語を使えるようになることを目標とする。特にビジネスの場面で、海外でフィールドワークを実施するような場合に、相手に対して丁寧かつ明確に情報を伝え、交渉し、合意に達するというプロセスを繰り返し練習し、実用的な英語を身につける。また、対面だけでなく文書によるコミュニケーション（Emailやショートメッセージなど）の方法も学び、時間や場所を問わずスムーズに意思疎通を図れる技術を習得する。学期の終盤には組織や商品を紹介するプレゼンテーションを実施し、より高度なプレゼンテーションスキルを磨く。		
		英語コミュニケーション	これまでの英語クラスで学んだことを活かし、よりスムーズで深みのある会話を続けられる能力を身につけることを目的とする。毎回のレッスンを通じて、自分の意見を論理的かつ説得力を持って表明したり、相手の意見に対し婉曲に反対意見を述べたりできるようにする。また、予測される未来についての会話などを通して、想像力を養いながら、より自然な英語表現の習得も目指す。1、2年次開講の英語クラス同様、学期の終盤にはプレゼンテーションを導入し、今まで養ってきた、人前で自分の意見を効果的に表明するスキルにさらに磨きをかける。このコースでの学習を通して、よりネイティブライクな英語話者になることを目指す。		
		Malaysian Cultural Camp I	本授業はマレーシアにおける海外研修を中心とした、多文化共生社会について学ぶ体験型のプログラムの一環である。現地での研修の前後に、多摩キャンパスにおいてワークショップをおこなう。研修前には、マレーシア社会に関する基礎的な講義や現地でのプレゼンテーションの準備となるグループワークなど、研修後には、研修での成果をまとめ、文化祭においてグループ・プレゼンテーションをおこなうこととなる。このプログラムは、本学部が3つのポリシーで掲げている、人々と共生するための幅広い知識と教養、多様性を受け入れる価値観とコミュニケーション能力を身につけることにつながり、TEP(Tama English Program)で養った英語力に対しても、より発展的な学習効果が期待される。	講義 6時間 演習 24時間	
		Malaysian Cultural Camp II	本授業はマレーシアにおける約3週間にわたる海外研修を中心とした、多文化共生社会について学ぶ体験型のプログラムである。夏季にSunway Universityにおいての各学部等の協力によって構成された、幅広い分野に及ぶ内容を講義・演習にて学ぶが、その中には現地学生との交流やキャンパス外でのフィールドワークも含まれる。このプログラムは本学部が3つのポリシーで掲げている、人々と共生するための幅広い知識と教養、多様性を受け入れる価値観とコミュニケーション能力を身につけることにつながる。また、これは単なる語学研修ではないが、TEP(Tama English Program)で養った英語力に対しても、より発展的な学習効果が期待される。	講義 28時間 演習 92時間	
		異文化理解 I	留学認定科目として設置されている。本学が行っている留学・研修プログラム等に参加し、一定以上の成績を修めた場合にこの科目の単位が修得されることになる。プログラムの参加先における授業形態・授業内容はさまざまであるが、普段学んでいる環境とは異なる社会・文化のあり方を体験すること、またプログラムの内容を学ぶことを通じて、社会・文化・世界における多様な生のあり方について理解し、知識を深めることが期待される。		
		異文化理解 II	留学認定科目として設置されている。本学が行っている留学・研修プログラム等に参加し、一定以上の成績を修めた場合にこの科目の単位が修得されることになる。プログラムの参加先における授業形態・授業内容はさまざまであるが、普段学んでいる環境とは異なる社会・文化のあり方を体験すること、またプログラムの内容を学ぶことを通じて、社会・文化・世界における多様な生のあり方について理解し、知識を深めることが期待される。		
全 学 共 通 科 目	基 礎 科 目	女 性 と キ ャ ン パ ス ラ イ フ	大妻教養講座	新入生が、この大学で何をどう学ぶかについてを考える入門講座である。大人（社会人）として、自分の行為に自分で責任を持つことは、自分の心身の状態を自分でコントロールする必要性を知ることであり、法律的、経済的な自分の権利義務を知る必要性を知ることである。また、卒業後、職業人として旅立つために、大学での学びの中でどのような職業に進むかなどを含めて、人生についての見直しを持ってよう、4年間の学びが人生にどう影響していくかを理解し、本学での学びをどう進めるかを考える。なお、この講座では、大妻コタカ先生が何を考えておられたのかも学ぶ。	

全学共通科目	基礎科目	大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ	大妻学院の使命「学び働き続ける自立自存の女性の育成」の具体化を目標とした科目である。1年生の時に受講した「大妻教養講座」における「大妻での学びと人生（卒業生の回）」での学びを踏まえ、本科目では卒業生による講演を中心とした授業を行う。卒業生から、学生時代の過ごし方を含めた今までのキャリア、現在の仕事内容などを紹介いただき、職場での体験・経験などを通じて得たこと、将来の目標、学生へのメッセージなどをお話いただく。	
		キャンパスライフとメンタルヘルス	主として思春期・青年期の一般的な心理社会的特徴を概観しながら、大学生がキャンパスライフの中で遭遇する可能性のある危機、あるいはメンタルヘルス上の問題について、その予防や対処方法も含めて学ぶことを目的とする。キャンパスライフの中で、大学生が体験する成長のプロセスは、時に大きな心の揺れを伴いやすく、悩みや危機を経験することもごく自然なことである。本講義では、ストレス、五月病、摂食障害、うつ病、自傷行為、アパシーといった問題や、消費トラブル、宗教カルト、ハラスメント等の具体的かつ身近な話題を取り上げながら、学生たちがより健康的で有意義なキャンパスライフを送れるような講義内容とする。	
		女性と健康	我が国の女性のライフサイクルは、ここ数十年間で大きな変化を遂げている。この講義では、女性の健康に関する問題点を正しく理解し、対策を講じる事は、これからの人生を健康で豊かなものにするために必要不可欠である。講義は生物学的な“女性”の定義から始まり、「月経」、「妊娠」、「(性)感染症」、「食生活」、「喫煙」、「飲酒」、「薬物」、「精神疾患」等をキーワードに、医師、看護師等の専門家により分かり易く行う。	
		ジェンダーと社会生活	ジェンダーを前提に成り立つ役割分業や格差、種々の社会的制度とジェンダーとの関わりについて、具体的な事象を通して学ぶ。妊娠、出産といった身体をめぐる問題、DV（ドメスティック・バイオレンス）やセクシュアル・ハラスメントなどの性と暴力の構造、労働をめぐる不平等な環境、結婚制度や家族制度の現状、メディアに含まれる女性差別的なメッセージ、セクシュアリティと社会システムのかかわり等々、各授業では日常生活と深く結びついたテーマが設けられる。社会をジェンダーの観点から分析することを通して、自らの生活環境についてとらえなおし、自分の視点をもって生きていくために必要な知識を得ることが目的となる。	
		女性史	「女性史」とは、女性を主体とした歴史、またはジェンダー（文化的に構築された性差）の視点からみた歴史のことを指しているが、女性史を学び、歴史のなかに生きた女性たちへの想像力を手に入れることで、いま女性として生きることの意味を考えていく。また、大妻女子大学の学祖・大妻コタカ先生の教育活動も含め、女子の高等教育機関をめぐる歴史を知ることが、現在の学びの環境である。過去の歴史を理解し、歴史を生きた女性たちの足跡を知ること、自らの社会的位置や生活環境を積極的に解釈し、歴史的知識を自分の人生に活用することを旨とする。	
		リーダーシップ開発	当科目では、産業界や地域社会で活躍する複数の女性リーダーから、それぞれのリーダーシップ論やそれを確立した背景や経験、さらに自身の今後の展望に関する講演を聞いたうえで、「男女共同参画社会において必要とされるリーダーシップ」をテーマに講師と学生を交えた対話を行う。 これを複数回繰り返すことで、自己理解を深めるとともに、女性リーダーに関する様々なロールモデルを通じて、学生自身がこれまで持っていたリーダーシップに対するイメージをブラッシュアップし、自らのリーダーシップ論を再構築することが目的である。	
	リテラシー	日本語A(文章表現)	文章表現力向上を目指す場合、読み手への配慮を忘れずに、しかも、より正確に伝えようとする努力をいとわない、という二つのことが重要になる。したがって、文章表現力向上には、(1)読み手に対する思いやりの気持ちを養うこと、(2)事実関係、意図、感情が正確に伝わるような工夫として表現効果を磨こうとする努力、(3)形式上の決まりを当然のこととして守ろうとする意識を養うこと、等が意識されるべきだろう。 本科目はあくまで本学での学生生活の基本となる文章表現力の育成を目指す。社会においても通用する基礎生活力として個人の日本語運用能力を高めていく基盤を作ることも、授業におけるねらいとする。	
		日本語B(口頭表現)	話し言葉を中心に、日本語を目的や場面に応じて適切に表現し、運用する能力の向上を目指す。「聞き手」を意識して、伝えるべき内容や目的・場面を限定した自己あるいは第三者の紹介や説明を行うなど、話し言葉の実践的訓練を行う。また、筋道を立てて話すために必要な論理的思考力と話し言葉での論理的な表現力を身につけることも重要であることから、説明資料を用いたプレゼンテーションなども行う。さらに、口頭表現においては、書き言葉とは異なり、(3)適切に発声・発音する力も必要となるため、その実践的な訓練を含める。	
		日本語C(読解)	言語としての日本語の特質に対する理解を深めるとともに、情報を的確に受け取り、分析的・批判的に捉え返すことができるような、読解リテラシーの向上を目指す。方策としては、(1)中等教育の(国語科)を補うような、語彙・語法・慣用表現など、日本語に関する知識を確認すること(2)さまざまなジャンルの文章に触れて、自らの問題意識を深め、知的な好奇心を涵養すること(3)一定以上の長さを持った文章の内容を把握し、組み立てや構成を理解すること(4)テキストに対する批判的・能動的なかわりを可能にするための分析的な読解の訓練を行っていく。	
		コンピュータ基礎A	パソコンを使って文書を作成し、計算し、発表するための知識・技能の基礎を、演習を通して身につける。また、インターネットを使った情報収集などで注意すべきセキュリティと情報モラルを理解し、安全にコンピュータを利用するために知識を身につける。 Wordを使った基本的な文書の作成、Excelを使った表計算によるデータ処理の基礎、PowerPointを使ったプレゼンテーションの方法を演習により身につける。 1. コンピュータの仕組みと基本操作(2回) Windowsとファイル操作、セキュリティと情報モラル 2. Wordによる文書の入力(5回) 文字の入力、作成、印刷、表、表現力をアップする機能 3. Excelの基礎(5回) 4. PowerPointの基礎(3回)	

全学共通科目 基礎科目	リテラシー	コンピュータ基礎B	<p>パソコンの基本操作（文字入力、保存、印刷など）ができる学生を対象として、表計算ソフト（Excel）を使った効率的、効率的なデータ処理の方法を演習する。ICT（Information and Communication Technology）が進展し、情報が低コストで、時間差なく収集することができるようになってきている。また、処理しきれない量の情報が氾濫している時代でもある。このような中、本当に必要な情報を取捨選択し、意思決定に生かしていくことが求められている。</p> <p>本科目では、多くのデータ（社会における実データを含む）から、われわれが必要とする情報を抽出すること、また、その抽出結果を読み解き、それら情報の関係を分析、考察し表現することを目的とする。その一連の中でExcelの基本からグラフ、データベース、応用的な関数の使い方を演習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> Excelの基本操作（3回） 表の作成、修飾、印刷、便利な機能 グラフの作成（3回） グラフの基礎、さまざまなグラフ、グラフの編集（適切なグラフ表現）、グラフの読み解き方 データベース（4回） データベースの基礎、並べ替えと抽出、自動集計、クロス集計、ピボットテーブル、データの読み解き方 関数の応用（5回） 統計関数、論理関数（IF）、表検索（VLOOKUP）、財務関数 	
		コンピュータ応用	<p>パソコンの基本操作、Word、Excelの基本操作を習得している学生を対象とした科目である。社会や企業で必要となる具体的な文書作成、企画提案、プレゼンテーション、データ分析、効果的なデザインなどの実例を取り上げ、インターネットによる情報検索、文書作成、データ分析、プレゼンテーションおよび情報発信の方法を総合的に演習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> Wordの活用（3回） ビジネス文書とは、表の活用 Excelの活用（4回） 実用的な関数（VLOOK、IF関数を含む）、図解とグラフ、データベースの活用、ピボットテーブルの活用 WordとExcelの活用（2回） 連携の方法、表とグラフの活用 PowerPointの活用（3回） プレゼンテーションとは、図解の基本、見やすいスライドの作成 総合演習（3回） 報告書の作成、案内書の作成、レポートの作成 	
		データサイエンス・AI概論	<p>近年、自らの専門分野に加えて、数理・データサイエンス・AIの素養を持った人材が求められている。一方、数理やデータサイエンス、AIと聞くと難しく感じる人もいられると思われる。そのため、これらを活用することの「楽しさ」や「学ぶことの意義」に重きを置く。</p> <p>当科目では主に、「AIやデータサイエンスが社会にもたらす価値」と「デジタル技術が行き渡る社会における課題」をテーマとして、本学の各学部における具体例や最新動向等を織り込みながら、データサイエンスが様々な事象にどう関与しているかという「ストーリー」を理解してもらう。さらにデータ活用におけるリスクや留意事項についても学ぶ。</p>	
	キャリア	キャリアデザインⅠ	<p>キャリアデザインの第1段階として、「職業世界的一端を知る」「自己を知る」「自己を育成する方法を知る」ことを目的とする。職業意識を涵養すると共に、産業界から求められている汎用的能力の育成のきっかけとツールを提供することにより、課内外の学生生活からの学びを促す。</p> <p>「働くことの意味」「職業への適性と能力」「ライフプラン」「自己分析」「コミュニケーション能力」「チームワーク」「セルフコントロール」を中心に学ぶ。</p>	
		キャリアデザインⅡ	<p>キャリアデザインの第2段階として、「実社会・実業界を知る」に主眼を置く。一般的な企業の構造や経営についての知識、および広く産業についての知識を受講者に付与し、もって職業選択の一助とする。前半は企業、後半は産業についての講義とする。</p> <p>「企業とは何か」「マネジメント（モノ・サービス、ヒト・カネ）」「各産業の概要」について学ぶ。</p>	
		キャリアデザインⅢ	<p>キャリアデザインの第3段階として、「内部世界（自己）と外部世界（実社会）を統合する」ことを目的とする。</p> <p>就職活動時期を目前とした学生に対し、女性を取り巻く雇用環境など現実問題の中で就職意欲を喚起すると同時に、学生生活からの学びと関連づける形で自己理解を促し、事務局主催の、業界研究等、各種就職支援活動の活用へとつなげる。</p> <p>「日本企業の人事管理制度」「昨今の労働事情」「女性の労働」「ワーク・ライフ・バランスの実践」「コミュニケーション能力」「自己分析（大学生生活の振り返り）」について学ぶ。</p>	
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ	<p>今日、大学卒業者に最も強く求められるものは、「汎用能力」（社会人基礎能力）である。具体的には、コミュニケーション能力、問題解決能力、達成意欲などである。しかし、これらの能力は必ずしも知識獲得によって育成できるものではない。</p> <p>本授業は、外部組織との提携のもと、与えられた実際の課題に対し、受講生がチーム単位で責任をもって取り組むという体験の場を設定することにより、かかる能力の重要性についての受講者の認識を高めるとともに、受講者相互の刺激により、受講者の潜在的な能力を引き出すものである。</p>	
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅡ	<p>本授業はⅠの発展版とし、履修条件としてキャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ（CDPⅠ）の単位を履修習得した学生とする。具体的な内容は、学生は「プロジェクトリーダー」または「ファシリテーター」という立場でCDPⅠの授業に参加し、CDPⅠの履修生に対してチーム運営をリードすることを、または、チーム運営のファシリテーションを体験する。その後、全プロセスを通してリーダーシップのあり方、チームワークのあり方、ファシリテーションを振り返り、CDPⅠと同様に「汎用能力」をより一層高めることを目的とする。</p>	

全学共通科目 教養科目 人間と文化	文学の世界	<p>本授業のひとつの目的は、ことばと物語の方が、想像力を通じていかにか人の心を揺さぶり、新しい認識を形づくるかという文学のもつ力について考えることである。このためには、さまざまな切り口が想定できる。特定の作品の鑑賞と解釈を通じて、その特定の社会と文化を映す物語の中に時空を超えた普遍的人間の精神や思想を読む、というものと。また、複数の作品の通時的関連性や、同ジャンルの歴史的発展の過程を辿るという、文学史的俯瞰によってその本質を考えてみることも可能となるだろう。</p>
	音楽の世界	<p>学生たちに音楽に対する認識を深め、かつそれを楽しむ糸口を与えることを目的としたものである。ここでいう音楽は、西欧古典音楽に限定されたものではない。日本の伝統的音楽や、世界の様々なエスニシティに根差した音楽もそのなかには含まれている。また若者たちは深くポピュラー音楽に親しみ、音楽なしには彼らの生活は成り立たなくなっているといっても過言ではない。また音楽は、今日では様々なセラピーのなかにも取り入れられている。音楽の心理的・医療的作用も講義の主題となりうる。</p>
	美術の世界	<p>優れた美術作品の観察と分析を通じて、対象を理解するだけにとどまらず、美的体験を豊かにし、鑑賞能力を養うことを目指す。また、美術の地域や時代による特徴をも把握できるようにして、諸作品の個別化と一般化を通じて、人間生活の中での造形表現の基本となる形体や空間を把握し、的確な観察力や構成力を養うことをねらう。さらには美術作品の記号的側面にも注目し、例えばビジュアルデザインの部門では視覚的な伝達効果を主とするデザインの学習を通して、デザインについて理解を深めるとともに、デザインにおける計画と表示の能力を高める。こうした学習と実践を通して、芸術としての美術の意義を理解させる。</p>
	映像・演劇の世界	<p>現在は、映像技術の進展と劇場型世界への転進のため、誰でもデジタル機器を駆使してイメージの編集ができるようになり、誰もが期待される役を意識してパフォーマンスを演じられるようになった。つまり「見る」アートから「する」アートへの転換が行われようとしている。本授業では、日常性に入り込んできたイメージとパフォーマンスの世界を、歴史的視座の中に置いたり、同時代の他のアートとの往來を絡ませてみたり、具体的な作品をそれぞれの世界の用語で分析してみたりして、これらのアートの本質と人間の本性との係わり合いを深く、また広く論じていきたい。</p>
	考古学の世界	<p>考古学という学問的な方法について理解を深めることを目的とする。対象地域としては、学生の関心を考慮して、日本周辺をフィールドとした考古学を講義の対象とすることが考えられるが、関係の深い他の地域や、画期的な発見がなされた遺跡、あるいは話題性のある遺跡・遺物などについて世界の他の地域をあつかうことも可能である。またどの時代をあつかうか、あるいはある特定の遺跡・遺物に関して通史的に扱うかなどについては担当者にゆだねられる。したがって先史考古学と歴史考古学を講義の対象にふくむことはいうまでもない。</p>
	ポピュラー・カルチャーの世界	<p>「ポピュラー・カルチャー」論とは、古くは大衆文化論と呼ばれていた。「ポピュラー・カルチャー」は直訳すれば「民衆の文化」となる。古くから受け継がれてきた伝統的な民衆の文化が、都市化とメディアの発達のおかげでどのような変容を遂げているのか。そして、村上春樹の小説の大ヒットが示すように「ハイ・カルチャー」と「ポピュラー・カルチャー」の区別も今日また曖昧なものとなってきている。このように本講義の内包する課題は多岐にわたり、メディアと文化に関心をもつ多様な研究者の参加が期待される。</p>
	地域と文化	<p>本科目では、地域の文化・社会について、言語、歴史、政治、経済、宗教、文学、芸術などさまざまな側面を、社会学、言語学、地理学といった単一の分野ではなく複数の分野にわたって「学際的研究」から全体的に理解することを到達目標とする。さらに近年の地球のグローバル化を背景に、特定の地域ではなくいくつかの地域のあいだの交流や関連にも注目し、そこから生ずる種々の政治・経済・社会問題と解決方法にも言及する。</p>
	言語と文化	<p>コミュニケーションを成立させるのは「言語」なのだが、その「言語」は時として（あるいは同時に）いってよいほど頻繁にコミュニケーションを阻害し破壊させるものでもある。「ことば」は通じる、しかし同時に「ことば」は通じない。 言語についてのかような二律背反は、言語観の対立にも引き継がれる。ある言語はその言語固有のやり方で世界を分節する結果、その言語固有の世界観が形成されるのだと主張する考え方が一方、異言語であっても普遍的な心的言語・普遍的言語生成構造の上にその差異が生じているのだと説く考え方もある。果たして人は、「言語」という共通した知性によって相互理解の基盤を得たのだろうか。それとも、異なる言語はそれぞれ独自の文化を生み出すと同時に相互理解を阻む壁ともなるのだろうか。 本授業では、空気のように「あたりまえ」で、人間の知的営為の前提と捉えられているもの、それゆえに深くその本質を考えることをしなくて済んできたもの、にもかかわらず、知的営為にとって不可欠あるいは知的営為そのものである「言語」とはなにかについて、さまざまな議論があることを知り、考える機会を与える。</p>
	日本の歴史と文化	<p>日本の歴史を主な対象とし、客観的に歴史を見る目を涵養し、歴史に対する理解を深める。対象とする時代や事象については、特定の時代を掘り下げて分析することも可能であるし、文化史などから通史的に歴史をあつかうことも可能である。またここで日本という枠組みも固定的なものではなく、周辺地域との関係や世界史のなかで歴史を見直すという視点も必要であろう。日本列島を中心とする地域の過去の歴史や文化を見る目を養うことによって、現代の日本社会をあらためて見直し、問い直す、視点と視野を開く契機としたい。</p>
	世界の歴史と文化	<p>世界の歴史を対象とし、広い視野で客観的に歴史を見る目を涵養し、歴史に対する理解を深める。併せて代表的な幾つかの民族と宗教について、その行動や思考の規範となっている教理と心性にも触れたい。対象とする地域・時代や事象については、特定の地域、時代を掘り下げて分析することも可能であるし、特定の事象を通史的にあつかうことも可能である。また、文化圏相互の交流という視点から、平和時の交易や宗教間戦争の事例を、分析することも有益であろう。世界の歴史と文化、民族と宗教を知ることによって、我々をとりまくグローバルな問題について、関心を深め、考えていく契機と視野を獲得できるようにしていきたい。</p>

全学共通科目 教養科目 社会と生活	人間と文化	哲学と思想	<p>哲学や思想は人類が発生以来、如何に生きるべきかを問い続けて、その問いと答えの繰り返しが集積され、体系付けられたものである。従ってその根本は実生活の即した具体的なものであったので、難解なものではない。教室ではまずこの誰もが経験するような身近な問題から出発し、それぞれの問題意識に基づいて思索してゆくことを練習する。また、哲学の長い歴史を参照し、滋養とすることにより我々が得手勝手に思索してゆくよりも、はるかに思考活動を豊かなものにしてくれる。こうした過去の遺産、そしてそれは現在にまで密接につながっているものであるが、それらに関する基本的知識の習得を試みる。</p>	
		日本文化・事情	<p>留学生の受講が優先されるが、履修人数に余裕がある場合には、日本人学生も受講できる科目である。留学生が日本語・日本文化に興味を持った理由の一つに、日本のアニメやマンガ、アイドルグループがある。留学生と共に、こうした日本の現代文化を鑑賞・分析し、それを育んだ日本の文化事情について学ぶ。</p>	
	社会と生活	子どもの世界	<p>子ども文化という時、学生たちが抱くイメージは多様なものであろう。広い意味での「子ども文化」そのものに、児童学、教育学、体育学、社会学、心理学、歴史学、文化人類学等々のさまざまなディシプリンからアプローチすることが本講義の方向性とし、小説、詩、絵画そして音楽等々、さまざまな芸術作品のなかで描かれた子どもの姿を論じること本講義のもうひとつの方向性である。「子ども」は生命力や創造性の隠喩でもある。学生たちの「内なる子ども」に語りかけ、それを呼び覚ますような瑞々しい講義としたい。</p>	
		人間の成長と心理	<p>本講義では、人間の生涯に渡る“心・身体・社会性”の成長や発達というテーマについて、主に心理学的アプローチから概説していく。生涯発達の諸局面における様々なライフイベントを横軸として、そこでの心や身体の状態、人間関係や社会の様相、直面するであろう課題や問題について共に考え、受講生各自が自分なりの視点を持てるようになることを目指したい。特に受講生の皆さんが当面する青年期・成人期の特徴や課題について、講義を通して共に考えていくことを目指す。</p>	
		日本国憲法	<p>本科目は、わが国の法制度及び法体系の根幹をなす日本国憲法の基本原則と概略を理解することを目的とする。講義の中心は、実定法としての日本国憲法の解釈におかれる。即ち、基本的人権および統治機構に関わる憲法諸規定を、具体的な判例と関連諸法令の分析を通じて、その意味内容を解釈する作業を行う。また、実定憲法の解釈の枠に留まらず、その歴史のない論理的基礎をなす、英、仏、独、米などの西洋近代社会の構造ないし憲主義思想の分析、さらには現代の諸外国の実定憲法との比較する。最後に、本科目は現代社会における憲法の最新の問題状況、例えば所謂「新しい人権」（環境権、国際人権など）についても論じる。</p>	
		法律と現代社会	<p>本科目は、現代社会を成立かつ存続せしめている、道徳、倫理、慣習そして法律など、種々の「社会規範」のうち、「法律」に焦点を当てて考察することを目的とする。以下、ここでの法律は法規範の中の、狭義の「法律」ではなく、法規範全体を意味するものとして扱う。</p> <p>第一に、社会規範の中での法規範の特徴を、特に国家権力との関係において明らかにする。</p> <p>第二に、代表的な法領域である、民法、刑法、そして行政法などについて、その基本的な特徴と概略を、具体的な判例を通じて考察する。</p> <p>第三に、法を紛争解決の方法として、動態的、機能的視点から分析する。</p> <p>第四に、現代社会における具体的な法律問題をいくつか取り上げ、法的主体としての我々市民について聴講者とともに考えたい。</p>	
		政治と現代社会	<p>現代社会における「政治」のあり方をできるかぎり多面的に考察することを通じて、「政治」に対するセンスを養うとともに、主権者として「政治」に対する判断や行動の指針を獲得することを目的とする。</p> <p>まず、政治に関する基本概念と、それらを育んだ西洋社会の歴史的・思想的理解をたかめ、近代国家およびここでの政治の特徴を明確にする。次に、現代社会における政治のシステムと機能を実証的分析も扱う。投票行動分析、政治意識分析などを通じた政治過程論、現代政治論などの領域である。さらに、国際政治史、国際関係論なども扱う。最後に、国家単位の政治行動とは異なる、例えばNGOなど新しい政治主体の役割についても考察する。</p>	
		経済と現代社会	<p>21世紀に入って世界経済は、市場のグローバル化が進展する中、近代国家と国民経済の形成においてさまざまな発展段階にある国々が、競争的關係をさらに強める場となっている。先進国が近代国家の枠組を超える方向を模索している一方、新興国は経済の急速な発展に国家の枠組みが追いつかない状況にあり、また途上国は政治経済の近代化が進まないまま伝統社会の仕組みが崩壊しつつある。このような世界経済の状況に、アダム・スミスに確立され、ケインズによる大きな革新を経た、市場と国民経済を分析する経済学の諸理論はいかなる有効性をもつかを検証し、新たなパラダイムの形成を模索してゆく。特に、日本経済が世界経済の中でどのような位置付けにあるかを確認し、高齢社会化など日本経済に特有な問題を明らかにした上で、その解決策をさまざまな角度から考えてゆく。</p>	
		メディアと現代社会	<p>現代社会に生きる私たちは、様々なメディアに囲まれて生活し、各種メディアは人々にとって情報源であるばかりでなく、彼らに娯楽を提供するソースともなっている。そこで、新聞・雑誌・テレビ・ラジオ等のマス・メディアが提供する様々なエンターテインメントについて論じる。またネットや携帯電話を通じて自ら情報を積極的に発信する事は、ネット右翼や学校裏サイトののような負の現象も生み出している。本授業ではこれらのメディアと現代社会にかかわる諸問題について、多様な切り口から考える事を通じ、私たちが世界を認識する方法やあり方を再検討する。</p>	

全学共通科目	教養科目	社会と生活	家族と現代社会	<p>家族は、社会における基本的人間結合単位であると言える。本科目は、そのような家族の現代社会における位置と特徴を、社会諸科学（社会学、法学、経済学、教育学など）の方法論と視点から、具体的問題の考察を通じて、明らかにすることを目的とする。現代日本における家族の諸側面および諸問題を分析するためには、歴史的、比較社会的考察が不可欠である。</p> <p>伝統的な家族のあり方と、近代以降のあり方には大きな相違が横たわり、それを正確に測定することなしに、現在のわが国の家族のあり方を把握することは不可能である。以上の考察を踏まえて、現在社会における家族の諸問題をいくつか取り上げ、具体的に考察したい。</p>	
			福祉と現代社会（ボランティアを含む）	<p>私たちが暮らす現代社会を「福祉」の視点から取り上げて、履修者が身近な生活課題として受け止めながら考察し、一人ひとりがよりよく生きていくために役立てることを目的とする。今日の社会福祉制度がこれまで歩んできた歴史的経過とその社会的背景やそれらの制度を支えてきた思想、そして制度の運用を行う福祉現場の実践活動の様子などをDVD等で紹介していく。また、国や地方自治体の法令によって制度化された福祉だけでなく、地域住民の自主的な活動によって創り出される市民ボランティア等の活動状況についても紹介しながら、これらの市民活動のあり方や今後の展望について考察していきたい。</p>	
			SDGsと現代社会	<p>当科目ではまずSDGsの全体像と17の目標の相互関係を理解し、本学の教育・研究と目標との関連について、最新動向を踏まえて学ぶ。これらは、①各学部の教育・研究はSDGsとどのように関連しているのか、②得た知識をSDGs課題発見・解決にどのように生かせるかについて、学生自身の「気づき」を促すことが目的である。学生には、1つの目標に対して多角的なアプローチ方法があることを知り、本学における学びは将来にわたって有機的に結びつくことを実感して欲しい。「持続可能な共生社会の実現への貢献」を教育使命の一つとする本学にて、SDGsと自らの興味関心の対象を結び付けて考え、今後、どのように学びを深めたいのかを考える契機となる講義を提供する。</p>	
	自然と科学		数学の世界	<p>①微分・積分は、万有引力を発見したニュートンによって作られた。車のメータで見る速度というものが微分の概念のひとつの具体例である。速度をきちんと理解できれば、微分が何であるかがわかる。この理解のためには、関数と、極限の概念を知る必要がある。初歩から始めて、微分というものを理解するまで進む。</p> <p>②「速度」という概念と、「速さ」という概念は異なる。大きさしかないものが速さであり、大きさと向きを持つものが速度である。大きさと向きを持つものをベクトルという。図示するときには矢印で表す。このベクトルの演算などを学ぶと、幾何学において強力な武器となる。このベクトルを別のベクトルに移す行列や、行列の性質を知るために役に立つ行列式も学ぶ。</p>	
			生活の物理	<p>日常生活に見る現象の裏にある法則を物理を使って、なるべく数式に頼らず、説明していく。身の回りに溢れる家電製品などは、物理という学問がなければどれひとつとして存在しない。いくつか例をあげる。電子レンジは、第二世界大戦中のレーダの民生品である。電気ポットは、ジュール熱の法則に従って、お湯が沸く。また、日々新聞を賑わす地球温暖化の問題の理解には気象学の知識が必要だが、気象学の基本には物理学がある。</p> <p>学生の興味ある話題を取りあげ、その裏にある物理法則を明らかにして、物理的思考方を身につけてもらうことを目標とする。</p>	
			生活の化学	<p>その昔、化学者の夢は錬金術であったと言われる。金でないものから金を作り出すのが錬金術であるが、現在、プラスチックや繊維などは錬金術のごとく石油からつくることができる。ペットボトルからフリースをつくるなんてこともできる。ペットボトルもフリースも、炭素（C）と水素（H）と酸素（O）からできていて、結合の組み合わせを変えるだけで、見かけも性質も違うものに変化させることができるのである。砂糖と紙とサラダ油、見かけは違っても、これも実は主成分はすべて炭素（C）と水素（H）と酸素（O）からできている。どれも、燃やすと二酸化炭素と水になる。このような物質たちの七変化を理解するためには、物質を構成している原子に思いを馳せなければならない。</p> <p>水も化学物質の1つである。水は水素（H）2つと酸素（O）1つが結合してできたシンプルな物質だが、特別な性質を持っている。電子レンジで水を含む食品を暖めることができるのはなぜか。それは水の化学構造に秘密がある。本授業では、物質の性質や化学変化を理解するための化学の基礎を学び、日常生活に散らばっている事柄を化学の目で見てみることを目的とする。</p>	
			科学と環境	<p>地球環境は、この星が生まれて以来の約46億年間で常に変動し続けており、生命は環境の変動に適応しながらさまざまな生き方を獲得・進化してきた。地球環境の歴史を学ぶことで環境および生命の多様性を学ぶ。近年の環境問題は地球規模（温暖化や砂漠化など）でありながら身近な問題（都市化や食料・エネルギー問題など）でもある。これらの問題の多くは科学の進歩がもたらしたものであるが、こうした諸問題を克服して持続可能な社会を構築するのもまた科学の力である。本講義では、「環境・生命の多様性を学ぶ」と「科学技術の功罪をふまえて未来を考える」という2つの視点を中心に据えて環境問題について考える力を養うことを目的とする。</p>	
			生命の科学	<p>生命の誕生から始まり、成長に伴う様々な機能を持つようになる分化現象、子孫を残す生殖活動、そして加齢による老化現象、生命の終焉までを様々な観点から、最新の研究成果を踏まえて講義するのが本授業である。近年、ヒトゲノム計画を始めとして多くの生物において分子生物学の研究成果は著しいものがある。このような成果を踏まえて疾病の研究や品種改良などの応用面は言うまでもないが、生命の根本に触れる研究も行われている。このような研究は人類の健康に対する貢献は多大であることは間違いない。一方、本来動物細胞においては受精以降では全能性を欠いているわけであるが、iPS細胞のような人工的に全能性を待つ細胞に対する危険性や倫理面について指摘されている。このように最先端の研究の両面性も学生と一緒に考えていきたいと思っている。</p> <p>本授業を行うことで学生に生命現象を探究する面白さを学び、科学的な考え方を修得してもらうことが授業目標である。</p>	

全学共通科目	自然と科学	宇宙の科学	宇宙の科学に関する発展は目覚ましく、宇宙の起源や進化に関する研究ばかりでなく、惑星探査機による火星などの直接探査、そして宇宙旅行や月旅行も実現間近になっている。宇宙に関する基本的な科学的知識や考え方を始め、人類が宇宙や地球のなかでは極めて小さな存在であることを理解する。本授業では古代や中世の宇宙観を始め、宇宙の起源や進化、太陽系と地球の起源と進化、宇宙開発についてビデオ等の画像を用いて解説する。 宇宙は137億年前にビッグバンと呼ばれる超高温の火の玉として始まったとされているが、ビッグバン後には星や銀河が生成し宇宙の構造が形成された。太陽系は46億年前に誕生し、太陽を中心に8つの惑星とその衛星などから構成される。太陽系と同時に誕生した原始地球は、微惑星の衝突で生成したため高温であったが、冷却するにつれて海洋が生成し陸地が形成された。宇宙開発は1957年の人工衛星の打ち上げの成功に始まるが、その後人類は月面に降り立ち、スペースシャトルや宇宙ステーションの開発に成功し、宇宙旅行の基礎ができた。宇宙の巨大な時間的空間的な広がりや理解し、これからの宇宙と人類のあり方を言及する。	
		人類の進化	本授業では、まず生物分類および学名について解説し、その後、生命誕生から現在に至るまでを通覧しながら人類進化の概要、すなわち人類の誕生から世界各地への拡散移住の過程を解説する。とくに近年詳細な部分にまで理解が及ぶようになった人類のアフリカ単一起源説を基に、人類進化の特徴を理解してゆく。また併せて、進化過程で獲得してきた人体の構造と機能について解説する。また日本人の起源についても解説する。以上の知識をもとに、近未来生活において人類自らが制御する温度や照明など環境要因への適応の問題、およびロボットとの共存が想定される生活と人間観について、学生諸君の意見を求めながら考える。	
		自然科学の歴史	自然科学は、人間のあくなき知的欲求から生み出された輝く宝石のような結晶である。人間は、自然科学の知識を活用することで、物質的にも精神的にも豊かな社会を築いている。授業では、自然科学の歴史の夜明けから解説し、人類の歴史の中で、どのような科学的思想や科学的概念が生まれたかについて、自然科学の方法論とともに学ぶ。また、それらの科学的知識がどのようにして体系づけられ、現代のような自然科学が発展してきたかについて基礎から学ぶ。こうした歴史に関する知識を背景に、現代社会における、人間と自然科学の付き合い方について考える。また、自然科学は常に発展途上段階にあるため、今後の展開を含め、自然科学の未来についても考える。 授業を通して、自分の中にある知的好奇心と人類の進歩や未来像との深い関わりを意識することを目標とする。	
	スポーツ	スポーツA	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことから本授業では、生涯スポーツの中でも愛好者の多い卓球・バドミントン・テニス・ゴルフなどの個人スポーツを中心に授業を実施する。	
		スポーツB	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことから本授業では、健康づくりのための体力を高める・技を高めるためのスポーツ実践として、エアロビックダンス・ウォーキング・ランニングや器械運動（トランポリン）などを中心に授業を実施する。	
		スポーツC	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことを踏まえ本授業では、チームで協力して課題を解決し、コミュニケーション能力及び、スポーツ技能を高めるために、バレーボール型・バスケットボール型・ベースボール型などのスポーツを中心に授業を実施する。	
		スポーツD	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことから本授業では、健康でしなやかな日常生活を送れるように、軽いエクササイズ（ヨガ・ピラティス等）やストレッチを通して、自己のからだについて気づきを促し、身体のコンディショニングを行う。	
		シーズン・スポーツ	身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。 以上のことを踏まえ本授業では、学外での集中授業を（夏季はトレッキング、冬季はスキー・スノーボード）通してそれぞれの技能を習得し高めると共に、自然と触れ合い、またそこに集う人たちとの交流を通して、コミュニケーションを高めることを目的として授業を実施する。	
		スポーツと健康	現代社会は、都市化、高齢化、労働環境の変化にもなる自由時間の増大といったライフスタイルの変化、また、科学技術の進歩や経済成長による生活の効率化がもたらした慢性的な運動不足やストレス傾向等にあつて、心身の健康を自ら維持管理することや、運動・スポーツ・野外運動を積極的に行うことは、現代人にとっては必要不可欠であると考えられる。 「健康」「運動」「スポーツ」の実践の基礎となる理論的な事柄について理解を深めていくことを目的に、①生活とスポーツ②生活とスポーツ技術③生活と体力④生活とトレーニング⑤女性とスポーツなどについて解説し、自らが生涯にわたって心身ともに健康で豊かな生活を営むための「健康・スポーツ」について考える機会とする。	

全学共通科目	教養科目	スポーツ	レクリエーション論	レクリエーションとは、単なる身体的な健康だけでなく、精神的な健康をも促す活動で、自分の生活に喜びと活力を満たしてくれる重要な手段というように変わってきた。そしてまた、職場や地域社会、地域福祉の現場等においても、重要な役割をはたしている。本授業では、レクリエーションの基礎理論を学び、必要とされる地域社会等におけるレクリエーションの重要性や必要性、さらには支援方法等について理解を深めることをねらいとする。なお、本授業はレクリエーション・インストラクター資格取得とも関連する。	
		スポーツ	レクリエーション実技	レクリエーションとは、単なる身体的な健康だけでなく、精神的な健康をも促す活動で、自分の生活に喜びと活力を満たしてくれる重要な手段というように変わってきたのです。そしてまた、職場や地域社会、地域福祉の現場等においても、重要な役割をはたしている。本授業では、レクリエーションでの人と人との結びつけるためのコミュニケーションワークや目的に応じたレクリエーション・ワーク等の指導・支援技術や方法を習得し、多くの人たちを結び付けるための基礎的能力の育成をねらいとする。なお、本授業はレクリエーション・インストラクター資格取得とも関連する。	
		殊教講義特	教養特殊講義	本授業は、協定を締結した他大学・他短期大学が開設する特色ある授業科目を受講し修得した場合の単位認定科目である。なお、内容が異なる場合は、複数回の履修が可能である。	
	外国語科目		英語 I A	英語の基礎的な、聞く、話す、読む、書く、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、高校までに習得した英語力を実際のコミュニケーションに活かす訓練を行う。高校までの間に学んだ英語は「知識」として脳に蓄積されているはずである。しかしいざその「知識」を使ってコミュニケーションを行なおうとすると、簡単な表現さえ発することが出来ないのが現状ではないだろうか。このコースでは、「知識」としての英語を「道具」として使えるようになることを目標とし、コミュニケーション技術向上のための基礎構築を目指す。	
			英語 I B	英語の基礎的な、聞く、話す、読む、書く、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、平易な語彙や文法を用いつつ、人間関係を築く基となるコミュニケーション能力を磨く。前期の英語 I Aを受講することで英語のみの授業に慣れ、英語を「道具」として使うための基礎を身につけるはずである。このコースでは更にその「道具」を使ってコミュニケーションを行い、会話を継続・発展させる訓練を行うと共に、自分の意見を分かりやすい言葉で表現して発表する機会も設ける。	
			英語 I C	英語の基礎的な、読む、書く、聞く、話す、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語の基礎的な読解力と表現力を身につけることを目指す。高校までの間に、入試問題で出題されるような英文読解力や英作文力は既に身につけているはずである。しかし、本来読み書きの目的はコミュニケーションである。このコースではその原点に戻り、基礎的な英語で書かれた文章を読んで理解し、それに倣って文章を作成するという訓練を繰り返し行い、書面によるコミュニケーション技術の構築を目指す。	
			英語 I D	英語の基礎的な、読む、書く、聞く、話す、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語の基礎的な読解力と表現力を身につけることを目指す。前期の英語 I Cを受講することで、センテンスレベルの英語による書面コミュニケーション技術の基礎を身につけるはずである。このコースでは更にその技術を発展させ、基礎的な英語で書かれた文書を読んで書き手の意図を理解し、簡単な英語でそれに返答するという書面によるコミュニケーション技術の向上を目指す。	
			英語 II A	英語 I A・英語 I Bを発展させ、中級レベルで4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、普通で話される英語をセンテンス・レベルから発展させ、パラグラフ・レベルでその大まかな内容を把握できることを目指す。扱うトピックは世界の人の暮らしや環境、世界各地の都市の様子など幅広い分野に及び、英語を通して一般教養を身につけることも目指す。また、海外旅行を想定した旅行英語の要素も取り入れ、英語力の実践的な利用を目指す。さらに、学期を通してグループプロジェクトを行い学期末にその成果を発表することで、1年次に培った協調性を磨くことも目指す。	
			英語 II B	英語 I A・英語 I B・英語 IIAを発展させ、中級レベルで4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、普通で話される英語をパラグラフ・レベルで理解できるようになることを目指す。また、相手の話に耳を傾けてそれに反応し、自分の意見や感想を加えてパラグラフ・レベルで表現する訓練も行う。扱うトピックは世界中の家族のあり方や最新のテクノロジー、個人固有の嗜好など幅広い分野に及び、英語を通して一般教養を身につけることも目指す。また、学期を通してグループプロジェクトを行い学期末にその成果を発表することで、より豊かな協調性を身につけることも目指す。	
			英語 II C	英語 I C・英語 I Dを発展させた、いわゆる英語の中級の、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語をセンテンス・レベルから発展させてパラグラフ・レベルで読解できることを目指す。具体的には、新聞や雑誌記事などのパラグラフを、限られた時間で辞書を引かずその大まかな内容を把握することを目指す。また、自分の身の回りのことをパラグラフ・レベルの英語で書くこと、環境・健康・文化・歴史などに関するレポートを書くことを目標とする。そのためには、かなり多くの英語の情報に接する必要がある。新聞、雑誌に限らず、平易にライティングされたエッセイやストーリーを読むことも望まれる。	

全学共通科目	外国語科目	英語ⅡD	英語ⅠC・英語ⅠDを発展させた、いわゆる英語の中級のな、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語をセンテンス・レベルから発展させてパラグラフ・レベルで読解できることを目指す。具体的には、新聞や雑誌記事などのパラグラフを、限られた時間で辞書を引かずにはその大まかな内容を把握することを目標とする。また、自分の身の回りのことをパラグラフ・レベルの英語で書くこと、環境・健康・文化・歴史などに関するレポートを書きこなすことを目標とする。そのためには、かなり多くの英語の情報に接する必要がある。新聞、雑誌に限らず、平易にリライトされたエッセイやストーリーを読むことも望まれる。	
		英語ⅢA	今まで学習した英語を発展させた、いわゆるブラクティカルな上級総合英語へのレベルアップを目的とする。たとえば、スピーチ、ディスカッション、ディベート、そしてプレゼンテーションなどにおいて必要とされる、自分の意見を英語で発表できること、相手の意見を聞きながら自分の意見も英語で述べ討論できること、相手を説得できるようなレトリカルな英語の発表ができることを目標とする。また、英検、国連英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験を念頭に高得点獲得も目標とする。そのためには、新聞・インターネットの記事など英語で書かれた各種の資料などから瞬時に必要な情報を的確に抜き出し、それを分析すること、BBC、CNN、ABCなどのニュースやドキュメンタリー番組を積極的に活用し、高度なリスニング力を体得することも望まれる。	
		英語ⅢB	今まで学習した英語を発展させた、いわゆるブラクティカルな上級総合英語へのレベルアップを目的とする。たとえば、スピーチ、ディスカッション、ディベート、そしてプレゼンテーションなどにおいて必要とされる、自分の意見を英語で発表できること、相手の意見を聞きながら自分の意見も英語で述べ討論できること、相手を説得できるようなレトリカルな英語の発表ができることを目標とする。また、英検、国連英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験を念頭に高得点獲得も目標とする。そのためには、新聞・インターネットの記事など英語で書かれた各種の資料などから瞬時に必要な情報を的確に抜き出し、それを分析すること、BBC、CNN、ABCなどのニュースやドキュメンタリー番組を積極的に活用し、高度なリスニング力を体得することも望まれる。	
		フランス語Ⅰ	初めてフランス語に接する人のためのクラス。まずはフランス語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、フランス語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		フランス語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級フランス語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がフランス語できちんとできるようになることを目指す。	
		フランス語Ⅲ	フランス語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、フランスの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたフランス語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		フランス語Ⅳ	全学共通教養科目としてのフランス語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、フランスと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とフランスの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたフランス語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		ドイツ語Ⅰ	初めてドイツ語に接する人のためのクラス。まずはドイツ語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、ドイツ語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		ドイツ語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級ドイツ語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がドイツ語できちんとできるようになることを目指す。	
ドイツ語Ⅲ	ドイツ語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、ドイツの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたドイツ語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。			

全学共通科目	外国語科目	ドイツ語Ⅳ	全学共通教養科目としてのドイツ語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、ドイツと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とドイツの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたドイツ語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		スペイン語Ⅰ	初めてスペイン語に接する人のためのクラス。まずはスペイン語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、スペイン語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		スペイン語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級スペイン語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がスペイン語できちんとできるようになることを目指す。	
		スペイン語Ⅲ	スペイン語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、スペインの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたスペイン語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		スペイン語Ⅳ	全学共通教養科目としてのスペイン語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、スペインと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とスペインの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたスペイン語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		ロシア語Ⅰ	初めてロシア語に接する人のためのクラス。まずはロシア語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり、文型の反復練習をすることによって、ロシア語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		ロシア語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級ロシア語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がロシア語できちんとできるようになることを目指す。	
		ロシア語Ⅲ	ロシア語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、ロシアの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたロシア語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		ロシア語Ⅳ	全学共通教養科目としてのロシア語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、ロシアと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とロシアの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたロシア語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		中国語Ⅰ	初めて中国語に接する人のためのクラス。まずは中国語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、中国語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
中国語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級中国語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介が中国語できちんとできるようになることを目指す。			

全学共通科目	外国語科目	中国語Ⅲ	中国語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、中国の雰囲気を映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きた中国語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		中国語Ⅳ	全学共通教養科目としての中国語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、中国と日本の文化や習慣の違いを知ることにも視野に入れる。日本と中国の歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きた中国語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		韓国語Ⅰ	初めて韓国・朝鮮語に接する人のためのクラス。まずは韓国・朝鮮語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、韓国・朝鮮語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		韓国語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級韓国・朝鮮語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介が韓国・朝鮮語できちんとできるようになることを目指す。	
		韓国語Ⅲ	韓国・朝鮮語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、韓国・朝鮮の雰囲気を映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きた韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		韓国語Ⅳ	全学共通教養科目としての韓国・朝鮮語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、韓国・朝鮮と日本の文化や習慣の違いを知ることにも視野に入れる。日本と韓国・朝鮮の歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きた韓国・朝鮮語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		日本語Ⅰ	日本語を母語としない学生のための授業である。大学の授業を受講する際に必要な日本語のうち、聞くことと話すことを中心に、基礎を固めて応用に備える練習を行う。	
		日本語Ⅱ	日本語を母語としない学生のための授業である。大学の授業を受講する際に必要な日本語のうち、読むことと書くことを中心に、基礎を固めて応用に備える練習を行う。	
		日本語Ⅲ	日本語を母語としない学生が大学の授業で必要となる日本語を総合的に養う授業である。特に、受講という学習活動に必要な日本語を総合的に訓練する。講義を聴き、ノートを取り、質疑、応答に対応して、内容を理解するという流れと、理解、整理した内容に対する詳細を補足的に調べることで、さらに内容の理解を深める方法を学ぶ。	
		日本語Ⅳ	日本語を母語としない学生が大学の授業で必要となる日本語を総合的に養う授業である。特に、学術上の表現・発信活動に必要な日本語をコミュニケーションに訓練することで、日本の大学の学習活動のあり方とその流れを理解する。また、まとまった意見として口頭で発表するプレゼンテーションを通し、文化的、倫理的約束事に配慮しつつ産出する方法を学ぶ。 具体的には、講義で出された課題を実施する際、下調べを行い、その調査に基づいて他の学生と意見交換を行うのであるが、掲示板、メール、板書においては文書で、また、グループ活動では口頭で意見交換しながら、考察を深める練習を行うものである。	
	外国語特殊演習	本授業は、協定を締結した他大学・他短期大学が開設する特色ある授業科目を受講し修得した場合の単位認定科目である。なお、内容が異なる場合は、複数回の履修が可能である。		
	地域文化・国際理解科目	地域文化理解Ⅰ	本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。	
		地域文化理解Ⅱ	本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。	
		地域文化理解Ⅲ	本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。	

<p style="text-align: center;">全学 共通科目</p>	<p style="text-align: center;">地域文化・国際理解科目</p>	<p style="text-align: center;">国際理解（海外研修）Ⅰ</p>	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。</p>	
		<p style="text-align: center;">国際理解（海外研修）Ⅱ</p>	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。</p>	
		<p style="text-align: center;">国際理解（海外研修）Ⅲ</p>	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。</p>	
		<p style="text-align: center;">国際理解（海外研修）Ⅳ</p>	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が2週間以上、かつ研修の実日数が10日間以上の場合、1単位を認定をする。</p>	
		<p style="text-align: center;">国際理解（海外研修）Ⅴ</p>	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が迫られることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が2週間以上、かつ研修の実日数が10日間以上の場合、1単位を認定をする。</p>	
<p style="text-align: center;">博物館学芸員課程に関する科目</p>	<p style="text-align: center;">生涯学習概論</p>	<p>本授業では、生涯学習の理念や制度など基礎的知識を学び、生涯学習に携わる博物館学芸員・図書館司書・社会教育主事・公民館主事など、その活動や方法、意義について事例や実践例などを通して学ぶ。</p>		
	<p style="text-align: center;">博物館概論</p>	<p>博物館学芸員資格取得のための必修の授業である。多くの博物館を対象にしたが、歴史系博物館を中心に、博物館の本質、機能や役割、業務の内容、学芸員の仕事とともに、博物館に関連する法律など全般的な基礎知識を学ぶことを目的とする。</p>		
	<p style="text-align: center;">博物館経営論</p>	<p>授業のテーマは、「現代博物館経営の諸問題解決に向けて」。博物館経営では、理念に基づいた様々な効率的、かつ効果的な事業展開を図っていかねばならない。特に公立博物館における博物館経営の向上への取組は、行政改革において運営面や財政面から指定管理者制度導入など、切実な問題に直面している。いかに入館者増を図り、収入を増加させて安定した財政運営に導くかという一面的な問題解決では、博物館経営は成り立たない。</p> <p>本授業では、現代博物館の抱える経営の諸問題の現状と課題を通して、博物館のあるべき姿を模索しながら、学芸員としてどのように博物館経営に携わっていくかを考える。</p>		
	<p style="text-align: center;">博物館資料論</p>	<p>博物館にとって資料は博物館活動を行うための基本となるものである。本授業では、博物館資料の種類や、その収集・整理の方法、保存や活用するためには何が必要なのかなどについて学ぶ。</p>		

博物館学 芸員課程に 関する科目	博物館資料保存論		資料の保存は博物館の大きな役割である。ここでの保存とは、単に失くさない、壊さないということではなく、歴史の物的証拠である種々の資料を良好な状態を保ったまま、次世代に引き継ぐということである。そのためには、防犯や防災対策はもちろんのこと、温湿度変化や光、気中化学物質などの環境要因や虫カビによって引き起こされる変質を防ぐための対策が必要となる。本授業では、博物館において必要とされる資料保存のための環境、またこれを維持するための構造や空間配置、設備、管理体制などに関して概観する。	
	博物館展示論		博物館における展示の歴史、現状、教育活動、主要な博物館・美術館等の紹介・見学等をおして博物館展示に関する基礎的理解を深める。さらに博物館展示の意義について、調査研究、展示の計画、解説・図録の作成等、具体的な作業を通して、その果たす役割についても考える。	
	博物館情報・メディア論		博物館資料データベースを基に博物館活動に関わる様々なメディア（図録、展示パネルなど）を再構成する基礎的能力を習得できるようにする。	
	博物館教育論		社会教育機関としての博物館の役割、エデュケーターとしての学芸員の役割を理解すること。学芸員として学習者の特性や発達段階に応じて適切な理論と方法を選択し、生涯学習に繋がる基礎的能力を涵養したい。	
	博物館実習		博物館学芸員として必要な基礎的知識および技術、心構え等について実習する。また、学内の博物館施設「大妻女子大学博物館」あるいは博物館に認定された学外の施設で実習を行うので、その際に必要となる事項や留意すべき点などについて学習する。 「博物館実習」は3つの内容から構成される。 (1) 講義や実技を含む学内実習 (2) 見学実習および巡見 (3) 実際の博物館での館内実習である。 (オムニバス方式／全30回) (23 是澤博昭／15回) 博物館見学実習、博物館館務実習、事前事後指導を中心に担当する。 (34 下田敦子／15回) 博物館実務実習を中心に担当する。	オムニバス方式
	文化史A		我々のくらは過去の歴史の積み重ねによって成り立っている。本授業では「日本文化」の原点である原始古代の文化について学ぶ。旧石器時代から弥生時代を対象とし、さまざまな歴史事象を通観して各時代の文化の特質を明らかにする。	
	文化史B		我々のくらは過去の歴史の積み重ねによって成り立っている。本授業では「日本文化」の原点である原始古代の文化について学ぶ。古墳時代から奈良時代を対象とし、さまざまな歴史事象を通観して各時代の文化の特質を明らかにする。	
	美術史A		西洋美術の源流にある古代ギリシア・ローマの美術からルネサンス美術までをとりあげ、博物館学芸員を目指す者にとって必要な知識を習得し、芸術作品の見方をつちかうことを目標としている。 また、美術史の基礎的な事柄を習得することを目的としている。	
	美術史B		西洋美術の、バロック時代（17世紀）から20世紀までの作例をとりあげ、博物館学芸員を目指すものにとって必要な知識を習得し、芸術作品の見方をつちかうことを目標とする。	
	民俗学A		民俗学の基礎を学ぶ。どこの地域に行ってもその地域の歴史や生活の様子をテーマにした博物館を見かける。「□（地域名）歴史・民俗博物館」とか「□郷土博物館」などである。歴史と民俗はワンセットで組み込まれていることが多いが、展示の内容に違いがある。おおよその傾向として歴史が過去の人が記した古文書や歴史的出来事を中心に展示しているのに対し、民俗は生活用具や聞き書き資料に重きを置いた内容になっている。この違いが民俗学を特徴付けているともいえるが、民俗学は生活のあらゆる場面を研究対象としている。それ故研究者によって関心領域も異なり今日の民俗学は細分化される傾向を強めているのが実情である。 本講義ではそうした流れを念頭に置きつつもA「社会生活」、B「宗教（信仰）生活」の二つの面に絞って進めていく。Aの社会生活は人と人とのつながり方を考察する。特に家族・親族、地域社会で人はどうつながっているのか、という点に関する代表的な事例を紹介しながら解説する。	
民俗学B		民俗学Aに続き、民俗学の基礎を学ぶ。Bでは主に宗教（信仰）面を取り上げる。私たちの生活は情報化社会の中で一見すると均一化したようにも思われるが、ちょっとしたところでこれが「標準」ではなかったことに気がついたりする。そうした経験は他の地域の出身者とのつきあいの中で生じることがほとんどと思う。また、どんなに科学的な知識を学んだとしても、日常生活を省みると「げんをかつぐ」とか「縁起が悪い」など合理的とはいえないものにこだわっている自分がいる。些細なことのように思っても、こうしたことは実は私たちの精神世界を根底から支えている文化であり、しかもその有り様は多様なのである。本講義では民俗学の視点から私たちの生活の中に展開する様々な宗教（信仰）をみていきたいと思う。		
図書館司書に 関する科目	生涯学習概論		本授業では、生涯学習の理念や制度など基礎的知識を学び、生涯学習に携わる博物館学芸員・図書館司書・社会教育主事・公民館主事など、その活動や方法、意義について事例や実践例などを通して学ぶ。	
	図書館概論		本授業では、図書館に関する全体的な理解を深めるために、図書館の歴史や、館種などの基本的な事柄を説明する。	

図書館司書に関する科目	図書館情報技術論	<p>図書館の使命は、様々な情報資源を蓄え、将来に向けて保存し、利用者に提供することである。現在、図書館で利用される情報資源は多様な形態をとっており、そこには情報技術が深く関係している。情報資源は、従来からあるプリント媒体だけではなく、デジタル媒体の資料も多く利用されている。また、図書館を通じて提供可能な図書館外のデータとしては、インターネット上の情報資源やデータベースもある。情報技術の活用は、図書館で提供される情報だけではなく、図書館自体の業務や所蔵資料の検索、広報としてのWebページなどにも影響を与えており、今や情報技術は、図書館とは切り離すことのできない重要な位置を占めている。</p> <p>本授業では、図書館にかかわるいろいろな情報技術について理解し、基礎的な情報技術を修得することを目標としている。図書館スタッフとして必要な知識や技術だけではなく、利用者側からの視点や図書館を運営する自治体等からの考えや立場も考慮しつつ、図書館の運営を支える核となる情報技術を考えつつ学んでもらいたい。</p>	講義 26時間 演習 4時間
	図書館制度・経営論	<p>記録された知識や情報を収集、組織、保存し、人々の要求に応じて提供するための「社会的機関」「情報社会の羅針盤」と位置づけられる図書館は、制度的にそれぞれの設置者が定めた使命あるいは設置の目的を掲げている。</p> <p>図書館の経営とは、そうしたねらいが十分に達成できるように、「組織の内部および外部に働きかける活動」であるという内容を核に講義を行う。なお、図書館活動と地域社会のかかわりについても解説する。</p>	
	図書館サービス概論	<p>現代の図書館の重要な機能であるサービス提供機能の全体的な理解を図るために、代表的な図書館サービスを取り上げ解説する。図書館サービスの構造、種類、方法を理解することが本科目の目標である。</p> <p>まず、図書館サービスの考え方、構造、変遷等について学修する。つぎに図書館サービスの二つの柱である資料提供サービスと情報提供サービスについて考察する。この二つの領域は、図書館サービスの車の両輪とも言われる基本的なものである。その上で、利用対象者別のサービスとして、障害者・高齢者・多文化サービス等について理解を深める。合わせて、こうしたサービスを支える仕組みである図書館の連携・協力、接遇、著作権についても学ぶ。本科目では図書館のサービス面に焦点を当てるが、図書館サービスのうち児童サービス、情報サービスについては別に科目を設定し、より詳しく学ぶ。</p>	
	情報サービス論	<p>本授業では図書館における情報サービスの意義を明らかにしたうえで、図書館における各種情報サービス、情報検索サービスの理論と方法、情報サービスに必要な各種情報源の種類と特性、その組織化などについて解説する。図書館の情報サービスについて基礎的な知識を身に付けることをねらいとする。</p>	
	児童サービス論	<p>本授業では以下について解説する</p> <ol style="list-style-type: none"> ①乳幼児からヤングアダルトを対象とした児童サービスの意義 ②子どもの発達と学習における読書の役割 ③年齢別の児童サービス ④児童サービスの企画・運営 ⑤各種資料の意義と役割 <p>以上を理解したうえで、子どもたちへのよりよい図書館サービスとは何か、理解を深めることを目的とする。</p>	講義 28時間 演習 2時間
	情報サービス演習（1）	<p>本演習では、図書館が提供するサービスのうち、情報サービスについての演習を行う。本科目では、その中でも信頼性の高い情報源を調べるための手法を身につけるため、レファレンスブックを中心とした探索法について学ぶ。まず、情報サービスの概要について理解を深めるため、その設計方法、レファレンスコレクションの整備、レファレンスプロセスについて解説し、つぎに、実際のレファレンスを想定したインタビューについて確認を進める。最後に、レファレンスブックを中心にさまざまな情報源を解説するとともに、それらを使った演習を行う。この演習を通して、情報を探索する力を高める。</p>	
	情報サービス演習（2）	<p>本演習では、主に情報検索（IR：information retrieval）の基礎的な知識と技術を、座学と実習を通じて身に付ける。</p> <p>私たちの日常生活では、インターネット上の情報を検索することや、様々なツールを用いて情報を入手し利用することがごく普通に行われている。</p> <p>しかしながら、信頼度を考慮した正確な情報や専門的な情報は、一般的な検索エンジンを用いた情報検索では、十分に見つけることは期待できない。</p> <p>信頼性の高い情報をどのように見つけるかは、ある程度専門的な知識と技術が必要である。どこを探せばどのような情報があるか、どのように探せば的確な情報を得られるかは、図書館のような情報提供を担う組織のみのミッションではなく、だれもが身に付けておくべきスキルのひとつでもある。</p> <p>本授業を通じて、様々な問題解決を可能とする情報検索ができるような知識と技術を身に付けることが大きな目標である。</p>	
	図書館情報資源概論	<p>図書館のコレクション（蔵書等）は、長期間にわたって構築されるものである。そのコレクションは、個別の図書館の特徴や魅力を示すうえで、重要な要因でもある。そこで、本講義では、魅力的なコレクションを構築していく上で必要な知識を得るため、コレクションの特徴や収集、蓄積について理解を深める。</p> <p>まず、資料の類型について学んだ上で、コレクション形成の理論、情報源、プロセスを学ぶ。また、主題分野ごとの情報資源とそれらの特性についても考察する。最後に、図書館と密接に関わる出版社・取次を含む情報資源の生産・流通について理解する。</p>	

情報資源組織論		<p>図書館をはじめとする「知のアーカイブ」においては、多岐にわたる資料を取得し、その資料に利用者がより確実にアクセスすることが可能なように、様々な組織化の方法を発展させてきた。</p> <p>本授業では、まず、これら組織化の意義からスタートし、情報資源組織法を概括する。その後、ほとんどの受講者が次年度に履修するはずの「情報資源組織演習」に備えて、実際に利用されているさまざまな組織法について理解していく。特に、司書教諭資格取得を目指している受講生には、組織化の演習機会がほとんどないため、それを自覚しつつ、本講義においてはそのエッセンスを必ず身に付けてもらいたい。また、各組織法自体が、コンピュータを利用したボーダーレスになりつつある状況も把握し、コンピュータやデータベースを利用した演習にも備えてもらいたい。同時に、図書館内の資料組織化だけではなく、インターネット上の情報資源の組織化についてもその基礎を理解する必要がある。</p> <p>授業全体で学んでもらいたいことは、単に組織法を覚えることではなく、その組織法にどのような意味があるのかを受講者自身が考え咀嚼してもらいたいことと、日本で利用されている代表的な組織化の具体的な方法の要点である。そのためには、組織化する側だけの視点ではなく、利用者側の視点も常に意識しつつ受講し学習を進めることが必要である。</p>	
情報資源組織演習		<p>コンピュータを中心とする情報化の進展は、図書館においても、様々な変化を与えてきた。公的機関や民間から様々なMARC（機械可読式目録）が提供され、図書館の現場では、それを利用（流用）して、目録データベース作成の負担を軽減させているというのが実状である。それは、確かに省力化にはなるが、図書館員の様々な能力（特にデータ作成能力）を著しく低下させている現実も見逃せない。資料の組織化は、図書館システムの基礎でもあり、組織化を的確に行うためには、既存のデータを利用するだけの能力では明らかに不足である。</p> <p>本授業では、受講者自身が考えることによって、具体的に資料を組織化してもらいたい。そのためには、各組織法で利用するツール（日本目録規則など）から、必要な情報を読み取る能力が必要である。マニュアルをきちんと読みこなし、効率のよい作業ができる技能をしっかりと身に付けてもらいたい。演習を通じて得られたこれらの能力は、既存のデータの矛盾や誤りもきつと発見できるはずである。</p> <p>また、組織化の手法を用いて作成されたデータは、一般的にはコンピュータを通じて利用されていますから、それらデータをデータベースに登録する作業もシミュレートしてもらいたい。時間的な余裕があれば、ネットワーク情報資源の組織化についても、より理解を深める演習にしていく。</p>	
図書・図書館史		<p>本授業では図書を中心とした情報資源の歴史と図書館の歴史を学ぶことによって、図書館と情報資源について、より広い視野から考えることができるようになることを目的とする。</p> <p>講義では図書館や図書館で扱われるメディアの歴史的变化について、日本はもとよりアメリカやヨーロッパ、イスラムやインドなどの諸外国についても取り上げ解説する。併せてそれぞれの文化圏がどのような相互作用を及ぼしたかについての理解を深める。</p>	
図書館サービス特論（1）		<p>本授業では公共図書館を運営するなかで起こりうる可能性のある、様々な問題について解説する。近年の公共図書館で起きている図書館サービスにかかわる諸問題を取り上げ、図書館サービスを取り巻く環境について理解を深めることを目的とする。</p>	
図書館情報資源特論（2）		<p>図書館情報資源特論（2）では図書館基礎特論と合わせて「医学情報特論」として授業を構成し、医療専門家、患者や家族、一般市民のための医学情報やサービスについて、次の4点を中心に解説する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医学情報の需要と供給 ・研究の進展が早く日々新しい発見がある医学情報の特徴 ・人命にも関わる医学情報の信憑性 ・最新、且つ、正確な情報を提供するためのサービス 	
図書館基礎特論		<p>図書館基礎特論では図書館情報資源特論（2）と合わせて「医学情報特論」として授業を構成し、医療専門家、患者や家族、一般市民のための医学情報やサービスについて、次の4点を中心に解説する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医学情報の需要と供給 ・研究の進展が早く日々新しい発見がある医学情報の特徴 ・人命にも関わる医学情報の信憑性 ・最新、且つ、正確な情報を提供するためのサービス 	

授 業 科 目 の 概 要				
(人間共生学部共生デザイン学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
学部 共通 科目	人間共生総論Ⅰ		本授業は新入生に対して学部の基本理念である「共生」について考えさせることを目的とした授業である。人間共生総論Ⅰにおいては、社会学の観点から共生に問題を考えていく。ジェンダー間、世代間、異文化間、様々な次元の共生について論じられる。受講生には自分とは異なる他者を理解し、共に生きていくための知識と知恵を身につけてもらいたい。講義科目ではあるが、授業内容についての討論を行う等、学生たちが能動的に学べる機会を提供したいと考えている。	
	人間共生総論Ⅱ		人は誕生の瞬間から人との関係の中で生き、成長していく。人間共生とは「人と人が共に生きる」ことであるが、よりよい共生を目指すためには、お互いの心を理解する必要がある。本授業の目的は、自身の感情や考え方を見つめるとともに他者の視点でも物事を捉え、「人間共生」を心理学の立場から多角的に眺めること、そして日常生活の中で実践的に「人間共生」に関する学びを生かす発想力、創造力を身につけることを目指す。そのために本授業では、「人間共生」にかかわる多様な心理学領域の知見を学ぶ。	
	人間共生総論Ⅲ		急速な社会の変化に伴い、人間関係のあり方も大きく変わりつつある。本授業では、共生社会の基盤となる人間関係の基本的視点、対人認知、人間関係の生涯発達、対人関係の成立、コミュニケーションなど基礎的な概念を学ぶ。次に、現代社会において円滑な対人関係を促進あるいは阻む要因について、現在社会で生じている事象を通して考える。そのうえで、円滑な人間関係を構築するための方法についてロールプレイを通して身につける。さらには対人援助における人間関係について事例から学ぶ。	
	人間共生総論Ⅳ	○	本授業は、共生社会の実現に向けて、多様性を背景とする地域社会や職場の課題を、国内外の地理的差異に関わる「グローバル・地域共生」、多様な特徴を持つ人間同士の共生である「人間共生」の二側面から「共生」を捉える様々な視点について、多様な専門領域の教員がオムニバス形式で授業を行っていく。様々な角度から社会の課題を捉える広い視点を持ち、発想力、構想力を養う。 (オムニバス方式/全15回) (2 小川浩/2回) 「共生社会」とは何か、またグローバル・地域共生と人間共生の2つの視点を知る。社会の課題を発見する視点を養う。 (4 蔵野ともみ/2回) メンタルヘルスの視点から人間共生を捉え、発想力を養う。 (6 伊藤みちる/1回) 国際的な課題からアプローチする視点と発想力を養う。 (7 高丸理香/2回) インターセクショナリティの視点から多様な人々が尊重しあう社会づくりのための発想力を養う。 (3 大橋寿美子/2回) コミュニティを育む共生空間と運営デザインのための視点と構想力を養う。 (8 野崎智仁/2回) 総合リハビリテーション及びコミュニティ創りの視点と構想力を養う。 (5 本田周二/2回) 心理学の観点から多様な特徴を持つ他者とのコミュニケーションに必要な知識を養う。 (1 齊藤豊/2回) まとめ：共生デザインにおける各分野の基礎的知識を身につけて、その中から深く探究する分野を見つける。	主要授業科目 オムニバス方式
	社会学概論Ⅰ		本授業では、私たちの身近な諸事例と関連付けながら、まず、社会的行為やコミュニケーション等の社会学の基礎概念について学ぶ。次に、個人と社会との関係を解明するために構築された主要な社会学理論について学習する。本授業を通じて、受講者は、身近な諸事例と関連付けながら、社会学の基礎概念と理論を学ぶことによって、自分自身の日常生活と現代社会の構造・動態との関連を多角的かつ体系的にとらえるため、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、必要な社会学の基本的な考え方を身につけることができるようになる。	
	社会学概論Ⅱ		本授業では、まず、現代日本社会における、地域社会の変容、結婚や家族の変化、少子・高齢化の進行といった側面から現代社会の特色と問題点を学習する。本授業を通じて、受講者は、身近な諸事例と関連付けながら、地域社会の変容、結婚や家族の変化、少子・高齢化の進行といった側面から現代社会の特色と問題点を学ぶことによって、自分自身の日常生活と現代社会の構造・動態との関連を多角的かつ体系的にとらえるため、さまざまな人々と社会と共存する知識を備え、必要な社会学の基本的な考え方を身につけることができるようになる。	
	心理学概論Ⅰ		本授業の狙いは、心理学を学ぶ上での基本的な知識を身につけることにある。特に、心理学的な考え方を身に付け、学問としての心理学を学ぶ基礎を身に付ける。具体的には、心理学史、心と脳、知覚、学習、記憶、思考、自己について、それぞれ身近な例を取り上げて概説する。授業は、講師による講義に加え、適宜、重要なポイントについてディスカッションを行うことにより、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、学生が自らの体験を心理学的に理解、説明できることを目指す。	
	心理学概論Ⅱ		本授業の狙いは、心理学を学ぶ上での基本的な知識を身につけることにある。特に、心理学的な考え方を身に付け、学問としての心理学を学ぶ基礎を身に付ける。具体的には、動機づけ、原因帰属、感情、性格、知能、思考の発達、愛着、心理学研究法について、それぞれ身近な例を取り上げて概説する。授業は、講師による講義に加え、適宜、重要なポイントについてディスカッションを行うことにより、さまざまな人々と社会と共存する知識を備え、学生が自らの体験を心理学的に理解、説明できることを目指す。	

学部 共通科目			社会福祉学概論Ⅰ	<p>本授業のねらいは、社会福祉学に関する導入の講義科目として、社会福祉とは何か、その概念、制度・政策について理解を深めることである。</p> <p>多様な地域生活課題を抱える人々に関する事例や、日本における福祉的な課題・テーマ・時事をもとに、それに対する向き合い方や考え方を学び、問題の構造を読み解く力や必要とされる思考を身につける。</p> <p>社会福祉の主要な概念および日本における制度・政策について概説する。そのうえで、日本における実際の出来事や社会問題をもとに考察することや、多様な人々と共生し協働するための知識を備え、福祉的思考を涵養する。</p> <p>授業は講師による講義を中心に、学生個人のワーク、授業内容に応じて少人数でのディスカッションを行う。</p>	
			社会福祉学概論Ⅱ	<p>本授業では、社会福祉学の全体像を学び、対象ごとの事例検討から各論的な理解を深める。授業を学んだあと、多様な対象や領域から、各自の専門的興味を持てるようにすることをねらいとする。社会福祉とよばれる社会的現象は、歴史、価値、対象、政策、運営、援助、社会行動など、さまざまな要素を包摂しつつも、単なるその集合体ではない。内部的には、多様な要素からなるシステムとしての体系をもち、同時に外部に対してはより高次の、あるいは広範なシステムの構成要素である、一つの全体として存在している。本授業では、そのような社会福祉の全体像を、可能な限り一定した視点と枠組みを基盤に、理論的に把握することをめざす。本授業では、さまざまな人々や社会と共存する知識を備え、様々な社会的現象の事例検討を通して、専門的、多角的な視点を身につける。</p>	
			共生デザイン概論Ⅰ	<p>本授業では共生デザイン概論分野における多様性のうち、グローバルに関わる概念をグループワークを中心に学習する。</p> <p>地理的差異による多様性、すなわち人種、言語、宗教、文化、生活習慣等の差異を含むグローバル化に伴う多様性である。グローバル化は、しばしば政治・経済領域での他国との連携や競争の文脈で言われるが、一部の国際的なビジネスに限らず、国内においても、インバウンド消費に焦点を当てた商品・サービスの開発・提供、外国人労働者との協働や雇用管理、地域社会における外国人住民との共生、外国人に対する教育・医療・福祉場面での対応など、職場や地域社会における日常的なグローバル化が課題となっている。本授業では、国際貿易や国際協力を中心に、グローバルな地理的差異に基づく多様性に焦点を当て、異なる地域間での対話と協力の重要性、そして国際社会での課題解決について学ぶことでグローバルにおける多様性を理解することを目指す。</p>	主要授業科目
			共生デザイン概論Ⅱ	<p>本授業は、少子高齢化社会や障害者福祉などをもとに、個人としての多様性を考え、地域づくりの在り方について学習する。</p> <p>就労支援や生活支援という保健医療福祉的視点を持ち、地域の課題分析をすすめるための思考を身につける。</p> <p>特に就労に関しては社会的に労働者の減少からその確保が重要視されていることから、取り巻く周辺事情を解説する。</p> <p>授業は生きにくさを抱える個人の課題等を講義により行い、小グループでの演習により想定した地域の分析を行う。</p>	主要授業科目
専門 教育科目	基礎 科目	グ ロー バ ル ・ 地 域 共 生 基 礎 科 目	国際関係論	<p>国際関係論は、日本の人々が平和で安全な生活を送ることを可能にしている世界的な枠組みについて学ぶ学問である。日本から遠く離れた国で起こっている現象が日本の日常生活に大きな影響を与えるように、冷戦後の国際秩序の成り立ちからグローバル化の始まりとその問題、そして現在の日本を取り巻く国際的な環境やその中で日本の役割を検証する。</p> <p>本授業の目標は、個人や市民のローカルな立場から、グローバルな視野で今日の世界における日本の国際的な立ち位置を理解し、日本を含めた地球社会の諸問題解決に向けて行動できるようになる基礎力の習得である。</p> <p>テキストに沿って国際関係論の基礎理論を押さえたうえで、さまざまな国際機関や日本の活動を紹介しながら地球規模の諸問題への議論を深め、映画やドキュメンタリー映像を用いながら国際関係論に関わる問題を身近に感じられるように展開する授業である。</p>	主要授業科目
			コミュニティ・空間デザイン論	<p>本授業は、現代社会において人と人がつながる必要性を認識し、コミュニティデザインのあり方を考えることをねらいとする。</p> <p>本授業を通じて現代社会が抱えるコミュニティの課題について理解を深め、共生空間においてコミュニティの担い手となりコミュニティ空間をデザインするための基礎的知識を身につける。また、学生自身の考えを発表する場面の設定から、考えながら学ぶ姿勢およびプレゼンテーション力を身につける。</p> <p>本授業は、主に日本の家族や地域社会におけるコミュニティの実態と課題を把握し、求められるコミュニティに応じた共生空間と運営をマネジメントする意義と方法を先進事例から学ぶ。</p> <p>授業は講義形式で行われるが、講義内容を受けて学生自身の考えをプレゼンテーションし、意見交換を行う。</p>	主要授業科目
			コミュニケーションスキル論	<p>本授業の目的は、対人関係におけるコミュニケーションの構造や諸課題、有用性などを理解し、多様な対人場面におけるコミュニケーションスキルを養うことである。</p> <p>心理学、保健医療学なども踏まえたコミュニケーションに関する専門的な知識と技法を身につける。コミュニケーションに関する概要、面接（支援）に関連する理論、基本的面接技法などについて概説する。</p> <p>授業は講師による講義、授業テーマに応じて参加型演習の形式で授業を実施する。</p>	主要授業科目 講義 12時間 演習 18時間
			社会学と社会システム	<p>本授業は、現代社会の特性、生活の多様性、人と社会の関係、社会問題とその背景について、社会学の視点及び社会学理論から理解することを目的とする。</p> <p>まず初めに、社会学に関する歴史を踏まえながら、社会システム論、社会変動論等による現代社会の捉え方を理解する。さらに、日本の村落・都市等の地域社会の特質や、異文化と地域社会の課題について事例・新聞記事を基に検討していく。また、生活と人生、社会構造と変動、市民社会と公共性、社会集団と自己・他者について学ぶ。</p> <p>社会学理論に基づいて社会現象や地域社会の仕組み、社会集団、生活様式の変化と差異について理解し、説明できる力を養う。</p>	

専門教育科目	グローバル・地域共生専門科目	文化人類学		文化人類学とは、世界のさまざまな人々の文化を知ること、自文化の「当たり前」を考え直す学問である。そのおもしろさは、自分の「常識」から遠く離れた世界を知ること、視野が広がることである。本授業の目的は、多様な背景を持つ人々と相互理解を図るために必要なものの見方・考え方を身につけることである。 本授業では、文化人類学の基本的な知識と技能について学び、異文化理解の基礎を身につけることを目指す。世界各地と日本の、日本各地と自分個人の、具体的な事例を客観的に分析し、人間文化の多様性について論理的に理解すること、そして文化相対主義の態度を学ぶことで、自文化中心主義を批判しながら異文化社会を相対的に理解する柔軟性を養うことが目標である。 本授業ではグループワークやプレゼンテーションを行い、学期末にはワールドワークのレポートを課す。	
		まちづくりデザイン		本授業は、生活者の視点で都市やまちへの理解を深め、高齢化や空き家などの多摩地域の課題を解決する、持続可能なまちづくりデザインのための知識と手法の獲得を目的とする。 まちづくりの担い手となるために、まず都市の成り立ちやニュータウンを取り巻く環境変化と課題についての知識を修得する。さらに、ニュータウンの課題を解決するための市民参加による協働でのまちづくりの手法を獲得する。 本授業は、多摩キャンパスがある多摩地域を対象として、都市の成り立ち、生活空間を支える基盤、ニュータウンの開発と変化および現在抱える課題について学ぶ。その上で、持続可能なニュータウンのまちづくりデザイン手法について、先進事例やまちづくりワークショップなどを通じて考えていく。授業は講義形式で行われるが、一部ワークショップ形式でまちづくりのアイデアを出し合い、意見を集約しプレゼンテーションを実施する。	
	人間共生基礎科目	ジェンダー論	○	本授業の目的は、「ジェンダー」について基本的な知識を獲得するとともに、社会問題を解決するための思考力と問題解決力を養うことである。 「ジェンダー」をめぐる社会問題は、身体的な違いだけではなく、社会・文化的な違いが複雑に絡み合っている。本授業を通して、身体的、社会・文化的な違いがもたらす問題の背景や日常生活における「当たり前」のリスクを見抜く力を身につける。 授業は、ジェンダー研究を学ぶ講義と身近なジェンダー問題をテーマとしたグループディスカッションを組み合わせて実施する。	主要授業科目
		人間の多様性と障害	○	本授業は、人間共生の土台となる人間の多様性を理解するための視点及び基礎知識の修得を目的とする。特に、障害及び疾病を中心とし、原因、症状や状態、生活及び職業上の課題等に関する基礎知識を修得する。 障害や疾病により人々がどのような困難を抱えているか、どのような配慮や対応が必要かについて、事例を通して学ぶことにより社会的課題を発見する視点と、解決に向けて主体的に考える姿勢を身につける。 本授業は講義を通して基礎知識を学んだ後、障害者福祉施設、障害者雇用企業等の協力を得て、ゲスト講師や映像等により実際の現場での様子を知り、グループディスカッションや小レポート等で知識の定着を図る。	主要授業科目
		メンタルヘルスの課題と支援 I	○	本授業は、メンタルヘルスの課題について基本的な考え方と精神保健学の役割を学ぶ。さらに、人間の多様性、文化や社会的背景の差異から生じる様々なメンタルヘルスの課題について捉える視点を学ぶことを目的としている。 また、現代社会における精神保健の諸課題と、精神保健の実践および精神保健福祉士の役割、精神保健を維持増進するために機能している専門機関や関係職種との役割と連携の実践について事例を用いながら学ぶ。特に、家族、学校教育、勤労者の精神保健の課題とアプローチを取り上げる。さらに、国際的視野での精神保健活動や現状について理解するために、WHO等の国際機関の活動や諸外国の精神保健医療の実情について実践事例を交えながら理解する。 精神保健の現状と対策について、知識をもとに多様な人々の課題を考えることができる力を養う。	主要授業科目
		医学知識		本授業は、人体の構造と働き、疾病、障害、さらにリハビリテーション、健康の考え方について基本的な知識を身につけることをねらいとしている。 まず最初に、人のライフステージにおける心身の変化と健康課題について理解する。さらに、人の身体構造と心身機能について学び、健康・疾病の捉え方について理解する。また、疾病と障害の成り立ち及び回復過程について学ぶ。公衆衛生の観点から、人々の健康に影響を及ぼす要因や健康課題を解決するための対策を理解する。 人体模型や視覚教材を用いて、体系的に理解する。	
	人間共生専門科目	心理学と心理的支援		本授業は、人の心の基本的な仕組みと機能を理解し、環境との相互作用の中で生じる心理的反応を理解する。また、自己理解や心理療法におけるアセスメント手法と様々な介入技法の基礎を理解することを目的としている。 心理学の基礎分野である「心理学理論」とその理論に基づいて心理相談を行っていく際のアセスメント手法（心理検査）、心理的支援（心理療法）の具体的な実践方法について学ぶ。 また、各テーマについて講義だけではなく、グループディスカッションや具体的な相談場面を想定したロールプレイを導入して、対人援助活動に必要とされる実践能力の基礎を身につける。	
		ソーシャルワーク論 I A		本授業は、ソーシャルワークの価値や倫理、理念といった概念や基盤となる考え方、社会福祉士・精神保健福祉士の役割、形成過程を学ぶ。さらに、社会の中で生活する中で、問題や課題を持つ当事者の立場を尊重し、問題の軽減や解決を目指そうとする「相談援助（ソーシャルワーク）」の意義や目的を学ぶ。 講義を中心としながら、視覚教材や事例を取り上げ、ディスカッション等を行う。これらを通して、多様な人々の生活問題に対して、ソーシャルワークの価値・倫理に基づいて、考察し、分析できる力を習得する。	
		精神医学 I		本授業では、精神医学概論、精神障害の理解、精神疾患の症状と診断、代表的な精神疾患について、講義を中心としながら、症例や事例を用いながら学ぶ。特に、精神疾患の分類を把握するとともに、主な疾患の症状、経過、治療方法などについて理解し、精神医学・医療の歴史を学び、現在の精神医学・医療の位置づけを理解することを目的とする。 授業を通して、精神医学の基本的なアプローチ、主な精神疾患の概略を理解し、他者に説明できる力を養う。	

専門教育科目	人間共生専門科目	マイノリティと社会問題	<p>本授業の目的は、マイノリティ（少数派）の人々が抱える社会問題について、制度・政策や権利の視点から考察できるようにすることである。特に、セクシュアル・マイノリティを中心に、歴史的経緯を踏まえつつ、社会構造や格差・差別のメカニズムを理解する。</p> <p>性（セックス/ジェンダー）に対する認識は多様であり、多様な人々が尊重しあうための広い視野とともに、社会的正義の実現に向けた思考力と判断力を身につける。</p> <p>授業は、セクシュアル・マイノリティに関する社会学の理論を学んだのち、現代社会の諸問題に関するテーマ学習を実施する。</p> <p>なお、講義は日本語で行うが、テーマ学習の成果は英語で発表することを目指す。</p>		
		就労支援論	<p>本授業の目的は、一般労働者や障害者の就労に関する諸課題や支援方法を学修し、解決方法を理解できるようにすることにある。</p> <p>同時に、実際の個別課題に対して具体的な支援が実践できる専門的知識や技術を身につける。</p> <p>本授業では、就労支援の理念や目的、障害者雇用の現状と雇用・福祉施策、就労支援のプロセス（基本的姿勢、インテーク、アセスメント、プランニング、求職活動、企業開拓、企業アプローチ等）、職業準備支援や職場定着支援、就労支援機関と連携、障害特性と職業的課題（身体障害、高次脳機能障害、知的障害、発達障害、精神障害、難病等）、労働関係法規、企業支援（企業情報やニーズの把握、障害理解の促進支援、業務の切り出し等）、生活支援や家族支援、アセスメントの目的や手法、連携やネットワーク活用などを学習する。</p> <p>授業は講師による講義と、授業ごとに設定したテーマへのグループディスカッション、支援技法に関する演習といった形式で実施する。</p>		
		企業と社会	<p>本授業では、グローバルビジネスにおける人事政策と企業行動における男女格差に焦点を当て、実際の状況を理解し、問題解決能力を高めることを目指す。</p> <p>日本においては、男女雇用機会均等法や女性活躍推進法などが法制化されているにもかかわらず、企業内での男女間の格差が依然として存在している。この問題は、日本に限らず、先進国から新興国、発展途上国に至るまで、グローバル社会のあらゆる場所で顕在化している。</p> <p>本授業では、国際機関の統計データ、各国政府の統計情報、企業が提供するデータなどを駆使し、グローバルビジネス環境における労働におけるジェンダー平等の実現に向けた様々な課題を多角的に探求し、深く考察する。</p>		
		ビジネスデータ分析の基礎	<p>本授業のねらいは、記述統計学・推測統計学について学び、ビジネスの現場で使われている統計的データの分析、結果の解釈ができるようになることにある。</p> <p>そのために、変数の種類や代表値、データの可視化、統計的検定とは何か、量的・質的変数同士の相関関係、t検定による平均値の差の検定、分散分析による平均値の差の検定、回帰分析について概説する。</p> <p>授業は主に、講師による講義の後、各自、Excel等を用い実際にビジネス現場で扱われているデータについて、分析を行う形式をとる。</p> <p>これらを通して、既存のデータからどのような分析が可能であるか（分析力）、その結果から読み取れることは何かについて理解できるようになる（判断力）ことを目指す。</p>	講義 12時間 演習 18時間	
	基礎科目	ビジネス・ダイバーシティ科目	産業と経営	<p>本授業では、経営の基本を学ぶ。日本会計基準に基づく有価証券報告書の読解からスタートし、その後は国際会計基準といったグローバルビジネスにおいて広く用いられる会計基準に焦点を当て、企業経営における実務的な理解を養う。</p> <p>グローバル化が進化する現代社会では、日本国内でビジネスを行う企業であっても、国際的な環境と接点を持つことがよくある。将来、自己の幸福を実現するためには、日本と世界の企業経営と組織に関する理解が不可欠となる。</p> <p>本授業の履修によって、自身の働き方を工夫し、企業内での成功を追求する素地を築くことができ、企業経営に関する洞察力を養い、将来のキャリアに役立てることを本授業の目的とする。</p>	
		グローバル・地域共生専門科目	精神保健福祉の原理Ⅰ	<p>本授業は、精神保健福祉の理解の基本となる理念・概念・社会的障壁の概念と実態について歴史の変遷を辿りながら事例や事件を取り上げて実際に理解する。さらに現状と課題を考察し、グループディスカッションや当事者の講話等を踏まえながら、対応策や解決方法について考える機会を持つ。</p> <p>授業のねらいは、「障害者」に対する思想や障害者の社会的立場の変遷から、障害者福祉の基本的枠組み（理念・視点・関係性）について理解することである。また、「精神障害者」の定義とその障害特性を構造的に理解するとともに、精神障害者の生活実態について理解することである。授業を通して、精神疾患や精神障害のある当事者の社会的立場や処遇内容の変遷をふまえ、社会的排除と社会的障壁の歴史と仕組みについて理解し、日本が抱える課題について対応策を考察する力を養う。</p>	
			精神保健福祉の原理Ⅱ	<p>本授業のねらいは、精神障害者へのかかわりについて、精神医学ソーシャルワーカーが構築してきた固有の価値を学び、精神保健福祉士の存在意義を理解して職業的アイデンティティの基礎を築くことである。さらに、現在の精神保健福祉士の基本的枠組み（理念・視点・関係性）と倫理綱領に基づく職責について理解し、近年の精神保健福祉の動向を踏まえ、精神保健福祉士の職域と業務特性を理解する。</p> <p>本授業は、講義を中心に行うが、精神障害者の生活実態について事例を用いながら、多面的な課題を考察する。</p> <p>また精神保健福祉士の専門的視点に寄って立つ精神保健福祉の原理と概念について理解する。その上で精神保健福祉分野及び精神保健福祉士が実践する多領域におけるソーシャルワークの考え方・内容・実践方法、特に権利擁護の一環として意思決定支援とアドボカシーの手法を習得する。</p>	

<p style="text-align: center;">専門 教育 科目</p>	<p style="text-align: center;">応用 科目</p>	<p style="text-align: center;">グ ロー バ ル ・ 地 域 共 生 専 門 科 目</p>	<p style="text-align: center;">精神保健福祉制度論</p>	<p>本授業は、精神障害のある人たちの生活問題、ニーズを理解し、その問題解決に必要な制度について理解することを目的とする。 特に、精神保健福祉法、医療観察法等の医療に関する制度、生活支援に関する制度、生活保護制度や生活困窮者自立支援制度等の経済的支援に関する制度の概要と課題、それらに規定されている精神保健福祉士の役割について理解する。また、障害者に関する法制度を適切に活用でき、法制度の限界と課題について考えることができるようになることも目指す。障害者福祉理念の発展過程に関する国際的動向及びわが国の障害者福祉の歩みを理解する。その上で、現代における障害者福祉の支援施策や実践に求められる理念について考えることができるようになる。また、障害者の権利保障の歴史および現在の到達点について理解する。その上で、精神障害者固有の権利擁護の問題について医療現場・地域社会の視点から理解する。</p>	
			<p style="text-align: center;">社会福祉調査の基礎</p>	<p>本授業は、社会福祉調査の意義や方法について学び、ソーシャルワーク実践において活用する力を身につけることを目的とする。 社会福祉調査を行う意味や問いのたて方を理解した上で、量的調査と質的調査とともにデータの収集及び分析、結果の報告ができるようになること、また、社会福祉調査の実施過程で生じる倫理的問題等への配慮の必要性やインターネットの活用についても理解する。 統計分析ソフトの発達等によって、社会福祉調査によって得られたデータを分析し、実践に活かすことは身近なものになりつつあり、精神保健福祉士にはそのデータに基づいて、様々な説明を行うことが求められている。 サービス利用者の満足度調査や地域住民のニーズ把握、アプローチの効果測定などの知識・技術を身につける。 講義を行いながら、統計分析にはExcel等を活用する。</p>	
			<p style="text-align: center;">地域福祉と包括支援体制 I</p>	<p>本授業では、地域福祉の概念並びに地域福祉の歴史的背景やその形成過程を学ぶ。また、地域福祉実践を展開する上で必要なニーズの把握方法や地域福祉計画の意義や内容とともに、社会福祉協議会における活動や住民参加の意義、財源確保のあり方も習得する。 その中で、地域社会において必要な組織の運営管理、人材の育成や活用などの人材管理、それらに必要なリーダーシップやフォローシップなど、チーム運営の基本を理解し、他者に説明する力とチーム運営の基礎力を養う。 さらに、地域住民の組織化やボランティア活動、NPO活動など社会資源の開発や福祉教育の普及を捉えながら、市民や行政、関連団体の役割とその有機的な連携を踏まえて、共生社会に向けた専門的アプローチを実践事例を活用し、体系的に学ぶ。</p>	
			<p style="text-align: center;">地域福祉と包括支援体制 II</p>	<p>本授業は、地域福祉を推進するための、福祉行政の実施体系と果たす役割について理解し、地域福祉計画をはじめとする福祉計画の意義や目的も理解することを目的としている。 また、地域住民自身が問題解決に働きかける力を高める「地域住民のエンパワメント」に向け、精神保健福祉士等の支援者にはどのようなアプローチが期待されているのかについて聴覚教材や事例を用いながらグループディスカッション等を行う。 特に、地域住民のエンパワメントを支援する組織や団体行政組織や民間組織、地域共生の実現に向けた多機関協働の実態について学ぶ。 授業を通して、地域アセスメントの基礎力を養う。</p>	
			<p style="text-align: center;">異文化コミュニケーション</p>	<p>グローバル化の進展とともに、異文化接触による摩擦があらゆる場面においてみられるようになってきている。本授業のねらいは、異なる文化的背景をもつ他者・集団と協働するための知識・技能を習得することにある。 そのため、異文化コミュニケーションに関わる概念や理論について概説したうえで、具体的な事例をもとに、ロールプレイやディスカッションを行う。授業は、講師による講義に加え、個人ワーク、ペアワーク、グループワークを通して学びを深めていく。</p>	<p>講義 12時間 演習 18時間</p>
			<p style="text-align: center;">居住環境論</p>	<p>本授業は、医療・福祉・建築をつなぎ居住環境について提案・アドバイスができる人を育成するために必要となる資格「福祉住環境コーディネーター2級」の取得を目指す。 本授業では、福祉住環境コーディネーターとして求められる、高齢者・障がい者のための居住環境整備に関する知識を獲得する。また、資格取得のための取り組み姿勢を身につける。 本授業は、高齢者・障がい者をとりまく状況、住環境整備の進め方および実践方法について概説する。 また資格試験の対策として、復習と過去問題に取り組み、積み重ねによる知識の定着を計る。授業は講師による講義と章ごとの小テストで構成され、試験直前には集中講義と模擬テストも実施される。</p>	
			<p style="text-align: center;">ユニバーサルデザイン論</p>	<p>本授業のねらいは、だれもが使いやすいデザイン（ユニバーサルデザイン）のあり方を考え、課題を解決するデザイン提案ができるようにすることにある。 私たちは物理的な障壁を生み出す多くのモノや空間に囲まれている。本授業を通じて、この現状や課題について理解を深め、共生社会を実現するためのユニバーサルデザインの知識を修得し、提案する力を身につける。 本授業は、ユニバーサルデザインの概念および、人体寸法～モノの寸法～空間寸法の流れを概説する。その上で、生活用具並びに室内と屋外におけるユニバーサルデザインについて、課題と対象者別のデザインの考え方を学ぶ。 授業は講師による講義の他に、小グループに分かれて実際にユニバーサルデザインに触れ、意見交換や提案を行う。</p>	<p>講義 20時間 演習 10時間</p>
			<p style="text-align: center;">エスニシティ論</p>	<p>グローバル化が進み、国際的な交流機会が増加する21世紀の社会においては、「他者との違いを尊重しながら、他者とともに生きること」が喫緊の課題となっている。それは遠い外国の他人事ではなく、現代日本社会に生きる私たちが直面している事実である。本授業の目標はエスニシティという視座から文化的他者に対する共感的理解の土台を築き、共生のあり方について学び、議論できるようにすることである。 そのため、本授業では、人種や民族の概念やその歴史的動態を概説し、移民・難民、人権、差別、国籍、民族紛争などの社会事象について、事例や統計等のデータに基づいて傾向を分析したり、映画を観たり、ゲストスピーカーの話の聞いたり、現地生活のエピソードを交えたりしながら国内外の事例を学ぶ。 そうして本授業を通じて、エスニシティに関わる基本的な概念・理論を身につけ、自分の意見を論理的に説明できるようになる。</p>	

専門教育科目	応用科目	グローバル・地域共生専門科目	政策デザインとガバナンス	<p>本授業の目的は、政治、行政、市民の関係についての知識と思考力を用いて、公共政策ガバナンスに資する実践的スキルを獲得することである。</p> <p>健全な公共政策ガバナンスには、政策決定プロセスにおける市民の意見や検証が重要な役割を担っている。本授業では、地方行政における過去のパブリックコメント手続きを検証したのち、公募中のパブリックコメントに対する市民としての建設的かつ長期思考の意見をデザインする。</p> <p>授業は、少人数（3～5名）のグループディスカッションを行い、最終的に具体的な提案のプレゼンテーションを実施する。</p>	
			国際共生と社会課題	<p>グローバル化の進展とともに、地球温暖化やエネルギー資源の枯渇、海洋資源や生物多様性の問題など地球規模の社会課題が山積している。これらの課題解決のためには、国際社会が一体となって取り組む必要がある。そこで、本授業の目的は、国際社会が抱える課題を理解し、それを解決するためにグローバルな視点から共生のあり方をデザインする思考力を獲得することを目指す。</p> <p>本授業では、持続可能な開発目標（SDGs）に基づき、各国の政府、市民がともに持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のために必要な取り組みについて検討する。</p> <p>授業は、講師による講義に加え、適宜、授業のテーマに関する課題についてディスカッションを行う。</p>	
			国際経済論	<p>現在、経済のグローバル化が進行し、私たちの生活は国際経済の動向と緊密に結びついている。為替相場の変動、二国間の貿易問題、デジタル・イノベーションやアメリカでビッグマックセットを食べると日本円で3千円かかる、など国際経済に関連するトピックは、日々のニュースで頻りに取り上げられている。例えば、K-POPアイドルが日本を含めたグローバルで活躍することによって韓国に外貨が入り、韓国民の生活が潤うことなど、身近な出来事でお金が動き、それが国境を越えることが何を意味するのかは国際経済の理論と実践によって説明できる。今、起きている国際経済の出来事を理解するために、国際経済の基本的な理論を身につけることを目指す。</p> <p>本授業では、現代の国際経済で発生している問題を理解するために、国際経済の基本的な理論フレームワークの習得を目指す。</p>	
		人間共生専門科目	メンタルヘルスの課題と支援Ⅱ	<p>本授業は、メンタルヘルスに関連する社会的問題について、保健、医療、福祉の各種支援制度と合わせて実態を理解できるようにすることである。</p> <p>同時に現存する支援方法のみならず、新たな対策を考察できる思考を身につける。</p> <p>メンタルヘルスの視点から見た現代社会の課題、発生予防、偏見や差別、地域連携等について概説する。</p> <p>授業は講師による講義と、授業ごとに設定したテーマへのグループディスカッションの形式で実施する。</p>	
			刑事司法と福祉	<p>本授業では、刑事司法の近年の動向と、特に更生保護制度及び医療観察制度の仕組みについて理解し、関係機関の役割とそこに携わるソーシャルワーカーに期待されることについて考察していく。</p> <p>近年、高齢者や軽度の知的障害・発達障害のある方による犯罪の増加が指摘されており、矯正施設を出てからの福祉・医療・雇用などの領域における支援が適切に行なわれるかどうか、再犯を防止するうえでの重要なカギとなっている。刑事司法と社会福祉援助が緊密に連携し、犯罪者の社会内処遇を進めていく必要性について理解していく。</p> <p>講義を中心に行うが、事件や事例を活用してグループディスカッションを行い、犯罪予防や周囲への支援についても検討する。授業を通して、犯罪者もしくは心身喪失等の状態で重大な他害行為を行った者を、地域の一員として迎え入れる共生社会のあり方について適切な制度の活用やサポートシステム構築を検討する力を養う。</p>	
			権利擁護を支える法制度	<p>本授業では、認知症や障害等で判断能力が十分でなくなり、社会生活で消費者被害、差別などの不利益を被る方が多く存在している現状を知り、そのような人たちも住み慣れた地域でその人らしい生活が出来る人権、権利擁護の仕組みについて理解することを目的とする。</p> <p>法に共通する基礎的な知識を身につけるとともに、権利擁護を支える憲法、民法、行政法の基礎を学び、権利擁護の意義と仕組みについて、生活の中にある事例を用いて理解する。さらに、家庭裁判所等や専門職団体の役割を学ぶ。</p> <p>権利擁護活動における成年後見活動実践を理解し、実際にどのように活動するか説明することができる力を養う。また、虐待防止実践を中心に、権利擁護にかかわる法を理解し、活用できる力を養う。</p>	
			ソーシャルワーク論ⅡA	<p>本授業は、ソーシャルワークにおける人と環境の相互作用に関する理論について理解することから始める。その上で、ソーシャルワークにおける価値や倫理について学ぶ。また、ソーシャルワークの過程について、ミクロレベルのソーシャルワーク実践を中心に、知識と技術を理解し、援助関係の構築技法や面接技法を習得する。</p> <p>さらに具体的な事例を通して、対象者の違いとソーシャルワークの基本的枠組み及び理論（システム理論、生態学理論、生活モデル）、利用者の複雑多様化する生活ニーズに対して、具体的にどのように実践されるのかを学ぶ。</p>	
			ソーシャルワーク論ⅡB	<p>本授業は、ソーシャルワークにおける基本的な枠組みを理解しながら、利用者の複雑多様化する社会福祉ニーズに対して、相談援助がどのように実践されているのかを理解する。その上で、ソーシャルワークにおけるメソレベル及びマクロレベルのソーシャルワーク実践を中心に学ぶ。</p> <p>具体的な事例を通して、メソレベルのソーシャルワークの援助過程を理解し、グループに関する知識と援助者としてのグループ支援の技法を習得する。</p> <p>その際にはグループ活動のプログラム作成を行い、ロールプレイ等を活用し技術を習得する。さらに、マクロレベルのソーシャルワークとして、事例を用いて地域ニーズの調査法、地域計画立案を体験する。さらに、記録の技法や、ケースマネジメントの意義、目的、方法などについても学ぶ。</p>	

専門 教育 科目	応用 科目	人間 共生 専門 科目	精神医学Ⅱ	<p>本授業は、代表的な精神疾患に加え、さらに精神疾患の治療、精神科医療機関、精神科治療における人権擁護や医療・保健・福祉の連携の重要性について理解し、精神保健福祉についても学ぶ。特に、精神医療と人権擁護の歴史を学び、現在の精神保健福祉法における精神科病院の入院形態や医療観察法について理解し、その中で精神保健福祉士の役割と法制度の課題を理解する。講義を中心に行うが、地域包括ケアの事例を用いて、事例検討やグループディスカッションを取り入れる。</p> <p>授業を通して、精神科病院等におけるチーム医療及び地域の多職種・多機関連携における精神保健福祉士の役割を判断する力を養う。</p>	
			ソーシャルワークの理論と方法Ⅰ	<p>本授業では、精神保健福祉領域のソーシャルワークの概要を踏まえ、ソーシャルワークが人間の適応や成長、発展に深くかかわっていることを理解する。また、精神保健福祉分野のソーシャルワークの過程の特性と、家族支援における精神保健福祉士の役割について学ぶ。</p> <p>したがって、授業内容に合わせた視覚教材や事例を活用したグループワークなども取り入れる。</p> <p>精神保健福祉分野におけるソーシャルワークの概要について理解し、基本的視点及び、ソーシャルワークの過程と各段階で用いられる価値・理論・技術について説明できる力を養う。また、家族支援の実際を知り、適切な支援方法を発想する力とコーディネーション力を養う。</p>	
			ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ	<p>本授業では、精神保健福祉における基礎となるソーシャルワークの考え方や内容・実践方法などを習得し、ソーシャルワークが人間の適応や成長、発展に深くかかわっていることを学ぶことを目的とする。</p> <p>さらに、精神障害を持つ人や家族を対象として実施される集団（グループ）を活用した支援を想定して進める。</p> <p>講義を中心に、事例の紹介などを通して学ぶ。</p> <p>授業を通して、精神医療、精神障害者福祉における多職種連携・多機関連携の方法と精神保健福祉士の役割について理解し、さらに、所属する機関の組織運営管理、組織介入・組織活動の展開に関する概念と方法について説明できる力を養う。また、個別支援からソーシャルアクションへの実践展開をマイクロ・メソ・マクロの連続性・重層性を踏まえる力を養い、各段階で精神保健福祉士としての様々な介入をするか判断できる力を習得する。</p>	
			精神障害リハビリテーション論	<p>本授業の目的は、精神障害リハビリテーションの学修を通じて、人間の多様性や諸課題への理解ができるようにすることである。</p> <p>同時に、精神保健福祉に関する問題に対して、解決へ導くための専門的な技術や思考を身につける。</p> <p>精神障害リハビリテーションの理念や定義、医学的・教育的・職業的・社会的リハビリテーションの概要、構成や展開、諸課題や動向について概説する。</p> <p>授業は講師による講義と、授業ごとに設定したテーマへのグループディスカッションの形式で実施する。</p>	
			障害者福祉論	<p>本授業のねらいは、障害者施策を中心に共生社会を支える法律・制度の基礎知識を修得し、障害のある人が地域で暮らし、就労する上で、どのような困難が生じ、どのように障害福祉サービス等を活用したら良いのかについて、ケースマネジメントの視点と方法を身につける。</p> <p>具体的には、障害者基本法、障害者総合支援法、障害者雇用促進法の基礎を理解した後、具体的な事例等を通して公的サービスがどのように適用されているのかを学ぶ。</p> <p>本授業は、講義を中心とするが、数回、障害者福祉の実践に携わっている方をゲスト講師としてお招きし、事例検討やディスカッションを行う。</p>	
			アイデンティティ論	<p>本授業のねらいは、人間の多様性や、それらに起因する社会的課題及び解決方法に関するより深い理解のために、現代社会におけるアイデンティティの構相について知識を深め、自分なりの考えを持つことができるようになることを目指す。</p> <p>そのために、エリクソンのアイデンティティ理論の観点から、人格発達のプロセスについての理解を深めるとともに、多様な背景をもつ人々のアイデンティティの在り方について学ぶことで、自己と他者の違いを理解したうえで協働するための知識・技能を身につける。</p> <p>授業では、講義に加えて、各自が自身の経験と照らし合わせながら授業のテーマについてディスカッションやグループワークをすることを通して理解を深めてもらう。</p>	講義 12時間 演習 18時間
			防災とジェンダー	<p>本授業のねらいは、これまでの災害時の防災対策について、その背景を理解したうえで、ジェンダーの視点からその問題点を見つけ出し、解決するための方法論を身につけることにある。</p> <p>1999年に男女共同参画社会基本法が施行されてから様々な分野でジェンダー政策が進められているが、日本の取組みはまだ遅れを取っている。そこで、本授業では、国内外の男女共同参画に関する動向を理解した上で、様々な分野の中から防災に焦点をあて、災害時の防災対策に関する過去の事例を元に、その問題点や解決策についてジェンダーの視点からグループワークやディスカッションを通して考察していく。</p>	
			家族論	<p>本授業のねらいは、人間の多様性の中でも、家族における多様性に焦点をあて、現代の家族をめぐる様々な諸問題に関する背景や原因についての知識および解決するための方法論を身につけることにある。</p> <p>授業では、家族とは何か、ジェンダー役割、家父長制、少子化、ワークライフバランス、DV、同性婚など、家族に関する歴史的な流れや最近のトピックについて解説する。</p> <p>授業では、講義に加えて、各自がニュースや新聞記事などと照らし合わせながら授業のテーマについてディスカッションやグループワークをすることを通して理解を深めてもらう。</p>	
			ジョブコーチ論	<p>本授業のねらいは、障害のある人が企業等で働くことを支援する「ジョブコーチ」の基本理念、支援方法・技術の基礎知識及び応用力を身につけることにある。</p> <p>ジョブコーチの基本的な役割、障害者支援と企業支援のバランス、アセスメントからフォローアップに至る全体プロセスを理解した上で、各プロセスで求められる支援技術を修得する。</p> <p>本授業は、講義で基礎知識を修得した後、主にロールプレイを中心とした演習を通して応用力を身につけ、ディスカッションによりそれらの整理と定着を図る。</p>	

専門 教育 科目	応用 科目	ビジネス・ ダイバー シティ科 目	社会保障制度Ⅰ	<p>本授業では、社会保障の発達の歴史、全体の体系、財政の仕組みと、社会保障制度の概要、特に公的年金制度の導入部分までを扱う。さらに、日本の社会保障制度の理解にとどまらず、諸外国の制度との比較も行いながら、日本の経済や社会の仕組みと社会保障が、非常に密接な関係にあることを理解していく。</p> <p>授業を通して、少子高齢化の進行によって、現代の社会保障制度はどのような問題に直面しているのか、さらに、それらの問題に対してどのように取り組もうとしているのかについて説明できる力を習得する。</p> <p>講義を中心に行うが、国や市町村、諸外国の統計データを用いて、現状や課題についてグループディスカッションや各自で考察する機会を持つ。</p>	
			社会保障制度Ⅱ	<p>本授業では、「社会保障制度Ⅰ」の内容を受けて、さらに年金、医療保険、介護保険、労働保険の各社会保険制度の具体的な内容について学ぶ。</p> <p>日本の社会保険制度改革のねらい、及び、これらの改革によって国民の生活にどのような変化が生じているのかという視点から、社会保障の問題について考える。また公的保険と民間保険の違いを知り、それぞれの特徴を説明できるようにする。</p> <p>さらに、社会扶助の概要、特に生活保護制度と社会手当の内容について事例を活用しながら学ぶ。授業を通して、社会保険制度である年金、医療保険、介護保険、労災保険、雇用保険の各制度について概要を説明することができ、さらに、その実際の運用をめぐる主要な問題点について理解することを旨とする。</p>	
			イノベーションと社会	<p>本授業では、過去から現在に至るまでのイノベーション（技術革新）について事例を元に読解し、イノベーションと社会との関係を探究し、社会でどのようにイノベーションを利用しているかが理解できる力を養う。</p> <p>産業革命の前から、経済発展は社会の進歩に欠かせない要素であり、その影響は経済、社会、環境、文化、政治など、あらゆる側面に及んでいる。各側面において、イノベーションは経済発展や社会の前進を推進する要因として、重要な役割を果たしている。国際的な協力は、グローバル社会においてより良い未来を築くための鍵となり、イノベーションは継続的な支援や奨励が必要であり、社会全体の発展への貢献が期待されている。特に1995年以降のインターネットの時代において、デジタル分野でのイノベーションが人々の生活を劇的に変えている。本授業では、社会の発展とイノベーションの関係を理解し、イノベーションが経済発展や社会の進歩にどのように貢献しているかを学び、改善のための方策を考えていく。</p>	
			ビジネスモデルデザイン	<p>ビジネスモデルは、企業が利益を生み出すために「誰に」、「何を」、「どのように提供」し、「どのように収益を上げるのか」というビジネスの設計思想である。本授業では、ビジネスモデルを構成する要素を詳細に考察し、その本質を深く理解する。</p> <p>具体的には、グローバルビジネスや日本国内の企業など、さまざまなビジネスモデルのケーススタディを通じて、ビジネスモデルの多様性について考え、企業の経営理念から日常業務に至るまでのビジネス実務とビジネスモデルの相互関係を探求する。また、グループディスカッションを通じてビジネスモデルの研究を深め、グループワークによってその成果をまとめることで、ビジネスモデルに関する概念と理論を活用し、実際のビジネスを説明できるスキルを身につけることを目指す。</p>	
			人事心理学	<p>本授業のねらいは、ビジネスの世界で生じている様々な現象を心理学の観点から解釈できるようにすることである。</p> <p>授業では、人材育成やモチベーション、リーダーシップ、キャリア開発、組織運営などに関わる心理学の古典から最新の理論まで具体的な事例を用いて概説する。これらを通して、より良い組織に必要な要素や人材育成の手法、チームのパフォーマンスを向上させる要因などに関する知識と技能を身につけることを目指す。</p> <p>授業では、講義に加えて、各自が自身の経験と照らし合わせながら授業のテーマについてディスカッションやグループワークをすることを通して理解を深めてもらう。</p>	
			女性とキャリア形成	<p>本授業の目的は、女性が長期的な視点に立ってライフコース選択を行うための知識と行動力を身につけることにある。</p> <p>女性が個人としてたどる人生では様々な出来事に直面する。本授業では、「公的生活（public life）」と「私生活（private life）」に加え、それを横断する領域で、自分らしく人生を選択するための幅広い知識を学んだのち、社会人女性へのインタビューを通して、将来のライフプランをシミュレーションする。同時に、女性に必要な生活リスクマネジメントについて検討する。授業は、キャリア形成に関する理論を学んだのち、授業内外での実践的・体験的な学習活動を行う。</p>	
			ダイバーシティとインクルージョン	<p>本授業の目的は、現代社会における「多様性（Diversity）」「公平性（Equity）」「包括性（Inclusion）」の実現に向けたアイデアを考案することにある。</p> <p>多様な人々が生きるなか、一人ひとりの状況にあわせて適切なツールやリソースを提供することで公平性を担保し、誰もが能力を発揮できる社会の実現が目指される。本授業を通して、個人の問題を社会構造との関係においてとらえる観察力と自分とは異なる現実にある他者への想像力を磨く。</p> <p>授業は、職業場面における問題をシミュレーションしたのち、少人数（3～5名）のグループディスカッションを行う。最終的には、ダイバーシティ社会に向けた実践的なアイデアを提案する。</p>	
			マーケティング論	<p>本授業ではマーケティングの核心を探求し、経済の中で消費者と企業の相互作用がどのように進行しているかを考察する。</p> <p>受講生は、製品やサービスの市場導入、消費者の心理、競合分析、広告とプロモーション戦略、倫理的な実践に関する知識を習得し、現代のマーケティングの複雑な世界に取り組む。具体的には、マーケティングの基本概念を一般的な日常生活に適用し、顧客のニーズと市場の特性を洞察して効果的な市場戦略を立案する能力やマーケティング計画を策定し、倫理的なマーケティング実践について議論して持続可能なビジネスモデルを理解すること、および、現代のマーケティングトピックスに関する知識を深め、ビジネスにおける競争優位性を構築することができるようになることを目標とする。</p>	

応用科目	ビジネス・ダイバーシティ科目	ホスピタリティ論		<p>本授業のねらいは、ビジネスの世界において求められるホスピタリティの考え方や重要性について事例を通して理解することにある。</p> <p>授業では、ホスピタリティの概念や理論をはじめとし、観光、宿泊、飲食、福祉など様々な業界におけるホスピタリティの事例について解説する。それらを通して、現代社会におけるホスピタリティが生み出す価値について理解できるようになることを目指す。</p> <p>授業では、講義に加えて、各自が自身の経験と照らし合わせながら授業のテーマについてディスカッションやグループワークをすることを通して理解を深めてもらう。</p>	
		グローバル企業戦略と社会		<p>現在、世界全体では38,000社以上の多国籍企業が存在し、そのうちの約9割が先進国を拠点としている。この中で日本企業は約3,650社と全体の10%に相当し、企業数では世界で2番目に多い位置にある。これは、ドイツの約7,000社（全体の18.2%）に次ぐ位置づけであり、日本企業の国際的な存在感を示している。これらの企業は、グローバル戦略を策定し、日々のビジネス活動を通じて、グローバル社会での競争力を維持・向上させている。本授業では、グローバル企業と社会の相互作用が、グローバル企業の戦略に与える影響を探究することで、グローバル企業の戦略が分かるようになることを目指す。</p> <p>具体的には、多国籍企業が進出先国の文化を尊重し、適切にビジネスを展開するための戦略や、多文化社会でのビジネス展開に関連する戦略、そして異なる文化背景を持つ従業員を雇用するための人事戦略などを読解により考察する。</p>	
専門教育科目	コミュニケーション力養成科目	共生デザイン基礎セミナー	○	<p>本授業では、大学で学ぶための基礎的・汎用的能力（情報収集力、課題発見力、批判的思考力、分析力、プレゼンテーション力など）の基盤を身に付け、大学での学びの動機づけを高めることを目指す。</p> <p>そのため、大学で学ぶことの意味や学び方（情報検索の仕方やレポートの書き方など）、課題発見の仕方、プレゼンテーションの仕方、チームでの学び方について、講師による講義に加え、少人数でのグループワークを通して、理解を深めていく。</p>	主要授業科目
		SDGsセミナー	○	<p>本授業では、少人数のグループでSDGsの17のゴールと169のターゲットからテーマを設定し、課題発見、解決に向けた提案を行う。</p> <p>「誰一人として取り残さない」共生する社会の実現とは何かについて考え、行動を構想することができるようになることを目的としている。</p> <p>世界の共通課題に向き合い、身近な生活課題から国内外に視野を広げる力を養う。</p> <p>共生デザイン基礎セミナーで身につけた能力を活用し、プレゼンテーションを行う。さらに、2年次に行うPBLの選択に向けて、グローバル・地域共生・ダイバーシティを柱とした体験型の授業とする。</p>	主要授業科目
	共生デザイン力養成科目	共生デザインセミナーⅠ	○	<p>本授業は、自ら関心のある「国内外の地理的差異」や「多様な特性のある人間同士の差異」等、社会の中にある多様性に関する課題、共生社会の実現に向けた取り組みについて、グローバル、地域共生、ダイバーシティ&インクルージョンのいずれかの視点から、具体的にアプローチする基礎力を育成することを目的としている。</p> <p>より専門的な視点の学問領域の基礎を知るために、体験学習と理論学習を繰り返す。体験学習ではグループでフィールドを活用し、多様な手段でのコミュニケーションを実際に取り、課題発見、共生に向けた構想を行う。それらを理論と関連づけ根拠を示すことの重要性を学ぶ。</p>	主要授業科目
		共生デザインセミナーⅡ	○	<p>本授業は、自ら関心のある「国内外の地理的差異」や「多様な特性のある人間同士の差異」等、社会の中にある多様性に関する課題、共生社会の実現に向けた取り組みについて、グローバル、地域共生、ダイバーシティ&インクルージョンのいずれかの視点から、具体的にアプローチする基礎力を育成することを目的としている。</p> <p>共生デザインセミナーⅠで進めてきた取り組みを発展させる。実際にグループで構想した内容を提案し、実行する。プレゼンテーション能力と運営する能力を養う。最終的には、理論と結びつけてレポート等として実際にまとめる論理的思考と文書作成能力を養う。</p>	主要授業科目
		共生デザインセミナーⅢ	○	<p>本授業では、4年間の集大成として、これまで学んできた知識、技能を生かしながら、多様性に起因する現象について、自分自身の力で問題を発見し、仮説を立て、検証を行い、考察する力を実践を通して養うことを目標とする。</p> <p>授業では、各自、共生社会の実現に資する課題についてエビデンスをもとに他者と協働しながら解決していくための方策を提案する。授業は、指導教員および授業内のメンバーと協働しながら進めていく。</p>	主要授業科目
		共生デザインセミナーⅣ	○	<p>本授業では、4年間の集大成として、これまで学んできた知識、技能を生かしながら、多様性に起因する現象について、自分自身の力で問題を発見し、仮説を立て、検証を行い、考察する力を実践を通して養うことを目標とする。</p> <p>なお、共生デザインセミナーⅢで進めてきた活動をさらに発展させる。授業では、指導教員および授業内のメンバーとディスカッションをしながら、各自、共生社会の実現に資する課題についてエビデンスをもとに他者と協働しながら解決していくための方策を提案する。</p>	主要授業科目
		卒業論文	○	<p>本授業のねらいは、4年間の学びの集大成として、多様性を背景とする地域社会や職場に現存する課題をテーマとし、自分なりの共生のあり方について分析、考察できるようになること、つまり共生デザイン力を身につけることにある。</p> <p>そのために、テーマ設定、関連する先行研究のまとめ、仮説の構築、研究方法の立案、データ収集、分析と考察、発表という一連の作業について、指導教員および授業内のメンバーと協働しながら進めていく。</p>	主要授業科目
		共生実践科目	グローバル共生フィールドワークⅠ	○	<p>本授業は、多文化共生社会を学ぶための短期留学の一環である。留学の前後に、学内においてワークショップを行う。留学前には、留学先に関する基礎的な講義や現地でのプレゼンテーションの準備となるグループワークなど、留学後には、留学の成果を振り返り、グループで英語によるプレゼンテーションを行う。</p> <p>これらを通して、多文化で共生するための基礎的な知識や技能、そして、実践的なコミュニケーション力を身につけることを目指す。</p>

専 門 教 育 科 目	実 践 科 目	共 生 デ ザ イ ン 力 実 践 科 目	グローバル共生フィールドワークⅡ	○	本授業のねらいは、多文化共生社会を学ぶための短期留学を通して、グローバルな視点、実践的なコミュニケーション力、他者と協働する力、行動力を修得することにある。 授業では共生や多様性に関わる幅広い分野に及ぶ講義・演習に加え、現地の人々の交流やキャンパス外でのフィールドワークを行う。 授業では、講師による講義に加え、少人数のグループによる英語でのディスカッション、グループワークを通して理解を深めていく。	主要授業科目 講義 20時間 演習 40時間
			ダイバーシティインターンシップⅠ	○	本授業では、グローバル化や人間の多様性により企業活動の中に存在する課題について、他の授業での学びを総合し、課題の解決や新たな価値を創造するアプローチを構想、提案、実行する力を修得する。 企業等との連携により提供された事例をもとに、職場でのダイバーシティの課題、多様性に対応する商品やサービスの必要性、利益とのバランス感覚等の視点を身につける。他者と協働して実行するための構想力、コミュニケーション力、提案力を経験を通して習得する。 体験的学習の前にグループワークを通して事前学習を行う。また、体験的学習の途中及び事後において、グループワークやプレゼンテーションを通して、自分たちの取り組みを説明し、他者の理解を得ることを経験する。	主要授業科目 講義 10時間 演習 20時間
			ダイバーシティインターンシップⅡ	○	本事業では、グローバル化や人間の多様性により企業活動の中に存在する課題について、他の授業での学びを総合し、課題の解決や新たな価値を創造するアプローチを構想、提案、実行する力を修得する。 ダイバーシティ・インターンシップⅡでは、主に企業に実在する生産活動、CSR活動、SDGsに関する課題等について、企業等との連携の下、少人数での現場見学、グループワーク、短期の体験実習等を行う。 ダイバーシティ・インターンシップⅠとの関連において、Ⅰで構想・提案した内容について、企業側スタッフや他の学生とコミュニケーションを取り、具体的に実行し、その成果を振り返り、自己評価を行う。	主要授業科目 講義 20時間 演習 40時間
			地域共生フィールドワークⅠ	○	本授業は、地域社会における共生のあり方について実践的に学ぶためのフィールドワークの一環である。フィールドワークの前後に、学内においてワークショップを行う。実施前には、フィールドワーク先に関する基礎的な講義や現地が抱えている課題の整理など、実施後には、フィールドワークの成果を振り返り、受け入れ先の人たちに向けてグループで現地が抱えている課題に対する解決方法についてプレゼンテーションを行う。 これらを通して、地域社会の現状や抱えている課題の基礎的な知識や多世代の人々との実践的なコミュニケーション力を身につけることを目指す。	主要授業科目 講義 10時間 演習 20時間
			地域共生フィールドワークⅡ	○	本授業のねらいは、地域社会における共生のあり方について実践的に学ぶためのフィールドワークを通して、地域に現存する社会課題を想定し、分析的な力、他世代の人との実践的なコミュニケーション力、他者と協働しながら解決策を提案する力を修得することにある。 授業では地域の抱える課題や共生のあり方に関する講義・演習に加え、地域の人々へのヒヤリング、ディスカッションを通して見出された課題について少人数のグループで取り組む。	主要授業科目 講義 20時間 演習 40時間
			グローバル・地域共生フィールドワーク		本授業は本学科の3つの実践科目（グローバル共生フィールドワーク、ダイバーシティインターンシップ、地域共生フィールドワーク）をベースとし、そこでの経験を踏まえ、多様性に着目して新たな価値を創出するためのフィールドワークを行うものである。 各現場が抱える課題への解決策を提案するだけでなく、新たな価値を見つけ出す一連のプロセスを通して、共生のあり方をデザインする力、主体性、他者を巻き込む力の獲得を目指す。 授業では、様々な他者との協働や連携が求められる。	講義 10時間 演習 20時間
			ソーシャルワーク実習指導		ソーシャルワーク実習は、精神保健福祉実践現場で活用されるソーシャルワークの知識、方法、技術を修得することを目的としている。 したがって本授業では、実習指導の一環として、ソーシャルワーク実習の体系と目的について理解し、その上で、精神保健医療福祉の現状と利用者の状況について学ぶ。また、実際に実習を行う施設・機関を知るために、見学実習や実践家の講話を聴く機会を持つ。さらに、精神保健福祉士の倫理については、専門職としての自覚に基づいた行動ができるように倫理綱領の理解、及び実践の方法、課題について常に意識した言動を取れるよう事例等を用いながら実習指導を展開する。	講義 10時間 演習 20時間
			ソーシャルワーク実習事前指導		本授業では、ソーシャルワーク実習の配属に向けて、自らの実習課題について配属実習において具体的に取り組めるよう事前学習を展開する。 実習動機を明文化し、そこから個人の関心と精神保健福祉士として必要とされる視点や技術を踏まえ、実習目標、実習課題、実習方法を検討し、実習計画書としてまとめる。これを通して、自己分析、自分の考えを文章としてまとめ、他者に伝える力を養う。 また、実際にスーパーバイザーに対して、実習で取り組みたい内容をプレゼンテーションし、取り組めるよう交渉し、計画の修正等を行う。さらに、実習中に必要な知識について総合的に学習し、冊子としてまとめる。また、配属実習を通じて、自己の精神保健福祉士としての適性及び課題について考察するため、自己覚知の方法、スーパービジョンの受け方について理解する。	講義 10時間 演習 20時間
			ソーシャルワーク実習事後指導		本授業では、ソーシャルワーク配属実習の事後学習として、特に実習体験を通じて、精神保健福祉士に求められる専門性、資質、援助技術、知識について総括を行い、自らの今後の課題を見出し取り組むことを目指す。 実習中の出来事についてインシデント分析を行い、グループディスカッションを行い、実習期間中の出来事を自分の言動とその根拠、思考を客観的に振り返る機会とする。また、実習目標の到達度について自己評価とスーパーバイザー評価、教員評価を行い、三者で振り返りの場を設け、自らのストレングスと今後取り組むべき課題を見出す。実習の総括として、テーマを決めてパワーポイントを活用した口頭での実習報告と、文書として実習報告書をまとめ、プレゼンテーション能力と文書作成能力を養う。	講義 10時間 演習 20時間

専門教育科目	共生デザイン実践科目	ソーシャルワーク実習Ⅰ	本授業は障害者サービス事業、精神保健福祉センター、保護観察所、障害者職業センター等で配属実習を行う。 ソーシャルワーク実習を通して、精神保健福祉士としてのソーシャルに係る専門的知識と技術の理解に基づき精神保健福祉現場での試行と省察の反復により実践的な技術等を体得することを目的としている。 実習先の施設、機関で、スーパーバイザー指導の下で精神保健福祉サービス利用者に接し、その実態と問題解決の実際などを観察し、利用者援助の場面に関わることで、講義や演習で学んだ諸理論、倫理、技術を現実即して活用できることを目指す。さらに、地域社会における機関、施設の機能や役割、組織の運営管理、関連機関等援助を必要としている対象者を取り巻く社会全体の仕組みとの関係を総合的に学習する。具体的な地域社会への働きかけとしてのアウトリーチ、ネットワーク、社会資源の活用・調整・開発場面に同席し、観察する。	
		ソーシャルワーク実習Ⅱ	ソーシャルワーク実習Ⅰ及びソーシャルワーク実習Ⅱで、機能の異なる施設・機関で計210時間以上の実習を行うため、本授業では、精神科を標榜する総合病院や精神科病院、診療所で90時間以上の配属実習を行う。 ソーシャルワーク実習を通して、精神保健福祉士としてのソーシャルに係る専門的知識と技術の理解に基づき精神保健福祉現場での試行と省察の反復により実践的な技術等を体得することを目的としている。 スーパーバイザー指導の下、患者に接し、その実態と問題解決の実際などを観察し、利用者援助の場面に関わることで、講義や演習で学んだ諸理論、倫理、技術を現実即して活用できることを目指す。特に、患者や家族、関係者との面接や診療への同席、院内外のカンファレンスを体験し、実際に患者との面接を実施し、ニーズ把握と個別支援計画を立案する。さらに計画実行のために他職種や他機関との連携の取り方、交渉力を体験的に身につける。	
		ジョブコーチ実習指導	本授業は「ジョブコーチ実習」の事前学習の位置づけであり、人間の多様性、障害特性、障害者福祉施策、ジョブコーチの理念及び方法・技術に関する基礎知識を土台とし、それらをどのように障害者雇用及び就労支援の実践現場でジョブコーチ支援として応用・実践するかについて学ぶ。 具体的には、実習企業の下調べ、実習の目的の確認、基本技術の復習、実習計画書の作成等を通して、実習に向けての真摯な意識と基礎的な知識と技術の準備性を身につける。 授業は、講義、ロールプレイ、ディスカッション等を通して行う。	講義 10時間 演習 20時間
		ジョブコーチ実習	本授業では、人間の多様性、障害特性、障害者福祉施策、ジョブコーチの理念及び方法・技術に関する基礎知識を土台とし、それらを障害者雇用及び就労支援の実践現場で応用・実践することを通してジョブコーチとしての基本姿勢と実践力を修得する。 原則として2カ所の障害者雇用企業において、合計60時間以上の現場実習を行う。 現場実習では、障害のある従業員と共に業務を行うことを通じて企業における業務遂行と雇用管理の実際を学ぶ。具体的に支援計画の作成、障害のある従業員との面接、関係機関との連携等を体験し、それらを言語化してプレゼンテーションを行うことを通じて、ジョブコーチとしての総合的な実践力を身につける。	共同
	グローバル・地域共生専門科目	コミュニティ・空間デザイン演習Ⅰ	本授業のねらいは、福祉住環境コーディネーターに求められる空間デザインや運営の技術を獲得することにある。 図面から生活行動を読み取る力、並びに空間デザインに関する図面作成などの基礎的な技術を習得する。その上で空間デザインと空間運営に関する提案力を身につける。 本授業は、主に室内における快適な居住環境整備のためのデザイン技術を学ぶ。事例をトレースしながら寸法や動線、家具配置などのデザイン手法と、基礎的なインテリア図面の描き方を演習する。さらにオリジナルデザイン課題に取り組み、提案を行う。なお課題は講師とデザイン案を相談しながら完成させ、プレゼンテーションを行い、意見交換を行う。 授業は講師によるデモンストレーションのあと、個別指導を交えて演習が進められる。	
		コミュニティ・空間デザイン演習Ⅱ	本授業のねらいは、地域や施設における人と人がつながる共生空間の空間デザインや運営の技術を習得することにある。 共生空間のコンセプト立案から、空間デザインや運営方法（空間の使い方・維持管理方法）の手法および提案力を身につける。また、自身の考えをビジュアルに説明するプレゼンテーション力および、グループワークを通じてコミュニケーション力を身につけることができる。 本授業は、主に地域や施設における共生環境整備のための技術を学ぶ。どのような人がどのように利用する共生する空間が求められるのか、現代の課題からつながる場のコンセプトを考え、空間デザインと運営デザインにグループで取り組み提案する。また提案内容をプレゼンテーションし、課題の設定やコンセプトの立案、デザインなど意見交換を行う。 授業は毎回、講師によるデモンストレーションのあと、グループ別指導を交えたグループワークによる演習が進められる。	
		国際協力実践論	国際協力とは、日本も含めた国際社会全体の平和と安定のために、開発途上国・地域の人々を支援することである。したがって国際協力は、開発途上国で支援活動に従事するだけでなく、日本国内でも可能である。本授業は、異なる価値観や習慣を持つ人々が協調しながら暮らせる多文化共生社会の構築にグローバルな視点から貢献できる人材を育成する。 世界の国々の多様性や国際環境を概観してから、開発途上国の様々な問題を解決するための支援事業の形成・実施・評価の基本と実践を学ぶ。 本授業は日本や国際機関の具体的な協力事例をケーススタディとして用いて、講義とグループワーク、討論と発表を行い、複雑な社会問題をどのように解決して、より良い地球社会のためにどのように貢献できるか、自分の考えを言語化できるようになる。さらに国際協力の現場で仕事をしている専門家たちからのリアルな体験談を聞くことを通じて、国際協力の理論と実践を学ぶ。	講義：10時間 演習：20時間
		Human Diversity Studies	本授業は、少人数で英語のみで行う授業である。それまで学んだ基礎知識や実際の体験を基に、共生社会の実現に関わるテーマ、あるいは多様性を新しい価値に結びつけるアイデア等を学生が自らの視点で選択し、与えられた準備期間の中で、教員の助言、他の学生との意見交換を通して、テーマの概要、方法の提案、予想される成果、実践上の課題等について、英語でプレゼンテーションを行う準備をする。後半の授業では、順番に学生が英語でプレゼンテーションを行い、教員や他の学生と英語で質疑・応答、相互に評価を行う。これらを通して、グローバルな視点、他者への説明力及び提案力、実践的コミュニケーション能力を修得する。	

専門 教育 科目	人間 共生 専門 科目	ソーシャルワーク演習	本授業は、新聞記事や事例等を通して自己理解、他者理解を行いながら、個人的価値観と専門職としての価値観の違いを知る。さらに、基本的なコミュニケーション技術を習得し、事例検討やロールプレイを通して、面接の基礎を身につけることを目的としている。 また、事例を用いて、ソーシャルワークの展開過程を追い、それぞれの段階で活用される倫理・理論・技術について体系的に学習する。 受講者が体験的に学習することが求められるため、20名以下の少人数で行う。	
		ソーシャルワーク演習Ⅰ（専門）	メンタルヘルスに関わる事例（集団に対する事例を含む）を通して、他の科目との関連性を視野に入れつつ、精神保健福祉士としての実際の思考と援助の過程における行為を想定し、メンタルヘルスの課題を捉え、その解決に向けた総合的かつ包括的な援助について実践的に習得していく。 特に、マイクロ・メソ・マクロレベルの相談事例を取り上げ、入院から地域移行・地域定着支援のためのチームアプローチ技法、グループ活動の手法、コミュニティアセスメントの技術を習得する。その際、実践的な場面を想定したロールプレイングやグループワークを用い理解を深めていく。また、全ての事例で、精神保健福祉士に共通する原理である「社会的復権と権利擁護」「自己決定」「当事者主体」「社会正義」「ごく当たり前の生活」を実践的に考察する。受講者が体験的に学習することが求められるため、20名以下の少人数で行う。	
		ソーシャルワーク演習Ⅱ（専門）	メンタルヘルスに関わる事例（集団に対する事例を含む）を通して、他の科目との関連性を視野に入れつつ、精神保健福祉士としての実際の思考と援助の過程における行為を想定し、メンタルヘルスの課題を捉え、その解決に向けた総合的かつ包括的な援助について実践的に習得していく。 特に、外国人の受診受療支援、アルコール依存症の家族支援、引きこもり、自殺予防のための電話相談、DPATによる被災地支援等の支援の場の異なる事例を取り上げる。その際、実践的な場面を想定したロールプレイングやグループワークを用い理解を深めていく。対象者に応じた面接技法、制度の活用、チームアプローチの技法を習得し、倫理・理論・技術の側面から根拠を説明できる力を養う。 また、全ての事例で、精神保健福祉士に共通する原理である「社会的復権と権利擁護」「自己決定」「当事者主体」「社会正義」「ごく当たり前の生活」を実践的に考察する。受講者が体験的に学習することが求められるため、20名以下のクラスでグループワークを活用して進める。	
		ソーシャルワーク演習Ⅲ（専門）	メンタルヘルスに関わる事例（集団に対する事例を含む）を通して、他の科目との関連性を視野に入れつつ、精神保健福祉士としての実際の思考と援助の過程における行為を想定し、メンタルヘルスの課題を捉え、その解決に向けた総合的かつ包括的な援助について実践的に習得していく。 特に、市町村協議会における障害福祉計画立案、児童虐待の要援護児童と家族支援、合理的配慮に基づく学生支援と就労支援、触法障害者支援、企業における障害者雇用支援等の事例を取り上げる。その際、実践的な場面を想定したロールプレイングやグループワークを用い理解を深め、状況に応じた法制度の活用、多様な人々とコミュニケーションを取り連携する力を習得する。 また、全ての事例で、精神保健福祉士に共通する原理である「社会的復権と権利擁護」「自己決定」「当事者主体」「社会正義」「ごく当たり前の生活」を実践的に考察する。受講者が体験的に学習することが求められるため、20名以下の少人数で行う。	
	パ ジ シ ネ テ ィ ・ 科 目 イ	ジョブコーチ演習	本授業は「ジョブコーチ実習指導」と共に「ジョブコーチ実習」の事前学習に位置づけられる。障害者雇用現場において職場適応援助者として活動するために必要な支援方法・技術について、アセスメント、ジョブマッチング、職域開発、企業内調整、指導技法、ナチュラルサポート、フォローアップ等に焦点を当て、少人数でのロールプレイを通して学ぶ。 それらの体験的学習を通して、職場での課題を発見し、問題解決に向けて他者とコミュニケーションをとり、解決策を構想し、提案・実行する応用力と実践力を身につける。	
	専 門 英 語 科 目	ビジネス英語	これまでの英語クラスで学んだことを活かし、よりフォーマルな場面で自信を持って英語を使えるようになることを目標とする。特にビジネスの場面や、海外でフィールドワークを実施するような場合に、相手に対して丁寧かつ明確に情報を伝え、交渉し、合意に達するというプロセスを繰り返して練習し、実用的な英語を身につける。また、対面だけではなく文書によるコミュニケーション（Emailやショートメッセージなど）の方法も学び、時間や場所を問わずスムーズに意思疎通を図れる技術を習得する。学期の終盤には組織や商品を紹介するプレゼンテーションを実施し、より高度なプレゼンテーションスキルを磨く。	
		英語コミュニケーション	これまでの英語クラスで学んだことを活かし、よりスムーズで深みのある会話を続けられる能力を身につけることを目的とする。毎回のレッスンを通して、自分の意見を論理的かつ説得力を持って表明したり、相手の意見に対し婉曲に反対意見を述べたりできるようにする。また、予測される未来についての会話などを通して、想像力を養いながら、より自然な英語表現の習得も目指す。1、2年次開講の英語クラス同様、学期の終盤にはプレゼンテーションを導入し、今まで養ってきた、人前で自分の意見を効果的に表明するスキルにさらに磨きをかける。このコースでの学習を通し、よりネイティブライクな英語話者になることを目指す。	
	留 学 認 定 科 目	異文化理解Ⅰ	留学認定科目として設置されている。本学が行っている留学・研修プログラム等に参加し、一定以上の成績を修めた場合にこの科目の単位が修得されることになる。プログラムの参加先における授業形態・授業内容はさまざまであるが、普段学んでいる環境とは異なる社会・文化のあり方を体験すること、またプログラムの内容を学ぶことを通して、社会・文化・世界における多様な生のあり方について理解し、知識を深めることが期待される。	
		異文化理解Ⅱ	留学認定科目として設置されている。本学が行っている留学・研修プログラム等に参加し、一定以上の成績を修めた場合にこの科目の単位が修得されることになる。プログラムの参加先における授業形態・授業内容はさまざまであるが、普段学んでいる環境とは異なる社会・文化のあり方を体験すること、またプログラムの内容を学ぶことを通して、社会・文化・世界における多様な生のあり方について理解し、知識を深めることが期待される。	

全学共通科目	基礎科目	女性とキャンパスライフ	大妻教養講座	新入学生が、この大学で何をどう学ぶかについてを考える入門講座である。大人（社会人）として、自分の行為に自分で責任を持つことは、自分の心身の状態を自分でコントロールする必要性を知ることであり、法律的、経済的な自分の権利義務を知る必要性を知ることである。また、卒業後、職業人として旅立つために、大学での学びの中でどのような職業に進むかなどを含めて、人生についての見通しを持てるよう、4年間の学びが人生にどう影響していくかを理解し、本学での学びをどう進めるかを考える。なお、この講座では、大妻コタカ先生が何を考えておられたのかも学ぶ。	
			大妻教養講座Ⅱ 卒業生から学ぶ	大妻学院の使命「学び働き続ける自立自存の女性の育成」の具体化を目標とした科目である。1年生の時に受講した「大妻教養講座」における「大妻での学びと人生（卒業生の回）」での学びを踏まえ、本科目では卒業生による講演を中心とした授業を行う。卒業生から、学生時代の過ごし方を含めた今までのキャリア、現在の仕事内容などを紹介いただき、職場での体験・経験などを通じて得たこと、将来の目標、学生へのメッセージなどをお話いただく。	
			キャンパスライフとメンタルヘルス	主として思春期・青年期の一般的な心理社会的特徴を概観しながら、大学生がキャンパスライフの中で遭遇する可能性のある危機、あるいはメンタルヘルス上の問題について、その予防や対処方法も含めて学ぶことを目的とする。キャンパスライフの中で、大学生が体験する成長のプロセスは、時に大きな心の揺れを伴いやすく、悩みや危機を経験することもごく自然なことである。本講義では、ストレス、五月病、摂食障害、うつ病、自傷行為、アパシーといった問題や、消費トラブル、宗教カルト、ハラスメント等の具体的なかつ身近な話題を取り上げながら、学生たちがより健康的で有意義なキャンパスライフを送れるような講義内容とする。	
			女性と健康	我が国の女性のライフサイクルは、ここ数十年間で大きな変化を遂げている。この講義では、女性の健康に関する問題点を正しく理解し、対策を講じる事は、これからの人生を健康で豊かなものにするために必要不可欠である。講義は生物学的な“女性”の定義から始まり、「月経」、「妊娠」、「（性）感染症」、「食生活」、「喫煙」、「飲酒」、「薬物」、「精神疾患」等をキーワードに、医師、看護師等の専門家により分かり易く行う。	
			ジェンダーと社会生活	ジェンダーを前提に成り立つ役割分業や格差、種々の社会的制度とジェンダーとの関わりについて、具体的な事象を通して学ぶ。妊娠、出産といった身体をめぐる問題、DV（ドメスティック・バイオレンス）やセクシュアル・ハラスメントなどの性と暴力の構造、労働をめぐる不平等な環境、結婚制度や家族制度の現状、メディアに含まれる女性差別的なメッセージ、セクシュアリティと社会システムのかかわり等々、各授業では日常生活と深く結びついたテーマが設けられる。社会をジェンダーの観点から分析することを通して、自らの生活環境についてとらえなおし、自分の視点をもって生きていくために必要な知識を得ることが目的となる。	
			女性史	「女性史」とは、女性を主体とした歴史、またはジェンダー（文化的に構築された性差）の視点からみた歴史のことを指しているが、女性史を学び、歴史のなかに生きた女性たちへの想像力を手に入れることで、いま女性として生きるこの意味を考えていく。また、大妻女子大学の学祖・大妻コタカ先生の教育活動も含め、女子の高等教育機関をめぐる歴史を知ることは、現在の学びの環境である。過去の歴史を理解し、歴史を生きた女性たちの足跡を知ること、自らの社会的位置や生活環境を積極的に解釈し、歴史的知識を自分の人生に活用することを旨とする。	
			リーダーシップ開発	当科目では、産業界や地域社会で活躍する複数の女性リーダーから、それぞれのリーダーシップ論やそれを確立した背景や経験、さらに自身の今後の展望に関する講演を聞いたうえで、「男女共同参画社会において必要とされるリーダーシップ」をテーマに講師と学生を交えた対話を行う。 これを複数回繰り返すことで、自己理解を深めるとともに、女性リーダーに関する様々なロールモデルを通じて、学生自身がこれまで持っていたリーダーシップに対するイメージをブラッシュアップし、自らのリーダーシップ論を再構築することが目的である。	
			日本語A（文章表現）	文章表現力向上を目指す場合、読み手への配慮を忘れずに、しかも、より正確に伝えようとする努力をいとわない、という二つのことが重要になる。したがって、文章表現力向上には、(1)読み手に対する思いやりの気持ちを養うこと、(2)事実関係、意図、感情が正確に伝わるような工夫として表現効果を磨こうとする努力、(3)形式上の決まりを当然のこととして守ろうとする意識を養うこと、等が意識されるべきだろう。 本科目はあくまで本学での学生生活の基本となる文章表現力の育成を目指す。社会においても通用する基礎生活力として個人の日本語運用能力を高めていく基盤を作ることも、授業におけるねらいとする。	
			日本語B（口頭表現）	話し言葉を中心に、日本語を目的や場面に応じて適切に表現し、運用する能力の向上を目指す。「聞き手」を意識して、伝えるべき内容や目的・場面を限定した自己あるいは第三者の紹介や説明を行うなど、話し言葉の実践的訓練を行う。また、筋道を立てて話すために必要な論理的思考力と話し言葉での論理的な表現力を身につけることも重要であることから、説明資料を用いたプレゼンテーションなども行う。さらに、口頭表現においては、書き言葉とは異なり、(3)適切に発声・発音する力も必要となるため、その実践的訓練を含める。	
			日本語C（読解）	言語としての日本語の特質に対する理解を深めるとともに、情報を的確に受け取り、分析的・批判的に捉え返すことができるような、読解リテラシーの向上を目指す。方策としては、(1)中等教育の(国語科)を補うような、語彙・語法・慣用表現など、日本語に関する知識を確認すること(2)さまざまなジャンルの文章に触れて、自らの問題意識を深め、知的な好奇心を涵養すること(3)一定以上の長さを持った文章の内容を把握し、組み立てや構成を理解すること(4)テキストに対する批判的・能動的な読みかかわりを可能にするための分析的な読解の訓練を行っていく。	

全学 共通科目	基礎科目	リテラシー	コンピュータ基礎A	<p>パソコンを使って文書を作成し、計算し、発表するための知識・技能の基礎を、演習を通して身につける。また、インターネットを使った情報収集などで注意すべきセキュリティと情報モラルを理解し、安全にコンピュータを利用するために知識を身につける。</p> <p>Wordを使った基本的な文書の作成、Excelを使った表計算によるデータ処理の基礎、PowerPointを使ったプレゼンテーションの方法を演習により身につける。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. コンピュータの仕組みと基本操作 (2回) Windowsとファイル操作、セキュリティと情報モラル 2. Wordによる文書の入力 (5回) 文字の入力、作成、印刷、表、表現力をアップする機能 3. Excelの基礎 (5回) 4. PowerPointの基礎 (3回) 	
			コンピュータ基礎B	<p>パソコンの基本操作 (文字入力、保存、印刷など) ができる学生を対象として、表計算ソフト (Excel) を使った効果的、効率的なデータ処理の方法を演習する。ICT (Information and Communication Technology) が進展し、情報が低コストで、時間差なく収集することができるようになってきている。また、処理しきれない量の情報が氾濫している時代でもある。このような中、本当に必要な情報を取捨選択し、意思決定に生かしていくことが求められている。</p> <p>本科目では、多くのデータ (社会における実データを含む) から、われわれが必要とする情報を抽出すること、また、その抽出結果を読み解き、それら情報の関係を分析、考察し表現することを目的とする。その一連の中でExcelの基本からグラフ、データベース、応用的な関数の使い方を演習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Excelの基本操作 (3回) 表の作成、修飾、印刷、便利な機能 2. グラフの作成 (3回) グラフの基礎、さまざまなグラフ、グラフの編集 (適切なグラフ表現)、グラフの読み解き方 3. データベース (4回) データベースの基礎、並べ替えと抽出、自動集計、クロス集計、ピボットテーブル、データの読み解き方 4. 関数の応用 (5回) 統計関数、論理関数 (IF)、表検索 (VLOOKUP)、財務関数 	
			コンピュータ応用	<p>パソコンの基本操作、Word、Excelの基本操作を習得している学生を対象とした科目である。社会や企業で必要となる具体的な文書作成、企画提案、プレゼンテーション、データ分析、効果的なデザインなどの実例を取り上げ、インターネットによる情報検索、文書作成、データ分析、プレゼンテーションおよび情報発信の方法を総合的に演習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Wordの活用 (3回) ビジネス文書とは、表の活用 2. Excelの活用 (4回) 実用的な関数 (VLOOK、IF関数を含む)、図解とグラフ、データベースの活用、ピボットテーブルの活用 3. WordとExcelの活用 (2回) 連携の方法、表とグラフの活用 4. PowerPointの活用 (3回) プレゼンテーションとは、図解の基本、見やすいスライドの作成 5. 総合演習 (3回) 報告書の作成、案内書の作成、レポートの作成 	
			データサイエンス・AI概論	<p>近年、自らの専門分野に加えて、数理・データサイエンス・AIの素養を持った人材が求められている。一方、数理やデータサイエンス、AIと聞くと難しく感じる人もいると思われる。そのため、これらを活用することの「楽しさ」や「学ぶことの意義」に重きを置く。</p> <p>当科目では主に、「AIやデータサイエンスが社会にもたらす価値」と「デジタル技術が行き渡る社会における課題」をテーマとして、本学の各学部における具体例や最新動向等を織り込みながら、データサイエンスが様々な事象にどう関与しているかという「ストーリー」を理解してもらおう。さらにデータ利活用におけるリスクや留意事項についても学ぶ。</p>	
	キャリア	キャリアデザインⅠ	<p>キャリアデザインの第1段階として、「職業世界の一端を知る」「自己を知る」「自己を育成する方法を知る」ことを目的とする。職業意識を涵養すると共に、産業界から求められている汎用的能力の育成のきっかけとツールを提供することにより、課内外の学生生活からの学びを促す。</p> <p>「働くことの意味」「職業への適性と能力」「ライフプラン」「自己分析」「コミュニケーション能力」「チームワーク」「セルフコントロール」を中心に学ぶ。</p>		
		キャリアデザインⅡ	<p>キャリアデザインの第2段階として、「実社会・実業界を知る」に主眼を置く。一般的な企業の構造や経営についての知識、および広く産業についての知識を受講者に付与し、もって職業選択の一助とする。前半は企業、後半は産業についての講義とする。</p> <p>「企業とは何か」「マネジメント (モノ・サービス、ヒト・カネ)」「各産業の概要」について学ぶ。</p>		
		キャリアデザインⅢ	<p>キャリアデザインの第3段階として、「内部世界 (自己) と外部世界 (実社会) を統合する」ことを目的とする。</p> <p>就職活動時期を目前とした学生に対し、女性を取り巻く雇用環境など現実問題の中で就職意欲を喚起すると同時に、学生生活からの学びと関連づける形で自己理解を促し、事務局主催の、業界研究等、各種就職支援活動の活用へとつなげる。</p> <p>「日本企業の人事管理制度」「昨今の労働事情」「女性の労働」「ワーク・ライフ・バランスの実践」「コミュニケーション能力」「自己分析 (大学生生活の振り返り)」について学ぶ。</p>		

基礎科目	キャリア	キャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ	今日、大学卒業者に最も強く求められるものは、「汎用能力」（社会人基礎能力）である。具体的には、コミュニケーション能力、問題解決能力、達成意欲などである。しかし、これらの能力は必ずしも知識獲得によって育成できるものではない。 本授業は、外部組織との提携のもと、与えられた実際的な課題に対し、受講生がチーム単位で責任をもって取り組むという体験の場を設定することにより、かかる能力の重要性についての受講者の認識を高めるとともに、受講者相互の刺激により、受講者の潜在的な能力を引き出すものである。
		キャリア・ディベロップメント・プログラムⅡ	本授業はⅠの発展版とし、履修条件としてキャリア・ディベロップメント・プログラムⅠ（CDPI）の単位を履修習得した学生とする。具体的な内容は、学生は「プロジェクトリーダー」または「ファシリテーター」という立場でCDPIの授業に参加し、CDPIの履修生に対してチーム運営をリードすることを、または、チーム運営のファシリテーションを体験する。その後、全プロセスを通してリーダーシップのあり方、チームワークのあり方、ファシリテーションを振り返り、CDPIと同様に「汎用能力」をより一層高めることを目的とする。
全学共通科目	人間と文化	文学の世界	本授業のひとつの目的は、ことばと物語の力が、想像力を通じていかに人の心を揺さぶり、新しい認識を形づくるかという文学の持つ力について考えることである。このためには、さまざまな切り口が想定できる。特定の作品の鑑賞と解釈を通じて、その特定の社会と文化を映す物語の中に時空を超えた普遍的人間の精神や思想を読む、というののひとつ。また、複数の作品の通時的関連性や、同ジャンルの歴史的発展の過程を辿るといふ、文学史的俯瞰によってその本質を考えてみることも可能となるだろう。
		音楽の世界	学生たちに音楽に対する認識を深め、かつそれを楽しむ糸口を与えることを目的としたものである。ここでいう音楽は、西欧古典音楽に限定されたものではない。日本の伝統的音楽や、世界の様々なエスニシティに根差した音楽もそのなかには含まれている。また若者たちは深くポピュラー音楽に親しみ、音楽なしには彼らの生活は成り立たなくなっているといっても過言ではない。また音楽は、今日では様々なセラピーのなかにも取り入れられている。音楽の心理的・医療的作用も講義の主題となりうる。
		美術の世界	優れた美術作品の観察と分析を通じて、対象を理解するだけにとどまらず、美的体験を豊かにし、鑑賞能力を養うことを目指す。また、美術の地域や時代による特徴をも把握できるようにして、諸作品の個別化と一般化を通じて、人間生活の中での造形表現の基本となる形体や空間を把握し、的確な観察力や構成力を養うことをねらう。さらには美術作品の記号的側面にも注目し、例えばビジュアルデザインの部門では視覚的な伝達効果を主とするデザインの世界を通して、デザインについて理解を深めるとともに、デザインにおける計画と表示の能力を高める。こうした学習と実践を通して、芸術としての美術の意義を理解させる。
		映像・演劇の世界	現在は、映像技術の進展と劇場型世界への転進のため、誰でもデジタル機器を駆使してイメージの編集ができるようになり、誰もが期待される役を意識してパフォーマンスを演じられるようになった。つまり「見る」アートから「する」アートへの転換が行われようとしている。本授業では、日常性に入り込んできたイメージとパフォーマンスの世界を、歴史的視座の中に置いたり、同時代の他のアートとの往來を絡ませてみたり、具体的な作品をそれぞれの世界の用語で分析してみたりして、これらのアートの本質と人間の本性との係わり合いを深く、また広く論じていきたい。
		考古学の世界	考古学という学問的な方法について理解を深めることを目的とする。対象地域としては、学生の関心を考慮して、日本周辺をフィールドとした考古学を講義の対象とすることが考えられるが、関係の深い他の地域や、画期的な発見がなされた遺跡、あるいは話題性のある遺跡・遺物などについて世界の他の地域をあつつかうことも可能である。またどの時代をあつつかうか、あるいはある特定の遺跡・遺物に関して通史的に扱うかなどについては担当者にゆだねられる。したがって先史考古学と歴史考古学を講義の対象にふくむことはいうまでもない。
		ポピュラー・カルチャーの世界	「ポピュラー・カルチャー」論とは、古くは大衆文化論と呼ばれていた。「ポピュラー・カルチャー」は直訳すれば「民衆の文化」となる。古くから受け継がれてきた伝統的な民衆の文化が、都市化とメディアの発達のなかでどのような変容を遂げているのか。そして、村上春樹の小説の大ヒットが示すように「ハイ・カルチャー」と「ポピュラー・カルチャー」の区別も今また曖昧なものとなってきた。このように本講義の内包する課題は多岐にわたり、メディアと文化に関心をもつ多様な研究者の参加が期待される。
		地域と文化	本科目では、地域の文化・社会について、言語、歴史、政治、経済、宗教、文学、芸術などさまざまな側面を、社会学、言語学、地理学といった単一の分野ではなく複数の分野にわたった「学際的研究」から全体的に理解することを到達目標とする。さらに近年の地球のグローバル化を背景に、特定の地域ではなくいくつかの地域のあいだの交流や関連にも注目し、そこから生ずる種々の政治・経済・社会問題と解決方法にも言及する。
		言語と文化	コミュニケーションを成立させるのは「言語」なのだが、その「言語」は時として（あるいは同時に）いってよいほど頻繁にコミュニケーションを阻害し破壊させるものでもある。「ことば」は通じる、しかし同時に「ことば」は通じない。 言語についてのかような二律背反は、言語観の対立にも引き継がれる。ある言語はその言語固有のやり方で世界を分節する結果、その言語固有の世界観が形成されるのだと主張する考え方が一方、異言語であっても普遍的な言語・普遍的言語生成構造の上にその差異が生じているのだと説く考え方もある。果たして人は、「言語」という共通した知性によって相互理解の基盤を得たのだろうか。それとも、異なる言語はそれぞれ独自の文化を生み出すと同時に相互理解を阻む壁ともなるのだろうか。 本授業では、空気のように「あたりまえ」で、人間の知的営為の前提と捉えられているもの、それゆえに深くその本質を考えることをしなくて済んできたもの、にもかかわらず、知的営為にとって不可欠あるいは知的営為そのものである「言語」とはなにかについて、さまざまな議論があることを知り、考える機会を与える。

全学 共通科目	人間と文化	日本の歴史と文化	日本の歴史を主な対象とし、客観的に歴史を見る目を涵養し、歴史に対する理解を深める。対象とする時代や事象については、特定の時代を掘り下げて分析することも可能であるし、文化史などから通史的に歴史をあつかることも可能である。またここで日本という枠組みも固定的なものではなく、周辺地域との関係や世界史のなかで歴史を見直すという視点も必要であろう。日本列島を中心とする地域の過去の歴史や文化を見る目を養うことによって、現代の日本社会をあらためて見直し、問い直す、視点と視野を開く契機としたい。	
		世界の歴史と文化	世界の歴史を対象とし、広い視野で客観的に歴史を見る目を涵養し、歴史に対する理解を深める。併せて代表的な幾つかの民族と宗教について、その行動や思考の規範となっている教理と心性にも触れたい。対象とする地域・時代や事象については、特定の地域、時代を掘り下げて分析することも可能であるし、特定の事象を通史的にあつかることも可能である。また、文化圏相互の交流という視点から、平和時の交易や宗教間戦争の事例を、分析することも有益であろう。世界の歴史と文化、民族と宗教を知ることによって、我々をとりまくグローバルな問題について、関心を深め、考えていく契機と視野を獲得できるようにしていきたい。	
		哲学と思想	哲学や思想は人類が発生以来、如何に生きるべきかを問い続けて、その問いと答えの繰り返しが集積され、体系付けられたものである。従ってその根本は実生活の即した具体的なものであったので、難解なものではない。教室ではまずこの誰もが経験するような身近な問題から出発し、それぞれの問題意識に基づいて思索してゆくことを練習する。また、哲学の長い歴史を参照し、滋養とすることにより我々が得手勝手に思索してゆくよりも、はるかに思考活動を豊かなものにしてくれる。こうした過去の遺産、そしてそれは現在にまで密接につながっているものであるが、それらに関する基本的知識の習得も試みる。	
		日本文化・事情	留学生の受講が優先されるが、履修人数に余裕がある場合には、日本人学生も受講できる科目である。留学生が日本語・日本文化に興味を持った理由の一つに、日本のアニメやマンガ、アイドルグループがある。留学生と共に、こうした日本の現代文化を鑑賞・分析し、それを育んだ日本の文化事情について学ぶ。	
	社会と生活	子どもの世界	子ども文化という時、学生たちが抱くイメージは多様なものであろう。広い意味での「子ども文化」そのものに、児童学、教育学、体育学、社会学、心理学、歴史学、文化人類学等々のさまざまなディシプリンからアプローチすることが本講義の方向性とし、小説、詩、絵画そして音楽等々、さまざまな芸術作品のなかで描かれた子どもの姿を論じることも本講義のもうひとつの方向性である。「子ども」は生命力や創造性の隠喩でもある。学生たちの「内なる子ども」に語りかけ、それを呼び覚ますような瑞々しい講義としたい。	
		人間の成長と心理	本講義では、人間の生涯に渡る“心・身体・社会性”の成長や発達というテーマについて、主に心理学的アプローチから概説していく。生涯発達の諸局面における様々なライフイベントを横軸として、そこでの心や身体の状態、人間関係や社会の様相、直面するであろう課題や問題について共に考え、受講生各自が自分なりの視点を持てるようになることを目指したい。特に受講生の皆さんが当面する青年期・成人期の特徴や課題について、講義を通して共に考えていくことを目指す。	
		日本国憲法	本科目は、わが国の法制度及び法体系の根幹をなす日本国憲法の基本原則と概略を理解することを目的とする。講義の中心は、実定法としての日本国憲法の解釈におかれる。即ち、基本的人権および統治機構に関わる憲法諸規定を、具体的な判例と関連諸法令の分析を通じて、その意味内容を解釈する作業を行う。また、実定憲法の解釈の枠に留まらず、その歴史のないし論理的基礎をなす、英、仏、独、米などの西洋近代社会の構造ないし立憲主義思想の分析、さらには現代の諸外国の実定憲法との比較する。最後に、本科目は現代社会における憲法の最新の問題状況、例えば所謂「新しい人権」（環境権、国際人権など）についても論じる。	
		法律と現代社会	本科目は、現代社会を成立かつ存続せしめている、道徳、倫理、慣習そして法律など、種々の「社会規範」のうち、「法律」に焦点を当てて考察することを目的とする。以下、ここで法律は法規範の中の、狭義の「法律」ではなく、法規範全体を意味するものとして扱う。 第一に、社会規範の中での法規範の特徴を、特に国家権力との関係において明らかにする。 第二に、代表的な法領域である、民法、刑法、そして行政法などについて、その基本的な特徴と概略を、具体的な判例を通じて考察する。 第三に、法を紛争解決の方法として、動態的、機能的視点から分析する。 第四に、現代社会における具体的な法律問題をいくつか取り上げ、法的主体としての我々市民について聴講者とともに考えたい。	
		政治と現代社会	現代社会における「政治」のあり方をできるかぎり多面的に考察することを通じて、「政治」に対するセンスを養うとともに、主権者として「政治」に対する判断や行動の指針を獲得することを目的とする。 まず、政治に関する基本概念と、それらを育んだ西洋社会の歴史的・思想的な理解をたかめ、近代国家およびその政治の特徴を明確にする。次に、現代社会における政治のシステムと機能を実証的分析も扱う。投票行動分析、政治意識分析などを通じた政治過程論、現代政治論などの領域である。さらに、国際政治史、国際関係論なども扱う。最後に、国家単位での政治行動とは異なる、例えばNGOなど新しい政治主体の役割についても考察する。	
		経済と現代社会	21世紀に入って世界経済は、市場のグローバル化が進展する中、近代国家と国民経済の形成においてさまざまな発展段階にある国々が、競争的關係をさらに強める場となっている。先進国が近代国家の枠組を超える方向を模索している一方、新興国は経済の急速な発展に国家の枠組みが追いつかない状況にあり、また途上国は政治経済の近代化が進まないまま伝統社会の仕組みが崩壊しつつある。このような世界経済の状況に、アダム・スミスに確立され、ケインズによる大きな革新を経た、市場と国民経済を分析する経済学の諸理論はいかなる有効性をもつかを検証し、新たなパラダイムの形成を模索してゆく。特に、日本経済が世界経済の中でどのような位置付けにあるかを確認し、高齢社会化など日本経済に特有な問題を明らかにした上で、その解決策をさまざまな角度から考えてゆく。	
		教養科目		

全学共通科目	社会と生活	メディアと現代社会	現代社会に生きる私たちは、様々なメディアに囲まれて生活し、各種メディアは人々にとって情報源であるばかりでなく、彼らに娯楽を提供するソースともなっている。そこで、新聞・雑誌・テレビ・ラジオ等のマス・メディアが提供する様々なエンターテインメントについて論じる。またネットや携帯電話を通じて自ら情報を積極的に発信する事は、ネット右翼や学校裏サイトのような負の現象も生み出している。本授業ではこれらのメディアと現代社会にかかわる諸問題について、多様な切り口から考える事を通じ、私たちが世界を認識する方法やあり方を再検討する。	
		家族と現代社会	家族は、社会における基本的人間結合単位であると言える。本科目は、そのような家族の現代社会における位置と特徴を、社会諸科学（社会学、法学、経済学、教育学など）の方法論と視点から、具体的問題の考察を通じて、明らかにすることを目的とする。現代日本における家族の諸側面および諸問題を分析するためには、歴史的、比較社会的考察が不可欠である。 伝統的な家族のあり方と、近代以降のあり方には大きな相違が横たわり、それを正確に測定することなしに、現在のわが国の家族のあり方を把握することは不可能である。以上の考察を踏まえて、現在社会における家族の諸問題をいくつか取り上げ、具体的に考察したい。	
		福祉と現代社会（ボランティアを含む）	私たちが暮らす現代社会を「福祉」の視点から取り上げて、履修者が身近な生活課題として受け止めながら考察し、一人ひとりがよりよく生きていくために役立てることを目的とする。今日の社会福祉制度がこれまで歩んできた歴史的経過とその社会的背景やそれらの制度を支えてきた思想、そして制度の運用を行う福祉現場の実践活動の様子などをDVD等で紹介していく。また、国や地方自治体の法令によって制度化された福祉だけでなく、地域住民の自主的な活動によって創り出される市民ボランティア等の活動状況についても紹介しながら、これらの市民活動のあり方や今後の展望について考察していきたい。	
		SDGsと現代社会	当科目ではまずSDGsの全体像と17の目標の相互関係を理解し、本学の教育・研究と目標との関連について、最新動向を踏まえて学ぶ。これらは、①各学部の教育・研究はSDGsとどのように関連しているのか、②得た知識をSDGs課題発見・解決にどのように生かせるかについて、学生自身の「気づき」を促すことが目的である。学生には、1つの目標に対して多角的なアプローチ方法があることを知り、本学における学びは将来にわたって有機的に結びつくことを実感して欲しい。「持続可能な共生社会の実現への貢献」を教育使命の一つとする本学にて、SDGsと自らの興味関心の対象を結び付けて考え、今後、どのように学びを深めたらよいかを考える契機となる講義を提供する。	
	自然と科学	数学の世界	①微分・積分は、万有引力を発見したニュートンによって作られた。車のメータで見る速度というものが微分概念のひとつの具体例である。速度をきちんと理解できれば、微分が何であるかがわかる。この理解のためには、関数と、極限の概念を知る必要がある。初歩から始めて、微分というものを理解するまで進む。 ②「速度」という概念と、「速さ」という概念は異なる。大きさしかないものが速さであり、大きさ向きを持つものが速度である。大きさ向きを持つものをベクトルという。図示するときは矢印で表す。このベクトルの演算などを学ぶと、幾何学において強力な武器となる。このベクトルを別のベクトルに移す行列や、行列の性質を知るために役に立つ行列式も学ぶ。	
		生活の物理	日常生活に見る現象の裏にある法則を物理を使って、なるべく数式に頼らず、説明していく。身の回りに溢れる家電製品などは、物理という学問がなければどれひとつとして存在しない。いくつか例をあげる。電子レンジは、第二次世界大戦中のレーダの民生品である。電気ポットは、ジュール熱の法則に従って、お湯が沸く。また、日々新聞を賑わす地球温暖化の問題の理解には気象学の知識が必要だが、気象学の基本には物理学がある。 学生の興味ある話題を取りあげ、その裏にある物理法則を明らかにして、物理的思考方を身につけてもらうことを目標とする。	
		生活の化学	その昔、化学者の夢は錬金術であったと言われる。金でないものから金を作り出すのが錬金術であるが、現在、プラスチックや繊維などは錬金術のごとく石油からつくることができる。ペットボトルからフリースをつくるなんてこともできる。ペットボトルもフリースも、炭素(C)と水素(H)と酸素(O)からできていて、結合の組み合わせを变えるだけで、見かけも性質も違うものに变化させることができるのである。砂糖と紙とサラダ油、見かけは違うが、これも実は主成分はすべて炭素(C)と水素(H)と酸素(O)からできている。どれも、燃やすと二酸化炭素と水になる。このような物質たちの七変化を理解するためには、物質を構成している原子に思いを馳せなければならない。 水も化学物質の1つである。水は水素(H)2つと酸素(O)1つが結合してできたシンプルな物質だが、特別な性質を持っている。電子レンジで水を含む食品を暖めることができるのはなぜか。それは水の化学構造に秘密がある。 本授業では、物質の性質や化学変化を理解するための化学の基礎を学び、日常生活に散らばっている事柄を化学の目で見てみることを目的とする。	
		科学と環境	地球環境は、この星が生まれて以来の約46億年間で常に変動し続けており、生命は環境の変動に適応しながらさまざまな生き方を獲得・進化してきた。地球環境の歴史を学ぶことで環境および生命の多様性を学ぶ。近年の環境問題は地球規模(温暖化や砂漠化など)でありながら身近な問題(都市化や食料・エネルギー問題など)でもある。これらの問題の多くは科学の進歩がもたらしたものであるが、こうした諸問題を克服して持続可能な社会を構築するのにもまた科学の力である。本講義では、「環境・生命の多様性を学ぶ」と「科学技術の功罪をふまえて未来を考える」という2つの視点を中心に据えて環境問題について考える力を養うことを目的とする。	

全学共通科目	自然と科学	生命科学	<p>生命の誕生から始まり、成長に伴う様々な機能を持つようになる分化現象、子孫を残す生殖活動、そして加齢による老化現象、生命の終焉までを様々な観点から、最新の研究成果を踏まえて講義するのが本授業である。近年、ヒトゲノム計画を始めとして多くの生物において分子生物学の研究成果は著しいものがある。このような成果を踏まえて疾病の研究や品種改良などの応用面は言うまでもないが、生命の根本に触れる研究も行われている。このような研究は人類の健康に対する貢献は多大であることは間違いない。一方、本来動物細胞においては受精以降では全能性を欠いているわけであるが、iPS細胞のような人工的に全能性を待つ細胞に対する危険性や倫理面について指摘されている。このように最先端の研究の両面性も学生と一緒に考えていきたいと思っている。</p> <p>本授業を行うことで学生に生命現象を探究する面白さを学び、科学的な考え方を修得してもらうことが授業目標である。</p>	
		宇宙の科学	<p>宇宙の科学に関する発展は目覚ましく、宇宙の起源や進化に関する研究ばかりでなく、惑星探査機による火星などの直接探査、そして宇宙旅行や月旅行も実現間近になっている。宇宙に関する基本的な科学的知識や考え方を始め、人類が宇宙や地球のなかでは極めて小さな存在であることを理解する。本授業では古代や中世の宇宙観を始め、宇宙の起源や進化、太陽系と地球の起源と進化、宇宙開発についてビデオ等の画像を用いて解説する。</p> <p>宇宙は137億年前にビッグバンと呼ばれる超高温の火の玉として始まったとされているが、ビッグバン後には星や銀河が生成し宇宙の構造が形成された。太陽系は46億年前に誕生し、太陽を中心に8つの惑星とその衛星などから構成される。太陽系と同時に誕生した原始地球は、微惑星の衝突で生成したため高温であったが、冷却するにつれて海洋が生成し陸地が形成された。宇宙開発は1957年の人工衛星の打ち上げの成功に始まるが、その後人類は月面に降り立ち、スペースシャトルや宇宙ステーションの開発に成功し、宇宙旅行の基礎ができた。宇宙の巨大な時間的空間的な広がりを理解し、これからの宇宙と人類のあり方を言及する。</p>	
		人類の進化	<p>本授業では、まず生物分類および学名について解説し、その後、生命誕生から現在に至るまでを通覧しながら人類進化の概要、すなわち人類の誕生から世界各地への拡散移住の過程を解説する。とくに近年詳細な部分にまで理解が及ぶようになった人類のアフリカ単一起源説を基に、人類進化の特徴を理解してゆく。また併せて、進化過程で獲得してきた人体の構造と機能について解説する。また日本人の起源についても解説する。以上の知識をもとに、近未来生活において人類自らが制御する温度や照明など環境要因への適応の問題、およびロボットとの共存が想定される生活と人間観について、学生諸君の意見を求めながら考える。</p>	
		自然科学の歴史	<p>自然科学は、人間のあくなき知的欲求から生み出された輝く宝石のような結晶である。人間は、自然科学の知識を活用することで、物質的にも精神的にも豊かな社会を築いている。授業では、自然科学の歴史の夜明けから解説し、人類の歴史の中で、どのような科学的思想や科学的概念が生まれたかについて、自然科学の方法論とともに学ぶ。また、それらの科学的知識がどのようにして体系づけられ、現代のような自然科学が発展してきたかについて基礎から学ぶ。こうした歴史に関する知識を背景に、現代社会における、人間と自然科学の付き合い方について考える。また、自然科学は常に発展途上段階にあるため、今後の展開を含め、自然科学の未来についても考える。</p> <p>授業を通して、自分の中にある知的好奇心と人類の進歩や未来像との深い関わりを意識することを目標とする。</p>	
	スポーツ	スポーツA	<p>身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。</p> <p>以上のことから本授業では、生涯スポーツの中でも愛好者の多い卓球・バドミントン・テニス・ゴルフなどの個人スポーツを中心に授業を実施する。</p>	
		スポーツB	<p>身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。</p> <p>以上のことから本授業では、健康づくりのための体力を高める・技を高めるためのスポーツ実践として、エアロビックスダンス・ウォーキング・ランニングや器械運動（トランポリン）などを中心に授業を実施する。</p>	
		スポーツC	<p>身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。</p> <p>以上のことを踏まえ本授業では、チームで協力して課題を解決し、コミュニケーション能力及び、スポーツ技能を高めるために、バレーボール型・バスケットボール型・ベースボール型などのスポーツを中心に授業を実施する。</p>	
		スポーツD	<p>身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。</p> <p>以上のことから本授業では、健康でしなやかな日常生活を送れるように、軽いエクササイズ（ヨガ・ピラティス等）やストレッチを通して、自己のからだについて気づきを促し、身体のコンディショニングを行う。</p>	

全学共通科目	教養科目	スポーツ	シーズン・スポーツ	<p>身体活動の体験を通して心身の調和を図り、健康な身体保持増進することによって、生涯にわたって豊かな生活を営むために必要な運動の技能や知識を習得すること。また、大学や将来の社会生活において運動やスポーツを通じて、さまざまな身体コミュニケーションを行うことの意義について理解を深めることを目的に、「スポーツ」関係の授業を実施している。</p> <p>以上のことを踏まえ本授業では、学外での集中授業を（夏季はトレッキング、冬季はスキー・スノーボード）通してそれぞれの技能を習得し高めると共に、自然と触れ合い、またそこに集う人たちとの交流を通して、コミュニケーションを高めることを目的として授業を実施する。</p>	
			スポーツと健康	<p>現代社会は、都市化、高齢化、労働環境の変化にともなう自由時間の増大といったライフスタイルの変化、また、科学技術の進歩や経済成長による生活の効率化がもたらした慢性的な運動不足やストレス傾向等にあつて、心身の健康を自ら維持管理することや、運動・スポーツ・野外運動を積極的に行うことは、現代人にとっては必要不可欠であると考えられる。</p> <p>「健康」「運動」「スポーツ」の実践の基礎となる理論的な事柄について理解を深めていくことを目的に、①生活とスポーツ②生活とスポーツ技術③生活と体力④生活とトレーニング⑤女性とスポーツなどについて解説し、自らが生涯にわたって心身ともに健康で豊かな生活を営むための「健康・スポーツ」について考える機会とする。</p>	
			レクリエーション論	<p>レクリエーションとは、単なる身体的な健康だけでなく、精神的な健康をも促す活動で、自分の生活に喜びと活力を満たしてくれる重要な手段というようにならなってきた。そしてまた、職場や地域社会、地域福祉の現場等においても、重要な役割をはたしている。本授業では、レクリエーションの基礎理論を学び、必要とされる地域社会等においてのレクリエーションの重要性や必要性、さらには支援方法等について理解を深めることをねらいとする。なお、本授業はレクリエーション・インストラクター資格取得とも関連する。</p>	
			レクリエーション実技	<p>レクリエーションとは、単なる身体的な健康だけでなく、精神的な健康をも促す活動で、自分の生活に喜びと活力を満たしてくれる重要な手段というようにならなってきたのです。そしてまた、職場や地域社会、地域福祉の現場等においても、重要な役割をはたしている。本授業では、レクリエーションの人と人をつなげるためのコミュニケーションワークや目的に応じたレクリエーション・ワーク等の指導・支援技術や方法などを習得し、多くの人たちをつなげるための基礎的能力の育成をねらいとする。なお、本授業はレクリエーション・インストラクター資格取得とも関連する。</p>	
			特殊教養	<p>本授業は、協定を締結した他大学・他短期大学が開設する特色ある授業科目を受講し修得した場合の単位認定科目である。なお、内容が異なる場合は、複数回の履修が可能である。</p>	
	外国語科目	英語ⅠA	<p>英語の基礎的な、聞く、話す、読む、書く、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、高校までに習得した英語力を実際のコミュニケーションに活かす訓練を行う。高校までの間に学んだ英語は「知識」として脳に蓄積されているはずである。しかしいざその「知識」を使ってコミュニケーションを行なおうとすると、簡単な表現さえ発することが出来ないのが現状ではないだろうか。このコースでは、「知識」としての英語を「道具」として使えるようになることを目標とし、コミュニケーション技術向上のための基礎構築を目指す。</p>		
		英語ⅠB	<p>英語の基礎的な、聞く、話す、読む、書く、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、平易な語彙や文法を用いつつ、人間関係を築く基となるコミュニケーション能力を磨く。前期の英語ⅠAを受講することで英語のみの授業に慣れ、英語を「道具」として使うための基礎を身につけるはずである。このコースでは更にその「道具」を使ってコミュニケーションを行い、会話を継続・発展させる訓練を行うと共に、自分の意見を分かりやすい言葉で表現して発表する機会も設ける。</p>		
		英語ⅠC	<p>英語の基礎的な、読む、書く、聞く、話す、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語の基礎的な読解力と表現力を身につけることを目指す。高校までの間に、入試問題で出題されるような英文読解力や英作文力は既に身につけているはずである。しかし、本来読み書きの目的はコミュニケーションである。このコースではその原点に戻り、基礎的な英語で書かれた文章を読んで理解し、それに倣って文章を作成するという訓練を繰り返して、書面によるコミュニケーション技術の構築を目指す。</p>		
		英語ⅠD	<p>英語の基礎的な、読む、書く、聞く、話す、の4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語の基礎的な読解力と表現力を身につけることを目指す。前期の英語ⅠCを受講することで、センテンスレベルの英語による書面コミュニケーション技術の基礎を身につけるはずである。このコースでは更にその技術を発展させ、基礎的な英語で書かれた文書を読んで書き手の意図を理解し、簡単な英語でそれに返答するという書面によるコミュニケーション技術の向上を目指す。</p>		
		英語ⅡA	<p>英語ⅠA・英語ⅠBを発展させ、中級レベルで4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、普通の速度で話される英語をセンテンス・レベルから発展させ、パラグラフ・レベルでその大まかな内容を把握できることを目指す。扱うトピックは世界の人々の暮らしや環境、世界各地の都市の様子など幅広い分野に及び、英語を通して一般教養を身につけることも目指す。また、海外旅行を想定した旅行英語の要素も取り入れ、英語力の実践的な利用を目指す。さらに、学期を通してグループプロジェクトを行い学期末にその成果を発表することで、1年次に培った協調性を磨くことも目指す。</p>		

全学共通科目	外国語科目	英語ⅡB	英語ⅠA・英語ⅠB・英語ⅡAを発展させ、中級レベルで4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリスニングとスピーキングに主体を置き、普通で話される英語をパラグラフ・レベルで理解できるようになることを目指す。また、相手の話に耳を傾けてそれに反応し、自分の意見や感想を加えてパラグラフ・レベルで表現する訓練も行う。扱うトピックは世界中の家族のあり方や最新のテクノロジー、個人固有の嗜好など幅広い分野に及び、英語を通して一般教養を身につけることも目指す。また、学期を通してグループプロジェクトを行い学期末にその成果を発表することで、より豊かな協調性を身につけることも目指す。	
		英語ⅡC	英語ⅠC・英語ⅠDを発展させた、いわゆる英語の中級のな、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語をセンテンス・レベルから発展させてパラグラフ・レベルで読解できることを目指す。具体的には、新聞や雑誌記事などのパラグラフを、限られた時間で辞書を引かずにその大まかな内容を把握することを目標とする。また、自分の身の回りのことをパラグラフ・レベルの英語で書くこと、環境・健康・文化・歴史などに関するレポートを書くことなどを目標とする。そのためには、かなり多くの英語の情報に接する必要がある。新聞、雑誌に限らず、平易にリライトされたエッセイやストーリーを読むことも望まれる。	
		英語ⅡD	英語ⅠC・英語ⅠDを発展させた、いわゆる英語の中級のな、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的にレベルアップさせることを目的とする。特にリーディングとライティングに主体を置き、英語をセンテンス・レベルから発展させてパラグラフ・レベルで読解できることを目指す。具体的には、新聞や雑誌記事などのパラグラフを、限られた時間で辞書を引かずにその大まかな内容を把握することを目標とする。また、自分の身の回りのことをパラグラフ・レベルの英語で書くこと、環境・健康・文化・歴史などに関するレポートを書くことなどを目標とする。そのためには、かなり多くの英語の情報に接する必要がある。新聞、雑誌に限らず、平易にリライトされたエッセイやストーリーを読むことも望まれる。	
		英語ⅢA	今まで学習した英語を発展させた、いわゆるブラクティカルな上級総合英語へのレベルアップを目的とする。たとえば、スピーチ、ディスカッション、ディベート、そしてプレゼンテーションなどにおいて必要とされる、自分の意見を英語で発表できること、相手の意見を聞きながら自分の意見も英語で述べて討論できること、相手を説得できるようなレトリカルな英語の発表ができることを目標とする。また、英検、国連英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験を念頭に高得点獲得も目標とする。そのためには、新聞・インターネットの記事など英語で書かれた各種の資料などから瞬時に必要な情報を的確に抜き出し、それを分析すること、BBC、CNN、ABCなどのニュースやドキュメンタリー番組を積極的に活用し、高度なリスニング力を体得することも望まれる。	
		英語ⅢB	今まで学習した英語を発展させた、いわゆるブラクティカルな上級総合英語へのレベルアップを目的とする。たとえば、スピーチ、ディスカッション、ディベート、そしてプレゼンテーションなどにおいて必要とされる、自分の意見を英語で発表できること、相手の意見を聞きながら自分の意見も英語で述べて討論できること、相手を説得できるようなレトリカルな英語の発表ができることを目標とする。また、英検、国連英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験を念頭に高得点獲得も目標とする。そのためには、新聞・インターネットの記事など英語で書かれた各種の資料などから瞬時に必要な情報を的確に抜き出し、それを分析すること、BBC、CNN、ABCなどのニュースやドキュメンタリー番組を積極的に活用し、高度なリスニング力を体得することも望まれる。	
		フランス語Ⅰ	初めてフランス語に接する人のためのクラス。まずはフランス語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、フランス語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		フランス語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級フランス語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がフランス語できちんとできるようになることを目指す。	
		フランス語Ⅲ	フランス語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかに語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、フランスの雰囲気を映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたフランス語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		フランス語Ⅳ	全学共通教養科目としてのフランス語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、フランスと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とフランスの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたフランス語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
ドイツ語Ⅰ	初めてドイツ語に接する人のためのクラス。まずはドイツ語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、ドイツ語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。			

全学共通科目	外国語科目	ドイツ語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級ドイツ語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がドイツ語できちんとできるようになることを目指す。
		ドイツ語Ⅲ	ドイツ語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、ドイツの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたドイツ語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。
		ドイツ語Ⅳ	全学共通教養科目としてのドイツ語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、ドイツと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とドイツの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたドイツ語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。
		スペイン語Ⅰ	初めてスペイン語に接する人のためのクラス。まずはスペイン語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、スペイン語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。
		スペイン語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級スペイン語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がスペイン語できちんとできるようになることを目指す。
		スペイン語Ⅲ	スペイン語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、スペインの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたスペイン語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。
		スペイン語Ⅳ	全学共通教養科目としてのスペイン語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、スペインと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とスペインの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたスペイン語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。
		ロシア語Ⅰ	初めてロシア語に接する人のためのクラス。まずはロシア語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり、文型の反復練習をすることによって、ロシア語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。
		ロシア語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級ロシア語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介がロシア語できちんとできるようになることを目指す。
		ロシア語Ⅲ	ロシア語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、ロシアの雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きたロシア語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。
		ロシア語Ⅳ	全学共通教養科目としてのロシア語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、ロシアと日本の文化や習慣の違いを知ることも視野に入れる。日本とロシアの歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きたロシア語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。
		中国語Ⅰ	初めて中国語に接する人のためのクラス。まずは中国語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、中国語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しさや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。

全学共通科目	外国語科目	中国語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級中国語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介が中国語できちんとできるようになることを目指す。	
		中国語Ⅲ	中国語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、中国の雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きた中国語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		中国語Ⅳ	全学共通教養科目としての中国語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、中国と日本の文化や習慣の違いを知ること視野に入れる。日本と中国の歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きた中国語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		韓国語Ⅰ	初めて韓国・朝鮮語に接する人のためのクラス。まずは韓国・朝鮮語に慣れることを目標にする。発音の練習を重視し、正確な発音と共に、文字の読み方(綴りと発音の関係)、文字表記をしっかりと修得する。 CD等を用いて基礎会話の訓練を行い、やさしい文章を読んだり文型の反復練習をすることによって、韓国・朝鮮語に馴染みながら自然に文法の基礎も身につくように指導する。学生にとって新しい外国語を学ぶことには努力が必要とされるが、未知の世界に触れ視野を広げる楽しみや、将来の自分の可能性を高める期待感も大きいはずである。	
		韓国語Ⅱ	ホテル、空港、学校、商店、レストランなど、日常生活のいろいろな場面で実際に使われる言葉に触れながら、初級韓国・朝鮮語の基礎事項を発展的に学習する。新しい内容を学ぶと共に、すでに学んだことを確認し定着していくことも重要である。反復練習を通じた実用的な会話力の増進、文法知識の発展とともに、文章を読む基礎的な力も養いたい。具体的な目標としては、半期授業の終わりには自己紹介が韓国・朝鮮語できちんとできるようになることを目指す。	
		韓国語Ⅲ	韓国・朝鮮語の初歩を反復学習によって定着させるクラス。日常生活や旅行中のいろいろな状況に即した実用会話の練習、文法事項の学習、発音の訓練、やさしい文章の購読を通じて、たしかな語学力を身に付けさせる。教科書で学ぶだけでなく、韓国・朝鮮の雰囲気や映像でじかに味わう機会を作るため随時DVD等で映画やTV番組その他を紹介したい。読む力を養うために、教科書以外にやさしい文学作品を購読することもある。生きた韓国・朝鮮語を聞き、話し、読み、書けるようになることを目指して指導する。	
		韓国語Ⅳ	全学共通教養科目としての韓国・朝鮮語に一応のまとまりをつけるためのクラス。コミュニケーション力の増強とともに、韓国・朝鮮と日本の文化や習慣の違いを知ること視野に入れる。日本と韓国・朝鮮の歴史や文化交流についての理解も深めたい。そのためにも、これまで以上に映画や文学作品を紹介していく。ヒアリング力、読解力、書く力、表現力を高め、生きた韓国・朝鮮語をコミュニケーションの場でも活用できるようになることが最終目標である。	
		日本語Ⅰ	日本語を母語としない学生のための授業である。大学の授業を受講する際に必要な日本語のうち、聞くことと話すことを中心に、基礎を固めて応用に備える練習を行う。	
		日本語Ⅱ	日本語を母語としない学生のための授業である。大学の授業を受講する際に必要な日本語のうち、読むことと書くことを中心に、基礎を固めて応用に備える練習を行う。	
		日本語Ⅲ	日本語を母語としない学生が大学の授業で必要となる日本語を総合的に養う授業である。特に、受講という学習活動に必要な日本語を総合的に訓練する。講義を聴き、ノートを取り、質疑、応答に対応して、内容を理解するという流れと、理解、整理した内容に対する詳細を補足的に調べることで、さらに内容の理解を深める方法を学ぶ。	
		日本語Ⅳ	日本語を母語としない学生が大学の授業で必要となる日本語を総合的に養う授業である。特に、学術上の表現・発信活動に必要な日本語をコミュニケーションに訓練することで、日本の大学の学習活動のあり方とその流れを理解する。また、まとまった意見として口頭で発表するプレゼンテーションを通じ、文化的、倫理的約束事に配慮しつつ産出する方法を学ぶ。 具体的には、講義で出された課題を実施する際、下調べを行い、その調査に基づいて他の学生と意見交換を行うのであるが、掲示板、メール、板書においては文書で、また、グループ活動では口頭で意見交換しながら、考察を深める練習を行うものである。	
		外国語特殊演習	本授業は、協定を締結した他大学・他短期大学が開設する特色ある授業科目を受講し修得した場合の単位認定科目である。なお、内容が異なる場合は、複数回の履修が可能である。	
		地域文化・国際理解科目	地域文化理解Ⅰ	本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。
			地域文化理解Ⅱ	本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。
地域文化理解Ⅲ	本授業は、本学と協定を結んでいる自治体の行政や企業などとの連携によりプログラムを作り、講義やフィールドワーク、実習をおとして、価値観の醸成を目的とする科目である。なお、本学と協定を結んでいる企業等が複数あることにも対応すべく、3科目用意している。			

全学共通科目	地域文化・国際理解科目	国際理解（海外研修）Ⅰ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。</p>	
		国際理解（海外研修）Ⅱ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。</p>	
		国際理解（海外研修）Ⅲ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が3週間以上、かつ研修の実日数が15日間以上の場合、2単位を認定をする。</p>	
		国際理解（海外研修）Ⅳ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が2週間以上、かつ研修の実日数が10日間以上の場合、1単位を認定をする。</p>	
		国際理解（海外研修）Ⅴ	<p>グローバル化が進むなかで、これからの社会的人材も国際化対応が求められることから、現在のグローバル社会の問題や課題について論じるための基礎を培うことは必要である。このような状況を踏まえ、本科目は、学士課程在学中に留学プログラムにより海外の機関で学んだ学習内容に応じて、修得した単位の認定を行う際に対象となる科目である。</p> <p>日本の将来や日本が抱える課題、日本の国際社会への貢献方策、国際交流のあり方等々について客観的に捉えることのできる視野を養い、グローバルな教養に結びついていることを評価・認定の判断の根拠とする。一人の学生が留学する機会が複数あることにも対応すべく、単位認定先となる科目も相応に留意しており、修得してきた内容を精査し、人文的内容、社会的内容、自然的内容、学際・複合領域内容に応じて、出国から帰国までの全行程が2週間以上、かつ研修の実日数が10日間以上の場合、1単位を認定をする。</p>	
博物館学芸員課程に関する科目	生涯学習概論	本授業では、生涯学習の理念や制度など基礎的知識を学び、生涯学習に携わる博物館学芸員・図書館司書・社会教育主事・公民館主事など、その活動や方法、意義について事例や実践例などを通して学ぶ。		
	博物館概論	博物館学芸員資格取得のための必修の授業である。多くの博物館を対象にしながら、歴史系博物館を中心に、博物館の本質、機能や役割、業務の内容、学芸員の仕事とともに、博物館に関連する法律など全般的な基礎知識を学ぶことを目的とする。		
	博物館経営論	授業のテーマは、「現代博物館経営の諸問題解決に向けて」。博物館経営では、理念に基づいた様々な効率的、かつ効果的な事業展開を図っていかねばならない。特に公立博物館における博物館経営の向上への取組は、行政改革において運営面や財政面から指定管理者制度導入など、切実な問題に直面している。いかに入館者増を図り、収入を増加させて安定した財政運営に導くかという一面的な問題解決では、博物館経営は成り立たない。 本授業では、現代博物館の抱える経営の諸問題の現状と課題を通して、博物館のあるべき姿を模索しながら、学芸員としてどのように博物館経営に携わっていくかを考える。		
	博物館資料論	博物館にとって資料は博物館活動を行うための基本となるものである。本授業では、博物館資料の種類や、その収集・整理の方法、保存や活用するためには何が必要なのかなどについて学ぶ。		

博物館学 芸員課程 に関する科目	博物館資料保存論	資料の保存は博物館の大きな役割である。ここでの保存とは、単に失くさない、壊さないということではなく、歴史的証拠である種々の資料を良好な状態を保ったまま、次世代に引き継ぐということである。そのためには、防犯や防災対策はもちろんのこと、温湿度変化や光、気中化学物質などの環境要因や虫カビによって引き起こされる変質を防ぐための対策が必要となる。本授業では、博物館において必要とされる資料保存のための環境、またこれを維持するための構造や空間配置、設備、管理体制などに関して概観する。	
	博物館展示論	博物館における展示の歴史、現状、教育活動、主要な博物館・美術館等の紹介・見学等をおして博物館展示に関する基礎的理解を深める。 さらに博物館展示の意義について、調査研究、展示の計画、解説・図録の作成等、具体的な作業を通して、その果たす役割についても考える。	
	博物館情報・メディア論	博物館資料データベースを基に博物館活動に関わる様々なメディア（図録、展示パネルなど）を再構成する基礎的能力を習得できるようにする。	
	博物館教育論	社会教育機関としての博物館の役割、エデュケーターとしての学芸員の役割を理解すること。学芸員として学習者の特性や発達段階に応じて適切な理論と方法を選択し、生涯学習に繋がる基礎的能力を涵養したい。	
	博物館実習	博物館学芸員として必要な基礎的知識および技術、心構え等について実習する。また、学内の博物館施設「大妻女子大学博物館」あるいは博物館に認定された学外の施設で実習を行うので、その際に必要となる事項や留意すべき点などについて学習する。 「博物館実習」は3つの内容から構成される。 (1) 講義や実技を含む学内実習 (2) 見学実習および巡見 (3) 実際の博物館での館内実習である。 (オムニバス方式/全30回) (21) 見澤博昭/15回 博物館見学実習、博物館館務実習、事前事後指導を中心に担当する。 (29) 下田敦子/15回 博物館実務実習を中心に担当する。	オムニバス方式
	文化史A	我々のくらしは過去の歴史の積み重ねによって成り立っている。本授業では「日本文化」の原点である原始古代の文化について学ぶ。旧石器時代から弥生時代を対象とし、さまざまな歴史事象を通観して各時代の文化の特質を明らかにする。	
	文化史B	我々のくらしは過去の歴史の積み重ねによって成り立っている。本授業では「日本文化」の原点である原始古代の文化について学ぶ。古墳時代から奈良時代を対象とし、さまざまな歴史事象を通観して各時代の文化の特質を明らかにする。	
	美術史A	西洋美術の源流にある古代ギリシア・ローマの美術からルネサンス美術までをとりあげ、博物館学芸員を目指す者にとって必要な知識を習得し、芸術作品の見方をつちかうことを目標としている。 また、美術史の基礎的な事柄を習得することを目的としている。	
	美術史B	西洋美術の、バロック時代(17世紀)から20世紀までの作例をとりあげ、博物館学芸員を目指すものにとって必要な知識を習得し、芸術作品の見方をつちかうことを目標とする。	
	民俗学A	民俗学の基礎を学ぶ。どこの地域に行ってもその地域の歴史や生活の様子をテーマにした博物館を見かける。「□(地域名)歴史・民俗博物館」とか「□郷土博物館」などである。歴史と民俗はワンセットで組み込まれていることが多いが、展示の内容に違いがある。おおよその傾向として歴史が過去の人が記した古文書や歴史の出来事を中心に展示しているのに対し、民俗は生活用具や聞き書き資料に重きを置いた内容になっている。この違いが民俗学を特徴付けているともいえるが、民俗学は生活のあらゆる場面を研究対象としている。それ故研究者によって関心領域も異なり今日の民俗学は細分化される傾向を強めているのが実情である。 本講義ではそうした流れを念頭に置きつつもA「社会生活」、B「宗教(信仰)生活」の二つの面に絞って進んでいく。Aの社会生活は人と人とのつながり方を考察する。特に家族・親族、地域社会ではどうつながっているのか、という点に関する代表的な事例を紹介しながら解説する。	
民俗学B	民俗学Aに続き、民俗学の基礎を学ぶ。Bでは主に宗教(信仰)面を取り上げる。私たちの生活は情報化社会の中で一見すると均一化したようにも思われるが、ちょっとしたところでこれが「標準」ではなかったことに気がついたりする。そうした経験は他の地域の出身者とのつきあいの中で生じることがほとんどと思う。また、どんなに科学的な知識を学んだとしても、日常生活を省みると「げんをかつぐ」とか「縁起が悪い」など合理的とはいえないものにこだわっている自分がある。些細なことのように思えても、こうしたことは実は私たちの精神世界を根底から支えている文化であり、しかもその有り様は多様なのである。本講義では民俗学の視点から私たちの生活の中に展開する様々な宗教(信仰)をみていきたいと思う。		
図書館司書に関する科目	生涯学習概論	本授業では、生涯学習の理念や制度など基礎的知識を学び、生涯学習に携わる博物館学芸員・図書館司書・社会教育主事・公民館主事など、その活動や方法、意義について事例や実践例などを通して学ぶ。	
	図書館概論	本授業では、図書館に関する全体的な理解を深めるために、図書館の歴史や、館種などの基本的な事柄を説明する。	

図書館司書に関する科目	図書館情報技術論	図書館の使命は、様々な情報資源を蓄え、将来に向けて保存し、利用者へ提供することである。現在、図書館で利用される情報資源は多様な形態をとっており、そこには情報技術が深く関係している。情報資源は、従来からあるプリント媒体だけではなく、デジタル媒体の資料も多く利用されている。また、図書館を通じて提供可能な図書館外のデータとしては、インターネット上の情報資源やデータベースもある。情報技術の活用は、図書館で提供される情報だけではなく、図書館自体の業務や所蔵資料の検索、広報としてのWebページなどにも影響を与えており、今や情報技術は、図書館とは切り離すことのできない重要な位置を占めている。 本授業では、図書館にかかわるいろいろな情報技術について理解し、基礎的な情報技術を修得することを目標としている。図書館スタッフとして必要な知識や技術だけではなく、利用者側からの視点や図書館を運営する自治体等からの考えや立場も考慮しつつ、図書館の運営を支える核となる情報技術を考えて学ぶつもりでほしい。	講義 26時間 演習 4時間
	図書館制度・経営論	記録された知識や情報を収集、組織、保存し、人々の要求に応じて提供するための「社会的機関」「情報社会の羅針盤」と位置づけられる図書館は、制度的にそれぞれの設置者が定めた使命あるいは設置の目的を掲げている。 図書館の経営とは、そうしたねらいが十分に達成できるように、「組織の内部および外部に働きかける活動」であるという内容を核に講義を行う。なお、図書館活動と地域社会のかかわりについても解説する。	
	図書館サービス概論	現代の図書館の重要な機能であるサービス提供機能の全体的な理解を図るために、代表的な図書館サービスを取り上げ解説する。図書館サービスの構造、種類、方法を理解することが本科目の目標である。 まず、図書館サービスの考え方、構造、変遷等について学修する。つぎに図書館サービスの二つの柱である資料提供サービスと情報提供サービスについて考察する。この二つの領域は、図書館サービスの車の両輪とも言われる基本的なものである。その上で、利用対象者別のサービスとして、障害者・高齢者・多文化サービス等について理解を深める。合わせて、こうしたサービスを支える仕組みである図書館の連携・協力、接遇、著作権についても学ぶ。本科目では図書館のサービス面に焦点を当てるが、図書館サービスのうち児童サービス、情報サービスについては別に科目を設定し、より詳しく学ぶ。	
	情報サービス論	本授業では図書館における情報サービスの意義を明らかにしたうえで、図書館における各種情報サービス、情報検索サービスの理論と方法、情報サービスに必要な各種情報源の種類と特性、その組織化などについて解説する。図書館の情報サービスについて基礎的な知識を身に付けることをねらいとする。	
	児童サービス論	本授業では以下について解説する。 ①乳幼児からヤングアダルトを対象とした児童サービスの意義 ②子どもの発達と学習における読書の役割 ③年齢別の児童サービス ④児童サービスの企画・運営 ⑤各種資料の意義と役割 以上を理解したうえで、子どもたちへのよりよい図書館サービスとは何か、理解を深めることを目的とする。	講義 28時間 演習 2時間
	情報サービス演習（1）	本演習では、図書館が提供するサービスのうち、情報サービスについての演習を行う。本科目では、その中でも信頼性の高い情報源を調べるための手法を身に付けるため、レファレンスブックを中心とした探索法について学ぶ。まず、情報サービスの概要について理解を深めるため、その設計方法、レファレンスコレクションの整備、レファレンスプロセスについて解説し、つぎに、実際のレファレンスを想定したインタビューについて確認を進める。最後に、レファレンスブックを中心にさまざまな情報源を解説するとともに、それらを使った演習を行う。この演習を通して、情報を探索する力を高める。	
	情報サービス演習（2）	本演習では、主に情報検索（IR：information retrieval）の基礎的な知識と技術を、座学と実習を通じて身に付ける。 私たちの日常生活では、インターネット上の情報を検索することや、様々なツールを用いて情報を入力し利用することがごく普通に行われている。 しかしながら、信頼度を考慮した正確な情報や専門的な情報は、一般的な検索エンジンを用いた情報検索では、十分に見つけることは期待できない。 信頼性の高い情報をどのように見つけるかは、ある程度専門的な知識と技術が必要である。どこを探せばどのような情報があるか、どのように探せば的確な情報を得られるかは、図書館のような情報提供を担う組織のみのミッションではなく、だれもが身に付けておくべきスキルのひとつでもある。 本授業を通じて、様々な問題解決を可能とする情報検索ができるような知識と技術を身に付けることが大きな目標である。	
	図書館情報資源概論	図書館のコレクション（蔵書等）は、長期間にわたって構築されるものである。そのコレクションは、個別の図書館の特徴や魅力を示すうえで、重要な要因でもある。そこで、本講義では、魅力的なコレクションを構築していく上で必要な知識を得るため、コレクションの特徴や収集、蓄積について理解を深める。 まず、資料の種類について学んだ上で、コレクション形成の理論、情報源、プロセスを学ぶ。また、主題分野ごとの情報資源とそれらの特性についても考察する。最後に、図書館と密接に関わる出版社・取次を含む情報資源の生産・流通について理解する。	

	情報資源組織論		<p>図書館をはじめとする「知のアーカイブ」においては、多岐にわたる資料を収集し、その資料に利用者がより確実にアクセスすることが可能なように、様々な組織化の方法を発展させてきた。</p> <p>本授業では、まず、これら組織化の意義からスタートし、情報資源組織法を概括する。その後、ほとんどの受講者が次年度に履修するはずの「情報資源組織演習」に備えて、実際に利用されているさまざまな組織法について理解していく。特に、司書教諭資格取得を目指している受講生には、組織化の演習機会がほとんどないため、それを自覚しつつ、本講義においてはそのエッセンスを必ず身に付けてもらいたい。また、各組織法自体が、コンピュータを利用したポーターレスになりつつある状況を把握し、コンピュータやデータベースを利用した演習にも備えてもらいたい。同時に、図書館内の資料組織化だけではなく、インターネット上の情報資源の組織化についてもその基礎を理解する必要がある。</p> <p>授業全体で学んでもらいたいことは、単に組織法を覚えることではなく、その組織法にどのような意味があるのかを受講者自身が考え咀嚼してもらいたいことと、日本で利用されている代表的な組織化の具体的な方法の要点である。そのためには、組織化する側だけの視点ではなく、利用者側の視点も常に意識しつつ受講し学習を進めることが必要である。</p>	
	情報資源組織演習		<p>コンピュータを中心とする情報化の進展は、図書館においても、様々な変化を与えてきた。公的機関や民間から様々なMARC（機械可読式目録）が提供され、図書館の現場では、それを利用（流用）して、目録データベース作成の負担を軽減させているというのが実状である。それは、確かに省力化にはなるが、図書館員の様々な能力（特にデータ作成能力）を著しく低下させている現実も見逃せない。資料の組織化は、図書館システムの基礎でもあり、組織化を的確に行うためには、既存のデータを利用するだけの能力では明らかに力不足である。</p> <p>本授業では、受講者自身が考えることによって、具体的に資料を組織化してもらいたい。そのためには、各組織法で利用するツール（日本目録規則など）から、必要な情報を読み取る能力が必要である。マニュアルをきちんと読みこなし、効率のよい作業ができる技能をしっかりと身に付けてもらいたい。演習を通じて得られたこれらの能力は、既存のデータの矛盾や誤りもきつと発見できるはずである。</p> <p>また、組織化の手法を用いて作成されたデータは、一般的にはコンピュータを通じて利用されていますから、それらデータをデータベースに登録する作業もシミュレートしてもらいたい。時間的な余裕があれば、ネットワーク情報資源の組織化についても、より理解を深める演習にしていく。</p>	
	図書・図書館史		<p>本授業では図書を中心とした情報資源の歴史と図書館の歴史を学ぶことによって、図書館と情報資源について、より広い視野から考えることができるようになることを目的とする。</p> <p>講義では図書館や図書館で扱われるメディアの歴史的变化について、日本はもとよりアメリカやヨーロッパ、イスラムやインドなどの諸外国についても取り上げ解説する。併せてそれぞれの文化圏がどのような相互作用を及ぼしたかについての理解を深める。</p>	
	図書館サービス特論（1）		<p>本授業では公共図書館を運営するなかで起こりうる可能性のある、様々な問題について解説する。近年の公共図書館で起きている図書館サービスにかかわる諸問題を取り上げ、図書館サービスを取り巻く環境について理解を深めることを目的とする。</p>	
	図書館情報資源特論（2）		<p>図書館情報資源特論（2）では図書館基礎特論と合わせて「医学情報特論」として授業を構成し、医療専門家、患者や家族、一般市民のための医学情報やサービスについて、次の4点を中心に解説する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医学情報の需要と供給 ・研究の進展が早く日々新しい発見がある医学情報の特徴 ・人命にも関わる医学情報の信憑性 ・最新、且つ、正確な情報を提供するためのサービス 	
	図書館基礎特論		<p>図書館基礎特論では図書館情報資源特論（2）と合わせて「医学情報特論」として授業を構成し、医療専門家、患者や家族、一般市民のための医学情報やサービスについて、次の4点を中心に解説する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医学情報の需要と供給 ・研究の進展が早く日々新しい発見がある医学情報の特徴 ・人命にも関わる医学情報の信憑性 ・最新、且つ、正確な情報を提供するためのサービス 	